機動戦士ガンダムSEED DESTINY 逆襲のアムロ

罪次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ　逆襲のアムロ

【Ｎコード】
Ｎ８８８７Ｊ

【作者名】
罪次郎

【あらすじ】
宇宙世紀００９３年　地球連邦軍外郭新興部隊「ロンド・ベル」隊と
シャア＝アズナブル率いる新生ネオ・ジオン軍の戦いは幕を閉じた。
しかし、アムロ＝レイの戦いはまだ終わってはいなかった！
アムロが種デスの世界に行ったらという・ｉｆ作品です。

プロローグ（前書き）

今回が初めての、作品です。
変なところがあるかもしれませんので、ご指摘をお願いします。

プロローグ

白い光の後は暗闇だった。
全点周囲モニターは宇宙と同じ漆黒の闇で満たされ、
その中でコンソールパネルだけが、薄暗く光っていた。

その暗闇の中で男は目を覚ました。

「ん・・・。なんだ?」

アムロにはあまり状況が掴めていなかった。

「そうだ・・・俺はシャアと戦って・・・」

アムロは更に記憶をたどってみた。

「!・・・そうだ!アクシズはどうなったんだ!」

アムロの手は考えるよりも先に動き、
母艦である戦艦「ラー・カイラム」への通信を試みた。

「こちらアムロ、応答してくれ」

ザザザザザザ・・・ザザ・・・ザザザ・・・

「聞こえないのか!?返事をしてくれ!ブライト!チェーン!誰でもいい!」

返ってくるのはノイズばかりだった。

「クッ！駄目か・・・」

アムロは絶望に近いものを感じた。

アムロのνガンダムはどこかを漂っていた。
しかし、アムロはそれをうかがい知ることすら出来なかった。
孤独を感じさせる静けさがコクピットに充満し、
睡魔がアムロを襲った。

アムロはまた深い眠りへと落ちていった。

プロローグ（後書き）

読んでくれてありがとうございます。
ご意見やご感想などがありましたらお書きください。
遅いペースで更新しますのでご了承ください。

第1話　新たなる戦場

＜ユニウス7＜

「クッ！どういう奴らだよ一体！ジンでここまで！」

ディアッカはそう叫びながら、前方の所属不明機、ジン・ハイマニューバ2型を
大型ビームランチャー「オルトロス」で狙撃した。

「工作隊は破砕作業を進めろ！コレでは奴らの思うツボだぞ！」

イザークがメテオ・ブレーカーに近づく敵のジンをビーム突撃銃で追い払い、
部下達のゲイツRに叫ぶ。
その時だった。

ビームの筋が走り、味方のゲイツRを貫いたかと思うと、
今度は警告音がイザークの耳に響いた。
コンソールのレーダーには戦域に接近する3機のMSが表示されていた。

「冗談じゃないぜ。こんな所でドタバタと！」

「お前らのせいかよ！コイツが動きだしたのは！」

カオス、アビス、ガイアの3機は一斉にザフトのゲイツRへの攻撃を開始し、

あちこちで爆発の光輪が咲いた。

「なんだ？」

「アーモリー１で強奪された機体か！だけど奴らの相手をしてる場合じゃ・・・！」

隕石落下まであと２時間をきっていた。

ザフトは地球に落下しようとしているプラントのコロニー・・・・だったユニウス７の落下阻止のため、破砕作業を行っていた。
全長約８ｋｍの巨大な岩であるため、地球に落下すれば、“核の冬”と同じような現象が起きる。
この岩を前大戦“ヤキン・ドゥーエ戦役”時のプラント最高評議会議長
パトリック＝ザラの信仰者達が、フレアモーターを用いて地球に落下させようとしていた。

それは、シャア＝アズナブルのネオ・ジオンが５ｔｈルナやアクシズを地球に落とそうとした時
さながらの光景であった。

＜ミネルバのブリッジ＞

ザフトの新造艦、ミネルバはユニウス7へと向かっていた。

「本艦はこれよりユニウス7破砕作業の支援に向かう。総員、所定の位置につけ！」

ミネルバ艦長の女性、タリア＝グラディスの声がブリッジに響く。
オペレーターの少女、メイリン＝ホークは慌てた様子で振り返った。

「艦長！ジュール隊が所属不明のジン部隊からの攻撃を受けています！
さらに、カオス、アビス、ガイアとも交戦中とのことです！」

「そんな！コレでは破砕作業など・・・！」

ミネルバ副長のアーサー＝トラインが驚く。

「・・・議長、現時点でボギーワンをどう考えます？
海賊と？それとも・・・地球連合軍と？」

タリアは後ろのシートに座る、ギルバート＝デュランダル最高評議会議長に
問いかけた。

「難しいな。私は地球連合軍とはしたくなかったのだが・・・」

デュランダルは少し悩んだ。
この男の判断はいわばプラントの総意でもあるのだ。
隣のシートに座る、オーブ連合首長国代表首長のカガリ＝ユラ＝アスハも
この人物がどんな判断をするのか、心配していた。

「だが、状況は変わった。この非常時に際して、彼らが連合軍と認めるなら、この場での戦闘はナンセンスだ！逆に、あのジン部隊を我々が庇っているとも思われかねん」

「そんな！」

アーサーが再び驚きの声を上げる。

「仕方ないわ。あの機体がジンではなくダガーだったら、あなただって連合の関与を疑うでしょう？」

驚くアーサーに対し、タリアが言い放つ。

「とにかく、ＭＳ隊は出してくれ。ジンの掃討を行う。それと、ボギーワンにコンタクトはとれるか？”我々はユニウス７の落下阻止のため、破砕作業を行っている。”と伝えてくれ。」

デュランダルは利口だった。この状況、脅威は少しでも取り除かれた方がいい。

「わかりました。やってみます。メイリン、コンディションレッド発令よ！」

艦内のあちこちで赤色灯が点灯し始め、戦闘態勢に移り変わった。

＜ミネルバ　格納庫＞

「アイツ、信用出来るのか？どう思う、レイ？」

コアスプレンダーで待機するパイロット、シン＝アスカは同僚でアカデミー時代からの友人、レイ＝ザ＝バレルに問いかけた。アスラン＝ザラの事だな、とレイは思う。

「さあな。だが後ろから撃つようなまね真似はしないだろう。心配するな、シン」

レイは昔からこうだ。シンは同僚のルナマリア＝ホークにも問うてみよう
考えたが、その寸前に思いとどまった。
また子供っぽいとか言われると思ったからである。

「・・・聞こえてるぞ」

突如、声を発したオーブの代表の護衛、アレックス＝ディノことアスラン＝ザラにシンは驚き、思わず計器を蹴り飛ばしてしまった。

「うわっ！す、すみません！」

シンの声は筒抜けだった。

「もう、やっぱり子供っぽいわね！シンは。すみません、アスランさん」

「うわ・・・。やっぱり聞こえてたか・・・」

シンは流石に自重した。

メイリン
「出撃です！発進の準備をしてください！ジュール隊が
所属不明のジン部隊と交戦中です。また、例の３機とも交戦中です
！」

「アイツらが！？」

シンとルナマリアが同時に声を上げる。

「イザーク？」

アスランとイザークは前大戦時クルーゼ隊に
所属していた同僚だった。
もうしばらく逢っていないが。

「カタパルト固定。ガナーザクウォーリア、どうぞ！」

「了解、ルナマリア＝ホーク。ガナーザクウォーリア、いくわよ。」

「レイ＝ザ＝バレル。ブレイズザクファントム、発進する！」

ルナマリアの赤いカナーザクウォーリアが射出され、それに続いて
レイの
白いブレイズザクファントムが射出される。それに続いてアスラン
の一般兵仕様の
ザクウォーリアがカタパルトに固定される。

「どうします、アスランさん？戦闘になりましたけど。
いまならまだやめられますよ。」

ルナマリアは少しアスランをからかってみた。

「チッ、馬鹿にするな。」

アスランは少し苛立った。

「アスラン＝ザラ。出る！」

アスランのザクウォーリアが射出され、
久しぶりに感じる発進時のGを受けたアスランは少し
呻いたが、流石に前大戦のエース、
先行する2機に数秒でで追いついた。

（腕は本物みたいね・・・。）

ルナマリアはからかった事を少し後悔した。

（チッ！なんだよ、かっこつけて！）

シンは舌打ちした

「シン！発進よ。」

「シン・アスカ。コアスプレンダー、行きます！」

シンのコアスプレンダーに続いて、チェストフライヤー、レッグフライヤー、
フォースシルエットが射出され、
４機はフォースインパルスガンダムに合体した。

４機は落下するユニウス７に突進していった。

ユニウス７に着いたシンは３機の強奪機体と敵のジン・ハイマニューバ２型の部隊、
そして戦闘を行う味方部隊を発見した。

「いた！アイツら！」

「今日こそ落としてやるわ！」

「待て、目的は戦闘じゃ・・・！ん？」

ユニウス７で戦うＭＳの中に真っ白な
見たことのない機体が居るのを４人は見た。

「新型か？」

「なんだ・・・アレ？あの３機やジンを攻撃している？」

「あれは・・・。ドラグーン？」

その白い機体の周囲にはドラグーンのようなものが飛び回っており、
白い機体に付き従っているようにも見えた。

「あの機体は敵じゃないみたいだ！」

アスランの確信であった。

アムロは夢を見ていた。

「ここは・・・？」

辺りが青く光っている。
それがだんだん青白くなるのをアムロは感じた。

「ウフフフ・・・」

「・・・ララァ！？」

ララァ＝スン。かつてアムロが分かり合うことができたＮＴの少女。
しかし、アムロが殺してしまった・・・。

「ララァ・・・。俺は・・・君のところに来たのかい？」

突然、辺りが漆黒の闇に包まれた。

「地球が持たん時が来ているのだ！何故邪魔をする、アムロ！」

アムロのよく知った声。シャア＝アズナブルの声
今度はアムロの目の前に、地球が現れた。そして落下中の
赤く染まったアクシズも見えた。

「やめろ、シャア！！」

アムロは必死に手を伸ばした。しかし無駄だった。
アクシズは地球に落下し、地球全体を、光が包んでいった。

「シャア、何故こんな事をする！地球にはセイラさん・・・
貴様の妹だって居るんだぞ！」

アムロの率直な怒りだった.

「アムロ、人類全体のＮＴへの覚醒を促すには、
誰かが業を背負わねばならんのだ。」

「こんな、やり方が正しいと思っているのかシャア！
世界に人の心の光を見せなけりゃならないんだろ！」

「貴様の言っているようなことでは、世界は変わらんのだ。
キレイ事は連邦を腐らせるだけだ！だから地球の人類を粛清する！
それを
邪魔した貴様も連邦と変わらん！」

「クッ・・・何を・・・！」

言葉が詰まった。
何故出てこない！
シャアの言っていることなど単なるエゴだ！
そんな物に・・・いや、そうなのか？
そういう物なのか？
オレの言っている事など、キレイ事で・・・。
シャアの言っている通り、連邦なんかが居るから
争いが無くならない。

だったらいっそのこと潰して・・・。

「それは違うッ！」

「カミーユ！？」

カミーユが叫ぶ。

「カミーユ・・・貴様にも分かっている筈だ。本当に粛清すべき物が！」

「本当に倒さなくちゃいけないのは、
あなたみたいな歪んだ価値観を押し付ける人だ！
エゴで世界を救えると思うな！」

「カミーユ・・・」

アムロは我にかえった。

「そうだ、カミーユさんの言うとおりだ！」

ジュドーも叫ぶ。

「だが、ジュドー。貴様に何ができる。人の優しさだけでは世界は救えん！」

「あんたの言っている事は、ちっぽけな自己満足だ！
グレミーと同じなんだよ！」

「ジュドー・・・。シャア、やはり貴様の言っている事は間違っている！」

よくみると地球は、元々の青さを取り戻していた。
アムロの迷う心だったのだろう。

「だが貴様等の甘さだ！アムロ、貴様にもそのうちわかるはずだ！本当の答えがな！」

そう言い残すと、シャアは消えた。
辺りも真っ白になり、カミーユもジュドーも居なくなっていた。

「・・・本当の答えが分かっても俺には何もできない・・・」

自分は非力だったとアムロは思う。
あのままシャアの言葉に流されていたかもしれない。

「大尉にもまだできることがあります！」

また、アムロがよく知る声が響く。
若い女性の声。チェーン＝アギの声だ。

「νガンダムの・・・いえ、アムロの力なら、世界に人の心の光を見せることができるはずです」

「チェーン・・・」

そうだやってやる。
シャアのエゴに負ける訳には行かない！

「だから、起きてください・・・ア・・・ム・・・」

ピコピピピーン・・・

「ん？」

アムロは目を開いた。
気がつくと、黒い一つ目玉のＭＳたちがνガンダムを取り囲んでいた。

「なんだ、コイツ等は！？ギラドーガとも違う！」

一つ目玉のＭＳ・・・ジンハイマニューバ２型の一機からアムロは殺気を感じた。
簡単に言えば「撃ってくる」と感じたのだ。
ジンがビームライフルを構え、ビームを放った。

「チイッ！」

アムロはバーニアを起動させ、それを避けた。

「なんだ？動いたぞ！」

「くそっ！撃て、撃て！」

同時にνガンダムを取り囲んでいたジンが一斉射撃をしかけてきた。
しかし、卓越した操縦技術を持つアムロの敵ではなかった。

アムロはνガンダムを巧みに操り、全てのビームを避けた。

「撃ってくるのなら仕方がない！
何か武器は・・・！」

アムロはコンソールパネルのタッチパネルをすばやく叩くと、
現在持っている武器の検索を行った

「何、フィン・ファンネルとライフルがある!?
どういうことだ・・・!?」

アクシズでの戦闘で失ったはずの武装。
それが何故ここにあるのかという疑問が
アムロの脳裏に浮かんだが、この状況で躊躇しているわけにも行かず、
アムロは敵の6機のジンに気を集中させ、声を限りに叫んだ。

「いけっ、フィン・ファンネル！」

νガンダムの背中に装備された6機のフィン・ファンネルが飛び出し、
それぞれ、アムロの思い描いた通りの位置についた。

「なんだ?誘導兵器か!?」

「よし、いけ！」

フィン・ファンネルの前部からメガ粒子の閃光が走り、
それぞれ狙った6機のジンに命中した。

「く、くそぉぉ！」

隠れていた一機のジンがアムロのνガンダムに切りかかり、
重斬刀を繰り出した。
しかし、切りかかる寸前、ビームサーベルを引き抜いたνガンダムに、
受け止められ、そのまま一刀両断にされた。

「無駄な抵抗を・・・！」

アムロはフィン・ファンネルをνガンダムの背中に収める機能がある事に気づいた。

「ん・・・こんな機能、つけた覚えは無いが・・・
だが、使ってみるしかないな」

アムロはフィン・ファンネルを自動で回収すると、
辺りの状況を確認した。

巨大な隕石の上・・・。
その外には青い惑星が見え、
だんだん近くなってくる。
まさか・・・。アムロの直感はこの答えを導き出した。

「・・・この岩は地球に落ちる！」

何とかしなければいけないという思いがアムロの思考を支配する。
辺りを見回すと、近くには戦闘の光が見えた。

「・・・行ってみるか」

アムロはνガンダムを突進させた。

＜ユニウス7　戦闘区域＞

イザークとディアッカは3機のガンダムと戦っていた。

「くらえ！」

イザークの叫びに呼応するかのように、
スラッシュザクファントムの肩に装備された、
ビームマシンキャノン「ハイドラ」がガイアに火を噴く。

「！？」

ステラのガイアガンダムはギリギリのところで、
そのビームの雨から逃れた。

「コイツ・・・。よくも私を！」

ステラはガイアを四足獣形態に変形させ、
イザークのスラッシュザクファントムに襲いかかった。

「ッ！？コイツ！」

機体をロールさせてかわしたイザークは、
更にビーム突撃銃を構え、ガイアを狙った。
しかし、カオスのガンバレルに阻まれ、イザークは

回避運動をとった。

「クッ、これでは埒があかん！」

「動きが速い！」

ディアッカはアウルのアビスを狙撃したが、
避けられてしまった。
アウルはアビスの２連装ビーム砲「バラエーナ改」の
照準をディアッカのガナーザクウォーリアに合わせた。

「そらいけェェェー！」

その時
ピンク色の閃光が走り、アビスの片足を吹き飛ばした。

「何だよ!?」

「ん?何だ・・・。増援?」

イザークもそれに気付き、
ビームの方向を見ると、白いＭＳが突進してくるのが見えた。

アムロのνガンダムである。

アムロはレーザー通信回線を開き、３機のガンダムに通信を試みた。

「そこの３機のガンダム!彼らは今、この隕石を砕こうとしている。
直ちに戦闘を止めろ！」

アムロの直感は研ぎ澄まされていた。
ニュータイプは物の本質が分かる・・・。
今がその時なのだろうと、アムロは思う。
このガンダム達からは、コレを落とそうという意思は感じない。
ならば素直に退いてくれるか・・・。

「さっきは撃っておいて、意味わかんねえ事言ってんじゃねーッ！」

「アウル！待て！」

「駄目か！？」

アビスはビームを斉射、更に複相ビーム砲「カリドゥス」を
アムロのνガンダムに放った。
アムロはそれを避け、カオスに狙いをつけた。

「そこの白い機体！今は味方と思っていいんだな！」

イザークはアムロに早口で問いかけた。

「ああ、協力させてもらう。破砕作業を進めてくれ！」

状況を認識している、とイザークは思った。
とりあえず味方なら大丈夫だろう。

「もう一度・・・頼む、フィン・ファンネル！」

アムロはフィン・ファンネルを再び起動させ、
カオスを取り囲んだ。

スティングのカオスはそれから逃れ、
ディアッカのガナーザクウォーリアに狙いをつけた。

「オラオラ！落ちろ！」

スティングはカオスの背中に装備された、
誘導兵器「ガンバレル」を飛ばし、ガナーザクウォーリアを撃った。

「おっと！」

ディアッカはそれを避けきれず、ビームが足をかすった。

「ファンネルか？だがこの感覚は・・・」

作られたニュータイプの感覚に似ている。
そう、グリプス戦役の時、香港とキリマンジャロで戦った、
あのティターンズの強化人間専用巨大ＭＳと似た感覚。
だとすれば彼、いや、彼らは強化人間なのか？

アムロはジンを撃ち落とすと、背中からビームサーベルを引き抜き、
ステラのガイアに切りかかった。
同時にガイアもサーベルを引き抜き、
２機は切り結ぶ形となった。

「ウッ！コイツ！」

「ウォォォ！」

その時

「いけ！」

シンのフォースインパルスの放ったビームが、
ガイアのすぐ傍を通り、続いて飛来した次弾に、
ガイアは回避運動をとらざるをえなかった。

「！」

「あれは・・・ガンダムか？」

後方から続いてきたルナマリアとレイのザクも、
ジンと3機の強奪機体への攻撃を始めた。
アムロのνガンダムに、フォースインパルスからの通信が入る。

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。感謝する」

アムロはこんな恩知らずなことを訊くのはどうかと思いながらも、
シンに質問をした。

「何故、俺を助けてくれたんだ？」

「え、あ、いや、アスランさんが・・・ほら、あの機体のパイロットに
言われたんです。あなたは敵じゃないって」

アムロはそれを聞き、少し安堵した。
この訳のわからない状況で自分の事を味方だと思っている人がいる。
アムロは「その機体」にレーザー回線を開いた。

「誰かは知らないが、礼を言う。アムロ＝レイだ」

「いえ、とんでもない。助けたのはシンですから」

「シン・・・あのガンダムのパイロットか」

「ガンダム？」

アスランはキラやカガリ以外に「ガンダム」という言葉を使う人物が居ることに
驚いた。
この世界においてはあまり使われない呼び名である。

「あ、オレ、シン＝アスカです。よろしくお願いします」

シンがやや遅れ気味の挨拶をする。

「よろしく。アムロ＝レイだ」

「アスラン・ザラです。よ・・・。」

イザーク
「貴様等！何を呑気に挨拶をしている！」

さっきの白いザク、「味方と思っていいんだな。」と言ってきた、
あのパイロットか。とアムロは思った。
アスランは久しぶりにあった知人に驚いた。

「イザーク！」

「アスラン！貴様、そんな所で何をやっている！」

「そんなことはどうでもいい！今は作業を急ぐんだ！」

「分かっている！」

「あの３機だ！散開しろ！」

アムロの言うとおり、３機のガンダムが、
４機へ突撃してきた。

フォースインパルス、νガンダム、ザクウォーリア、スラッシュザクファントム
の４機は散開し、その跡にはビームの雨が降り注いだ。

「クソッ！アイツら！」

インパルスがビームを放ち、ガイアのビームライフルを貫いた。

「イザーク、そろそろ割れるぜ！」

すぐ傍で共に戦闘をしていたディアッカから、
イザークに通信が入る。

「よし、全軍退避！」

「レイ、ルナ！退避しろ！ユニウス７が割れるぞ！」

「分かったわ！」

「了解した。」

「アムロさんも早く！」

「了解だ！」

メテオブレーカーの設置が完了し、ドリルが地中に潜っていく。
パトリック派のリーダー格であるサトーは、それに気づき、
阻止を試みたが、ゲイツＲの一斉射撃によって阻まれた。

「これではナチュラル共を・・・。」

5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・0

ユニウス7は真っ二つに割れ、あちこちに破片が飛び散った。

「グゥレイト！やったぜ！」

＜ガーティ・ルー　ブリッジ＞

「大佐。敵新造鑑より、国際救難チャンネルで電文です」

地球連合軍第８１独立機動群「ファントムペイン」に所属する戦艦、
ガーティ・ルーはユニウス7から離れた場所から戦いの推移を見守

っていた。

「電文？あの艦から？」

この部隊の指揮を執る仮面の男、ネオ＝ロアノーク大佐は、
ブリッジに入ってきざまに、イアン・リー艦長にそういった。

「はっ、通信士」

「読み上げます。

我々ザフトハ、現在地球へ向ケテ落下中ノ「ユニウス７」ノ
破砕作業中デアル。貴鑑ノ搭載機デアルＭＳ３機ヲ直チニ後退サセ、
願ワクバ、作業ノ支援ヲセン事ヲ切ニ願ウ。

とのことです」

「ふぅーん」

ネオは少し考えた。
コレが本当なら、自分たちは作業を妨害したことになる。

「どうされます、大佐」

ネオ
「うーん・・・。スティング達の様子は？」

「不明です。ノイズが激しくて・・・。」

そう告げたオペレーターの隣に座る対空監視が叫びを上げる。

「ユニウス7が割れます！」

「何！？」

モニターには、真っ二つになったユニウス7が映し出しだされていた。

「こっ、これは・・・大佐！」

「うむ、よし！艦を前に出せ。
スティング達が見える所まで来たら、信号弾発射だ！
ミラージュコロイド展開ッ！」

ネオの命令とともに、ブリッジクルー達がせわしなく動く。
ネオはキャプテンシートに腰掛け、目を閉じた。

これが吉とでるか凶とでるか・・・。

ふと、ステラの事が頭をよぎった。

＜ユニウス7　戦闘区域＞

ユニウス7が割れた。

しかし、そこでの戦いと作業はまだ続いていた。
真っ二つに割れたユニウス7の片方が、まだ地球への落下軌道に乗っているのだ。

「ダメだ・・・!もっと細かく砕かないと」

「アスラン!?こりゃあ、驚いたぜ。」

「無駄口を叩いてる場合か!さっさと破砕作業を進めるぞ!」

落下までのタイムリミットが迫る。
作業も大詰めに入り、メテオブレーカーが次々に運ばれてくる。

アムロとシンは三人の運ぶメテオブレーカーに随行する形で、周囲の警戒をしていた。
ルナマリアとレイのザクは別動隊の支援にまわり、各自、奮闘していた。

「いいんですか?アムロさん。あなたまでこの作業に付き合わなくても・・・」

「いや、俺は一度、落下する隕石を止められなかった。最後まで付き合わさせてもらう」

「?」

アムロは今回くらいは阻止したいと思った。
そういえば、アクシズは止められたのだろうか?
そんな疑問が、再び頭をよぎった時だった。

「前から何か来るぞ！」

「ジンか！」

あわせて3機のジン・ハイマニューバ2型が前方から接近してくる。

「おのれ、デュランダルの手下共がッ！」

各々、恨みをこめたビームを放ち、イザーク達の5機に挑みかかる。

「応戦するぞ！」

「了解だ、イザーク」

「俺も手伝う。シン君、君はこの機械を！」

「えっ、メテオブレーカーをですか？」

この人に命令される筋合いはない。

そう思ったシンだが、間違っているわけでもない。

シンのインパルスはメテオブレーカーを掴んだ。

4機は応戦に出た。

ジンの一機がアスランのザクの後ろに回り込む。

しかし、歴戦の勇士たちに旧式のジンが敵う道理はない。

アスランに気づかれ、たちまちビーム突撃銃で打ち抜かれた。

もう一機のジンがアムロに挑む。

「来るのか？しとめてみせる。ん？」

アムロは、νガンダムに覚えがない武器があるのにきずいた。

アムロ
「なんだ、これは・・・。」

腰の部分．又は脇腹の部分に何かが収納されている。
アムロがつけた覚えはない。チェーンが取り付けたのか、
アストナージが取り付けたのかもわからない。

「ビームブーメラン・・・か？・・・おわ！」

敵のジンは目の前に迫っており、重斬刀を振り下ろした。
アムロはそれを間一髪でよけた。

「チィッ！迂闊だったか」

敵のジンが態勢を立て直し、
そのモノアイを光らせる。

「・・・試してみるか」

アムロはνガンダムの腰部から、２つのビームブーメランを取り出し、
連結させた。

「いけ！」

νガンダムが投げたビームブーメランは、弧を描き、ジンの脇腹に直撃した。

「なに！うわあぁぁ！」

真っ二つになったジンが爆散し、４機のＭＳを明るく照らす。
残った一機は、イザークが仕留め、ひとときの安らぎは得た。

「しかし、何なんだ？この武器は・・・。」

戻ってきたビームブーメランを腰部に収め、つぶやく。
フィン・ファンネルやビームライフルのほかにこんな武器までついている事に、
アムロは疑問を持つ。誰かが細工したとも考えた。
しかし、戦闘中にそんなことを考えている暇は無い。

「アビスだ！気をつけろ！」

アムロが推理している間もなく、アビスが襲い掛かる。

「アイツら！」

アビスはバラエーナ改の砲門を４機に向け、ビームの雨を叩き込んだ。

「イザーク、上！」

「うるさい！今は俺が隊長だ。民間人は黙ってろ！」

イザークの叫びとともにビームトマホークが振りおろされ、アビス

が手にする
ビームランスを真っ二つにする。

「なっ！」

「そこだ！」

即座にアムロが残ったもう片方の足を切り落とす。

「てめぇらふざけやがって！」

「アウル！冗談じゃねぇ・・・ん？」

ディアッカの牽制射撃とアウルに気を取られていたスティングに、
アスランが切りかかる。

「うぉおおお！」

「チィッ！」

アスランはビームトマホークでカオスの右腕を切り落とし、
その勢いでシールドを破壊した。
全て一瞬の内に起こった事だった。

「すごい・・・！これがあの人達の力・・・」

「シン！メテオブレーカーを設置しろ。時間がない！」

「あっ、はい！」

シンはメテオブレーカーを設置し、その場を離れた。
ちょうどその時、3機の強奪機体の母艦である、ガーティ・ルーから
信号弾が放たれた。

「帰るぞ、アウル、ステラ！」

「ハイハイ！」

「駄目！コイツだけは！」

ステラのガイアは、ルナマリアのザクと戦っていた。

「クッ、ギリギリかしら・・・」

ルナマリアのガナーザクウォーリアはかなり損傷しており、オルト
ロスを
失っていた。

「おい、ステラ！」

「じゃあおまえは一人で・・・」

「アウル、黙ってろ！」

今度またブロックワードを使われたらたまらない。
スティングはネオに、アウルがステラに対してブロックワード「死」
を
言わないよう見張っておけと、念押しされていた。

「ステラ、帰っておいで。作戦は終了した。」

ネオはレーザー通信回線を使って、ステラと交信した。

「ネオ！」

ステラは急に落ち着きを取り戻し、後退した。

＜ミネルバ　ブリッジ＞

「敵の3機がさがります！」

「ようやく信じてくれたか。」

「そうかもしれませんし、別の理由かもしれません。」

「別の理由？」

デュランダルは再びタリアを振り返った。

「高度です」

ユニウス7の高度はとても低く大気圏突入は時間の問題だった。

「ユニウス7とともに降下すれば、我々も彼らも、
大気圏に引きずり込まれます。
こんな状況下ですが議長方はボルテール（イザークの艦）へお移り
頂けますか？

我々はこれより、ユニウス7とともに降下し、タンホイザーで対象の破砕を行います。」

「えええ！か、艦長！危険です！」

ただ出さえ取り乱すことの多いアーサーだが、この時は一層取り乱していた。

確かに、これはとても危険な行為だった。

下手をすれば、大気との摩擦熱で、自爆してしまう。

「どこまでできるか分かりませんが・・・。

ですが、出来るだけの力を持っているというのに、何もしないでただ見ているなんて、後味が悪いですわ」

「タリア、しかし」

「私はこれでも運の強い女ですわ。お任せください」

「わかった。すまない、グラディス艦長」

「いえ、議長もお急ぎください。

ボルテールに議長の移動を通達！」

デュランダルはシートから立つと、隣に座るカガリに手をさしのべた。

「代表、では行きましょう」

「・・・ここに残らせてはもらえないか？」

「えっ」

「アスランがまだ戻っていない」

ユニウス7で戦っているアスラン＝ザラはまだ艦には戻っていなかった。

「それに、ミネルバの諸君がそこまでやってくれるなら、私も・・・」

カガリは地球が好きだった。

その地球の危機に際して、逃げ出すわけには行かないと思ったのだ。

「しかし、為政者の方には、ほかにもお仕事が・・・」

「代表がそこまでお望みでしたら、お止めはしませんが・・・」

デュランダルが割って入り、カガリに許可を出す。

タリアは制帽を直し、前を向いた。

「ありがとう、助かる」

＜ユニウス7　戦闘区域＞

「ミネルバが艦首砲を撃ちながら・・・共に降下する!?」

イザークはミネルバから送られた報に驚いた。

「信じられん、自殺行為だ!」

「限界高度だ!イザーク!」

「よし、全軍ユニウス7より離脱!アスランたちも早くしろ!」

イザークはユニウス7に敬礼し、残った味方機と共に離脱した。

シンは、メテオブレーカーを支えるアスランのザクとνガンダムを発見した。

「何をやっているんです!アスランさん!それにアムロさんも!」

「見ての通りだ。最後のひとつを支えている。」

「回線は傍受させてもらった。俺は彼と共に、これを護衛する。」

νガンダムの目にあたる部分、デュアルカメラが光る。

「だったら、タンホイザーの使用だって聞いているはずです!このでかい岩と一緒に吹き飛ばされますよ。いいんですか、二人とも!」

「そのタンホイザーって言うのが、どのくらいの威力かは知らないがどんな強力なビーム砲でも、戦艦に積める物では限界がある。

それに、外からの攻撃は確実性にかけるし、この状況じゃ使用回数だって

限られる。」

アムロの言うとおりではあった。
しかし、これはアムロがタンホイザーの威力を知らないが為の過小評価でもあった。

「まったく・・・」

シンはインパルスを2機が支えるメテオブレーカーへと向かわせた。

「!?　俺たちだけでいい!さがれ、シン君!」

「あなたみたいな人が、何でオーブなんかに・・・!」

アスランはそれを聞いて、顔をしかめた。
シンが、オーブの事を本気で嫌っていることが改めてわかったからだ。

「それにアムロさん!何故あなたはここまで・・・」

「言ったろ、最後まで付き合うって。」

シンがメテオブレーカーをつかむ。
そのときだった。

いきなりビームが近くの残骸に直撃し、爆発した。
パトリック＝ザラの信仰者たちの攻撃だった。

「うおォォ!」

「これ以上はやらせん！」

「あいつら・・・まだやるのか！」

シンはビームサーベルを引き抜き、迫り来る三機のジンに突進した。
アスランのザクもビームホークを引き抜き、応戦に入った。

「我が娘のこの墓標！落として焼かねば世界は変わらぬ！」

アスランのザクが、サトーのジンが引き抜いた重斬刀をシールドで受け止める。

「娘？」

シンは向かってきたジンを、サーベルで切り倒した。

「な、何を・・・」

「かつての悲しみを忘れ、撃ち合ったものたちと何故偽りの世界で笑うか！
貴様らはッ！」

「！？」

「かつての悲しみ？」

アムロはそれを、一年戦争のことかと思ったが、
「違う」と感じた。

サトーのジンは更にサーベルを振り回し、再びザクに切りかかった。

「軟弱なシーゲル＝クラインの元で・・・ザフトは変わってしまった！
何故！何故気づかぬか！」

「何！」

「我らコーディネイターにとって、パトリック＝ザラのとった道こそが
ただひとつ正しきものだとォォ！」

「！」

アスランは自分の父・・・愚かな道を選んだパトリック＝ザラの事を思い出した。
気をそらしたアスランはサトーに、ザクの右腕を切られた。

「くっ・・・！」

それを見たシンは、アスランのところに駆けつけようとしたが、
横からジンに襲われた。

「この！」

シンは、サーベルでコクピットを狙った。
しかし、敵のジンはとんでもない行動をとった。
シンのインパルスにしがみつき、ジンは自爆した。

「ザフトの為に！！！」

「うわ！」

「シン！」

「ああ・・・いててて・・・。」

シンのインパルスが装備する、ヴァリアブルフェイズシフト装甲により、
インパルスは致命傷こそ免れた。

ユニウス7は、大気圏に突入し灼熱の大気に包まれた。

「離脱しないと・・・！」

しかし、サトーのジンは、アスランのザクにしがみついてきた。
これがサトーの最後の抵抗だった。

「我らのこの思い！今度こそナチュラル共に！」

「させるかぁぁ！」

突撃してきたシンのインパルスは、ジンの腕を切って、それを蹴り飛ばし、
アスランのザクを掴んだ。

「うわァァァァー・・・・・・！」

サトーのジンは、ユニウス7に激突し、音もなく消滅した。

灼熱の大気の中、シンは必死に離脱しようとした。

しかし、損傷と地球の重力が、ザクの腕を痛めつけ・・・

ザクの左腕は関節の部分から外れ、ザクは大気圏へと引きずりこまれ、

それを掴もうとしたインパルスも態勢を崩し、

同じように大気圏内へと引きずり込まれていった。

「あ・・・！」

「うわァァァ～！」

同じ頃、アムロのνガンダムも大気圏に突入していた。

「あの二人は？クッ、仕方がない！

大気圏突入システムがなくてもいけるか！？・・・ん？」

アムロは、コンソールパネルに表示されたシステムをみた。

「大気圏突入システム、及び大気圏内飛行システム起動・・・？

なんだ？どうだっていうんだ！？」

いつか言ったような台詞を叫び、アムロは少し混乱する。

νガンダムは、宇宙での運用だけを考えていたため、

こんなシステムは付けていなかった。
それも自動的に動くとは、考えもしなかった

（さっきのブーメランといい、このシステムといい、
誰かがνガンダムに細工をしたとしか思えないな。
それに・・・この隕石の事も気になる。ここは、別の世界とでもいうのか？）

ありえない。ナンセンスだ。

そんな事が有り得るのかと自問するが、
今は大気圏突入に専念しようと、アムロは思考を打ち切った

アムロは、改めてアームレイカーに力を入れた。

＜オーブのとある島　沿岸部＞

カガリが統治する国「オーブ連合首長国」は、
旧世紀ではソロモン諸島と呼ばれていた場所にある。

そのいくつかの島の１つの砂浜に、その家はあった。

「さあ、みんなついてきてくださいね。」

「どこ行くの？」

「あ、わかった。おつかい？」

桃色の髪の女性、ラクス＝クラインは子供達を
シェルターへと誘導していた。
キラ＝ヤマトが見当たらない事に、ラクスは気付く。

「・・・キラ？」

キラな砂浜に立っていた。
ラクスは子供達の誘導を、カリダ・ヤマトとマルキオ導師に任せ、
キラの本に駆け付けた。

キラは空を見ていた。
彼の視線の先には、落ちてきたユニウス７があった。

「キラ？」

「あ・・・ラクス。ごめん心配させちゃったかな？」

「いえ・・・。それよりも、早く避難を・・・！」

「うん。わかった」

２人は、子供達が全員シェルターに避難したのを確認し、
最後にシェルターに入った。

第2話　混沌の地球

＜ミネルバ　ブリッジ＞

ミネルバは主翼を折り畳み、
大気圏突入形態をとった。

「インパルスと彼のザクは？」

シンのフォースインパルス、そして、アスランの
ブレイズザクウォーリアのみが、ミネルバへ帰艦していなかった。

「ダメです！特定出来ません！」

「そんな・・・。アスラン・・・！」

「クッ、なんて事！」

インパルスとザクを探そうにも、この状況、
熱源体の殆どが落下する破片だった。

「艦長、砲を撃つにも限界です！」

「しかし、インパルスとザクが帰投していません！
巻き込まれる可能性があります！」

「アスラン・・・。大丈夫だよな・・・」

蚊が鳴くような声で、カガリが呟く。
タリアは迷った。ここでタンホイザーを撃たなければ、
破片の一番大きい部分はそのまま地球に落下し、
犠牲者は更に増える。
しかし、タンホイザーを撃てば
最悪の場合、インパルスとザクは無事には済まない。
タリアの視界を、落下物が横切った。

「タンホイザー起動・・・ユニウス7落下阻止は、最優先事項です。
照準、右舷前方構造体、ユニウス7！」

「了解、照準、右舷前方構造体！タンホイザー起動！」

アーサーの復唱とともに、ミネルバ艦首から、
タンホイザーがその顔を出す。

チャンスは少ない。ブリッジクルーが固唾を飲んで見守る。

「ブライマリ兵装バンク、コンタクト、出力定格、セーフティー解除！
いけます、艦長！」

「タンホイザー撃て！」

タリアの声とともに、

戦艦をまとめて数隻沈めることもできる陽電子の渦が、
ユニウス7に殺到した。
ユニウス7の一部が崩れ、破片が摩擦熱で消滅した。

「まだ足りない!?」

「一撃でやれるとは思っていないわ!チャージ急げ!」

次が限界。タリアの予想であった。

「艦長、準備完了です!」

「よし、撃て!」

タンホイザーから放たれたエネルギーの渦は、
落下物の中心部に直撃し、かつて「血のバレンタイン」の
悲劇があった場所は、完全に、数多の隕石と化した。

「フェイズ3突入!」

後は運を天に任すのみ。タリアは祈った。

＜太平洋上空　電離層付近＞

「突入角度調整、耐熱システムオールグリーン、自動姿勢制御システムＯＮ、
ＥＣＳ、ニュートラルへ・・・」

シンのインパルスは、灼熱の大気の中を突き進んでいた。
インパルスなどに装備されたフェイズシフトには、
耐熱性を高める効果があった。
かつての「ストライク」が大気圏突入に成功したのも
この効果によるところが大きいともいえる。

シンはアスランのザクとアムロの白い機体を探した。

「あの人達は・・・いた！」

シンはアスランのザクを遥か下の方で発見した。

「くっ・・・。損傷のせいで機体のバランスがとれない！」

アスランのザクもまた、大気圏に突入していた。
既にボロボロの盾を下に向け、かろうじて突入していたアスランだが、
限界が来るのも時間の問題だった。

（こんな所で倒れるなんて、カガリが許すはずがない。
必ず生き残ってみせる！）

アスランはかたく決意した。

＜ミネルバ　ブリッジ＞

「艦長、風力制御が可能になりました」

「大気圏内推力へ移行せよ。繰艦慌てるな」

ブリッジクルーは皆うつむいたままだった。

もういくつの隕石が落下し、どれだけの人々が・・・

タリアは考えるのをやめた。

「通信システム、及びセンサーの状況は?」

「破片落下の影響で、電磁波が乱れています。

使えそうに無いですね・・・」

「・・・総員、インパルスとザクウォーリアの探索にあたれ」

タリアは信じていた。

「彼らも無事に降下した・・・と?」

「平気でタンホイザー一を撃っておいて、何を今更と思うでしょうが・・・。
死んだと決まったわけではないわ」

「了解、総員、インパルス及びザクウォーリアの捜索を開始せよ。
対空監視、怠るな！」

ミネルバブリッジクルーによる捜索が開始された。

＜太平洋上空＞

アスランのザクは、大気圏突入には何とか成功したものの、
大気圏内で飛べるはずが無く、自由落下を続けていた。
計器は狂ったかのようにまわり、シールドが音を立てて砕け、
ザクは錐揉み落下状態となった。

「やはりブースターが無ければ・・・」

その時だった。

「ジジ・・ザザ・・アスラ・・さん・・ザザ・・・ンさん・・」

「シン、君か！」

「待ってて下さい、今助・・ザザ・・ます！」

「無茶だ！いくらインパルスでも・・・うわッ！」

シンはザクを掴み、接触回線を開いた。

「無茶でも何でも、やらなきゃあなたが死ぬんですよ！
もっと、俺を助けろぐらい言って下さい」

「ああ、すまない」

アスランは少し安心した。
コレで大丈夫・・・

ボン！

急に大きな音がしたと思うと、いきなり落下を始めた。
アスランは驚きながらシンに訊いた。

「シン！どうしたんだ！？」

「ス、スラスターが・・・！」

なんと、インパルスのスラスターが故障したのである。

シンたちは真っ逆さまに雲海に突入した。

万事休すか・・・。アスラン達が諦め掛けた時だった。

急に落下が止まり、シンは顔を上げた。

「そんな・・・誰が・・・？」

「借りは返したぞ、シン君」

「その声は・・・」

二機を掴んだのはアムロのνガンダムだった。

大気圏を突破したアムロが、二機を発見したのは全くの偶然であった。

「あ、ありがとうございます・・・」

「礼には及ばないよ。だが、このままではいずれ落ちてしまうな・・・」

νガンダムもそう長くは飛んではいられない。

そうアムロは推測した。

「シン、ミネルバが近くに降りてきてるんじゃないのか？」

「ミネルバ・・・？」

「俺たちの艦です。ザフトの最新鋭艦で・・・」

（ザフト・・・？
さっきのＭＳパイロットたちも言っていたな・・・。
何かの軍隊の１つか？
やはりここは別の世界なのか・・・？）

アムロの予想が絵空事ではなく、次第に現実味を帯はじめる。

「なら、何とか位置を特定してくれ。君たちを送り届ける」

「あっ、はい・・・いました。北北西に約４０ｋｍです」

「了解した」

νガンダムは、太陽の光を浴びて輝いていた。

＜ミネルバ　ブリッジ＞

「センサーに反応あり！
ＭＳと思われる熱源が３機分です」

ミネルバのセンサーが熱源を捕らえた。

「これは・・・インパルス?
にしては大きすぎる・・・まさかザクも!?」

「光学映像は出せるかしら?」

「はい!」

ブリッジのスクリーンに映し出されたものは、
インパルスにつかまれたザク・・・ではなかった。

「なんだ・・・あのMSは・・・?」

スクリーンに映し出されたのは
フェイズシフトダウンで機体色がモノトーンになったインパルスと
ボロボロのザクをつかんだ白亜のMSだった。
その白いMSから通信が入った。

「こちらは、地球連邦軍外郭新興部隊ロンド＝ベル所属のアムロ＝
レイ大尉です。
貴鑑への着艦許可を願います。
尚、そちらの搭載機である2機のパイロットは健在です」

地球連邦軍?ロンド＝ベル?
タリアには何が何だか分からなかった。

“地球連合軍”の聞き間違え、
あるいは言葉通り“地球連邦軍”の所属か・・・。

「か、艦長。どうしま・・・す?」

「・・・アムロ大尉でしたね。
本艦への着艦を許可します」

「感謝します」

通信はそこできれた。

「よろしいので、艦長？あんな・・・」

「今この状況で拒めば、あの2機を見捨てることになるわ！
それに・・・」

タリアは後ろの座席のカガリに目を向けた。

カガリは、アスランが生きていたことに喜んでおり、
目を輝かせていた。

アムロのνガンダム、アスランのブレイズザクウォーリア、
シンのフォースインパルスは、無事に後部格納庫に収納された。

カガリは、アスランのいる格納庫へと走った。

「アーサー、一緒に来なさい」

「は、はい」

「それと、メイリン。着水可能なポイントを探して」

「了解です」

タリアは白いＭＳのパイロットと直接話すことにした。

＜ミネルバ　格納庫＞

アスランはザクから降り、深呼吸をした。
よく生き延びられたものだとアスランは思う。

「アスランっ！」

アスランは、カガリの声に気がついた。
走ってきたカガリはルナマリアにぶつかったが、
そんなことはお構いなしに、息を切らしてアスランと向き合った。

「アスラン、よく無事で・・・。
ＭＳで出るなんて、聞いてなかったから・・・」

「ああ、ごめんな。心配させて・・・」

アスランはカガリの頭をなで、今にも泣きそうなカガリをなぐさめた。
自分が無理をするとカガリがとても心配する。
アスランはそのことを改めて認識した。

シンもインパルスから降り、ヘルメットをとった。
あの女、泣きそうな顔してやがる。
しかしそんなことはシンにとってはどうでも良いことだった。
シンは白いＭＳを見上げた。
放熱版のようなものが背中についたそのＭＳは、
インパルスやザクと比べて若干、背が高かった。
確か、あの放熱版を飛ばして戦ってたんだっけ・・・。

アムロは、コクピットの中にいた。
３６０°全ての映像が見える全天周囲モニターの中では
全く落ち着かないので、アムロはコクピットの外にでた。

「あの人が・・・」

３０歳ぐらいに見えるその男性は、
シンの前に向かってきた。

「さっきはありがとうございました。ええと・・・アムロさん」

アムロは、シンの差し出した手を取り、握手をした。

「いや、礼には及ばないと・・・ん？」

なんだ、この感覚は？

アムロは何か違和感をおぼえた。
この少年、シン・アスカからは、
何か他の人間とは違う不思議な感覚がする。
そして、金髪の少女とその子をなだめる青年からも・・・。

そして、アムロはもう一つの事に気がついた。

「アムロ＝レイ」という名前に対して、
シンは何の反応も見せない。
一応、アムロはそれなりに有名人だった。
更に、ＭＳパイロットなら知らないはずがない名前だった。

（まさか、本当に別の世界に来てしまったのか・・・？）

「ええと、どうかしましたか？」

「ん・・・ああ、いや何でもない」

まあいい。その内わかる。
アムロは、レイ＝ザ＝バレルと目があった。

「レイ＝ザ＝バレルです。この度両名の救助に感謝します。」

レイはアムロに敬礼した。

「アムロ＝レイだ。よろしく」

「同じ名前・・・」

ルナマリアがボソッと呟いたときだった。
ドアが開き、白い軍服の女性と黒い軍服の男性、
そして２人の兵士が入ってきた。

タリアは、白いノーマルスーツの男性と白いＭＳを見た。

いくら素性が分からないとはいえ、
恩人であることを忘れてはいけない。
タリアがアムロと目を合わせる。

「ザフト軍所属ミネルバ艦長のタリア＝グラディスです」

「同じく、副長のアーサー＝トラインであります」

「地球連邦軍のアムロ＝レイ大尉です」

やはり、“地球連邦軍”と言っている。
タリアは思い切ってアムロに問うた。

「失礼ですが、地球連合軍の間違いではなくて？」

「？・・・いえ、地球・・・」

そこでアムロは口ごもった。

そうだ・・・。
にわかに信じがたいが、ここは、この世界は、
自分がいたあの世界とは違う世界なのだ。

自分のいた世界とは違う道を歩んだ世界・・・
いわゆる平行世界に来てしまったのだ。

しかし、それをどう説明すればいい？
他の世界から来たと言って、信じてもらえるとは思えない。
むしろ、怪しまれるだけだ。
ここは、間違えたフリをしておくのが得策か・・・？

アムロは瞬時に答えを導き、こう続けた。

「・・・連合軍の所属です。おっしゃる通り、先程の連邦軍というのは誤りです・・・」

アムロは弱い口調で言った。

「ロンド＝ベルというのは、新設の部隊なのかしら？それに、あの機体も新型機でいらっしゃって？」

「・・・」

アムロは予想外の質問に戸惑った。
部隊名まで自分は名乗ってしまったのだ。
アムロは機密事項ということにしておくことにした。

「申し訳ありませんが、お答えできません」

「機密事項というわけね・・・。
いえ、無理にお答え頂かなくても結構ですわ。
ここでは落ち着きませんのでまた後ほど・・・。
空き部屋がありますので、そこへご案内しますわ」

「有り難うございます」

「大尉を０２５士官室へお連れして。」

「了解しました。こちらへどうぞ、アムロ＝レイ大尉」

アムロが2人の兵に連れられ、
格納庫を出ようとしたときだった。
今にも泣きそうな顔をしていたカガリが、
突如として言う。

「あ、ごめん、アスラン。大丈夫。
でも、私はアスランが出撃してくれて良かったと思う。
おまえの腕は良く知ってるし。それに・・・」

「？」

「イザークや、おまえ達のおかげで、被害の規模は最小限に留められたんだ」

その言葉に、そこにいた全員が凍り付く。

「オーブの国家元首として感謝する。
それに、地球の人たちだって分かってくれるだろう。
ザフトが全力で・・・」

「・・・！やめろ、やめろよこのバカ！」

「！」

シンは突然叫び、カガリに詰め寄った。

「ひい！ま、またかよ・・・」

その場に居合わせた整備兵の一人、ヨウラン＝ケントが悲鳴を上げる。

「シ、シン！何て事を・・・！」

「やっぱり、きれいごとはアスハの十八番だな！
あんただって、ブリッジにいたんだろ？！
だったらこれが自然現象じゃないって分かるはずだ！
犯人がいて、それがコーディネイターだって事も！」

そしてシンは更にカガリに詰め寄った。

「あのユニウス7で家族を失って、それを恨んでた奴らが、
ナチュラルなんて消えろって落としたんだよ！」

「そ・・・それは分かってる！
でもそれはごく一部の人々のやったことで・・・。
それに、おまえ達はそれを阻止しようと全力でやってくれたじゃないか！」

「当たり前だ！手を抜く奴がいるか！」

「シン、いい加減になさい！
申し訳ありません、代表」

タリアに制されたシンは後退りし、
しかし両手の拳を握り締め、怒りを露わにしていた。

「だが、それでも破片は落ちた。
一部の行動とはいえ、地球の人たちには許してはもらえないだろうな・・・」

アスランはそのまま格納庫を出ていった。

「ア、アスラ・・・」

「やめろって言ってるだろ！」

シンが再び激昂する。

「連中の・・・テロリストの一人が叫んだんだ！
コーディネイターにとって、パトリック＝ザラの執った道こそが、
ただ一つ正しかったんだって！」

「え・・・！」

その言葉に、カガリは絶句した。

「何も分かってない奴が、下手な気休めするなよ！
あんたは何も考えていないのかよ！」

「・・・！」

シンの暴言と同時に、アムロはシンの前へとんでいた。
アムロが気付いたときには、シンは2～3mほどアムロに殴りとばされ、
尻餅をついていた。

まずい・・・。

しかし、そう思うよりも先に、アムロは怒鳴っていた。

「本当に何も考えていないのは君だ、シン君！
貴様の言葉がこの軍隊に、どんな不利益をもたらすのか分からないのか！？」

その言葉に、シンは言い返す。

「あんたに言われる筋合いがあるのかよ！
悪いのは、何も考えていないアスハの方だ！」

「そう言って君は国家元首を侮辱し、
グラディス艦長やトライン副長の顔に泥を塗るのか？」

「え・・・そ・・・それは・・・」

言葉につまり、言い返せなくなったシンは口を閉じた。

「君も軍人なら、個人的な感傷で身勝手な行動をするな」

「・・・はい」

シンは小さな声で返事をした。

「・・・申し訳ない、艦長。つい・・・」

「いえ・・・シンへのご指導ありがとうございます。
シン、代表に謝りなさい」

シンは立ち上がり、カガリの方を向いた。

「・・・ごめん・・・なさい」

「いや、いいんだ・・・。私も、無神経だった。
自分の立場を自覚しないで・・・」

双方とも、反省した顔でうつむいていた。
丁度その時だった。

「艦長、着水可能なポイントが見つかったとのことです。」

「分かったわ。戻るわよ、アーサー」

格納庫にいたクルーたちは、それぞれ待機室に戻り、
あるいは自分たちの持ち場へと戻った。

ミネルバは太平洋上に着水し、一応の落ち着きを取り戻した。
アムロは士官用個室へと案内され、ベッドに横たわった。
そして、これまで起こったことを整理した。

（アクシズを止めようとして、
そこで白い光に包まれたことまでは覚えている。
そう、シャアのあの言葉も・・・）

『ララァ＝スンは私の母になってくれるかもしれなかった女性だ！
そのララァを殺した貴様に言えたことか！』

「シャア・・・貴様はそんなに小さい人間だったのか・・・？
貴様程の男が・・・！」

アムロは一人呟き、苛立ちに駆られた。

（だが、問題はこれからだ。この世界のことを調べる必要があるな。後で、データベースの閲覧を申請しよう・・・）

そしてアムロは、自らが殴り飛ばした少年、シン＝アスカの事を考え始めた。

（彼には悪いことをしてしまったかもしれないな。できることなら、謝るべきか？しかしあの態度、どうにかした方が良いかもしれない。あの国家元首の少女に恨みがあるのか・・・？そうでなければ、あんな態度は普通はとらないからな）

一方のシンは、自室のベッドで寝転がっていた。

（痛っ・・・。殴られたところがまだ痛い。いったい何なんだよあの人は！いきなり殴る事はないよな・・・。でも、結構痛いところをつかれたような気がする。だけど、俺は間違ってない。綺麗事しか並べないアスハなんて・・・）

そのままシンは眠りについた。

＜ジブリール邸＞

「やれやれ、だいぶやられてしまったな」

「パルテノンが吹っ飛んでしまったわい・・・」

モニターからロゴスメンバー達の愚痴が聞こえる。
ブルーコスモスの盟主、ロード＝ジブリールは、
静かにグラスを手にとった。

「あんな古臭い物、なくなった所で何も変わりませんよ・・・」

ジブリールは骨董の類に興味がなかった。

「で・・・それよりもデュランダルの動きだが・・・」

「ええ、こちらでも確認しています」

プラントから放送されている、デュランダルの記者会見が
モニターに大写しになる。

「この未曽有の出来事に、我々もまた沈痛な思いで受け止めています。
この信じられない光景に、私も言葉がありません。
受けた傷は深く、また悲しみは果てない物と思います。
どうか、地球の皆さん。この絶望の淵から立ち上がってください。
皆様の復興の努力に、我々プラントも、
援助と協力を惜しみません」

その放送を見たジブリールは、不敵な笑みを浮かべる。

「奴の対応はずいぶんと速いな」

「プラントの方はずいぶんとキャッチするのが早かったからな。しかし、こうも先手を打たれてしまうとは・・・」

「ええ、ご心配なく。皆様方の元にも届いていると思いますが・・・。ファントムペインが大層面白い物を送ってきました」

「先程のあれか。どれどれ・・・ん！」

“面白い物”それはテロリスト達のジンやフレアモーターをとらえた写真だった。

「フレアモーターか・・・やれやれ」

「ほう、やはりそういうことだったか」

「どうです？思いがけない切り札ですよ・・・」

ジブリールは更に加えた。

「この様な事を許せる者など、どこにもいませんよ・・・フフフ。そして、コレは我らの団結を促す。コーディネイターどもを滅ぼす準備が整ったわけです。そう、蒼き清浄なる世界のためにね」

それを聞いたメンバーの何人かが顔をしかめる。

「滅ぼす？誰が滅ぼせと言った？」

「我々の儲けをなんだと思っているのかね、ジブリール。
仮想敵が常にいなければ、兵器は売れんよ」

（チッ・・・金の亡者共が・・・！）

ジブリールは舌打ちをしたが、
それはメンバー達にはきずかれることはなかった。

「連中はコーディネイターですよ？
遺伝子を弄った化け物です。そんな危険な物を野放しにして置けと？」

「ハァー・・・ジブリール、そんなに大量殺戮がしたいのか？
下手をすれば、貴様もアズラエルの二の舞になるぞ。
まさかとは思うが・・・核を使う気ではなかろうな？」

「そんな戦争が一瞬で終わるようなことはしませんよ・・・。
ご安心ください」

ワイングラスを置いたジブリールは、顔をしかめて、
しかしそれを悟られぬよう答えた。

「それならよいのだが」

「・・・とにかく、この件については大西洋連邦と連携して、
各国との結び付きを強化します。吉報をお待ちください」

「うむ、ああそうだ。あの国・・・そう、なんていったかな・・・
ああオーブだ！

あの国もうまく取り込めないか？」

「確かに、あの国の技術力は魅力的だな。
どうなんだ、ジブリール」

ジブリールは少し考え、心当たりがあるかのように答えた。

「ええ、考えがあります。お任せください」

「うむ、我々も対処に追われているのでな。では・・・」

「蒼き清浄なる世界のために・・・」

通信はそこで切れ、モニターの光が減った分、
ジブリールの通信室（書斎？）はまた薄暗くなった。
ジブリールは受話器を手に取った。

「私だ。ジョゼフ＝コープランド大統領と回線をつなげ。
それと、オーブのウナトを呼び出せ」

ジブリールの通話が終わるのと同時に、ドアをノックする音がした。

「私です、閣下。レーナもつれて参りました」

「ああ、クリストか。入れ」

ドアが開くとともに、水色の髪の女性と
茶髪の男性が中に入る。
水色の髪の女性がレーナ＝サヴィン、
茶髪の髪の男性がクリスト＝イェーガーだ。

年は二人共に２０代前半、クリストの方は東洋系の面影がある。

「クリスト、今の会話を聞いていたか？」

「はい、メンバーの方々と・・・ですね？」

「そうだ」

ジブリールは足を組むと更に加えた。

「私の描く世界に、彼等もコーディネイターも邪魔なだけだ。
もっとも、今は利用させてもらっているがな」

「ええ、そのことは存じ上げています」

クリストは、ジブリールのＰＣに映されたままの画像に気がついた。

「閣下、これは・・・？」

「ん・・・これか？」

クリストは自分の話に興味がないのか？
と思ったジブリールだが、言われてみれば付けっぱなしだったことに気がついた。

「ロアノーク大佐の部隊が入手したものだ。見るか？」

「はい、是非とも」

「いいだろう。レーナ、お前もどうだ？」

レーナは静かに首を振った。

「・・・！・・・これを見ろ、レーナ」

クリストは、３枚目の画像に映された白い機体、νガンダムを指差した。

「コレって・・・」

「ああ、間違いない。
閣下、我々をロアノーク大佐の部隊に配属していただけないでしょうか？」

クリストが真剣な眼差しでジブリールを見つめる。

「そのことなら、貴様等にはそうしてもらう予定だった・・・。
既にＭＳの用意も完了している」

「有り難うございます。では、失礼します」

クリストとレーナの二人は、静かに退室した。
ジブリールは再びグラスを手に取り、ワインを飲み干した。

＜オーブ＞

はぁ　はぁ　はぁ　はぁ・・・はぁ・・・はぁ

もうどのくらい走ったのだろうか？
地球連合軍の攻撃開始から、どの位たったかもわからない。
沿岸部では相変わらず、地球連合軍とオーブ防衛軍が一進一退の攻防戦を繰り広げている。

避難船はすぐそこまで見えており、
少年とその家族は走り続けた。

両親と少年の妹は、前の方を走り、
皆一生懸命に走っていた。

少年が振り返った先には空中戦を繰り広げるＭＳが見え、
一家の不安をあおるように、地響きが鳴り響く。

「父さん！」

「あなた・・・」

「大丈夫だ、目標は軍事施設だろう。さあ、急ぐんだ。」

一家はまた走り出した。
しかし、ここで思いもかけないアクシデントが起こったのだ。
少年の妹が携帯電話を落とし、崖下まで落ちていった。

「あ！マユの携帯！」

「そんな物はいいから！」

「イヤ！放して！」

「とってくる！」

「シ、シン！」

少年は崖をすべり、下まで降りて、携帯電話をとろうとした。

その時だった・・・。

少年が気づいたときには、彼は爆風で十数m吹き飛ばされていた。

「君、大丈夫か！」

「うう・・・はっ！父さん、母さん、マユ！」

少年が振り返った先には・・・

「うあああぁぁぁぁ～～ぁぁぁぁ～！！」

「シン、シン！大丈夫か、シン！」

シンはベッドから転げ落ち、意味不明の叫び声をあげていた。

「・・・はっ！レイ・・・ごめん・・・」

「また、いつもの悪夢か？」

シンは答えなかった。
というより、答えたくなかった。

「ごめんな、起こしちゃって・・・」

「大丈夫だ、もう慣れた。俺は気にしない」

そういうと、またレイは眠りについた。

「・・・」

その日もまた、シン＝アスカはいつもと同じ悪夢を見たのであった。

＜０２５士官室＞

誰かが泣き叫んでいるような感覚がしたのは、
気のせいだろうか？
いや、恐らくは気のせいではない。
アムロは何かを感じ取っていた。

アムロがデータベースで、この世界の事を調べ始めて、
既に６時間が経過していた。

知り得たことというと、
ナチュラルとコーディネイターの対立を始めとして、
様々な事だった。

「しかし、地球連合軍の所属と名乗ったのは、
まずかったかもしれないな・・・。その場しのぎの嘘が、どこまで
続くか・・・？」

アムロは己の行動に後悔した。

「今更悔やんでも仕方がない。だが、この艦は何処へ行くんだ？」

その時、インターホンのモニターに明かりがつき、
来客を知らせた。

（誰だ・・・？）

「レイ大尉、いらっしゃいますか？」

ミネルバ所属の整備兵、アムロは彼の名を知らないが、ヴィーノという少年である。

「ああ。何か？」

「はい、実は・・・大尉の機体を整備しておきたいのですが・・・」

「わかった、立ち会うよ」

「了解です。では、後ほど格納庫へお越しください」

アムロとしても、νガンダムのチェックはしておきたかった。色々と気になるシステムもあり、一度は目を通すべきだとも思ったのだ。

（・・・なんで俺がパシリなんだ・・・？）

＜カガリとアスランの部屋＞

「そうか・・・俺が出ていった後、そんな事があったのか・・・」

アスランはカガリから、格納庫での顛末について聞いた。

「うん、私も今回のことで、少し反省している・・・。
その・・・やっぱり自覚がなかったっていうか・・・」

「あまり自分を責めるなよ、カガリ」

カガリは精神的に弱い部分がある。
あまり追い詰めるのは酷だ。

「・・・飲み物でも持ってこようか？」

「すまない、アスラン。頼む」

アスランは自販機へと向かった。

その道の途中、銃声を聴いたアスランは、
気になってそっちの方を見に行った。

ルナマリア達が、自動拳銃を使った射撃訓練をしていたのであった。

バン！

「当たんない・・・」

バン、バン！

「また当たらない・・・」

バン、バン、バン、バン、バン、バン！

「ああ、もう全然だめ！調子悪いわ！」

ルナマリアの撃った弾は、全く見当外れの場所に当たっていた。

「なんでこんなに当たんないのかしら！」

「お姉ちゃんて、もともと射撃が下・・・」

「うるさい！」

「アカデミーの時なんか、『E』飛び越して『F』だったしな！」

妹の発言に過剰なまでに反応したルナマリアを、
シンがからかう。

「な、『E』位は取れたわよ！・・・って、何言わせるのよ！」

それを見ていたアスランは、幾分か心が和んだ気がした。

（仲がいいんだな、みんな・・・）

通路から見ていたアスランに、ルナマリアが気付く。

「あっ、アスランさん！一緒にやります？」

「あ・・・いや、俺はいい」

「お手本・・・見せてください！
私、あんまりうまくなくて・・・」

（認めた・・・）

仕方がない、やってみるか。
アスランは自動拳銃を構えた。

アスランの撃った弾は、次々と的に命中し、
ハイスコアを叩き出した。

「す、すごい・・・。1位なんて・・・」

「最下位は『L．H』だな」

「関係ないでしょ！でも、凄いです。アスランさん！」

アスランは自動拳銃を返した。

「こんな事ばかり得意でも、どうしようもないがな」

そうだ。どうしようもない。銃で解決できること何てないんだ。

「そんな事ないですよ。敵から身を守るための力です」

「敵・・・か。今この状況じゃ、誰のことだろうな・・・」

「？」

シンとアスランは、出ていきざまに、目があった。

「ミネルバは、オーブに向かうらしいですね」

「そのようだな・・・」

シンは、アスラン＝ザラという人間が、
オーブの人間であることがどうしても気に入らなかった。

「あなたは、そこで何をしてるんです？
あなたみたいな人がオーブにいる理由なんて・・・！」

「嫌いか？オーブは」

「！・・・はい」

「そうか・・・」

そうだよな・・・カガリの事はやはり許せないか・・・。
アスランは静かに立ち去った。

＜ミネルバ　格納庫＞

「・・・電圧系統、異常なし。やはりこれだけか」

アムロは、νガンダムについて、幾つかの点に気がついた。

まず一つは、ＯＳが一度書き換えられ、再調整されていること。

もう一つは、νガンダムに、幾つかの機能と武装が追加された点だった。

また、大気圏突入システムの起動は、

自動ではなく、アムロの感応波を拾った結果だった。

「いったい誰が・・・？」

「大尉、少しよろしいでしょうか？」

下にいた整備長の、マッド＝エイプスが声をかける。

「何か？」

コクピットから顔を出し、借りた緑の軍服をきたアムロが応える。

「その・・・動力源は何を使っていらっしゃるのでしょうか？

このＭＳは」

「核融合炉だ。」

それを聞いた整備長は、絶句した。

「は、はあ・・・」

（この世界のＭＳは、バッテリー駆動だ。参考程度に見せてもらったあのザクと、インパルスとかいうＭＳがそうだった。
この世界の人々には未知の技術なのかもな。
どうせ後で分かってしまう事だ。下手に嘘をつくよりもいいだろう。
だが、サイコフレームはどうする？
こっちについては、あまり話さない方がいいだろうか…）

アムロは再び、ＯＳの解析を始めた。

＜ミネルバ　艦長室＞

「艦長、失礼します」

「入って」

艦長室に、あの整備長が入室する。

「それで・・・何か分かったのかしら?あの機体について」

「はい。あの機体は・・・はっきり言って、異常です!」

異常、という言葉に、タリアが反応する。

「それは・・・どういう事かしら?」

「はい。まず、あの機体は、核動力を使用しています。
しかし、ＮＪＣ（ニュートロンジャマーキャンセラー）は搭載されていませんでした」

「ＮＪＣに頼らない核動力?」

「一種の核融合システムです。どうやら、特殊なフィールドの内部にヘリウム3と重水素プラズマを注入し、核融合を行っているようです」

調べた本人も、信じられないという顔だった。

「ＭＳ用の核融合炉…
明らかに、これは連合側の技術ではないわね。」

「実際、２０％程、プラント製の部品もありました。
後の８０％は不明ですが・・・。
また、ビームブーメランですが・・・ソードシルエットで使用しているものと同じ物です」

「ますます分からない機体ね。いいわ、後はレポートを提出して」

「了解しました。失礼します」
整備長は静かに退室した。
（彼は・・・何者？本当に地球軍なのかしら？）
タリアは目の前の缶コーヒーを飲み干した。

＜シンとレイの部屋＞

「・・・地球各地ではこの様に混乱が広がっています。
また、国際災害研究所によりますと、死者・行方不明者は数十億人にのぼるとも推測され・・・あっ、最新情報が入りました。
南アメリカ共和国の一部地域にて戦闘があったとの・・・」
テレビのニュースは、相変わらず地球各地の被災状況を伝え続けている。
しかし、シンはそんな事はお構いなしに、妹の形見である携帯をいじっていた。
「シン、お前も見ておけ。無関心なのは良くないぞ」

「わかってるよ・・・。」

「・・・やはり気にしているのか？」

「えっ・・・？」

「殴られたことだ」

それに対してシンは即答した。

「そ、そんな事ない！もう、その・・・気にしてないよ・・・」

「お前の言ったことも正しい。タイミングが悪かっただけだ」

「・・・ありがとう。ちょっと飲み物でも飲んでくるよ。何か、飲みたいヤツはある？ついでに持ってくるよ」

「そうだな・・・緑茶をくれ。あまり急がなくても良い」

うなずくと、シンは自販機へと向かった。

アムロもまた自販機へと向かっていた。

「少し休むか・・・ん？」

アムロとシンは丁度、自販機の所であった。

「シン君・・・か」

「あ・・・」

シンはアムロを無視した。誰が話すか。この人と。

「すまなかったな、シン君。君のことをよく知っているわけでもないというのに」

シンからすると、予想外の言葉だった。

「・・・いえ、いいですよ。もう気にしてませんから」

アムロは、コーヒーの缶を取り出しながら、更に尋ねた。

「一つ訊きたい事があるんだが・・・。
君は、何故あの少女を怨んでいるんだ?」

アムロとしては、やはり知りたいことの一つだった。

「・・・俺の家族は、アスハに殺されたんです・・・。」

シンもまた、オレンジジュースの缶を取り出しながら答えた。

「殺された・・・?」

「あいつらの理想とかって言うのを信じて、そして最後に、
オノゴロ島で連合かオーブの攻撃に巻き込まれて・・・。
俺を残して、全員・・・ッ!」

シンは、手にする缶を強く握りしめていた。

「それが理由・・・か」

「はい・・・」

（そうか・・・。
あの泣き叫ぶ声は彼のものだったんだな。
あのシャア＝アズナブルやカミーユ＝ビダンと同じような悲しみを
持っていたのか・・・）

「あなただって、連合なんでしょう！？
じゃあ、あなたもあの作戦に、参加してたんじゃないんですか！？」

「いや、俺はあの作戦には参加していない」

「そう・・・ですか」

アムロは空き缶を捨てると、振り返り、こう告げた。

「君の怒りと悲しみが分からない訳じゃない。
だが、自分の立場をよくわきまえた方が良い。
気に食わないからといって、自分よりも目上の人物に、
あんな事のようなことをすれば、周囲にも迷惑がかかる」

シンは少し間をおいて答えた。

「・・・あなたの言うこと、分かるような気がします。
俺、あまりあんな風に怒られたことないんです。
自分が好き勝手やっても、それを悪いとは思わなかった。
だから、それに気付く良い機会・・・だったかなっ・・・て」

「ああ、あんな事はもうないようにな。」

わかってくれたか・・・。
昔の俺もこんなだったかもな。
アムロはふと、ブライトに殴られたときのことを思い出した。

アムロの去り際に、シンは呼び止めるように聞いた。

「でも、なんであなたは俺のことを気にかけてくれるんです？
連合の所属なら、ナチュラルじゃないんですか？
俺たちコーディネイターとは・・・」

「・・・？
両者の対立のことを言っているのか？
そんな細かいことは気にしないさ。
それに、君はかつての俺に少し似ている所があるからな」

「似ている・・・？」

アムロはそのまま去っていった。

「あの人・・・何なんだろう・・・？
・・・緑茶もってかなけゃな」

シンは緑茶の缶を取り出すと、その場を立ち去った。

＜1時間後　艦長室＞

アムロはタリアに呼び出されていた。
アムロは扉の前にたち、考え事をしていた。

（あの後、ろくに話すこともできなかったからな。
恐らく、νガンダムの構造の事もある程度伝わっているだろう。
それも含めて・・・か）

アムロはインターホンのモニターを開いた。

「入ります」

「どうぞ、大尉」

アムロは室内に入った。

「どうぞ、おかけください。
それで、大尉にお聞きしたいことがあるのですが・・・」

アムロは一人用の椅子に腰掛けると、やはりきたか、
といわんばかりに答えた。

「私の機体のこと・・・ですね？」

「ええ、早速ですが・・・。

あの機体からは、プラント製の部品が見つかりましたわ」

「・・・！」

これにはアムロも驚きを隠せなかった。
この世界の部品が使われているかもしれないという、
アムロの想像力が欠けていた所からだった。

「連合製のＭＳならば、プラント製の部品の含有率はきわめて低いはず・・・。
しかし、全体の約２０％・・・この数値はあなたの所属を疑わざるを得ませんわ」

つまりは、あなたは本当に連合の人間なのか？ということだ。
あの整備長、そこまで調べていたか。
しかし、そう思う余裕もアムロにはなかった。

「部品の事だけではありませんわ。
あのＭＳには、明らかに連合及びプラントの物ではない技術が用いられています。また・・・」

「グラディス艦長、これから言う内容はクルーには伏せてほしいのですが・・・。」

「？・・・ええ、構いませんわ。」

アムロはついに観念した。
所詮はその場しのぎの嘘、長く続くとはアムロも思わなかった。
しかし、信じてくれるか？

別世界から来たと言おうものなら、ふつうは笑われる。
しかし、姑息なごまかしが利くとは思えない。
アムロは口を開いた。

「グラディス艦長、並行世界というものをご存じでしょうか？」

この言葉に、流石のタリアも困惑した。

「並行世界？ええ、知っていますわ。
ですが、それとこれと何の関係が・・・」

そこで遂に、アムロは真実を話した。

「私は、こことは別の世界から飛ばされてきました。
ＭＳでの戦闘中に気を失い、気がつけば、あの小惑星の上にいました。」

どうでるか？
アムロは息をのんだ。

「・・・大尉。冗談も程々にして欲しいですわね。
異世界から来たなどという話を、素直に信じると思って？」

やはりこうなるか。アムロの予想通りの反応だった。

「ですが、大尉のＭＳがその証明になっている・・・。
といっても、過言ではありませんわね。
例のプラント製の部品の事をのぞけば」

信じてくれるかも知れない。
アムロは付け足した。

「実は、私にもよくわからないのです。
指摘されるまで、気づきませんでしたから。
私の知らない間に、何者かが細工を施したようなのです。」

「・・・わかりました。
とにかく、この件に関しては、また後日お話致しましょう」

とりあえずこの場は凌げたか。
アムロは無駄に疲れていた。
そういえば・・・。

「恐らく、私のＭＳに記録映像が残っていると思います。
それを後でお渡しします」

記録映像は現時点では一番の証拠だからな。
アムロはそう考えた。

「ええ、頼みましたわ」

アムロは軽く頷くと、退室した。

アムロが退室した丁度その時、タリアに通信が入った。
ギルバート＝デュランダルからである。

「聞こえるか？グラディス艦長」

「議長・・・！？」

通信、といってもモニターとカメラを使ったテレビ電話だった。

「破片落下による電磁波の乱れで、通信がつながらなくてね。
しかし、無事でなによりだ。そちらの状況は？」

「はい。アレックス＝ディノ氏及びインパルスを収容したのち着水。
本艦は現在、オーブの北北西約７００ｋｍに位置しています。
尚、本艦はこのままオーブへ向かいます。
また、その際漂流者と思われる男性と彼の乗っていたＭＳを回収しました」

「漂流者・・・というと？」

デュランダルが興味深そうな面もちで聞く。

「はい。彼は地球連合の所属だと名乗りましたが、
その後異世界から来たと主張しています。また、彼のＭＳには不可解な点が多く、
精密な調査の必要を感じます」

「なるほど、彼の名前は？」

「アムロ＝レイと名乗っていますわ。それが何か？」

デュランダルはそれを聞くと、何か思いついたように言った。

「タリア、頼みがあるのだが・・・・・・・・・」

「・・・・・わかりました。彼に伝えておきますわ」

タリアはデュランダルから、ある頼みを受けた。

「すまない、タリア」

モニターが消えると、タリアは背もたれに寄りかかった。

（ギルバート、どういうつもり・・・？）

第3話　中立国

＜オーブ　領海内＞

「オーブ・ポートコントロールより入電。
貴艦の到着を歓迎する。とのことです」

長い旅路を経て、遂にミネルバは、オーブへと到着した。

「そのままの進路で前進、近くの船に当たらないよう注意して」

＜ミネルバ　食堂＞

アムロは食堂で昼食をとっていた。
セロリを口に放り込むと、アムロは窓の外に視線を移した。

窓から見える島、オーブの首都が置かれているオノゴロ島は、
やはりアムロの知らぬ土地であった。

（この船が向かっているのは中立国らしいな。
このまま下船するのも悪くはない・・・か）

食堂はだいぶ混雑しており、あちらこちらで席の取り合いが始まっていた。

丁度空いていたアムロの前の席に、2人の赤い服の男女が座った。
ルナマリア＝ホークとレイ＝ザ＝バレルであった。
2人はアムロに気づくと、何やら相談をし始めた。
（なんだ・・・？）
アムロはその行動を終始見守っていたが、
やがてルナマリアの方がアムロに話しかけた。
「あのォ・・・アムロ＝レイ大尉ですよね？」
「ああ、そうだ」
紙パックのコーヒーにストローをさしながら、アムロが答える。
「異世界からきたって本当ですか？」
「ん・・・うぐっ！な・・・何を・・・」
アムロは思わず、コーヒーを吹き出しそうになった。
これは全くの予想外であった。
「・・・誰から聞いたんだ？」
「え、だ、誰からって訳でもなく・・・噂です」
「噂・・・？」

あの副艦長がつい漏らしたのか？
アムロはそう推測した。
艦長と副艦長の間で、機密を共有するのは当たり前のことだった。
クルーの誰かと話していて、うっかりといったところか？
アムロは隠すのもバカらしくなってきた。

「そうだと言ったらどうするつもりなんだい？」

「ど、どうするって言われても・・・」

そこですかさず、レイが止めに入る。

「申し訳ありません、大尉。我々の興味本位です」

ルナマリアを肘で軽く小突くと、レイは蕎麦を食べ始めた。
ルナマリアもこれ以上はあきらめたのか、黙々と自分の昼食を食べ始めた。

（いつか彼らにも明かすときがくるか・・・？）

それも時間の問題か・・・。
アムロは残ったプチトマトを食べると、席を立った。

「そう言えば、シンは？」

パンの耳をかじりながら、ルナマリアがレイに訊ねる。

「恐らくは部屋に閉じこもっている。それ以上の事はわからない。」

「シンったら、どうしちゃったの？
やっぱり、オーブは嫌なのかしら？」

「ああ、そうだろう・・・恐らくな」

レイとルナマリアも、シンの過去については彼から聞いていた。

その時、艦内放送が流れる。

「本艦はオーブへ入港します。
上陸希望者はブリーフィングルームへ集まってください。
繰り返します。本艦はオーブへ入港します。
上陸希望者はブリーフィングルームへ集まってください」

「ちょっと、もう入港って・・・ずいぶんと早いわね」

「ルナマリアは上陸するんじゃないのか？」

「そうだった！いかなきゃ！」

ルナマリアは食器を返却コーナーに戻すと、
ブリーフィングルームへと走った。

レイはほうじ茶を飲み終えると、食器を戻した。

（シンの様子を見てくるか・・・）

＜シンとレイの部屋＞

シンは自分の部屋で、携帯をいじっていた。
レイが戻ってきたことに、シンが気付く。

「上陸希望者はブリーフィングルームへ集合らしいが・・・。
行かなくていいのか？」

「いや、いいよ。まだ考えてる。
とは言っても、許可がでるかどうかわかんないんだろ？」

「そうか・・・」

シンは悩んでいた。上陸するかどうか。
プラントへ移ってから、一度も戻らなかったオーブ。
かつて暮らした地、オーブ。
そしてすべてを失った地。
今更ここへ戻って、何の意味がある。
しかし・・・。

（・・・慰霊碑だけでも、行ってみる・・・かな）

折角戻ってきた。一度は行こうとシンは思った。

シンはベッドから起き、ブリーフィングルームへと向かった。

＜オーブ軍港＞

ミネルバは、オーブへ入港した。

カガリは早歩きで真っ先に降りた。
カガリが降りると共に、タラップの前に集まった人々の中から、
一人の男性が飛び出した。

「カガリ！」

「ユ、ユウナ！あっ・・・！」

その男性、ユウナ＝ロマ＝セイランはカガリにいきなり抱きついた。

「！？」

「は・・・！？」

「・・・」

「ああ、もうよく無事で・・・。ホントに心配したよ」

「そ、その・・・ユウナ。すまなかった、いろいろと」

ユウナはカガリをなかなか離さなかった。
勿論、アスランにとって面白いことではない。

「これ、ユウナ。場所をわきまえなさい。
ザフトの方々が驚かれておるぞ」

なかなか離さないユウナを、ウナト＝エマ＝セイランがたしなめる。

「お帰りなさいませ、代表」

「ウナト＝エマ・・・。
大事の時に不在ですまなかった。
被害の状況などはどうなっているか！？」

「その件につきましては行政府の方で・・・。
車をご用意いたしました」

「わかった」

カガリはアスランを振り返った。

「アレックスも・・・あっ！」

しかし、それをユウナが封じ込めた。

「君も本当にご苦労だったね、アレックス。

報告書は後で良いから、ゆっくり休んでくれて構わないよ」

「・・・はい」

アスランとしては、やはり悔しかった。

カガリはそのまま車に乗り、その場を去った。

「アレックス殿、車へお乗りください。」

「あ、ああ・・・」

アスランは車に乗り、溜め息をついた。

（疲れてるのかもな、俺）

＜数時間後　ミネルバ　応接室＞

アムロは以前の話の続きを、タリアとしていた。

「記録映像は観させていただきましたわ。

どうやら、嘘では無さそうね」

「しかし、あれで本当に信じてくれたのですか？」

「確証はありませんわ。ですが・・・」

「？」

タリアが観た映像、それは宇宙世紀００９３年３月１２日、すなわち、
シャアとの最終決戦の物だった。
目に映った物は有り得ないことばかりだった。
それは形容しがたいものでもあった。

「・・・それより、少しお話したいことがありますわ」

「ええ、何でしょう？」

タリアは話を逸らし、本題に入った。

「話からお察ししますと、大尉には行く宛がないように思えますが・・・」

「ええ、それについては否定はしません」

実際、アムロには行く宛も無ければ、元の世界に戻れるという保証もなかった。

「でしたら、このまま本艦に残り、我が軍に志願兵として加入しては頂けないでしょうか？」

「！」

アムロはその言葉に驚いた。
しかし、行く宛のないアムロからすると、悪くない要請とも思えた。
ただ、アムロには腑に落ちない点があった

「行く宛のない私にとっては、確かに魅力的な事です。
ですが、何故・・・？」

「一つはこの艦の搭載機が、大尉の機体をのぞいて４機・・・
実際に使える分ですと、３機だけなのですわ」

ミネルバの搭載機は、この時かなり貧弱なものとなっていた。

「直近の基地にたどり着くまでに、敵と遭遇しないという保証はありませんわ。
それに・・・これは、ギルバート＝デュランダル議長からの要請なのです」

「ギルバート＝デュランダル・・・？」

タリアがデュランダルから受けた頼みごとはこれだった。

「私にも、議長の考えはわかりませんわ。
恐らく、何か考えがあっての事でしょうが・・・。
何も、今すぐに決めていただかなくても結構ですわ」

「わかりました。少し考えさせていただく」

アムロは退室すると、自分の部屋へと向かった。

（何かの罠か・・・？
慎重に考える必要があるな）

アムロが調べた事の中にも、デュランダルに関する内容はやはりあった。
そのデュランダル議長直々の要請と考えると、
やはりアムロも疑わざるを得なかった。

＜翌日　オーブ市街地＞

ミネルバのクルー達に上陸許可が出たのは翌日だった。
シンは身支度をし、出かけると、
平和記念公園に向かう為、乗合バスに乗った。
彼がかつて住んでいた地だが、建物の面影はほとんど、
いや、全くと言っていいほど無かった。
前大戦時のオーブ戦の折り、市街地も破壊し尽くされたのだ。

そしてウズミ＝ナラ＝アスハの自爆・・・。

面影が無いのも当然だった。
が、シンは家族とのことを思いだしていた。

（父さん、母さん、マユ・・・。俺は戻ってきたよ）

「次は、平和記念公園前、平和記念公園前でございます」

シンは降車ボタンを押した。
海がすぐそばに見える海岸のバス停に降りたシンは、
慰霊碑がある公園に向かった。

だいぶ遅い時間に出てきたため、日は既に西へと傾いていた。
公園には誰も居ず、所々に潮をかぶった痕跡があった。

「・・・？」

シンは慰霊碑の近くまで来ると、一人だけ青年がたっていることに気づいた。
顔はよく見えないが、シンよりは年上に見えた。

「トリィ！」

「鳥・・・？」

シンの頭上をロボットの鳥が通る。
そのロボットの鳥は、シンの肩に止まった。
青年はそれに気づいたようで、シンの方を向いた。

「あ・・・ごめんね・・・」

「あなたの・・・ですか?」

「うん。大切な友人にもらったんだ」

シンは鳥を返すと、慰霊碑の方を向いた。

「慰霊碑・・・ですか。あれ」

青年もまた慰霊碑を見た。

「うん、そうみたいだね。僕もここに来たのは、初めてなんだ」

青年はしゃがんで、慰霊碑の周りに植えられた花を手に取る。

「折角、綺麗に咲いたのに・・・」

青年は悲しそうな目をしていたのが、シンに見えた。

「波を被っちゃったから、枯れちゃうね。」

シンも慰霊碑に近づき、花を見た。

花々はみなしおれ、枯れるのは時間の問題のように見えた。

「だけど・・・」

「?」

シンは公園を見渡しながら、

「誤魔化せないってことかも」

と言った。

「え・・・？」

「いくら綺麗に花が咲いても、過去の過ちを誤魔化す事なんてできない。
あの戦争で、この国が選んだのは頑固な理念で、結局この国を焼いた」

シンは拳を強く握りながら言った。

「・・・ウズミさんの事？」

シンは頷き、さらに加えた。

「その過ちを、そんな風に誤魔化しても・・・あ・・・。
すいません、何か意味わかんないこと言って・・・」

シンは少し言い過ぎたと感じた。
植えた本人も、そんな気持ちで植えた訳じゃないという事は、
シンにもわかった。

しかし、シンからすると、そうも感じてしまった。
この“平和記念公園”という場所も・・・。

シンは去り際に、青年に声をかけられた。

「・・・あの時、この国にいたの？」

「？・・・は、はい」

「そう・・・なんだ」

青年は俯くと、悲しそうな目をした。

「あなたも居たんですか？あの時」

「・・・うん」

シンは、彼も自分と同じような人なのかと考えた。
シンがそこを立ち去るときも、彼は俯いていた。

「・・・・」

青年の名はキラ＝ヤマト。前大戦のエースにして、オーブを守ろうとした者の一人である。

＜地球連合軍　セイロン島基地＞

「しかし、まあよくやられたもんだな」

地球連合軍大佐のネオ＝ロアノークと彼の部隊は、
地球へ降下した。

「・・・それで、補充員ってのは何処にいるのかな？」

シャトルから降りたネオは、迎えの士官に訊いた。

「はい、こちらに・・・」

ネオの前に、２人の男女が並ぶ。
クリストとレーナである。

「クリスト＝イェーガー少佐であります」

「イェーガー少佐の副官、レーナ＝サヴィン中尉であります」

２人は同時に、ネオに敬礼した。

「ネオ＝ロアノークだ。君の”黒き狩人”の名はきいている」

3人は屋内へ移動した。

「クリスト少佐。君はジブリール理事直属の部下と聞いたが・・・」

「はい。彼女もまた閣下の配下にあります」

ネオはコーヒーをすすりながら、さらに尋ねた。

「俺の部隊への配属は、君自身の意志でもあると聞いた。それは間違いないかな？」

「はい。それに、我々にはある重要な任務があります」

「閣下に相談してみましたら、最初からそのつもりだったのです」

「例の所属不明機の調査かな？」

クリストとレーナは小さく頷いた。

所属不明機・・・νガンダムの事である。

「あのＭＳが、ザフトの新造艦と合流したとスパイから確認があった」

「オーブに潜入していた者からの情報ですね？」

「その通りだ。あのＭＳの調査については、危険であれば、破壊も辞さないと言うことだったな？」

「あのＭＳをろ穫する事が最優先目的ですが、仰る通り、破壊も有り得ます」

「ですが、パイロットの確保も目的ではあります」

よこからレーナが口を挟む。

「それは、どういう事かな？サヴィン中尉」

レーナが答えようとするのを遮り、クリストが答える。

「申し訳ありませんが、これはお答えすることはできません」

「そうか・・・。いや、これ以上の詮索はやめておこう。君たちの機体だが・・・」

ネオが外に目をやると、ちょうどクリストとレーナの機体が、ネオ達の地上での旗艦“Ｊ．Ｐジョーンズ”に搬入されていた。

「中尉の機体は、俺と同じウィンダムだが、少佐の機体はあの”ストライク”の改良型らしいな」

「ＧＡＴ－Ｘ１０５Ｅ　ストライクＥ・・・。閣下よりお預かりしたＭＳです。ご期待に見合う戦果を挙げましょう」

「頼んだぞ。さて、ステラ達の調整が終わった頃かな・・・」

3人は部屋を後にした。

＜オーブ中心街　PM11：00＞

アムロは気晴らし程度に、オーブ中心街を歩いていた。
当然、私服などは持っておらず、スーツを借りていた。
アムロが町にでるのは、サイド1の”ロンデニオン”に寄ったとき以来だった。

が、その時はクェス＝パラヤやハサウェイ＝ノアと一緒に出かけており、
その後のシャアとの殴り合いや、
クェスの誘拐事件で決して休めるような状況ではなかった。
アムロはウィンドウショッピングというわけでもないが、ショーウィンドウの
ドレスを眺めていた。

そしてアムロは、同じようにしてそれを眺めている人物に気がついた。
シン＝アスカである。

「あ、アムロ大尉」

「偶然だな、シン君。君も外出していたのか」

2人が会ったのは、全くの偶然であった。

「これを眺めていたのかい？」

「あ・・・なんか、家族とのことを思い出しちゃって・・・。
妹が欲しがってたドレスに似てたんです」

「そうか・・・。君にとっては縁の地だからな。家族のことを思い出すのも・・・」

アムロの家族というと、カマリア＝レイとテム＝レイの二人しか居なかった。
テムの方というと地球連邦軍の技術士官であったため、帰って来る日は限られていた。

家族との思い出というと、殆どアムロにはなかった。
内向的だった性格もそれ故といっても、おかしくはない。

二人はミネルバへと戻る為、港を目指した。
特にアムロには目的はなく、あまり出歩いても仕方がないと、アムロは思ったからである。

その帰路の途中で、シンはアムロに訊いた。

「あの・・・」

「なんだい？」

「アムロ大尉は、他の世界からきたって言う話が流れているらしい

ですね」

アムロは頷いた。

「ああ、そのようだな。俺も昨日、クルーの一人に聞かれたよ」

「本当なんですか？」

アムロは困った顔をし、そして、隠し立てする必要もないと感じた。

「信じられないかもしれないが、確かに俺はこの世界の人間じゃない」

「やっぱり・・・。そういえばあの時、何てザフトに味方してくれたんです？」

異世界から来た人物と言うことで、シンの声も、若干うわずっているのが
感じられた。

「地球に隕石が落ちるのを、黙って見ている事などできないよ。
俺の居た世界でも、地球を潰そうとしていた人が居たんだ」

「え・・・？」

「それで、反射的にって所だ。
それに、奴の夢を見たってのもある」

アムロはさらに付け加えた。

「あのテロリスト達は、自らの恨みだけで、罪のない人々を抹殺しようとした。
そんなエゴが許されるわけがないさ」

アムロは、シャアの愚行が繰り返されるのを危惧していた。
例えそれが、別世界だとしても。

「奴のエゴに負けたくないって、一心かもしれないけどな」

「・・・ごめんなさい。言っていることがよくわかりません」

「あ・・・すまない」

確かにそうだ。いきなりこんなことを言われても、何が何だかさっぱりだ。
ましてや、シンはシャアの事を知らない。
話だってそれかかっている。

「とにかく、君たちがあの隕石を止めようとしたことが分かったからだよ」

「・・・大尉って、鋭い洞察力を持ってるんですね」

「・・・？」

突然の事に、アムロは戸惑った。

「だって、一瞬で状況を掴むなんて、そうできる事じゃないですよ」

シンが言っていることが、ＮＴの力の恩恵もあることは、

アムロも自覚していた。

「買いかぶりすぎだよ。俺はそんなご立派な人間じゃない」

アムロは首を振った。

しかし、それとは逆に、アムロはこんなことを言った。

「だが、人はいつか、そんな風に変われると思っているよ」

「大尉の居た世界のこと、今度詳しく聞かせてください」

「ああ、余裕があったらな」

アムロはシンに微笑んでみせた。

その時、シンの携帯電話がなる。

ミネルバからの呼び出しである。

シンはポケットから携帯を出すと、電話にでた。

「はい」

「シン、聞こえますか?」

電話口からは、メイリンの緊張した声が聞こえた。

「聞こえてるよ。何?」

「直ちにミネルバへ帰投せよとの事です!」

「何かあったの?」

「地球連合各国が、プラントに対して、宣戦布告しました！」

「宣戦布告！？」

「なんだと！？」

＜ミネルバ　ブリッジ＞

「これより私は、全世界の方々に、非常に重要かつ残念お知らせをしなければなりません」

ブリッジのモニターには、大西洋連邦大統領、ジョセフ＝コープランドの姿が
映し出されていた。

「か、艦長、コレって・・・」

「ええ、そのようね」

大西洋連邦を筆頭とし、安全保障条約に加盟した国々・・・。
すなわち、地球連合が、プラントに宣戦布告したのである。

町から戻った、スーツ姿のアムロがブリッジに入る。

「グラディス艦長！」

「アムロ大尉、一つお知らせしなければならないことがあるのですが・・・」

「地球側各国が宣戦布告をしたと聞きました」

モニターを見ながらアムロは言った。

「ええ、本艦はこれより、戦時体制に移行します」

そしてタリアは、その次の言葉の語勢を強めた。

「よって、これより部外者の立ち入りを禁じます」

タリアの鋭い視線が、アムロを捉える。

（僕を焦らせようと言うのか・・・）

タリアの狙いはこうである。

アムロを”部外者”として追いだそうとし、それによって焦らせるため、

志願兵として引き入れようというものだ。

が、もしアムロが追い出されたとすれば、野垂れ死にという可能性もあった。

アムロは決断した。

「この間の要請を受けましょう。私はこの軍に入隊します」

タリアの策略は見事に成功し、アムロはザフト軍に入隊した。

「了解ですわ。正式な軍籍の発行は後ですが、承諾しましょう」

「よろしく頼みます、艦長」

「ええ、よろしく頼みますわ、”アムロ大尉”」

二人は握手をした。

“アムロ”で構いません、艦長」

「分かりましたわ、“アムロ”」

「いや～、しかし、これで本艦の防衛力は万全ですね。何てったって異世界の技術が使われたＭＳですからね、艦長」

アーサーは大声で言ってしまった。

メイリンなど、数名が振り返る。

「アーサー！！」

タリアがアーサーに、怒声を浴びせる。

「ひっ・・・ももも、申し訳ありません！」

（やっぱりホントだったんだ・・・）

怒鳴ったタリアを、アムロがたしなめる。

「艦長、もう隠すことはありませんよ」

「？・・・そうですか、分かりましたわ」

噂が広まっていて、そして地球連合が宣戦布告をした今、
隠すのは帰って不都合だった。

「いずれにせよ、公表した方がいいでしょう」

その後、アムロはブリッジをでた。

部屋に戻る通路の途中には、談話室があり、
アムロは途中でそこによった。

「でも、こんなに早く開戦だなんて・・・」

「だよな～・・・。でもコレって、あてつけって奴じゃないの？」

談話室の大型モニターの前で、シン、レイ、ルナマリア、ヴィーノ、
ヨウランの
５人が話しているのを、アムロは見かけた。

「ま、プラントを滅ぼしがってるナチュラル共のあてつけだろな、
こりゃ」

「ユニウス７の犯人達は死んだっていうのに・・・。あ、どうした
のシン・・・」

シンが拳を握りしめ、明らかに苛立っているのにルナマリアが気付

く。

「これじゃ・・・オーブの時と同じじゃないか・・・！」

「シン・・・」

「何でこんな事・・・また戦争がしたいのかよ、アイツらは！」

「そのようだな」

シンを含め、５人がアムロの方を向く。

「アムロ大尉・・・まだ、この艦にいたんですか！？それじゃ・・・」

「ああ、今日から俺は、この軍で世話になる。改めて自己紹介をする、アムロ＝レイだ、よろしく頼む」

アムロが自己紹介をすると、ルナマリアが前にでる。

「ルナマリア＝ホークであります。搭乗機はガナーザクウォーリア」

ルナマリアに続いて、ヴィーノが自己紹介をする。

「ヴィーノ・デュブレです。整備士をやってます」

「ほら、ヨウラン！あなたの番よ！」

渋っているヨウランを、ルナマリアが肘で小突く。

「ええと・・・ヨウラン＝ケントです。ヴィーノと同じく整備士をやってます。
よろしくお願いします。アムロ・・・大尉」

（ん、なんだ・・・？）

アムロはヨウランから、何か負の違和感を感じた。

（見下されている・・・？遺伝子操作をしていない人間を、軽蔑しているのか・・・）

実際、ヨウランにはそんな傾向があった。

「よろしく頼む」

それぞれに目を会わせると、アムロ達はモニターに目を移した。
モニターには相変わらず、大統領が映っていた。

「・・・よって、以下の項目より、地球連合各国はプラント現政権を、
地球に対するきわめて悪質な国家とし、ここに宣戦を布告します」

それを見たシンは、更に激昂した。

「何が悪質な国家だ！畜生ッ！」

シンは壁を殴りつけた。

「落ち着け、シン君。ここで喚き散らしても、みっともないだけだぞ」

「でも・・・こんなのは一方的だ！」

「ああ、確かにな・・・」

この世界の地球連合軍に、アムロはかつてのティターンズの再来のようなものを感じた。

「戦闘自体はもう始まってるのよね？」

「ああ、それも先程終わったようだ」

モニターの画面は、繰り返し流されていた大統領の宣言から、ニュース速報に切り替わった。

「ええ、本日０：００より行われていた、連合プラント間の戦闘は、連合側の撤退で終了したようです。繰り返しお伝えします。０：００より行われていた戦闘は、連合側の撤退で終了したようです」

ニュースはそのまま映像へと変わり、核爆発とわかる映像が流された。

「嘘・・・これ、プラントに打ち込まれたの！？」

「クッ・・・こんな事して、何の意味があるんだよ！」

「これではティターンズと同じだな・・・」

「核自体は回避できたようだが、大変なのはこれからだな。」

アムロは何か思いつくと、談話室の出口へと向かった。

「アムロさん、何処に行くんです？」

「機体の調整を今からしておく。出航はそう遠くはなさそうだ。」

アムロは格納庫へと向かった。

「行っちゃった・・・」

「あの人・・・でも、こんな国に残らなくてよかったよ、あの人は」

シンの言葉に、ヴィーノが反応する。

「もう気にしてないのか、シン？」

「あ・・・まあね」

「シンの事だから、根に持ってるかと思ったわ」

「な、なんだよ、ルナまで・・・」

「この間のお返しよ」

「結局ルナの方が根に持ってるじゃん」

「あ」

このやりとりで、結局彼等は笑いをこらえきれず、
大笑いしてしまった。

自分達に、どんな“運命”が待っているかも知らず・・・。

＜ジブリール邸＞

「さてと、ジブリール・・・これはどういう事か説明してもらおうか」

ロゴスメンバーの一言に、ジブリールは決まりの悪い顔で応じる。

「ちょっとばかり計画がずれただけですよ・・・なにも問題はありません」

「ほう・・・大部隊でぞろぞろと出向いていき、使うなと言ったものを使い、
鼻っぱしに大打撃を食らって逃げていき・・・これが”ちょっとばかり”とはな。
我々をなめているのかな?」

「この憤りを誰にぶつければいいのだね？君かな？」

「！・・・ふざけたことを仰いますな！」

「ふざけたことなど言っとらん。むしろ君の方だと思うが？」

ジブリールはついにぐうの音もでなくなった。

「とにかく、計画は至って順調です！戦争には勝って見せますよ！」

「ふん。次は無いと思え」

メンバー達との通信はそこで切れた。

「おのれ、金の亡者共め！偉そうな口を叩きおって！」

ジブリールはワイングラスを投げ飛ばした。
当然の事ながら、ワイングラスは粉々に砕け散った。
その時、ジブリールに通信が入った。

「ジブリール理事！」

「今度はなんだ！」

「は、Ｊ，Ｐジョーンズのイェーガー少佐より通信です」

「わかった、直ぐに繋げろ」

画面が切り替わり、クリストがモニターに映る。

「閣下、計画に支障が出たとの事ですが・・・」

「いや、問題は無い。そちらは予定通り行動しろ。
それよりどうだ?機体の調子は」

「は、問題はありません。ノワールストライカーの調子は良好です。
ＩＷＳＰと比べ、汎用性は高く、機動性にも優れています」

「ファントムペインの別動隊のパイロットのデータと共に、
そちらの物もデータを回収する。壊すなよ」

「了解です、閣下」

「では、任せたぞ」

ジブリールは回線を切ると、先程の士官を呼び出した。

「オーブの方はどうなっている」

「はっ、代表首長のカガリ＝ユラ＝アスハが、同盟締結を拒み続けており、
依然として動きはありません」

「チッ、小娘が!何がオーブの理念だ!ウズミの亡霊め!
セイランに伝えろ、切り崩せとな!」

「了解しました」

ジブリールは通信を切った。

「ええい、どいつもこいつも・・・！」

＜翌日　ミネルバ　食堂＞

開戦から一夜明け、ミネルバの食堂は、昨夜の核攻撃の話でもちきりだった。
食堂の入り口近くでは、アムロ，シン，ルナマリア，メイリンの四人が朝食をとっていた。
反対側のテーブルでは、タリアとアーサーが朝食をとっていた。

「ですからね、艦長！この情勢では、オーブだって・・・！」

「今飛び出して、何処に逃げ込むって言うの？
オーブだって、まだ連合に汲みした訳じゃないのよ。
カーペンタリアとジブラルタルが連合に包囲されている以上、
逃げ込む所はないわよ。もう少し情勢を見ても遅くはないわ。
本部からは何もない以上はね」

「は、はあ・・・」

アーサーとタリアは出航の如何について話し合っていた。

「やっぱり、宇宙軍の予備兵力投下と会わせるのかな？」

「そうじゃないかな。アムロさんはどう思います？」

「どうだろうな。この軍に二つしかない基地が包囲されていれば、単艦で飛び出しても、恰好の標的だ。やはり、状況次第だろうな。だが、出航はそう遠くはないはずだ」

「ザフトの降下作戦まで、あと3日ですからね・・・」

ザフトの降下作戦にあわせて、連合は動くと見ると、延ばしにのばして、停泊はあと2日だった。

「どちらにせよ、その降下作戦とやらの前となる可能性は高いだろうな。

だが、この国の出方次第にもよる」

「それじゃ・・・この国が連合に汲みする可能性もあるって事ですか！？」

「可能性はゼロってわけじゃない。今の情勢ではな。オーブの理念とやらも、この情勢では非現実的だよ」

それに反応したのか、シンは妙に食いついてきた。

「頑固なアスハが、そう簡単に理念を捨てるなんて思えませんよ」

「どうかな。君と彼女のあのやりとりからして、彼女はかなり単純

だ。
少し弱い所をつけば、簡単に崩れる」
「え・・・」
「彼女が考えを押し通すのは、難しいんじゃないか？」
「そうですか・・・」
その時、ブリッジクルーの一人、バートが食堂へ駆け込む。
「艦長、発信者不明の秘匿回線が・・・！」
「秘匿回線？すぐいくわ」
タリアとアーサーは、席を立った。
「秘匿回線・・・何があったんだ？」
「カーペンタリアからの通信じゃないんですか・・・？」
「いや、連合が基地を包囲しているなら、電波攪乱をやっているんじゃないか？」
「あ、確かに」
「気になるわね・・・。」
ルナマリアはそう言いながら、隣の席に座るメイリンに視線を移す。

「メイリン・・・」

「い、嫌よ、お姉ちゃん。防諜なんて！」

「そう言わずに・・・頼むわよ、メイリン！」

「え～・・・」

「やめておけ。知ったところで、どうにかなるものじゃない。」

アムロが止めようとすると、ルナマリアはこう言った。

「・・・まあ、アムロさんの言うことにも一理ありますけどぉ・・・。

やっぱり、気になるじゃないですか？」

ルナマリアの態度に少し苛ついたアムロは、少し言い方を強めた。

「気になるから全てが許されるってわけじゃない。

我慢する事だって必要なんだよ！」

流石に、アムロが少し怒気を含んでいるのを察知してか、

ルナマリアは諦めた。

下手をすれば、“修正”だって有り得る。

（はぁ・・・よかった）

＜ミネルバ　ブリッジ＞

「秘匿回線っていうのは、どういうことかしら?」

食堂から戻ったタリアとアーサーは、通信機の前に座るオペレーターに訊いた。

「ええ、それが、さっきから何度も・・・」

通信機のスピーカーからは、ノイズ混じりで男の声が聞こえていた。

「ミネルバ・・・ザザザ・・・るか!?・・・ジジ・・・脱出・・・ろ!」

タリアは受信機のスイッチを入れた。

「ミネルバ艦長のグラディスよ。どういうことかしら?」

「お!声が聴けて嬉しいね。用件だけ言うと、ミネルバは早い所、オーブから脱出した方が良い」

「何ですって?」

「オーブは大西洋連邦との同盟条約を締結するつもりだ。
ザフトの降下作戦の前にな！」

タリアの背中に悪寒が走る。アーサーはキョトンとしてタリアの方を見ていた。

「匿名の情報を、正規軍が信じると思って？
あなた、何者？」

「誰か？そうだな・・・アンドリュー＝バルドフェルトって奴からの伝言だ」

「バルドフェルト・・・って！」

「“砂漠の虎”・・・？」

タリアとアーサーは、顔を見合わせた。

「とにかく、そういうことだ。面倒な事になる前に、逃げた方がいい。
後の判断は、あんたに任せるぜ・・・」

通信はそこで切れ、男の声は聞こえなくなった。

「・・・カーペンタリアと連絡はとれるかしら？」

「連合軍の電波攪乱で、つながりませんね。
何度もコールしてますが・・・」

タリアは少し考え、アーサーを見た。

「オーブ側の情報を集めてくれるかしら？
何も分からないままじゃ、手の打ちようがないわ」

「は、はい！」

「頼んだわよ。」

敬礼したまま硬直したアーサーを後目に、タリアはブリッジから出ようとした。
その時だった。

「ん？艦長！参謀本部より通達です！」

「え？」

タリアは再びオペレーターの方へと向かった。

「参謀本部はなんと言ってきているの？」

「読み上げます。
プラント防衛軍ザフトハ、積極的自衛権ノ行使ニヨリ、
地球連合各国ノ攻撃カラノ防衛作戦ヲ展開スルモノデアル。
尚、オペレーション・スピアオブトワイライトノ決行ヲ、
一日繰リ上ゲル物デアル。
との事です」

「他にはなんと？」

「いえ、これだけです」

全く、タリアの予想外であった。

「まずいわね・・・この国にはもう居られなくなったわね。
各員に通達、命令無きままだけど、翌朝８：００にミネルバは出航します」

「では、さっきの話を信じるんですか！？」

「そういう訳でもないけど、何にせよ今のオーブ政権は連合よりよ」

「はっ！了解しました！」

＜数時間後　ミネルバ　格納庫＞

ミネルバ出航の旨がクルー達に通達され、
ＭＳパイロット達は、各々の機体の最終調整にあたっていた。

「ほ、本当に全部マニュアルでいいんですか！？」

「構わないよ。それより、インパルス用ライフルが対応するかど・・・どうかしたか？」

「え、いや、だって戦いづらくないですか！？マニュアルじゃ！？」

「心配には及ばないよ。こっちの方が慣れてる。」

アムロとヴィーノは、νガンダムの調整を行っていた。

「聞いてるのか？インパルス用ライフルに対応させる」

「は、はい。実際の戦闘では、インパルス用の奴を使いますからね」

本来、νガンダムが使っていた武装は、データ解析用にまわされることになっていた。
戦闘では、インパルス用のビームライフル、ＡＢＣシールド、ビームサーベルを使うことになる。

「アンチビームコーティングか・・・。効果はどれくらいだ？」

「角度さえ調整すれば、殆ど無効化できます。
大出力ビームでも、無効化できますよ」

「凄いな・・・」

宇宙世紀の世界において、完璧な対ビームコーティングは、殆どなかった。アムロが驚くのも当然である。

「済まない、後は一人でやるよ」

「わかりました。後でまた来ます」

「頼む」

ヴィーノはνガンダムから降りると、
マッドの元に駆けつけた。

「あの人、全部マニュアルなのかよ・・・」

「そうみたいね。そんなに巧いのかしら?」

「よっぽど自信があるんじゃない?」

ヴィーノが大きな声で叫んだことで、アムロがマニュアル設定にしていることは、シン達にも知れ渡っていた。

「一度模擬戦の相手をしてもらったら?」

「・・・」

＜翌日　ミネルバ　ブリッジ＞

オーブ軍港に停泊するミネルバは、船出の準備をしていた。
その軍港に、一人の金髪の少女が訪れる。
オーブ連合首長国の代表、カガリ＝ユラ＝アスハである。

「では、やはり大西洋連邦との同盟条約を結ぶと？」

「そういうことになってしまった・・・。
本当に済まないと思う。私が非力なばかりに・・・」

カガリはタリアに、深々と頭を下げた。

「いえ、代表のそのお気持ちは、ありがたく受け取りますわ」

「では、私はこれで・・・」

カガリはブリッジから立ち去り、出口へと向かった。
その途中、カガリは曲がり角で、誰かとぶつかってしまった。

「あ・・・！済まない・・・あっ！」

カガリがぶつかった相手、それはシン＝アスカであった。

「ア、アスハ・・・！何しに来やがった！」

「わ、私は・・・！」

シンは明らかに怒っていた。衛兵がいなければ、殴りかかっていた

かも知れない。

「何が大西洋連邦との同盟だ！滅ぼしてやるよ、こんな国！」

シンはカガリの肩にわざとぶつかり、その場を立ち去った。

「シン！」

シンはそのまま遠ざかっていった。

「行きましょう、アスハ代表。ご無礼をお許しください」

「・・・」

カガリの下船後、ミネルバは出航した。

＜ミネルバ　ＭＳパイロット待機室＞

ミネルバの出航と併せて、艦内はコンディションイエローに移行した。

ＭＳパイロット達は、それぞれノーマルスーツを着込み、待機していた。

「これでオーブも敵側ね・・・。シン？」

シンは窓から、段々と遠ざかっていくオーブを見つめていた。

「やはり名残惜しいか？」

緑のノーマルスーツに身を包んだアムロが、缶ジュースを取り出しながら
シンに訊く。

「そんなこと無いですよ・・・あんな国！」

「ならいいが。それよりみんな、心の準備をしておけ、
そう遠からず戦闘になる」

その言葉に、ルナマリアとシンがアムロの方を向く。
レイの方も、ちらと振り返り、また準備を始めたが、
アムロの話自体は聞いているようだった。

「なんで、そんな事が分かるんです？」

「あの国（オーブ）は連合と同盟を結ぶ国だ。
それがどういうことか分かるか？」

「・・・！オーブが連合に、出航を告げ口したって事も・・・！」

「有り得ることだ。いや、そうでない方がおかしい。

そういうことだよ、政治という物は・・・！」

アムロの予測は正しかった。
その数分後に、艦内はコンディションレッドに移行した。

「やはり来たか・・・行くぞ！」

「クッ・・・やっぱりこうなるのかよ！」

アムロ達４人は、格納庫へと向かった。
格納庫についたと共に、艦内放送が流れる。
艦長のタリアだった。

「ミネルバ艦長のタリア＝グラディスよ。
現在、本艦の前方には、地球連合艦隊が展開中である。
また、オーブ艦隊が領海内に展開しており、後方のドアを閉めている」

「オーブが・・・！」

「チィッ！」

現在の状況では、ミネルバはオーブと連合に挟み撃ちにされていた。

「本艦には、前方の連合艦隊を突破するほかに活路はない。
これから予想される戦闘は、ミネルバ発進以来、嘗て無いものとなるだろう。
各員の一層の健闘に期待する」

ミネルバのクルー達は、戦闘配置につき、気を引き締めた。

アムロはνガンダムのコクピットに入り、νガンダムを起動させた。
全天周囲モニターが周りの状況を映し出し、
整備員達が駆け回っているのが見えた。
アムロがヘルメットを被ると、通信が入った。

「本艦は戦闘に入ります。発進を頼めるかしら？」

「ええ、僕もそのつもりです」

「頼むわ。νガンダムは発進後、インパルスと共に敵機の駆逐に当たって」

「敵の数は？」

「艦艇を十数隻確認。ＭＳの搭載数は、約３０って所かしらね。
旗艦が分からない以上、撃滅するしかなさそうね」

「了解」

νガンダムはカタパルトへと向かった。
整備員の１人が、νガンダムに向かって叫ぶ。

「カタパルトがまだ対応してないんで！自走でお願いします！

「了解だ！」

νガンダムは格納庫から直接、自走で発進した。

「アムロ、行きます！」

第４話　戦場の大海原（前書き）

作中でも書きますが、νガンダムの性能は少し下がっています。
だいたいザク？ぐらいの性能です。

また、ＤＥＳＴＩＮＹのモビルスーツの性能は、
グリプス戦役時ぐらいと考えています

第４話　戦場の大海原

「アムロ、行きます！」

アムロのνガンダムは、カタパルトの先から大空へとびだった。

「飛行能力は問題ないみたいだな・・・。
だが、若干不安定だな・・・ゲタがあればいいんだが」

アムロの言う“ゲタ”とは、ＳＦＳ（サブフライトシステム）の事である。
この世界では、飛行ＭＳが多いため、ザクなどの一部ＭＳが運用していた。

更にミネルバから、戦闘機が発進する。

「シン＝アスカ、コア・スプレンダー、いきます！」

コア・スプレンダーが発進すると共に、チェストフライヤー、レッグフライヤー、
フォースシルエットが続いて発進する。

「コア・ファイター・・・！？いや、インパルスの構成要素か！」

コア・スプレンダーは箱状の形態（コア・ブロック？）に変形し、
チェストフライヤー、レッグフライヤー、フォースシルエットと合体し、
フォースインパルスガンダムとなった。
（発進から合体までの流れを、

特殊な場合を除いて以後「フォースインパルスが発進する」と表す。
ソード、ブラストの場合も同様。）

「まるで“ガンダム”だな。だが、これでは隙が大きすぎる」

発進する前にあらかじめ合体したほうが良いとアムロは思ったが、特に気にはしなかった。

「インパルスは左舷の敵を、νガンダムは右舷の敵を迎撃して！」

「了解！」

インパルスは編隊を組んで向かってくるウィンダムとダガーＬの部隊に突進した。

「数ばかりごちゃごちゃと・・・ええええい！」

インパルスはビームを放ち、ウィンダムの一機を貫く。
他のウィンダムの攻撃をかわすと、また別のウィンダムを撃墜した。

「シン君、あまり艦から離れるな！」

「わかってます！」

アムロのνガンダムの前にも、ウィンダムとダガーＬの部隊が立ちはだかる。

「チィッ！」

アムロは向かってきたウィンダムを打ち抜くと、その残骸を踏み台

にし、
更にその後ろのウィンダムを、ビームサーベルで切り裂いた。
「機体の反応が鈍い・・・！やはり性能が落ちているのか！？」
アムロは、νガンダムの性能が若干落ちていることに気がついた。
「だが・・・！」
アムロは振り向きざまに、サーベルで切りかかってきたウィンダムを切ると、
更にライフルで二機のウィンダムを打ち抜いた。
「腕でカバーしてみせる！」
アムロ、シン、レイ、ルナマリア、ミネルバの奮闘で、
敵機の数は見る見るうちに減っていった。

一方の連合艦隊・・・。
「ふん、なかなかやる。増援部隊、出撃！ザムザザーもだ」
「了解、ザムザザーを出します」
艦隊司令の命令で、新型ＭＡ“ザムザザー”が発進準備に入る。
陽電子リフレクターを搭載した機体である。
「少佐、これからの時代は、ああいう大型ＭＡの時代だと思ってい

るよ」

艦隊司令が、傍にいた副官の少佐に言う。

「と、いいますと？」

「コーディネイター共のつくった。チンケなＭＳなどを、いつまでも真似する必要などない。絶対的な攻撃力と防御力こそが重要なのだよ」

「は、はあ・・・」

この少佐には、彼の言い分はよくわからなかった。

ザムザザーは発進体勢に入った。

「ザムザザー、発進！」

空母から発進したザムザザーは、ミネルバへと飛んでいった。

＜ミネルバ　ブリッジ＞

「増援の発進を確認、ＭＳが３０機と大型の熱源体が・・・。」

「大型の熱源体？」

タリアはオペレーターを振り返った。

「モビルアーマーと思われます！」

「モニターに出して！」

「光学映像、入ります！」

モニターに映し出されたのは、連合艦隊の艦と艦の間を行く、不気味な蟹の様なモビルアーマーと、増援のＭＳ部隊だった。

「あ、あんなのに取り付かれたら・・・！」

「クッ・・・タンホイザー起動、右翼の艦隊ごとなぎ払い、突破する」

「了解、タンホイザー起動、照準、敵ＭＡ！」

アーサーの復唱と共に、かの隕石を破壊した陽電子砲が顔を出す。

「タンホイザーを使用します。アムロ機は下がってください。」

タリアからの通信に気づいたアムロは、一度後退した。

「あのＭＡごとなぎ払うということか・・・！」

タンホイザーはエネルギーをチャージし、次第に砲門が光り始める。

「プライマリ兵装バンク、コンタクト、出力定格、セーフティー解除！
発射用意完了です！」

「タンホイザー、撃て！」

砲口から解き放たれたエネルギーの渦は、真っ直ぐにザムザザーへと伸びた。

「すごいな・・・！」

タンホイザーのエネルギーは、アムロの予想を上回るほどだった。

それは、周りの艦船を巻き込みながら、ザムザザーに直撃した。

しかし、アムロは直撃の寸前、ＭＡが何かを展開するのを見た。

「何だ・・・？」

ザムザザーはエネルギーの渦を受け止めながら、後退していく。

傍にいた巡洋艦が爆散し、巻き上がった水蒸気が辺りを包んだ。

「やったか・・・！？」

ほんの数秒で霧が晴れ、視界が戻る。

そこに映っていたのは、１０隻ほどの艦艇と、

無傷の蟹形ＭＡだった。

「えええええ！！」

「クッ・・・なんて事・・・！」

「ど、どうすればいいんですか、艦長！？」

「あなたも考えなさい！！」

驚いていたのはブリッジクルー達だけではなかった。

「ちょっと、何なのよあれ！」

「特殊なフィールドを展開したようだな・・・！」

「な、なんで！？」

アムロはＭＡを見ると、通信を開いた。

「艦長、あのＭＡは特殊なフィールドを使用しています。」

「ええ、恐らく、前大戦時に使用されていた、
光波防御帯の応用型と思われます。実弾も通用しないわ」

「なら、俺とシンで接近戦を仕掛ける」

「わかったわ。本艦は一時後退します」

「了解です。シン！」

「あ、はい！」

ミネルバはオーブの方向へと向かっていった。

＜オーブ　国防本部＞

「ミネルバ、領海線に接近！」

オーブの国防本部には、ユウナの姿もあった。
その国防本部に、カガリが入る。

「ユウナ、これは何だ！」

「ああ・・・ミネルバと連合の戦闘だよ・・・。
なにぶん近いからねぇ・・・」

「そういうことじゃない！ミネルバが・・・あれでは沈むぞ！」

カガリはモニターを指差し、ユウナに迫る。

「大西洋連邦は盟友となる相手だよ？
それなら、その敵であるザフトも、オーブの敵だよ。」

「だ、だが・・・！」

「ミネルバ、更に接近！」

「警告しろ！止まらないなら威嚇だ！」

ユウナはカガリを無視し、オペレーターの士官に言い放った。

無視されたのもあり、カガリはさらに声を荒げる。

「ユウナ！」

「国はあなたのおもちゃではない！」

ユウナはついに我慢できなくなり、カガリを叱り付けた。

「え・・・！」

「我々の立場を考えなさい！あなたのわがままが政治ではない！」

ユウナに圧倒されたカガリは、ついに黙り込んだ。

＜タケミカヅチ　ブリッジ＞

「トダカ一佐！」

先ほどオーブ国防本部から出た指令は、オーブ防衛艦隊司令のトダカ一佐の元に届いた。

「了解だ。」

トダカは通信機を取った。

（こういうの恩知らずって言うんだがな。政治は嫌いだよ。）

＜ミネルバ　ブリッジ＞

「ザフト軍戦艦、ミネルバに告ぐ。
貴艦はオーブ連合首長国の領海線に接近中である！
繰り返す、貴艦は領海線に接近中である！」

通信機を通じて、警告がミネルバに伝えられる。

「ど、どうします、艦長？」

「ここで戻れるはずないでしょ？沈みたいの？」

「は、はい！じゃなくて、いいえ！」

同じころ、アムロとシンは、ザムザザーの相手をしていた。

「な、なんてスピードだ！」

「落ち着け、シン！動きをよく見るんだ！」

近くのウィンダムを打ち抜いたアムロは、

ザムザザーの下に回りこむと、ビームライフルを向けた。

「下だ！」

「了解！」

ザムザザーは４門のビーム砲をνガンダムに向けた。

「チィッ！」

アムロはビームを回避した。

再び攻撃コースに入ったアムロは、ビームサーベルを引き抜いた。

その時、オーブ艦隊の威嚇が始まる。

「なんだ！？」

「オーブが・・・うわ！」

シンが気をそらした瞬間、インパルスはザムザザーの爪につかまれた。

「ＭＳが！そのひ弱なボディーを引きちぎってくれる！」

ザムザザーは急降下をはじめ、インパルスにかなりのＧがかかる。

「うあああああああ！！！」

「シン！」

「・・・・・」

「シン、どうしたんだ！返事をしろ！」

シンから応答はなく、返事はなかった。

インパルスはフェイズシフトダウンを起こし、
脚が砕け散った。

「死ね！砕け散るがいい！」

ザムザザーはビーム砲をインパルスに向けた。

シンは薄れ行く意識の中で、
過去のことが急に思い出されるのを感じた。
人が死ぬときに見る、走馬灯である。

オーブでの日々、失った家族、
マユ、父さん、母さん、レイ、ルナマリア・・・。
今まであったいろいろな人たち・・・。

こんなことで・・・こんなことで俺は・・・！

シンの中で何かが弾け、インパルスは体勢を整えた。
ビームをよけたインパルスは、ミネルバの方向へ飛んだ。

「シン君、大丈夫か！」

「大丈夫です、アムロさん」

（ん・・・なんだ！）

アムロは、シンの中の何かが変わったのを感じた。

（この感じは何だ・・・？）

どこか危険な感覚を感じたアムロだが、とにかく今は、
目の前の敵に集中した。

「ミネルバ、レッグフライヤー射出、デュートリオンビーム照射だ！
それと、俺の合図と共にソードシルエットをくれ！」

「りょ、了解！」

シンはレッグを取り替えると、
ミネルバの前まで行った。

「デュートリオンビーム、照射！」

デュートリオンビームはインパルスの額にのび、
インパルスは本来の輝きを取り戻した。

「おのれ、生意気な！」

ザムザザーはビームを斉射した。

「効くかああ！」

シンはシールドで受け止め、シールドをそのまま囮にし、ジャンプした。

「き、消えた・・・！」

「う、上です！」

「な、何！回避しろ！」

「避けられません！」

インパルスはビームサーベルを引き抜き、ザムザザーに取り付いた。

「てやあああああ！」

シンはビームサーベルを振り下ろし、コクピットを焼き尽くした。

「うわあああ！」

ザムザザーはそのまま海中に墜落した。

「ソードシルエットを！」

「了解！」

ミネルバから射出されたソードシルエットを装着したインパルスは、連合艦隊に取り付いた。

「な、なに！」

シンは次々と艦船を沈め、ついには、残存艦艇を撤退まで追い込んだ。

（あの感じ・・・彼はいったい何者だ？）

最後に残ったウィンダムを撃墜すると、
アムロは艦船の残骸の上に立つインパルスを見つめた。

アムロ、シン、レイ、ルナマリアの４人は、無事にミネルバへ帰還した。

第４話　戦場の大海原（後書き）

今回は、少しシンが目立って、アムロの影が薄くなったような気がします。
戦闘描写が下手ですいません・・・。

次回、「戦場への帰還」
戦乱の地球、駆けろ、セイバー！

思いつかなかったので原作通り（？）のサブタイトルです。

第5話　戦場への帰還

＜ミネルバ　格納庫＞

オーブ沖で待ち伏せしていた地球連合艦隊を打ち破ったアムロ達は、
ミネルバへと着艦した。

逃げ帰った連合艦隊とオーブ防衛艦隊を見送って帰還したシンは、
コクピットから降りるや否や、格納庫に集まったクルーたちに囲まれた。

「すごいじゃんシン！びっくりしたぜ！」

飛びついてきたヴィーノに抱擁されたシンは、
少しばかり戸惑いながらも「ま、まあな」と答えた。
他のクルーたちからも、シンを称える歓声がわいていた。

「でもすごいじゃないのよシン！
どうしちゃったの！」

「その・・・オーブ艦隊が発砲したのを見て、
それで少し気をそらしちゃってさ・・・それで、
こんな所でやられてたまるかって思ったら、
急に頭ん中が真っ白になって・・・」

「・・・キレたってこと？」

「ま、まあ・・・」

シン自身にも、何がおきたかはよくわからなかった。
ただ、自分の中で何かが爆発したということだけは、
漠然と捉えていた。

「何にせよ、よくやったシン。俺たちは生きている」

「レイ・・・。そうだな」

その後、整備長のマッドが他の者達を追い払い、
シンはやっと解放された。

アムロは先ほど感じた力のことが気になりながらも、
シンに声をかけた。

「よくやった、シン。なかなかの戦いぶりだったぞ」

「アムロさん・・・」

「少しいいか、シン？」

アムロには、一つ忠告しておきたいことがあった。

「え・・・」

「・・・少し落ち着けるところにいこう」

アムロとシンは、格納庫から出た。

「・・・それで、話ってのは何です？」

「ああ、さっきの戦闘のとき、君の中から強大な力のようなものを感じた」

「強大な力・・・？」

「君自身でも気づいているはずだ。君の中で、何かが起きたことに。その力に、振り回されないように気をつけてくれ」

「え・・・な、何言っているんです！
大丈夫ですよ。自分の力くらい、自分で制御できます！
それに、何でそんな・・・」

「いや、それならいいんだ。老婆心と思ってくれていい」

「それじゃ、俺行きますよ」

シンは自室へ入った。

アムロが心配する理由としては、
ガラス細工のように繊細な神経を崩壊させてしまった少年、
カミーユ＝ビダンの事を知っていたというところもあった。
その高すぎるＮＴの力に押しつぶされた彼のような悲劇を、
もう繰り返させたくないという気持ちだからだった。

（・・・焦りすぎか・・・？
まだ何か起こったわけじゃない。
今はただ、彼の成長を見守るしかないか・・・。）

アムロは、一休みしてからνガンダムの整備を始めることにした。

＜数日後　ザフト軍カーペンタリア基地＞

オーブ沖での激戦の数日後、
ミネルバはオーストラリア北部に位置する
ザフト軍基地、カーペンタリアのドックに入った。

アムロは正式な入隊手続きを済ませると、
カーペンタリア基地内を見学していた。

「どこを見ても、ジオン系のモノアイだな・・・」

アムロは、目の前を横切った運搬作業中のシグーを見上げながら呟いた。

「・・・ん？」

アムロが空を見上げると、赤い戦闘機が着陸態勢に入っている事に気がついた。

「艦の方向だな・・・行ってみるか」

アムロはミネルバへと走った。

その途中で、紙コップのジュースとハンバーガーをそれぞれ手に持ったシンに会った。
どうやら、彼も赤い戦闘機に気づいたらしく、同じくミネルバへと向かっていた。

「あ、アムロさん！」

「シン、君もあれに気づいたのか？」

「そうです」

「あれについて、何か聞いてないか？」

「聞いてないですよ、そんなの」

二人は話しているうちに格納庫につき、赤いＭＳが収納されたのを見た。
その赤い姿を見たアムロは、一人呟いた。

「ガンダム・・・？」

整備を手伝っていたルナマリアもそれに気づき、
ワイヤーをつたってガナーザクウォーリアから降りた。

「シン、何これ？」

「知らないよ・・・あ、ハッチが開いた」

赤いガンダムタイプのＭＳのコクピットから降りたワインレッドのノーマルスーツの人物は地上に降りると、ヘルメットを取った。

その人物は、あのアスラン＝ザラであった。

「アスランさん!?」

「そんな・・・なんで!?」

「認識番号２８５００２、特務隊フェイス所属、アスラン＝ザラだ。乗艦許可を頼む。艦長は艦橋か？」

アスランは辺りを見回すと、その場に居合わせたメイリンが一歩前に出る。

「私がご案内します。こちらへ。」

「すまない。ん?」

アスランはメイリンの後ろにいたアムロ＝レイに気がついた。

「あなたは・・・アムロ＝レイ大尉でしたよね。確か」

「ああ、理由あってこの艦に乗っている」

「よろしくお願いします」

「こちらこそ。よろしく頼む、アスラン＝ザラ君」

二人は改めて握手すると、こんどはシンがアスランにくいついてきた。

「ザフトに戻ったんですか！」

「そうだ、シン君」

「何でです!?オーブなんでしょう、あなたは!」

その言葉にアスランは振り返ることも無く去っていった。

「あ・・・!」

「よせ、シン。彼にもいろいろとあるんだろう。
何も、今すぐ詮索することは無い。彼も疲れているだろうからな」

アムロに咎められたシンは、しぶしぶ諦めた。
するとシンは、何か思い出したかのような顔をした。

「あ、それよりアムロさん。模擬戦しませんか?
MSシミュレーターですけど」

「構わん。いいだろう」

アムロとシンはMSシミュレーターの中に入った。

＜JPジョーンズ　甲板＞

ステラ＝ルーシェは遠くを見つめていた。
果ての無いように見える地平線。
ステラは海を見るのが好きだった。
そんな彼女に、一人の男性が近づく。
クリスト＝イェーガー少佐である。

「どうしたんだい？」

「海・・・見てるの」

「そうか、海に落ちないようにな」

クリストも共に海を見ていると、そこにアウル＝ニーダがやってきた。

「こんな所に・・・少佐、ネオがお呼びだぜ」

クリストは振り返ると、やや怒気を含んで言い放った。

「少尉、口の利き方に気をつけてもらおうか」

「はっ！申し訳ありませんでした！少・佐・殿！」

アウルはわざとらしく敬礼すると、その場を立ち去った。

（あれが強化人間か・・・）

クリストはその後ブリッジへと赴いた。

「少佐、例のＭＳの性能に関する報告が届いている。予測以上の性能だよ」

「・・・といいますと？」

「先日、オーブを出航したミネルバを攻撃した部隊が、敗走したらしい。戦力比は３０：１。新型のＭＡまで持ち出してだ。あの部隊と謎のＭＳ・・・かなり厄介かも知れんぞ。気を引き締めてくれ」

「了解です」

「連中がカーペンタリアから出てきたところを狙う。そのときは頼むぞ」

「了解、失礼します」

クリストはブリッジから退室した。

（あの態度・・・最初からわかっていたとでも言うのか・・・？）

＜ミネルバ　格納庫＞

シンはこの上なく焦っていた。
フォースインパルスのビームライフルの照準を、
敵のゲタ履きのブレイズザクウォーリアにつけると、発射ボタンを
押した。

「あたれ！」

敵のザクは難なくそれをかわし、
ビーム突撃銃のビームを放った。

「うわ！」

何とかシールドで防いだシンだが、その間に敵を見失った。

「どこだ・・・！あの雲海の中か？」

シンは一瞬だけ動きを止めた。
それがあだになるとも知らず。

雲海から飛び出してきた機体を確認したシンは、
反射的にライフルを向けた。

「迂闊だったな、アム・・・え！」

飛び出してきたのは、グゥルだった。
その瞬間、雲海からＭＳが飛び出し、ビームトマホークの光が輝い
た。

「あ・・・！」

とっさにビームライフルを上に向けたシンだが、
すでに手遅れだった。
インパルスの上半身は、構えたライフルごと切られ、
モニターには“撃墜（ロスト）”の二文字が映った。

「そんな・・・」

「悪いが、落とさせてもらったよ」

「０勝１０敗・・・もうやめたら？」

アムロとシンは、互いにシミュレーターから降りると、
近くのベンチに座った。

「・・・」

「あまり落ち込むなよ、シン。
実戦経験をつめば、それなりに強くなれるはずだ」

「そうよ、シン！だから、ね？」

落ち込むシンを励ましたアムロとルナマリアだが、
シンは悔しさでいっぱいだった。

無理も無い。
一矢報いることすら出来ず、一方的にやられてしまったのだ。
しかも、アムロの機体は格下のブレイズザクウォーリア。
ブースターによる飛行と性能で、圧倒的に有利なインパルスで負けたのだ。

アムロが去った後、シンはアムロがどんな設定で戦っていたのかを見た。

「なんだ・・・これ・・・！」

1回戦目はデフォルトの操縦法で戦っていたものの、
2回戦目からは全てマニュアルで操縦していた。

「技術も実力も、圧倒的にあっちのほうが上って事かよ・・・」

シンはシミュレーターから降りると、
白亜のνガンダムを見てこう呟いた。

「超えてやる・・・俺だって、出来るはずなんだ！」

＜翌日　カーペンタリア基地　カフェテリア＞

MSシミュレーターでの訓練の翌日の朝、
アムロ達は朝食をとっていた。
そこに、昨日到着したアスランがやってくる。

「ん？アスラン君か」

「お、おはようございます。アムロさん」

二人は軽く挨拶すると、ホーク姉妹とレイもアスランに敬礼した。
シンの方も敬礼はしたものの、やはり不満そうな顔をしていた。

「戦闘においては、俺がＭＳ隊の指揮を執る。
改めてよろしく頼む。それと・・・」

「ああ、わかっているよ。俺も君の指揮下に入る。
今は君が隊長だからな」

「すみません、アムロさん」

「いや、いいんだ。それより、今後の俺たちの艦の行き先を教えてくれないか？」

アスランは小さく頷くと、脇に挟んでいたノートパソコンを開いた。

「私たちが行く予定の場所は・・・ここです。
スエズ方面駐留軍拠点のマハムール基地」

ノートパソコンの画面には、世界地図のＣＧ画像が映し出され、
スエズ運河を中心とした地域がアップになる。

「確か、ミネルバは宇宙軍の艦じゃなかったのか？」

「正式な配属の前に出航しちゃったもんで、

どこの方面軍にも所属してないんです」

「ええ。それに評議会からの指令です。これは」

「評議会から・・・って！」

「ここら辺の情勢は酷いらしいからな。議長も、何とかしようと思われたんだろう。」

アスランはノートパソコンを閉じると、
席に着き、モーニングのメニュー表をめくり始めた。

（彼はオーブの人間だったはずだ。それがなぜここにいるんだ・・・？）

アムロはアスランをじろじろと見ながら考え込んだ。

その日の昼ごろ、物資の搬入と修理を終えたミネルバは、
次なる激戦の地へと赴くために出航した。

「アスラン君、一ついいかい？」

ミネルバの甲板上で風に当たっていたアスランと話していたアムロは、
アスランに訊いた。

「なんです？」

「君はなぜこの軍へ戻ってきたんだ？」

「・・・さっきシンにも訊かれましたよ。
まあその・・・プラントで議長の話を聞いて、
俺がこの世界のためにできることはなんだろうと思って・・・」

（やはりあの議長とやらか・・・一体どういうことだ？）

今度は逆に、アスランが質問をする。

「そういうアムロさんは、何でこの艦に？」

「似たようなもんさ。あの隕石落としを見て、
もうこんなことはいけないと思ったんだよ。
エゴを振りかざして世界を滅ぼすなどと、
認められるはずが無い」

「そうだったんですか・・・あれは、俺の父親の亡霊みたいなものです」

「そうだったのか。なら、パトリック＝ザラというのは・・・
いや、やめよう。ところで・・・」

そういった所で、“戦闘準備”の警報が鳴る。

「敵か！」

アムロ達は屋内へと入った。

第６話　黒き狩人（前書き）

第6話　黒き狩人

＜J．Pジョーンズ　格納庫＞

カーペンタリア基地を発進したミネルバを捕捉したJ．Pジョーンズは、
MS隊の発進準備を行っていた。

「少佐、発進できるか？」

ネオ専用機のウィンダムに乗ったネオは、
クリストのストライクEに通信回線を開いた。

「電圧系統異常なし・・・いつでも行けます、ロアノーク大佐。
レーナ、そちらはどうだ？」

「大丈夫よ。いつでもいいわ」

レーナのウィンダムが、右手の手首を動かし手を振る。

「了解だ。基地司令からは？」

別のモニターに明かりがつき、基地司令が不満そうな顔を向ける。

「ロアノーク大佐、どういうことですこれは！」

「どうもこうも、そっちのウィンダム隊を貸してくれってことだよ、中佐。
こっちはガイアをそっちにまわす」

「し、しかし・・・！」

「これは命令だ、中佐」

命令、といわれた基地司令は、仕方が無く受諾した。

「り、了解しました・・・第０１から０９小隊発進！」

Ｊ．Ｐジョーンズが寄港している建設中の前線基地から、
約２０機ウィンダムが飛び立つ。

「こちらも行くぞ、発進だ！」

ネオ達のＪ．Ｐジョーンズから、カオスやアビス等を含めた２０機
ほどのＭＳが出撃する。

「イェーガー隊、出るぞ！」

それに続いてクリストのストライクＥ、レーナのウィンダム、
そして３機の１０５スローターダガーからなる特殊部隊が出撃する。

「さて、どう出る・・・！」

クリスト達の部隊は、ミネルバとＪ．Ｐジョーンズのほぼ中間点である島を目指した。

＜数分後　ミネルバ　格納庫＞

連合のＭＳ隊を察知したミネルバは、戦闘態勢に入った。
ノーマルスーツを着込んだアムロ達は、各々の機体に搭乗した。

「アスラン君、君は彼等の戦闘データに目は通したか？」

「い、いえ・・・」

「そうか、シンは突出する癖がある。気をつけろ」

「わ、わかりました」

アムロはシン達の戦闘データに、一通り目を通していた。
それを見た結果、シンには特に目をつけておく必要があると判断したのだ。

アムロ達の機体それぞれに、ブリッジからの通信が入る。

「各機は出撃を。本艦の目的はあくまでもマハムール基地にたどり

着くことよ。
本艦は最大戦速で敵部隊を突破します。殲滅することが目的ではないわ」

「了解！」

「それと、敵部隊の中にカオス、そしてアビスを確認したわ。
あの強奪部隊のようよ」

「あいつらが！？なら、俺が叩き潰してやる！」

力むシンに対して、アスランがたしなめるように、
しかし、隊長としての威厳をこめて言う。

「シン、発進後の指揮は俺が取る。戦法をどうこうするのは俺の仕事だ」

「わ、わかってますよ。そんな事・・・」

アムロの読みは案外正しいかもしれないと思ったアスランは、
更に他のパイロット達にも指示を出す。

「νガンダムは俺のフォローに、インパルスは敵部隊へ切り込め。
アビスがいるのなら、ルナマリアとレイは水中戦の用意だ！」

アスランの指令で、２機のザクが水中戦の用意を始める。
それと同時にシンのフォースインパルスが発進し、
それに続いて、装甲を赤く染めたセイバーが発進する。

「ザラ隊長、切り込めってことは、後は好きにやっていいって事で

すよね？」

「・・・そういうことにもなるな。だが、あまり艦から離れるなよ。」

アスランはこのくらいなら大丈夫だろうと考えていた。
これが、後にあだとなるとも知らず。
そんな会話など関係ないかのように、アムロは発進準備を着々と進めていた。

「ヴィーノ、グゥルの用意を！」

「え、あれを使うんですか？」

「そうだ、急ピッチで頼む」

アムロの命令からまもなく、カタパルトにＳＦＳ「グゥル」がセットされる。
νガンダムはそれにうつ伏せで寝そべるようにして発進した。

「νガンダム、出るぞ！」

ミネルバのカタパルトから発進したνガンダムは、
先行する2機に追いつくと、片方のひざを立てる姿勢をとった。

「やはり、ゲタを持ってきたのは正解だったな。通常時と比べて、機体の安定性がダンチだ」

カーペンタリア基地においてミネルバ隊は、数機のグゥルを補給していた。

νガンダムの安定性の悪さを補うためだ。

「アムロさん、それで戦うんですか？」

「そうだ。こちらの方が・・・ん、来たぞ！」

アムロ達は敵部隊に向かって一斉射を放った後、
散開した。
インパルスが敵部隊に突入し、敵のウィンダムを次々と落としていく。
カオスのパイロット、スティング＝オークレーは
見たことのない赤いＭＳがいることに気づく。
アスランのセイバーである。

「あ？なんだありゃ。新型かよ？それにあっちは・・・！」

スティングはセイバーと共にウィンダムを落としていく白いＭＳに気づく。
スティングはネオのウィンダムに通信回線を開いた。

「ネオ、例の白いＭＳを発見した。」

「了解だ、スティング。撃破はするな。気をつけろよ。」

スティングは了解すると、まずはセイバーに攻撃を仕掛けた。

「力を見せてみろ！新型！」

スティングのカオスはビームライフルとシールド内蔵の機関砲の一斉射を

セイバーに叩き込んだ。

向かって来たウィンダムを蹴り飛ばし、怯んだ所にビームの直撃を喰らわせた
アスランは、カオスの接近に気付いた。

「左方向から敵・・・！強奪機体か！」

アスランは一斉射を軽々と回避すると、即座にビームライフルを構える。

「機体性能は互角のはずだ。いける！」

セイバーはビームを3連射すると、ＭＡ形態に変形し、一気に距離をとった。
カオスはその内一発をＡＢＣシールドで無効化するとセイバーを見失ってしまった。
その隙をついて、海面すれすれを飛行していたセイバーはカオスの真下から接近し、
ＭＳ形態に変形すると、カオスに切りかかった。
シールドで受け止めたカオスは、それをはじき返すと、
もう一度ライフルと機関砲の一斉射撃を叩き込んだ。

白熱する二機の空戦特化型ＭＳ同士の戦い。
そこへ、ゲタ履きのＭＳが割り込む。

「アスラン、援護するぞ！」

「頼みます、アムロさん！」

アムロのνガンダムは、バルカンでカオスを牽制しつつ、
同じく割り込んできたウィンダムをビームライフルで打ち抜く。

セイバーの方もカオスのビームライフルを破壊したようで、
カオスは代わりのビームサーベルを引き抜き、そのビームの刀身を
発生させる。

「調子に乗るんじゃねえぞ！手前らッ！」

激昂したスティングは、ビームサーベルでνガンダムに切りかかった。
アムロもそれに応戦すべく、グゥルをオート操縦に切り替えると、
バーニアを起動させてジャンプし、同じくビームサーベルでカオスに切りかかる。
鍔迫り合いを繰り広げるνガンダムとカオス。
その中で、アムロはひとつの確信を得る。

「間違いない。この人工的な敵意！相手は強化人間か！」

アムロは叫んだ。数々の悲劇を生み、悲しみを増やしたあの技術。
あの忌まわしき技術が、この世界でも実用化されていることに、
アムロは憤りを隠せなかった。
アムロはνガンダムのビームサーベルを持っていないほうの腕を動かすと、
人間で言う指の付け根の部分をカオスのメインカメラへ向ける。

「！」

スティングは反応しようとしたが、その前に指の付け根の部分から
白い物体が発射される。

それはカオスのメインカメラに付着し、パイロットの視界を奪った。

「な、何なんだこりゃ！？」

困惑するスティング。

白い物体の正体は、トリモチ・ランチャーであった。

装甲にべたりと張り付いて敵の動きを抑制したり、視界を奪ったりと、

使い道の広い固定兵装だ。

宇宙世紀の世界では、割と一般的な装備だった。

νガンダムはカオスから離れると、ビームサーベルで右腕を切り落とした。

損傷による警告音とほとんど見えない視界にあせるスティング。

経験の差からか、一年戦争末期のアムロのように

“たかが”で済ますことはできなかった。

「ね、狙い撃ちにされる・・・！？クソッ！」

カオスは一目散に後退した。

追おうとするアスランをアムロは

「今はミネルバを守るほうが先だ、シンの援護に行く」

と言って制すと、腰にマウントしたライフルを取り出し、

オートパイロットで飛行するグゥルに着地した。

本来、ＭＳ隊の指揮を執るアスランだが、

このときはそれに従った。

シンは、ネオのウィンダムと交戦していた。

ウィンダム隊の集中攻撃に苦戦するシン。

「クソ！何なんだよ。この！」

焦るシンに対して、ネオにはある秘策があった。

（うまくやってくれよ、少佐）

ネオは勝利を確信した。

インパルスとウィンダム隊の交戦区域が

だんだんと拠点予定地に近づいているとも気づかず。

セイバーとνガンダムはその交戦区域に突入した。

「シン、あまり艦から離れるな！」

「わかってますよ・・・うわ！」

シンのインパルスが陸に近づいたとたん、

黒いＭＳが飛び出す。

ステラのガイアだ。

四足獣形態から繰り出されたビームブレイド“グリフォン2”を回避したシンは、

そのままガイアとの切り合いをはじめた。

「シン！チィッ、援護に・・・」

アムロがそう言いかけた時だった。

レールガンによる長距離砲撃がνガンダムをかすめ、

新たに2機のＭＳが接近する。

「新手か！」

「アムロさん、応戦を！雑魚はこっちで相手をします！」

アムロは新手の相手を、アスランはウィンダムの駆逐をすることとなった。

一方、新たに戦闘区域に近づく2機のＭＳ、
クリストのストライクＥ改めストライクノワールと
レーナの赤と白を基調とした配色のウィンダムは、
通信を行っていた。

「外れた！？」

「やはりやるな。レーナ、敵艦の動きは？」

「予想通り、Ａ－３ルートを通っているわよ、クリスト」

レーナは普段、公の場でなければクリストの事を呼び捨てにする。
それについては当然、理由があるのだが、
いずれ触れることにする。
クリストは待機中の３機の１０５スローターダガーに指令を送る。
“作戦は１８０秒後に開始する”という内容だった。
それとは別に、クリストはレーナにも指示を送った。

「レーナ、狙いは“奴”だけでいい。他は相手にするな」

「ええ、わかったわ」

クリストとレーナは二手に分かれて、νガンダムへの攻撃を開始し

た。

「来たか！」

アムロは向かってくるストライクノワールに対し、
ビームライフルを放った。
クリストはそれを回避すると、
すぐさま、拳銃型ビームライフル“ビームライフルショーティー”
を二挺、
ストライクノワールの腰部から取り出した。

「速い！こいつら、他の連中のようには行かないか！」

「さあ、貴様の力を見せてもらおうか！」

クリストはビームをνガンダムへ連射しながら、
だんだんと間合いをつめていく。

「拳銃型のライフルか！しかし！」

アムロはそれを避わしつつ、しかし無理をせず、
ＡＢＣシールドで無効化しながら、再びビームサーベルを引き抜いた。

「これで！」

「接近戦ならば！」

ストライクノワールは最初の斬撃をよけると、
２振の対艦刀“フラハガッハ３ビームブレイド”を引き抜き、

νガンダムに切りかかった。

「くっ・・・！」

アムロはそれをサーベルで受け止めると、
ストライクノワールのコクピット部分にシールドアタックをきめた。
殴られた衝撃で、ストライクノワールは大きく体制を崩した。
その一瞬の隙をアムロは見逃さなかった。

「隙を見せたな、もらった！」

アムロのνガンダムが、ストライクノワールのコクピットにビーム
サーベルを向け、
今にもそのパイロットを蒸発させようとする。

そのときである。
突如響いた言葉が、アムロの脳を打つ。

（駄目！その人は・・・！）

その声に反応するように、脳に電流が流れるような痛みが広がる。

「な、なんだ・・・この声は・・・うう！」

ヘルメットを押さえ、目を開いた先には、
すでに黒いＭＳの姿は無く、代わりに敵機の接近を伝える警告音が
鳴り響いていた。

「左か・・・！」

左を向いた瞬間、突如としてアムロの視界いっぱいに、
赤い物体が飛び込んだ。

赤いＭＳ。
そう認識したアムロは、無意識にこんな言葉を呟いていた。

「シャア・・・！」

シャア＝アズナブル。
自身の永遠の障害にして越えるべき存在。
しかし、アムロに迫るそのＭＳのパイロットは、
その男ではなかった。

「そこね！」

赤いＭＳ、レーナのウィンダムがνガンダムにシールドアタックを
仕掛け、
白い機体を弾き飛ばす。

「チィッ、情けない！
敵に止めをさせず、こんな量産タイプにまで遅れをとるとは！」

率直なアムロの悔しさに呼応するかのように、
νガンダムは体勢を立て直しつつ、赤いウィンダムにバルカン砲を
放つ。

「あと２６秒・・・レーナ、こいつと敵艦をなるべく引き離せ。」

「わかってる！」

連合の二機とνガンダムが戦っている間、
アスランはウィンダム部隊の相手を、
シンのインパルスは、ステラとネオの相手を、
そして、ルナマリアとレイはアビスと水中戦を繰り広げていた。

つまり、艦の直衛機がが不在だったのである。
さらに、ミネルバは必要以上に陸地に近づいており、
その近づいていた島が、３機の特務仕様のダガーが潜伏していたところだった。

それにいち早く気づいたのは、アムロであった。

（ん・・・なんだ？何かがいる？）

「余所見をするな！」

ビームを連射しながら、更に次の攻撃を繰り砂糖としている黒い機体を、
目障りな奴、と感じたアムロは、黒い機体が手にする拳銃型ライフルを
ビームで破壊した。

「ぬ・・・！しかし、これでチェックメイトだ」

「何！？」

アムロの目に、３機の黒いＭＳが映る。
それらのうちの一体は、真っ直ぐにミネルバを目指していた。

「・・・そうか！くそ、やられた！」

クリストの作戦はこうだ。
ミネルバの艦載機を全てひきつけ、
守りが薄くなったところを、クリストの部隊が艦橋を制圧し、
νガンダムやミネルバもろとも拿捕しようというものだった。

今まさに、その作戦は成功しようとしている。

「く・・・！」

ミネルバの護衛に向かおうと、アムロはνガンダムをミネルバの方に向かわせるが、
その目の前に、またしても赤いウィンダムが立ちはだかる。

「逃がさないわよ！」

「これでは・・・まずい！」

その一方で、当然のことながらミネルバのブリッジもパニック状態になっていた。

「かかかか、艦長！」

「うるさい！メイリン、敵はどこから？」

「し、島に隠れていたと想われます！」

メイリンの声も、いつに無く震えていた。
この状況で、焦っていなかった者はいなかった。

迎撃はもはや間に合わず、３機の黒いダガーのうちの一機が、ブリッジにビームライフルを向ける。

「・・・！？」

「ひっ・・・！」

「い、嫌・・・！」

ブリッジの誰もがその先の死を予見した。
しかし、その灼熱のビームは撃たれず、代わりにこんな通信が入る。

「こちらは地球連合軍第８１独立機動群のクリスト＝イェーガー少佐である。
直ちに戦闘を停止し、投降せよ。但し、妙な真似をすれば、ブリッジを撃つ」

「な、何だと・・・！？」

「ミネルバが・・・！」

「クリスト＝イェーガー・・・？」

彼の名前を聞き、タリアが呟く。

「まさかそれって・・・！」

「ええ、前大戦時、我が方のＭＳを何十機も落として、“黒き狩人”と呼ばれたパイロットよ・・・」

「そんなのがなぜここに・・・！？」

ミネルバの艦載機は停止し、戦闘をやめた。
それを確認したのか、連合のモビルスーツ隊も発砲をやめる。
しかし、シンとステラは未だに戦い続けていた。
双方ともあまりに熱中しており、それに耳をかたむける余裕が無かったのだ。

「ステラ、拠点予定地に近づきすぎるなよ！」

「こいつ、こいつ、コイツ！」

ネオの話などまるで無視するかの様に、
ステラは戦い続けた。

「何、まだ戦っている奴がいるのか？
まあいい。さて艦長、返答を聞こうか」

νガンダムを二機の１０５スローターダガーが取り囲み、
ライフルを向ける。

「・・・」

「か、艦長・・・」

アーサーが、恐怖に満ちた顔でタリアを振り返る。
タリアは迷った。今ここで投降すれば、軍の新兵器と異世界のＭＳ

の技術を
連合に渡すことになる。

「あと１０秒だ。９，８，７・・・」

（これではどうにもならない！どうすれば・・・ん？）

アムロはνガンダムにどういうわけかついていた、
あのビームブーメランのことを思い出した。

（そうか、こいつで・・・！）

アムロはスラスターを切り、νガンダムに自由落下を促した。
力なく落ちていくνガンダム。その姿に、ブリッジを狙っていた
ダガーのパイロットも含め、全員が注目した。

「何だと！」

「そんな！」

「ばかな！」

「νガンダムが・・・」

「落ちていく？」

そして、νガンダムは誰も予想しえなかった行動をとった。

アムロはビームライフルを真上に投げ、すばやく二つのビームブー
メランを取り出し、

νガンダムを取り囲んでいた二機のダガーに投げつけた。
投げられたビームブーメランは、きれいに孤を描き、
二つ同時に二機のダガーをきりさいた。

「まだだ！」

更にアムロはバーニアをふかして体勢を立て直すと、
自由落下で落ちてきたビームライフルを掴み、
即座に、ブリッジを狙っているダガーにビームを放った。

そのダガーのパイロットは、
上半身と下半身が生き別れになった療機のダガーを目撃した瞬間、
灼熱のビームに意識もろとも蒸発させられた。

爆散せずに海中に落ちたダガーを見て、
すぐに、アスランは近くのウィンダムを撃ち落とした。

「今だ、押し切れ！」

この隙をみて、硬直している敵部隊をアムロ達は次々に撃ち落としていった。

「一瞬であの状況を・・・！？
奴を侮ったか・・・大佐！」

「ああ、この状況じゃ、どうしようもない。
どうも、拠点予定地にまで入られちゃったからな。撤退だ！」

ネオのウィンダムを始めとして、連合のＭＳ隊は撤退した。

「チィッ・・・しかし、まだチャンスはある。
覚えていろ、”連邦の白き流星”」

そういい捨てると、クリストとレーナも撤退した。

＜地球連合軍　拠点予定地＞

「何をしている！戦車隊を前に出せ！」

連合軍の戦車、リニアガン・タンクが
向かってくるインパルスへの砲撃を始める。

しかし、インパルスは全く怯むことなく、ビームライフルで戦車を
撃ち抜く。
シンは、拘束されていた民間人を開放して回っていた。
しかし、半ば、暴走状態でもあった。
目前で逃げ惑う民間人が連合軍の兵士に射殺されたのを目撃し、

怒りが爆発したのだった。

「・・・！」

所構わずビームライフルを撃ちまくり、
どんどん基地を破壊するシン。

「シン、大丈・・・！」

アムロが駆け付けた時、アムロが見たのは、
とっくに無抵抗の基地に、未だ攻撃を止めないインパルスの姿だった。
よく見れば、既に白旗を揚げているところもある。
容赦なくビームライフルを撃ちまくるその姿は、虐殺とも見える。

「よせシン、もうやめろ！」

アムロの呼びかけを無視し、突っ込むシン。

「止めろ！どうしても止めないのなら・・・！」

アムロはνガンダムでインパルスを押さえ込み、
動きを止めた。

νガンダムはそのままインパルスをミネルバまで運んだ。
エネルギー切れを起こしたのだ。

第7話　戦う意味（前書き）

今回から、ハイネと新キャラが登場します。
それではどうぞ。

第7話　戦う意味

＜ミネルバ　格納庫＞

一時はブリッジを狙われ、降伏の危機に直面したミネルバも、
戦闘終了と同時に平時の落ち着きを取り戻す。
しかし、そんなミネルバ艦内でまた新たな問題が勃発していた。
エネルギー切れを起こし、
輝きを失ったインパルスから、今回の騒動の発端となる少年、
シン＝アスカが這い出る。
そのインパルスを回収したνガンダムからも、
緑のノーマルスーツの男性、アムロ・レイが降りる。
アムロはやや怒気を含み、シンを呼びつけた。

「シン！こっちに来い！」

「何です。何か言いたいことでも？」

そこに、ＭＳ隊の隊長でもあるアスラン＝ザラも駆けつける。

「当たり前だろう！なぜあんな軽はずみなことをした！」

「軽はずみ？俺は間違ったことはしてませんよ」

「なぜ一言報告しなかった！君はアスランから、
あの基地を叩き潰すよう命令されたのか？」

「そんな事は言われてませんがね。“後は好きにやっていい”とは言われました」

「貴様には常識の範疇で物事をやるという概念が無いのか？
あの基地には、まだたくさんの連合の将兵が残っていただろう！
人殺しだけが、戦争じゃあないんだぞ！」

「じゃあどうすればよかったんです？
あのまま民間人が無抵抗のまま殺されるのを、
黙ってみてろって言うんですか？」

「ならば、なぜ基地を完膚なきまでに壊滅させる必要があった？」

「あれは連合の基地でしょう。
カーペンタリアの鼻先にあんなものを残すわけにはいきませんからね。
それに、奴らはすぐに核を撃つような連中なんですよ！？
あなただって見たでしょう？」

攻撃してくる奴は潰せばいいという考え方、
そして何よりも、シンには目先のことしか見えていなかった。
アムロはシンの胸倉をつかみ、最後にこう言い放った。

「貴様の勝手な判断で、全てがうまくいくなんて思うんじゃない。
それができないのなら、軍を抜けろ！」

アムロはシンを放すと、格納庫から去った。
アスランもまたシンを一瞥すると、アムロと共に格納庫を去った。

「シン・・・」

尻餅をついたままのシンにルナマリアが手を差し伸べる。
シンはそれを振りはらい「大丈夫だよ」というと、
同じく格納庫を去った。

＜ミネルバ　エレベーター内＞

「アスラン、シンの事だが・・・」

ブリッジへと通づるエレベーター内で、アムロが口を開く。

「・・・悪いのは俺です。俺がもっと注意していれば、
あんなことは防げたものを・・・」

「あまり気負うなよ。だが、もし部下が死んでしまったりしてから
はどうにもならない。
気をつけろよ」

そう言った所で、扉が開き、二人はブリッジの中に入った。

「ＭＳ隊、全機帰還しました」

「ご苦労様。それとアムロ、先ほどはありがとう、
あなたがいなければ、我々は今頃、連合の捕虜になっていたわ」

「いえ。この艦の乗組員として、
艦を守るのは当然の義務です」

「それと・・・シンが破壊したあの基地の処理は、
カーペンタリアがやるそうよ。
だけど問題は・・・」

「シンの処遇ですね・・・隊長、君はどう思う?」

「彼はまだ若く、わからないことも多いと思います。
それに、彼を謹慎処分にすれば、艦の防衛力は・・・」

そこまで言いかけて、タリアが横から口を挟む。

「とにかくこの件は、後で検討しましょう。
ゆっくり休んで頂戴」

そういわれた二人はブリッジを出た。

＜数日後　ザフト軍マハムール基地＞

インド洋での激戦から程なくして、

ミネルバはペルシャ湾沿岸部のマハムール基地に到着した。
タリア、アーサー、アスラン、そしてなぜか基地の司令から
呼び出されたアムロの４人は基地の司令と対面した。

「ミネルバ艦長、タリア＝グラディスです」

「同じく、副長のアーサー＝トラインであります」

二人が前に出て敬礼し、自己紹介をすると、
同じくアスランも敬礼する。

「ミネルバＭＳ隊隊長、特務隊のアスラン＝ザラであります」

「アスラン＝ザラ・・・？」

アスランの自己紹介と共に、
周りの兵達がざわつき始める。

「いや、これは失敬。
マハムール基地司令、ヨアヒム＝ラドルです
そしてそちらが噂の・・・」

ヨアヒム司令はアムロを見ると、
周りの兵達の視線もそちらに集まる。

「ミネルバＭＳ隊所属、アムロ＝レイです」

「噂は聞いております。確か、異世界から来た戦士と・・・」

「へえ、本当だったのかその噂は」

司令達の一群の後ろから、橙色の髪に赤い服の青年が現れる。

「彼は・・・？」

「ああ、今回の作戦の為、議長が派遣したＦＡＩＴＨの一人だ」

確かにその青年は胸に、
アスランやタリアと同じ、フェイスバッジをつけていた。
青年もまた前に出ると、自己紹介を始めた。

「特務隊所属、ハイネ＝ヴェステンフルスだ。よろしく」

ハイネの自己紹介が終わると、
ハイネを含めた５人は作戦本部へと案内された。

＜ＡＭ　１１：００　マハムール基地　作戦本部＞

「状況はあまり思わしくないと聞きましたが？」

作戦本部に入り、席に着くや否や、
タリアが口を開く。

「ええ、このあたりの戦局は泥沼の様相を呈しています。

特に、ユーラシア西側地域のガルナハンは」

「そこに何が？」

「うむ。まずはこれを見ていただきましょう」

ヨアヒムがテーブルのスイッチを押すと、
そのテーブルに、スエズ運河を中心とした地域の
３ＤＣＧの地図が映し出される。

「スエズの連合軍基地はすぐにでも、
我がマハムールを叩き、反対側のジブラルタル基地を
攻撃したいんでしょうが、
このあたり・・・スエズとマハムールをはさむ地域のガルナハンの
占領地域で反対勢力に押されて、連合もうまくいってないようなの
です」

「反対勢力？」

「ええ、連合の宇宙軍の作戦失敗によって、
戦争の長期化が確定した現在、連中は地上の補給線確保に
躍起になっています。その過程で、かなり強引に占領したこのガル
ナハンで、
反対勢力の抵抗にあっているということです。
また、連合はここに火力プラントを築いており、
我が軍はそこを無傷で手に入れたいのです。
ですが、ここを守る連合の基地の攻略は至難の業です」

「・・・と、いいますと？」

司令は更に別のスイッチを押すと、
今度はガルナハン一帯の３ＤＣＧ画像が映し出される。

「火力プラントがある集落に通づる渓谷は、
連合の支配下にあります。
また、そこは渓谷全体をカバーする陽電子砲と
それを守るバリアつきのＭＡによって守られており、
迂闊に手が出せないのです。
しかし、この基地を攻略するための秘策があります」

「その秘策とは何でしょうか？」

「まずひとつは、連合はこのあたりの詳しい地質調査をやっておりません。
なんせ、急ごしらえの基地ですからね。
二つ目は、陽電子砲のすぐ下にでる抜け穴があるということです」

３ＤＣＧの画像が変わり、抜け穴の場所とコースを示す。

「しかし、この抜け穴はかなり狭く、
通常のＭＳではとても通ることはできません」

ヨアヒム司令は困った顔をした。
そこで、アスランが発言する。

「ミネルバ搭載の機体、インパルスなら、
分離状態で何とか通れると思うのですが・・・」

そのアスランの発言に対し、
アムロが口を挟む。

「だが隊長、仮にインパルスが突破しても、
例のバリアつきがその前に鎮座していたら、
手も足も出ない。任務の特性上、よほどのことが無い限りは、
陽電子砲発射のとき以外は、そこから離れないだろうからな」

アムロの意見を聞いたハイネは、
同じく発言した。

「なら、そのバリアつきＭＡをどかす方法を考えようじゃないか」

「そういうことだ」

このアムロの発言の後、２時間ほどの
作戦会議が行われ、会議は終了した。

＜ＰＭ　２：００　マハムール基地　カフェテリア＞

会議の後、アムロとアスランは、
カフェテリアで話し合いの続きをしていた。

「・・・色々と不安要素が多いが・・・
これが一番妥当な案だろうな。
だが、問題はシンだな」

「ええ、あれ以来、色々とこじれていますから、速く何とかしたいところですが・・・」

そんな話し合いをしていると、
アムロ達の前に、ハイネが現れる。

「会議中失礼。俺の部下達を紹介しておきたくてな」

「ええ、構いませんよ。ヴェステンフルス隊長」

「俺のことはハイネでいいさ、アスラン。
それとそっちは・・・」

「ああ、改めて自己紹介をする。
アムロ＝レイだ。よろしく頼む。
俺のことはアムロでいい」

二人と握手をしたハイネは、
彼らをつれて、グフの格納庫へと向かった。

格納庫に入ると、アムロはそこに収納されていたオレンジ色のＭＳを見て、こう呟いた。

「あれは・・・グフか？」

「え！？な、何でこの機体の名を知ってんだ？」

驚くハイネの横で、
アスランもまた驚嘆の顔を浮かべていた。

「俺がいた世界にも、これに似たＭＳがあったのさ。
しかし、ザクといいガンダムといい・・・たまげたよ」

「この機体は、まだ試験運用中の機体でな。
それで、俺の部隊でテスト運用をやってんだ」

「・・・それで、ハイネ。君の部下達はどこにいるんだ？」

「おっと、忘れてたぜ。おい、ベリエス、ジョナサン、ユイ！」

ハイネが叫ぶと、
水色のボディーにオレンジ色のショルダースパイクの
３機のグフでそれぞれ作業をしていた３人の緑服の兵士が、
こちらに駆け寄ってくる。
一人は少女、もう二人が少年で、
シンやルナマリア達とさほど変わらない年齢に見えた。

そのうちの、茶髪でやや髪が伸びすぎの少年が
ハイネに問いかける。

「どうしたんだ、ハイネ？」

「ミネルバのＭＳ隊の隊長と、
異世界の戦士さんをお連れした。
・・・紹介するよ、ベリエスだ」

ハイネに促されて前に出た茶髪の少年は
アムロとアスランに敬礼した。

「ハイネ隊所属、ベリエス＝エバールです！
よろしくお願いします！」

元気のいい活発な少年、
アムロが彼に抱いた第一印象はそれだった。
それに、紺色の髪にくろぶち眼鏡の落ち着いた雰囲気の少年が続く。

「同じく、ハイネ隊所属、ジョナサン＝ブリヨンです。
以後お見知りおきを」

最後に、黒髪にロングヘアーの少女が
自己紹介をする。

「ユイ＝ビクトリアです。それで、異世界から来たっていう、
アムロ＝レイさんはこちら？」

ユイはアスランの方を指しながら、
まったく見当はずれのことを言う。

「あ、いや、俺じゃなくて・・・」

アスランが否定しようとした瞬間、
突如として、ベリエスが叫びをあげる。

「あ！知ってますよ！アスラン＝ザラ！
こんなところで遇えるなんてうれしいです！」

なにやら妙に高いテンションでアスランの手を握り、
めちゃくちゃにそれを振り回す。
突然のことに、アスランも困惑気味だ。

「と、ともかく、よろしく頼むよベリエス・・・」

ようやくベリエスがアスランの手を放すと、
ユイが咳払いをし、場の空気を元に戻す。

「・・・じゃあ、アムロ＝レイさんはこちら？」

「そうだ。自己紹介がまだだったな。
アムロ＝レイだ。よろしく」

今日で何回目かと思いながら、
アムロは一人ひとりと目を合わせた。
すると、ユイはそのままアムロのことを
ジロジロと見る。
そして、次の瞬間思いがけない一言を言い放った。

「おじさん、弱そうね」

「！？」

その言葉に、ハイネたちは凍りついた。
アスランは呆気にとられ、ベリエスとジョナサンは
あきれた顔をし、ハイネは明らかに戸惑っていた。
しかし、隊長ともあろうものが
おどおどしているわけにもいかず、ハイネは、

「ユイ、初対面の人になんてことを言うんだ！」

と、叱り付けた。

しかし、ユイは怖じ気づく事無く続る。

「強そうなオーラが全くしないの。
それに、異世界から来たっていうのも胡散臭いわ」

トドメの一撃。
やってしまったかと周りが呆れる中、
アムロは強く言い放った。

「君は思ったことを躊躇いなしに言う人間のようだな。
ならば、試してみるか？そこのＭＳシミュレーターで」

アムロが指さした先には、かつてシンとの対戦で使った、
あのＭＳシミュレーターがあった。

「へえ、いいわよ。言っておくけど、
手加減しないわよ」

二人はそれぞれＭＳシミュレーターの中に入った。

「アスラン＝ザラ隊長。アムロ氏の技量はいかほどで？」

二人がＭＳシミュレーターに入って少しした後、
ジョナサンがアスランに尋ねる。
少し考えるとアスランは、

「俺も詳しくは知らないが、かなり腕がたつようだ」

と答えた。

「やっぱり・・・ユイの奴もうやられてますよ」

ジョナサンが指さしたＭＳシミュレーターからは、
キーキーと喚きたてる声が聞こえた。

「そんな、まだ一分もたってないのに・・・
こんな事が・・・あるわけ・・・！」

「どうした、口だけ舞い上がってその程度か？」

先程見下していた相手に見下されて、
ユイは激昂した。

「今のは単なるまぐれよ！もう一度・・・もう一度！」

数分後・・・

「そんな・・・たった４分で私、６回も殺されたの！？」

完全に惨敗。
それもすべて直撃弾だった。

アムロはシミュレーターから出ると、
驚きを隠せないベリエスに質問攻めにされた。

「すごい！凄すぎる！一体どこであんな操縦を？
誰に習ったんです？異世界じゃ大活躍だったんですか？」

アムロはそれに苦笑いで答えると、
遅れて出てきたユイを見た。

「大人気ないと思うかい？
だがこれが・・・」

そういいかけたところで、アムロの言葉は、
いきなり飛びついてきたユイによって遮られた。

「！？」

「す、凄い！強すぎです！もう私の完敗です！
さっきの事は謝ります。スイマセンでした」

「そ、そうか、ならいい。ほら離れて」

アムロはユイを無理やり剥がすと、
ほっとため息をついた。

（変わった娘だ）

未だにアムロを見つめ続けている少女を一瞥し、
アムロは心の中でそう呟いてみせた。

「と、とにかく変わった奴らが多いが、
宜しく頼むぜ」

「ああ、3人とも宜しく。さて，そろそろ仕事に戻ろう。アスラン、会議の続きに戻るぞ。それとハイネ、よかったら君も来てくれ」

ハイネとアスランと共に、
格納庫から去ろうとしたアムロは、
ユイに呼び止められる。

「アムロさん！後で時間があったら・・・その・・・」

「悪いが、今日は暇ができそうにない。今度にしてくれ」

そう告げたアムロは、スタスタとその場を去った。

「あ・・・」

その姿が見えなくなるまで、ユイは目で追い続けた。
そんな彼女の姿をみて、ベリエスが彼女を茶化す。

「お？まさかユイ、あの人に惚れちゃったとか・・・？」

「う、うるさい！」

顔を赤らめたユイがベリエスを振り返り、
強烈なビンタを喰らわせる。

「い、イテ・・・叩くことはないだろ！」

「何よ！人をおちょくって！」

「お、おい・・・二人ともやめろって・・・・」

結局、このケンカは３０分程続いた。

「何あれ？」

「恐らくはケンカだろう。放っておけ」

格納庫の遠くから、シン、レイ、ルナマリアの３人はその喧嘩を見守っていた。

シンはあの一件以来、相変わらず不機嫌なままだ。

「シン、アムロさんやザラ隊長に言いたいことがあるんなら、はっきり言えば？」

「やめろよルナ。そんなお節介」

「何がお節介よ！」

「シン、今回はお前にも非がある。彼に謝った方がいいと思うが」

「なんだよ、レイまで・・・」

そういい残すと、シンはその場をスタスタと去り、
ミネルバの自室へ戻った。

「もう、なによ！」

＜夕方　ミネルバ　甲板＞

シンは気分転換も兼ねて、ミネルバの甲板から、
夕日を眺めていた。
そこに、話し合いを終えたアムロがやって来る。

「・・・なんですか、アムロさん、
こんな所に何か御用で？」

明らかに反抗的な態度をとるシンに対して、
アムロはやんわりと返す。

「君と話がしたいと思ってね。
随分と探したんだよ」

「・・・何です。話って」

アムロはシンと同じようにフェンスに両肘をかけると、
再び話し始めた。

「この前の戦闘の後・・・悪かったよ。
俺も頭に血が昇りすぎていたようだ」

「・・・？」

「だが、自分勝手な理屈と正義で力をふるえば、
ただの人殺しか破壊者だ。君は強い。
だからこそ、これは覚えておいてくれ」

「・・・」

シンからの返事は無い。
いや、もとよりアムロは返事など期待していなかった。

「それと、明日の作戦では君が鍵になる。
詳しいことは明日話すがな」

「俺が・・・鍵？」

やっと、シンがまともな返事を返す。

「ああ、それもかなり重要な役だ。
期待しているよ」

そういい残すと、アムロはその場を去った。

「期待・・・」

いまさら何を言うかとシンは思ったものだが、
同時に見放されていなかったという思いが、
シンの思考の中に浮かんだ。

第7話　戦う意味（後書き）

ハイネのしゃべり方・・・これであってるのかな・・・。
本編で登場した期間が短かったので、どうにも不安です。

そして、3人のオリジナルキャラクターは、
ハイネ隊のメンバーとして登場させました。

第8話　無敵砲台（前書き）

どうも、約1ヶ月ぶりの更新となります。
もうすぐ、この小説の初投稿から1年がたとうとしています。
でも、話がまったく進んでおりません・・・反省。
今度こそは、更新スピードを上げたいと思います。

また、全話の修正を行いました。
台本形式の修正、説明文の追加、台詞文の言い回しの変更などが中心です。是非、一度目を通してみてください。

第8話　無敵砲台

＜スエズ近郊　渓谷地帯＞

夜が明けきらない静かな渓谷に、
一隻の航空戦艦と二隻の陸上戦艦が接近していた。

ゴーグルをかけた少女はその姿を見て「時間だ・・・」と呟くと、
車のイグニッションキーをまわしてエンジンをかけ、
アクセルペダルを踏み込んだ。

少女は航空戦艦に懐中電灯を向けると、
チカチカと光を点滅させた。
光を使ったモールス信号である。
この時代においてもなお、野戦などでは、
連合、ザフトを問わず、よく使われていた。

その光に気づいたのか、その航空戦艦は車の真上に併走する形となり、
相対速度をあわせると、底部ハッチを開いた。

「ザフトの新造艦・・・」

少女はペダルを更に強く踏むと、車両回収用のリフトに乗り、
そのまま、その航空戦艦に収容された。

＜ミネルバ　ブリーフィングルーム＞

ミネルバのブリーフィングルームはそう狭くはない。
艦載機の数とはだいぶ不釣合いだが、
この艦の各部署の責任者が一堂に会するにはもってこいの場所だと、
アムロは思う。
レセップス級「デズモンド」やビートリー級「バグリィー」所属の
パイロットたちも、
このブリーフィングルームへ集まり、その中には先日言葉を交わした、
ハイネ隊の面々もいた。
前の演台にはアムロ、アスラン、アーサー、ハイネの四人。
一番前の列にはミネルバ所属のパイロット達。
その後ろに各艦のパイロット達が座り、会議は開始された

「あー、あー、本日は晴天なり。本日は晴天なり。
…では、ブリーフィングを始める」

アーサーの号令と共に、部屋の前にある大型スクリーンがつく。

「みんなこちらを見てくれ。俺はミネルバ所属のパイロット、アムロ＝レイだ。
よろしく頼む。今回は、例の敵砲台基地の攻略作戦について、
作戦内容を説明する」

アムロはアスランにマイクを渡した。

「アスラン＝ザラだ。よろしく頼む。
こちらを見てくれ。この砲台基地の後ろ、
断崖の向こう側にガルナハンの町がある。
この町を連合から開放するのが、我々の目的だ。
だが、この町へたどり着くための道は、この渓谷しかない。
この渓谷は連合側のローエングリーン砲台によって全域をカバーされており、
機動性のない戦闘艦が此処をぬける名は難しい。
また、その砲台は特殊なバリアを持ったＭＡによって守られており、
遠距離からの一斉射撃の効果も薄い。
そこで、我々の考案した作戦はこうだ」

スクリーンの３ＤＣＧの地図の一部で、光の筋が点滅する。
アスランはアムロにマイクを手渡した。

「これはあの砲台の真下へと出る坑道だ。
今はもう使われてはいない。我々はこの坑道を使って、敵基地に奇襲を仕掛けたい。
現地協力員が来ているはずだが…」

アムロがそういったとき、ブリーフィングルームの扉が開き、
二人の士官に連れられた少女が入室する。

「来たか…。では、ミス・コニール。
例の坑道についての説明を頼む」

「え？あ、ああ…わかった」

その少女、コニール＝アルメタはマイクを受け取ると、

やや緊張気味の声で説明を始めた。

「この坑道、現地の人でもほんの僅かな人しか知らない、抜け道がある。まだ連合も、この坑道の存在には気づいてはいないんだ。
だけど、この坑道は暗くて狭いし、距離も長い。全長はざっと１０ｋｍだ」

コニールはアムロにマイクを返した。

「この坑道を通れるのは、分離形態のインパルスだけだ。
シン、君にはこの坑道を通って、砲台に奇襲をかけてもらう」

「この坑道を使って…？」

シンはやや困惑気味の声を上げた。
無理もない。古今例のない作戦だ。

「ミス・コニール。行動のデータを彼に渡してくれ」

「え…！？」

コニールは坑道のデータが入ったディスクを持っていた。

「こんな奴に渡せっていうのかい？
こんな頼りなさそうな奴に！」

「な、何だとこいつ！」

コニールの悪口にシンが席を立つ。

「ミス・コニール。彼はとても優秀なパイロットだ。
あのタイプのＭＡとの戦闘経験もある」

アムロに説得されたコニールは、しぶしぶディスクをシンに渡した。
シンの方も、半ば奪い取るように受け取ると、しかしその行為とは裏腹に、
静かに着席した、

彼はディスクを受け取る際、コニールが小声で「頼んだぞ」と呟くのが
聞こえたのだ。

「ありがとう、シン、ミス・コニール。
では、シン＝アスカのインパルス支援の為の陽動作戦の内容について説明する」

アムロの声と共に、全員の視線が再びアムロに集中する。

「この砲台は、敵ＭＡが配備されており、
それが特殊なバリアを持っているのは先ほど説明した。
よって、インパルスが坑道をぬけたとしても、
そのＭＡが砲台の前に鎮座していては意味がない。
そこで、俺とアスラン、ハイネで正面から揺さぶりをかける。
君たちには、俺たちを突破して本陣に向かってきた敵の迎撃をしてもらう。
インパルスが坑道に入ってから１８０秒後、俺たちの３機は撤退、
それに続いて、我が軍がミサイルなどを用いた一斉射撃を行う。
目標はローエングリーン砲台が設置された岩山の麓に設置された、
トーチカや地上施設だ。

ここを狙う事で、敵ＭＡの注意を引き付け、少しでもＭＡをどかすことができればいい。
攻撃時間は１２０秒、それ以上は敵がこちらの思惑に気がつく可能性も否定できない。
シン、君にはこの１２０秒の間に坑道を突破してもらいたい」

「了解…」

シンの声は先ほどの事があったにもかかわらず、
妙に落ち着いていた。

「インパルスが砲台を破壊したあとは、全軍で進攻を開始する。
作戦開始は１３：００。今から6時間後だ。
以上だ。何か質問などはあるか？」

ざわつきはじめるパイロットたちの中で、一人だけ、
ゆっくりと手を挙げた人物がいた。
ハイネ隊のメンバー、ユイ＝ビクトリアだ。

「君は確か…ユイ＝ビクトリアだったな。何か？」

「お願いがあります。私を、前で戦闘を行う3機の中に加えて下さい」

ユイのこの発言に、周りが一気にざわつき始める。

「静かに！それは一向に構わないが…だが、かなり危険な役回りだ。
敵の砲台に注意しながら、大部隊と戦闘を行うことになるし、
敵砲台との距離にも注意しなければいけない。それでもいいのかい？」

「はい。腕には自信があります」

「了解した…ハイネ？」

「あ？ああ、本人の意思だ。構わないぜ」

「すまない。では、これにてブリーフィングは終わりだ。
みんな所定の位置につけ！」

ブリーフィングの終了と共に、パイロットたちはぞろぞろと退室する。
同じく立ち去ろうとするシンにコニールが近寄る。

「…何だよ」

「いや、その…前にザフトが攻撃を行ったとき、
町でも暴動が起きて…それで、たくさんの人が死んだ。
だから…頼む。町の人たちの命運はあんたにかかってるんだ」

それを聞いたシンは、自分にかなりの重責がのしかかっている事に気がつく。
罪のない人々がそんな風に殺されるのを認めるわけにはいかない。
シンは返事をしなかったが、小さく頷いた。

（俺が守るんだ・・・絶対に！）

＜6時間後　作戦区域＞

各々の出撃準備が整い、砲台基地攻略隊が地球連合軍のガルナハン基地の
警戒エリアに入る。

「Cポイント通過、作戦開始地点です」

「よし、MS隊出撃用意！」

タリアの出撃命令と共に、ミネルバの艦載機が出撃準備を始める。

「シン、やってくれるな？」

アムロはシンのコア・スプレンダーに通信回線を開いた。

「はい！シミュレーションは十分にやりました！いけますよ！」

シンの声には、いつになく力が入っていた。

「君はこの作戦の要だ。頼む」

νガンダムとセイバーの出撃準備が整い、
二機は先行して出撃した。
出撃後、二機はデズモンドから出撃したハイネとユイと合流した。
ハイネは初めて見る異世界のMSを見て呟く。

「これが異世界のＭＳ、νガンダムか・・・
アムロ、そいつとお前の力、見せてもらうぜ！」

「了解だ、ハイネ！その期待に答えられるよう努力する！」

そうハイネに返すと、アムロはユイが乗る、
オレンジショルダーのグフイグナイテッドに通信を入れた。

「ユイ、そちらの調子はどうだ？」

「上々です！アムロさんも気をつけてください！」

４機は戦闘エリアとなる区域に入った。

一方の連合基地では、ＭＳ隊とＭＡ“ゲルスゲー”の発進準備が進む。

「ローエングリンを出した後、ＭＳ隊展開！ゲルスゲーも発進だ！」

連合軍基地司令の声が、ざわめく司令室に響き渡る。

「敵艦の動きは？」

「依然として、Ｕ－４６ポイントの山の陰に隠れています。
ローエングリンによる狙撃も不可能です」

「ふん、我が軍の陽電子砲を恐れているのか。
第０３から０８小隊は敵艦へ攻撃を加えろ！」

ローエングリン砲台はその姿を現し、
その牙にかかる獲物を待った。

「あれか・・・よし、あまり固まるな。
散開しろ！」

アスランの号令と共に、４機は散開した。

「敵陽電子砲台にあまり近づくなよ！」

ハイネはダガーＬを落としながら、３人に告げた。
アムロはローエングリンを回避すると、
向かってきたダガーＬを撃ち抜き、
更に後ろからビームサーベルで攻撃を仕掛けてきたウィンダムを、
逆にビームサーベルで切り落とすと、その残骸を蹴り飛ばし、
別のダガーＬに当て、怯んだ所にバルカン砲の雨を叩き込んだ。
更にアムロは、また次のターゲットを狙っていた。
一瞬のうちに３機。これにはユイも驚きを隠せなかった。

（私、大変な人に喧嘩を売っちゃったのね・・・）

アムロが敵ではなかった事を、ユイは改めて幸運と感じた。
しかし、そんな風に余所見をしている暇は無いとばかりに、
２機のダガーＬうち、１機がユイにビームサーベルの斬撃を繰り出す。

ユイはそれを回避すると、ビームバルカンでそのダガーLを蜂の巣にした。

「迂闊なのよ！」

しかし、ユイは後ろにもう一機のダガーLが回りこんでいたのに気がつかなかった。

ユイが振り向いたときには、既にダガーLがビームカービンを構えていた。

「しまった！」

2機で1機のフォーメーション攻撃。

仮に最初の攻撃をはずしても、僚機がそれをカバーする。

ユイはそんなことを思い出した。

しかし、そんなことは今はどうにもならない。

構えられたビームカービンから、ビームが撃ち出されようとした時だった。

突如、そのビームカービンが光球へ転じ、その直後、そのダガーLも、

緑のビームで貫かれた。

「・・・誰が！？」

「迂闊だぞ、ユイ！」

ユイの窮地を救ったのは、アムロだった。

ユイがνガンダムを見たときには、既にアムロも別のウィンダムを撃ち落としていた。

「アムロさん・・・ありがとうございます！」

ユイはその命の恩人を見つめた。
アムロがいなければ、自分は既に死んでいたかもしれない。
ユイのアムロに対する好意はますます拡大していった。

「インパルス突入から１４０秒経過、各機は退却の用意を！」

メイリンから４機に通信が入った。

「全員、後退しつつ応戦、急げ！」

アスランの命令と共に、アムロ達は後退した。

「４機の後退を確認！」

「よし、一斉射、開始！」

ヨアヒム司令の号令と共に、ミネルバの副砲やミサイル、ＭＬＲＳや迫撃砲などによる攻撃が、砲台のある山の麓の地上施設へ降り注いだ。

「て、敵艦からの一斉射撃です！」

「うろたえるな！ゲルスゲーに地上施設の防衛に当たらせろ」

連合軍基地司令が、ゲルスゲーの移動を命じた。
ゲルスゲーは地上施設の元にたどり着くと、陽電子リフレクターを展開した。

（これで砲台への攻撃ができる・・・！後はお前次第だ、シン！）

アムロはシンの登場を待った。

一方のシンは、坑道の中を飛び続けていた。

「ク・・・何も見えない！」

コア・スプレンダーは坑道内を壁面すれすれで飛んでいた。
それに続いて、チェストフライヤー、レッグフライヤー、ブラストシルエットがコア・スプレンダーの後を追う。
データだけが頼りで、目視などできない状況。
任務の達成はとても困難なようにも見えた。
しかし、シンは心に誓っていた。
罪のない人々を、圧倒的な力から守ると。
無力な人々を殺させはしないと。
その強い意志が絶頂に達したとき、シンの中で、
また何かがはじけ、急に感覚が研ぎ澄まされた。
それからしてまもなく、コア・スプレンダーは出口へとたどり着く。
案の定、出口はふさがっていた。

「ゴールか！ミサイル発射！」

コア・スプレンダーはミサイルを発射し、出口をふさいでいた岩を吹き飛ばすと、
外へ飛び出した。

「ば、ばかな・・・砲台を戻せ！」

ローエングリン砲台はエネルギー供給用のコードを排除し、
収容する準備を急ピッチで行った。

「来たか！俺たちも行くぞ！」

アスランの指示で、アムロ達は再び飛び出した。

コア・スプレンダーはブラストインパルスに合体すると、
収容されつつあるローエングリン砲台にビームランチャー“ケルベロス”を向けた。

「喰らえ！」

ケルベロスの砲口から、エネルギーの渦が延び、
ローエングリン砲台を貫いた。

「や、やった・・・！」

「シン、よくやった！後はこいつだけだ！」

アムロはゲルスゲーと対峙した。
ゲルスゲーが放ったビームライフルを回避したアムロは、
ビームサーベルを引き抜いた。

「貴様らに勝ち目はない！投降しろ！」

アムロは叫んだ。
しかし、ゲルスゲーのパイロットはそれを拒む。

「誰が貴様らなどに！コーディネイターどもに屈するくらいならば、自ら死を選ぶ！」

ゲルスゲーは更にビーム砲を放ったが、アムロの機体には当たらない。
更にビーム砲を撃とうとしたゲルスゲーは、
しかし後ろに回りこんだアスラン、ユイ、ハイネの連続攻撃を喰らい、
怯んだ所をνガンダムに串刺しにされた。
残ったＭＳ隊も、進撃を開始した本隊によって撃墜されていき、
戦闘は終結へと向かった。

こうして、“ローエングリンゲート”と呼ばれた渓谷での攻防は、
ザフト側の勝利で終わった。

＜ガルナハンの町＞

連合軍基地陥落により、町に駐屯していた連合軍部隊も、
徐々に撤退を始める。
しかし、日頃、圧制を強いられてきた市民たちは、
この兵士達を許しはしなかった。
逃げ遅れた数十人はそのまま市民たちに捕らえられ、
私刑にかけられていた。

作戦を終えたシン達は、ガルナハンの町に寄っていた。
シンは降りた途端に群衆に取り囲まれ、胴上げをされるなど、
かなりの歓迎を受けていた。
そこへ、アムロとアスランがやってくる。

「よくやった、シン。君のおかげだ」

「あ、アムロさん、それにザラ隊長も。
作戦成功ですね」

「ああ、そろそろ行くぞ」

アムロはνガンダムに乗ると、
全天周囲モニターに映った、私刑の様子が目に入る。

「任務とはいえ・・・やりきれんな・・・」

自業自得といえばそれまでだが、無抵抗のまま射殺される兵士を見

るのは、
あまり良いものではない。
戦争とはそういうものだと自分に言い聞かせたアムロは、
シンやアスランと共に、ミネルバへ帰還した。

第8話　無敵砲台（後書き）

原作の該当話を見たときに、ＭＡの行動が気になったので、戦闘の流れを思いっきり変えてます。

次回は2月上旬の間には投稿したいと思います。

第9話　海辺の町（前書き）

どうも、なんとか2月上旬の間に投稿することができました。

第9話　海辺の町

＜黒海沿岸部　ディオキア市＞

“ローエングリンゲート”での激戦を終えたミネルバは、
黒海沿岸部の町、ディオキア市のザフト軍基地に入港した。
アムロ、アスラン、ルナマリア、シンの４人は基地内を散策していた。

「でも、きれいな町よねぇ。戦争とは無縁に見えるわ」

「ホント・・・だけど、ついこの間までは、連合の支配下だったんだよな。
ですよね、ザラ隊長」

「え・・・？あ、ああ、そうだな」

アスラン＝ザラには、ある悩み事があった。
その原因は、朝に読んだ新聞の朝刊の記事だった。

「オーブ連合首長国代表首長、カガリ＝ユラ＝アスハ誘拐」
の見出しから始まり、ユウナ＝ロマ＝セイランとの結婚式の途中、
突如現れたＭＳに拉致され、

その犯人は“フリーダム”と“アークエンジェル”らしいということだった
アスランにはそのフリーダムのパイロットが何者であるか、見当がついていた
そのパイロットの名は、キラ＝ヤマト。
アスランの友人である。プラントへとたつ前にオーブで会ってから、連絡は取っていない。
そもそも、オーブが敵に回った以上、連絡を取ることは絶望的だった。

（キラ・・・何を考えている・・・？）

アスランは下を向きながら歩いていた。
その時、シンが何かを指差す。

「あれって・・・」

シンが指差した先には、ピンク色に塗装されたザクウォーリアと、それの前にできる黒山の人だかりがあった。
よく見ると、そのザクの手の上で、人が踊っている。

「手の上に人が・・・！」

「あ、あれってよく見ると、ラクス様じゃない！？」

ルナマリアもまたそれを指差す。
その手の上で踊る女性はいかにもアイドルという過激ないでたちだった。
アスランが凍りついていることに、アムロは気がつく。

「どうした、アスラン？」

（な、何なんだ、あれは！）

「？」

アスランは返事もせずに硬直している。

そんな彼の傍をヨウランとヴィーノ、そして、アーサーまでもが駆け抜ける。

「やった！ラクス様のコンサート見れるなんて、超ラッキー！」

「おい、ヴィーノ、前のほうとられちまうぜ！副長も早く！」

「よ、よし、急ごう！」

「ミネルバ副長のお通りだ！どいたどいた！」

3人はやや興奮気味で走り抜けていった。

「・・・何あれ？」

「俺に聞くなって・・・あれ、ザラ隊長、足が震えてますよ」

アスランの足は妙に震えていた。

「ルナマリア、そのラクスっていう人物は大戦後、行方不明になったって聞いたが？」

アムロの素朴な質問に、ルナマリアは造作もなく答える。

「彼女、プラントに戻って平和のための活動をしているんです。
そういえば、隊長の婚約者ですよね、ラクス様って。
ご存じなかったんですか？」

ルナマリアの質問にアスランは答えない。

「・・・隊長？」

「アスラン！」

「・・・！？」

アスランの耳元で彼の名を呼んだアムロによって、
アスランはようやくアムロ達の声に気がついた。

「え？な、何か・・・？」

「急にどうしたんだ？」

アスランは彼女の正体を知っていた。
議長が用意した、“偽者のラクス＝クライン”。
彼女の本当の名は、ミーア＝キャンベルという。

「べ、別に・・・」

アスランは真実を語らなかった。
プラントで議長に“共犯者”にされてしまった以上、
本当のことを話すわけにはいかない。
答えに迷うアスランに、またしてもシンが助け舟を出すかのように、

何かを指差して叫ぶ。

「あ、あれって・・・議長!?」

シンの指差した先には、ハイネ＝ヴェステンフルスと話しながら歩く、
ギルバート＝デュランダルの姿があった。

（あれがギルバート＝デュランダルか・・・奴の真意を掴めるか？）

アムロは彼に対して、妙な警戒心を持っていた。
アムロのザフト入隊を願ったのは、他でもない彼なのだ。
得体の知れない人間を自分の軍隊に引き入れようとするなど、
正気の沙汰ではない。
警戒するに越したことはない、とアムロは思う。

（何にせよ、警戒するに越したことはないか・・・）

そんな事を考えていたアムロは、
再び歓声が湧き上がるコンサート会場のほうを見る。
丁度、一曲歌い終わったところなのだろう。

「勇敢なるザフト軍兵士の皆さ～ん！平和のために、本当にありがとう！
一日も早く、この戦争が終結することを、私も切に願ってやみませーん！」

ＭＳの掌に乗ったラクスの声に、
会場は更に盛り上がりを見せる。
アスランはその場から立ち去ろうとした。

「アスラン、見ないのか？」

「ええ、ちょっと、胃腸の調子が・・・」

適当な嘘でその場をごまかすと、
アスランは逃げるようにその場から立ち去った。

「どうしたんですかね、ザラ隊長」

「さあな」

そう答える裏で、アムロは疑問を抱く。

（だがあの態度、胃腸の調子が悪いなんて、
恐らくは嘘だ。どういうことだ・・・？）

考えても、答えなど出るはずもない。
アムロはしばらく、そのコンサートを見ていた。
曲が再びサビの部分に入った時である。
アムロはまた不思議な感覚を感じ取った。
この日で既に６回も感じ取っていた。

（何だ・・？また“奴”の感覚がする・・・？）

アムロが感じ取った感覚。
それは、アムロがよく知る人物に似た感覚であった。

＜Ｊ．Ｐジョーンズ　通信室＞

地球連合軍第８１独立機動群“ファントムペイン”の地上での旗艦、“Ｊ．Ｐジョーンズ”はインド洋での戦闘以来、スエズ基地にて補給を行っていたが、
程なくして出港し、ディオキアの近くの港に停泊していた。
その艦内の通信室には、ネオ＝ロアノーク大佐とクリスト＝イェーガー少佐の姿があった。
二人は、ブルーコスモスの盟主、ロード＝ジブリールとの通信を行っていた。

「・・・ということだ。オーブのユウナ＝ロマ＝セイランからは、追って連絡がある。
大佐、インド洋での失態を挽回しろよ」

「はっ、必ずやあのミネルバを沈めてご覧に入れましょう」

回線はそこで切れた。

「オーブとの同盟か・・・少佐、ミネルバはディオキアに入ったといったな？」

「ええ。先日、我が軍の基地を攻略した後、ディオキアに入ったとの事です」

「うむ。ユウナ＝ロマ＝セイランの艦隊と合流し次第、

作戦会議を開こう。今のうちに休んでおくといい。奴らとの戦闘はそう遠くはない」

「はっ」

ネオとクリストは、その通信室を出た。
クリストは部屋に戻る途中、レーナと出会った。

「クリスト、あのＭＳの事・・・」

「ああ、今度こそ倒してみせる。
君のためにも」

そして自分のためにも。
クリストは“あの日”誓った。
“奴”・・・いや、“奴ら”を倒すと。
レーナを利用した“奴”、レーナを突き放した“奴”を・・・。

＜１３：００　ディオキア　迎賓館＞

ミネルバのＭＳパイロット達は、デュランダル議長のお茶会に招待されていた。もちろん、アムロも含めてである。

アムロ、アスラン、シン、ルナマリアは、
迎賓館の大広間のドアの前に通された。
タリア艦長とレイは、既にデュランダルの元に居る。

（いよいよ、奴との対面か・・・どんな奴だ・・・？）

アムロが思考を巡らす中、ドアの向こうから声がする。

「入りたまえ」

「！？」

この声を聞いた瞬間、アムロは全身の血が一気に沸騰するような感覚に襲われる。
アムロの神経をさかなでるこの声。
アムロ＝レイの生涯のライバル、赤い彗星のシャア＝アズナブルの声。
ジオン＝ズム＝ダイクンの嫡子、キャスバル＝レム＝ダイクンや、
共に戦った反地球連邦政府組織“Ａ．Ｅ．Ｕ．Ｇ”のクワトロ＝バジーナ大尉という名も、
アムロの思考の中に現れたが、
彼にとって、シャアはシャア＝アズナブルでしかなかった。
アムロは勢いよくドアを突き破り、叫んだ。

「シャア！貴様、何故ここに居・・・ん？」

シャア＝アズナブルだと思い込んで叫んだ相手は、
シャアとは似ても似つかぬ男性であった。
一度議長の姿を見ていたにもかかわらず、アムロをこのような行動に駆り立てたのは、

やはり、アムロにとって、シャアという男の影響力が強い事に他ならない。
アムロの行動に驚いたデュランダルたち三人は、全員席を立っていた。
特にレイ＝ザ＝バレルに関しては、ホルスターの拳銃を抜く寸前であった。

「ア、アムロ・・・さん？」

シン達は呆然としている。
そんな中「貴様、どういうつもりだ！」とアムロを取り押さえにかかる警備兵に対し、
デュランダルは「いや、かまわん」と言って下がらせる。
警備兵が元の位置に戻ると、デュランダルはアムロに聞いた。

「誰かと間違えでもしたのかね？」

「も、申し訳ありません・・・よく知る人物の声と似ていたもので」

「いや、間違いというものは誰にでもあるものだ。気にする事はない。
自己紹介がまだだったね。プラント最高評議会議長、ギルバート＝デュランダルだ」

「ミネルバＭＳ隊所属、アムロ＝レイです」

デュランダルは更に、アスラン達に目をやる。

「久しぶりだね、アスラン君。それと、そちらは・・・」

「はっ、ミネルバＭＳ隊所属、シン＝アスカです！」

シンの声には緊張の色が現れていた。

「君がシン＝アスカ君か。君の活躍はよく聞いている。
それから・・・」

「はっ、ミネルバＭＳ隊所属、ルナマリア＝ホークであります」

ルナマリアのほうも緊張を隠せないようだった。

「うむ。とにかくみんなかけたまえ」

一同は恐らくは連合が使っていたものであろう、
ダイニングテーブルの椅子にそれぞれ腰掛けた。

「議長、停戦に向けての動きはないのですか？」

今まで黙っていたアスランが口を開く。

「残念ながらね・・・
あちら側は、何一つとして譲歩する気はないようだ。
困ったものだよ・・・全く」

デュランダルは更に加える。

「これ以上は“戦わない”。戦争を“やめる”ということは、
“戦う”事を決めるより、幾分か困難ということさ」

「でも・・・」

デュランダルの発言を聞いたシンが呟く。

「ん？いや、構わんよ。最前線で戦う、君達の意見も聞きたいのでな」

「は、はい。確かに、戦争をせずに戦わないことを決めるのは、とても大事なことです。
ですが、敵の脅威がある時、こちらが武力を行使するのは、止むを得ない事だと思います。
ただ何もせずにじっとしていても・・・殺されるだけです！
それに、平和に暮らしている人たちだって、戦争とは無縁でいたいはずです。
そういう人々は、守られるべきです！」

「ふむ・・・。アスラン、君はどう思う？」

「は、はあ・・・確かに、私もシンと同意見です。
そして、それは私の復隊した理由の一つでもあります。
ですが、私は『殺されたから殺して、殺したから殺されて、それで最後は本当に平和になるのか？』と以前言われた事があります」

アスランが言うこの言葉、カガリの言葉である。

「私は、それに答えることができなかった・・・。
今も、答えは見つかりません」

「・・・そうか。では・・・」

デュランダルは紅茶に口をつけると、
こういった。

「アムロ君、君はどう思う？」

「え？」

デュランダルを含めた全員の視線がアムロに集まる。

「君のような、別の世界から来た人間の客観的な意見は貴重だよ。
この世界の人間では、なまじ感情というものを持ってしまう」

このデュランダルの声からは、悪意というものは感じない。
自分の真意を探ろうというものとは思わなかったアムロは、
率直に答えた。

「そうですね・・・僕から見ると、
この世界の人々はあまりお互いのことを理解しようとせず、
ただ“奴らは自分たちと違うから”撃つ、“虐げるから”撃つといって、
ただ闇雲に戦いの歴史を生み出しているように感じる。
ですから、相手が強い力を行使するかもしれないということも含めて、
まず人類はお互いのことを理解すべきだと思います。
それはとても時間がかかり、また難しいことだと思います。
しかし、人間の知恵はそんなものだって乗り越えられると、
僕は信じています」

アムロは人類を信じていた。
戦いの最中、アムロはララァ＝スンとも分かり合うことができた。

それが例え、お互いを傷つける事になっても。
しかし、シャアは地球連邦政府を中心とした戦いの最中、腐敗しきった地球連邦政府や、死よりも重い最期を遂げた、ＮＴの少年でＺガンダムのパイロット、カミーユ＝ビダンの悲劇を見て、
人類を信じることができなくなってしまっていた。
アムロとシャアとでは、そこが違っていた。

「・・・とても貴重な意見だ。だが、それを妨げようとする者もいる」

デュランダルは更に紅茶に口をつけると、
こう続けた。

「この戦争、実は仕組まれたものではないかと思うのだよ」

「え・・・？」

一同は皆、驚きの声を上げる。

「仕組まれた・・・？」

シンの呟きを聞いたデュランダルは、更に続ける。

「うむ。戦争においては様々なものが破壊され、
そしてまた兵器が作られる。もしそれを一種の産業として捉えたらどうだね？」

「！」

「兵器ばかりではない。兵士の食料や生活設備をも考えると、莫大な費用がかかる。これほど儲かる産業はあまり類を見ない。恐らくこの戦争の裏にも、そういった利益獲得を求める、彼ら“ロゴス”がいる。あの“ブルーコスモス”の母体にもなっている秘密結社だ」

その場に居たほとんどの人間は、その説を受け入れた。しかし、納得していない男が居る。アムロ＝レイだ。

戦争を産業として捉えるのはわかる。ならば、何故彼らは“核”を撃ったのか・・・。そんな疑問を残しながらも、アムロはデュランダルの言葉の耳を傾ける。

「彼らは遥か昔から戦争を産業として考え、争いを作り上げてきた。彼らを打倒しない限り、我々はいつまでも戦い続けることのなるだろう。できることなら、彼らを打倒したいものだが・・・それこそが本当に難しいことなのだよ・・・」

その議長の言葉を最後に、お茶会は終了した。その去り際、アムロはデュランダルに呼び止められる。

「アムロ君、少しいいかな？」

「？・・・ええ、構いませんが」

「君とは、少しばかり二人きりで話をしたくてね。どこか別の場所へ移ろう」

二人はとある部屋へと移動した。

「・・・それで、話とは？」

その部屋に入るや否や、アムロが聞く。

「うむ。とにかくかけてくれ。
君の事はグラディス艦長から報告がある。
異世界から着た・・・ということのようだが？」

「ええ、それが一番説明がつきやすいですし、
それ以外の言葉は見つかりません」

「そうか・・・」

アムロは更に聞く。

「議長、一つお尋ねしたいことが・・・」

「ああ、君をこの軍に引き込んだ理由・・・かな？」

「ええ」

デュランダルのほうも、この質問が来ることは既に予測していたらしく、
造作もなく答える。

「君にはいくあてがないと聞いた。
だから、我が軍が君の斡旋先を引き受けた・・・というのではご不満かな？」

「・・・」

デュランダルはあまり含みを持たせなかった。
それでも、アムロは黙って聞く。

「それに、君は赤服のシン＝アスカや前大戦のエースパイロット、アスラン＝ザラをも助けることができると聞いたものでね。
是非とも、君のような人材がほしかったのだよ」

「・・・議長、私を買いかぶりすぎのようですが・・・」

「アムロ君」

「え？」

反論しようとしたアムロの声を、デュランダルが遮る。

「私は君と対等な立場で話がしたい。改まった話し方ではなくても結構だ」

「・・・では言わせてもらう。
貴方は僕を買いかぶっておられるようだが、僕自身に、それだけの力はない」

「それはどうだろう？
仮に君の強さではないとしても、“あの機体”はどうかね？」

「！」

デュランダルが言う“あの機体”。
それはＵＣの技術力の結晶、νガンダムの事であった。

「・・・いくあてのなかった僕を引き込んでくれたことには感謝する。
だが、やり方が気に食わないな。
所詮、僕には他に道がなかったことぐらい、わかっていただろうに」

「はっきり言う・・・。君を我が軍に引き込んだのは正解だったかも知れんな。
はっきり、君の力が借りたかったというべきだったな。いや、すまない」

デュランダルは不敵な笑みを浮かべた。
“奴”と・・・シャアと同じで、気に食わない奴だと、
アムロはその時感じていた。

この対談の後、アムロはミネルバの自室に戻った。
そしてアムロは、この一連のやり取りの中である答えを導き出した。
彼はその黒い腹のそこに、“何か”を隠している、と。
それがまだ何かは、アムロにはわからない。
アムロはそれを探ってみようとも思っていた。

少し昼寝でもしようかとベッドに横たわったアムロの元に、
新たなる来訪者が現れる。
インターフォンの受話機のモニターについた明かりに気がついたアムロは、
客人の応対に向かう。
アムロの部屋に訪れたのは、レイ＝ザ＝バレルであった。

「どうかしたか？」

「失礼。ミネルバＭＳパイロット全員に召集がかかっております。
ブリーフィングルームにお越しください。“アムロ隊長”」

レイはそう告げると、インターフォンを切り、
その場を立ち去った。

“隊長”・・・？」

レイが最後に言い残した“アムロ隊長”という言葉が引っかかりながらも、
アムロはすばやく緑の軍服に着替え、ブリーフィングルームへと向かった。

ブリーフィングルームにはアスラン達が既に集まっており、
更にハイネ隊のメンバー達も集まっていた。
後から入ってきたアムロに気づいたアーサーは話し始めた。

「ええ、全員集まったので・・・。
これより、新規部隊編成の通達を行う」

（新規の部隊編成・・・？）

もちろん、アムロはそんなことなど聞いていない。
それはシンやアスラン達も同じようで、「え・・・？」などと口々に呟いていた。

「本日付で、ハイネ＝ヴェステンフルス以下４名からなる、“グフ・イグナイテッド性能評価試験小隊”が我がミネルバ隊に編入される。
それに伴って、我々ミネルバ隊は“第９９独立戦隊”として正規軍に編入される事となった。
また、ミネルバ搭載機の増加に伴い、ＭＳ隊を二つに分割する。
第０１ＭＳ小隊はハイネ＝ヴェステンフルスを隊長として、元ハイネ隊のメンバーで構成、
第０２ＭＳ小隊はアムロ＝レイを隊長、アスラン＝ザラを副隊長として、
シン＝アスカ、ルナマリア＝ホーク、レイ＝ザ＝バレルで構成する。
以上だ」

アムロは、先ほどレイに“隊長”と呼ばれたことに納得した。
恐らく、先に聞いていたのだろう。

「あ、それとアムロ」

「ん？」

話の最後に、アーサーはアムロに、赤い服とＦＡＩＴＨ（フェイス）バッジ、そして、一枚の封筒を手渡す。

「デュランダル議長からの贈り物だ。
よって、アムロ＝レイを本日付で赤服待遇とする」

アムロはフェイスのバッジをよく見た。
アスランやハイネ、タリアなどがつけているものと同じバッジだ。
アムロは封筒の中身を見た。
デュランダル議長からの手紙である。

『もともと大尉であった君に、緑服待遇は不満があるのではないかと思い、
エリートの証である赤服を送らせていただいた。
また、そのＦＡＩＴＨバッジは私や評議会に“忠誠を誓う”という意味だ。
しかし、君は、君の信じるものに忠誠を誓ってくれ』

デュランダルからの手紙には、そう書いてあった。
アムロ自身には、出世欲はなかった。
そして、今までの待遇にも不満はなかった。
しかし、赤服待遇で尚且つＦＡＩＴＨとなれば、
デュランダルの動向を寄り近くで探ることができ、
アムロにはむしろ好都合だった。

＜翌朝　ザフト軍ディオキア基地　カフェテリア＞

シンとルナマリアはカフェテリアで朝食をとっていた。
シンの方は白米に味噌汁、コロッケに漬物という内容の、
“ニッポン定食”を食べており、ルナマリアのほうというと、
朝からハンバーガーを食べていた。

「ル、ルナ・・・大丈夫？」

「何がよ？」

「い、いや・・・いろいろと」

そんな会話をしていた二人の元に、シンと同じ定食を頼んだアムロがやってきた。

「あ、アムロ隊長、おはようございます」

アムロに気がついたシンは、彼に敬礼した。

「おはよう」

「お、おはようございます。アム・・・げほっ、げほっ！」

慌てて挨拶をしたせいか、ルナマリアはハンバーガーをのどに詰まらせ、
更に慌てて水を飲んだ。

「お、おい、大丈夫か？」

「だ、大丈夫です、隊長・・・ご心配をおかけしました」

「そうか。MSパイロットともあろう者が、のどにハンバーガーを詰まらせて死んだら、
お笑い種にもならないからな」

アムロは少し苦笑いすると、シンの隣の席に座った。
アムロが箸を取ったとき、
また、別の人物がやってくる。

「アムロ隊長!」

威勢のいい声に思わずビクリとしたアムロは、
後ろを振り返った。
そこに居たのは、茶髪の少年と紺髪の少年。
アムロは二人の名前を思い出した。
ハイネ隊のメンバー、ベリエスとジョナサンである。

「君たちか・・・こちらに転属するらしいな?」

「はい!よろしくお願いします!」

ベリエスが先ほどと同じくらい、大きな声を出す。

「アムロ隊長、誰ですか?」

「ああ、紹介するよ、シン。
二人はハイネ隊のメンバーだ」

「よろしく、ベリエス＝エバールだ！」

「ジョナサン＝ブリヨンだ。よろしく頼む」

「確か、インパルスのパイロットだろ？
ローエングリンゲートでの活躍、見させてもらったぜ！
アカデミーの頃から名前は聞いてたけど、やっぱりすごいんだな！」

「へへ、ありがとよ。俺、シン＝アスカ。よろしく！」

シンは二人と握手をした。

「私、ルナマリア＝ホーク。よろしく」

「よろしく！」

「よろしく頼む」

ルナマリアもまた自己紹介をした。
アムロはもう一人のハイネ隊のメンバー、
ユイ＝ビクトリアがいない事が気になった

「ところでベリエス、ユイはいないのか？」

「あ、あいつなら、多分まだ寝てますよ。
あいつ、アカデミーの頃から起きるのが遅いんですよ！」

「そうか。ん？」

急に、カフェテリアにいた兵士たちが騒ぎ始める。

何事かとその方向を見ると、
寝癖だらけで、酷くやつれた様子のアスランと、
彼の腕に抱きつく、ラクス＝クライン（もちろんミーア）の
姿があった。

「アスランの奴、あんなにやつれて、何があったんだ？」

「さあ・・・そういやルナ、ザラ副隊長を起こしに言ったよな・・・
ってあれ？」

シンがルナマリアを見たとき、ルナマリアは妙に苛立った様子で、
ハンバーガーの自棄食いをしていた。

「あ、そうだ」

ベリエスは何かを思い出したようで、アムロに耳打ちした。

「うわさじゃ、ザラ副隊長、ラクス様に夜這いを仕掛けられたらし
いですよ」

「・・・そういうことか。いや、その先はいい。
その手の話は、あまり好きじゃあない」

アムロはベリエスの話を打ち切ると、
食べ終わった食器を返却し、カフェテリアを出て行った。
カフェテリアを出ると、アムロは自室へと向かった。
アムロは今日、オフである。
アムロは、今日はどう過ごそうかと考えていると、
不意に「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？」という声を聞いた。

「！？」

アムロは振り返った。しかし誰もいない。
カフェテリアの出口からはそれほど離れてはいない。
兵士たちの雑談も聞こえてくるほどの距離だ。
その雑談の中から聞こえてきたのか・・・？

「誰が・・・？」

「Ｈｅｙ！」

「！？」

アムロは足元を見た。
そこに転がっていたのは赤いボール。
アムロはそれを拾い上げた。
アムロはそれを見て、驚嘆の声を上げた。

「な、ハロ・・・！？」

「Ｗｈａｔ　ｈａｐｐｎｅｄ　ｇｕｙ？」

アムロはそのハロをよく見る。
彼がＵＣの世界で持っていたものと、色と大きさは違えど、
そっくりであった。更に、小さいせいか、驚くほど軽い。

「だが、なぜハロがこんな所に・・・」

そこへ、一人の女性がやってくる。
ラクス＝クラインだ。

「あ、そこのお方！そのハロは私のものですの！」

ラクスはアムロからハロを受け取ると、

「だめですわよ、ハロ」とそのハロに言い聞かせた。

「ラクスさん、そのハロ、どこで手に入れたんだい？」

「え？こ、これは・・・アスランからの贈り物ですの」

アムロは後からやってきたアスランに、

やや興奮気味で問いただした。

「アスラン！このハロ、君が作ったのか！？」

「え？あ、はい。そういうことになります・・・ね」

もちろん、これはアスランが作った“本物”ではない。

しかし、ラクスが怪しまれる可能性があると思ったアスランは、

そう返事をした。

「すごいな・・・アスラン、今度ここまで軽量化できた理由を教えてくれ」

「は、はい・・・構いませんが・・・。

もしかして、アムロさん・・・隊長の世界にもあったんですか？」

「ああ、俺が作った奴だが、何分こいつより大きくてな。

それで、君の技術も参考にしたい。頼むぞ」

アムロはそう言って去っていった。
久々に見たハロ。
よく機械をいじっていた少年時代の記憶がよみがえる。
アムロは町の工具屋へ行き、ハロの“４代目”を作る事に決めた。

アムロがそんなことをしていた頃、
ディオキアのとある森で、ある異変が起きていた。
しかし、アムロはまだ、それを知る由もなかった。

第9話　海辺の町（後書き）

“第９９独立戦隊”はもちろん本作オリジナルの名前です。
劇中じゃ単に“ミネルバ”とか“ミネルバ隊”としか
呼ばれてなかったんで・・・。

そういや、ロゴスの“金儲けのための戦争”ってどうなんですかね？
劇中での描写が色々とおかしかったですし（いきなり核ミサイルとか）、
冷戦構造のほうが金儲けしやすいんじゅないのかなぁ・・・。
なんて思いながら書いてました。

次回の更新は2月中旬～下旬ぐらいになると思います。

第１０話　二人目の旅人（前書き）

どうも、２月中旬の間に更新できました。
今回は少し長めです。
それと、また新たなキャラクターが登場します。

第１０話　二人目の旅人

＜９：００　ザフト軍ディオキア基地　車両管理センター＞

ハロを作るため、アムロはホームセンターと部品屋に行くことにした。
この町の部品屋で売っている部品で足りるかどうかはわからなかったが、
どうにかなるであろうという考えが、アムロにはあった。
アムロは４人乗りのジープに乗ると、イグニッションキーを回した。
その時、車の外からアムロを呼ぶ声が聞こえる。

「隊長！アムロ隊長！」

「ん？」

アムロは窓から外を見た。
ザフト軍の車両管理センターから、一人の少年が走ってくる。
ヨウラン＝ケントだ。
アムロは一度、車から降りた。

「ヨウラン、どうしたんだ？」

「隊長、これからお出かけになるんですよね？」

「そうだ」

「なら、俺も連れて行ってください！」

「!?・・・別に構わないが・・・。
俺の行く先はホームセンターと部品屋だぞ？」

「俺の行き先もそこなんです！
実はミネルバ整備クルーの中で、
誰が用具を一通り買ってくるかじゃんけんしたら、
俺が負けちゃって・・・それで、俺もホームセンターに行こうと思ったら、
車は全部出払ってるって聞いたんで・・・お願いします！」

「わかった、隣に乗ってくれ」

二人は車に乗ると、大通りに出た。
程なくして部品屋とホームセンターをまわる。
アムロはそれぞれ一軒目でパーツをそろえたが、
ヨウランのほうはまだ足りないものがあるようで、
もう一軒のホームセンターに行く事となった。

しばらく走っていると、車は海が見える、崖沿いの道に出た。
他に車は居ず、アムロたちの車だけが走っていた。
ヨウランはその海を眺めながら、ふと呟いた。

「きれいだなぁ・・・今までこの海で戦ってたのに、
こうやって見ると、とっても平和に見えますよねぇ、隊長」

「ん？ああ、そうだな」

ヨウランの問いに、反射的に答えるアムロ。
アムロはこの日、前日感じたあの不思議な感覚を感じていなかった。
厳密に言うと“消えた”というより、遠ざかっていくような感覚であった。
しかし、その代わりに別の不思議な感覚をアムロは感じていた。

（この感覚は・・・なんだ？）

だんだんと強まっていくその感覚に、
アムロは何かが起きるのを予感していた。

「ヨウラン、次はどこで曲がればいい？」

「ええと、この先にある信号を右のラサマイ通りの方へ曲がって、
それから・・・」

「信号って言ったって・・・ん？」

再びその感覚が強まり、アムロの直感が働く。
何かが来る。それだけだった。

「ヨウラン、伏せろ！」

「え？」

アムロが急ブレーキを踏んだ瞬間、
突如として、道の陸地側の森が強い光に包まれる。
しかし、ミサイルや砲弾の類が着弾したわけでもなく、
爆風や轟音はなかった。

「イテテテ・・・今、何かが・・・」

衝撃で飛び出したエアバックに顔をうずめながら、
ヨウランは反射的に外を見ていた。

「ああ、森の中だ」

アムロはドアを開けると、外へ出た。
それにつられて、ヨウランも降車する。
二人の目の前には、まだ手もつけられていないであろう、
自然の森が広がっていた。
スペースコロニー内に広がる人工の森林とは、だいぶ雰囲気が違う。

「この森の中か・・・？」

アムロは吸い込まれる様に、森の中へと入っていく。

「ア、　アムロ隊長・・・どうしたんですか？」

「何かを感じる・・・調べてみよう」

「危険すぎます！ここはミネルバに報告して・・・」

「・・・そうだったな。ミネルバに連絡しておいてくれ。
俺は先に行って、様子を見てくる。
もしものときは頼んだぞ」

アムロは車内から拳銃を取り出すと、
中に弾が入っていることを確認し、森の中へと入っていった。

森の中は薄暗く、もう朝の９時だというのにも関わらず、まるで夜のような静けさだった。

「・・・だいぶ歩いたな・・・現在位置は・・・ん？」

アムロは木の陰に、金属の板が刺さっているのを見つけた。
アムロはそれに近づき、地面から引き抜いた。
よく見ると、それは何かの破片のようにも見えた。
更に見回すと、表面に何か文字のようなものが書いてあるのを発見した。

「ＲＧＺ－９１・・・？」

何かの型式番号。
アムロはその型式番号が、何のものであるか知っていた。

「リ・ガズィ・・・！？」

ＲＧＺ－９１　リ・ガズィ。
地球連邦軍が開発した、Ｚガンダムの簡易量産型ＭＳ。
そのＭＳの破片がこの世界にあるのならば、考えられることは一つ。

「僕のいた世界から、何かが転移してきたとでもいうのか・・・？」

その破片を置いたアムロは、再び歩き始めた。
修理中だったはずのリ・ガズィ。
誰かがそれに乗って出撃したのか？
アムロはただ考えながら進んだ。

破片のあった場所から、５０ｍと離れていない場所で、
アムロはまた何かを発見した。

白い物体が、森の少し開けたところで転がっている。
アムロは拳銃の安全装置をはずすと、
ゆっくりと、その物体に近づいた。
やはり、アムロの見覚えがある物体。
地球連邦軍の重装ノーマルスーツだ。

「間違いない、連邦のノーマルスーツだ！」

アムロは走って、そのノーマルスーツに駆け寄った。
顔はよく見えない。
バイザーの開け方は知っている。
アムロは首筋のボタンに触れ、バイザーをあけた。

「！？」

そのノーマルスーツの正体は、
アムロのよく知る人物であった。

「チェーン・・・！？」

チェーン＝アギ。
アムロ＝レイが乗っていた機体、νガンダムの整備士の一人で、
アムロの恋人。
倒れて、気絶している彼女の頭からはわずかだが血が流れていた。。

「！？・・・そんな、チェーン、何故君が・・・！」

まだ息はある。
アムロは彼女を抱きかかえると、大急ぎで車へと向かった。

「・・・こちら、ヨウラン＝ケント。
こちら、ヨウラン＝ケント！くそ、どうなってやがる！」

ヨウランは繰り返し、ミネルバへの連絡を試みていた。
しかし、通信がつながる気配はない。
それどころか、先ほどまでロックミュージックが流れていたラジオまで、
急に止まってしまった。

「一体なんで・・・ん？」

ヨウランは何かを担いでこちらに走ってくる、
アムロ＝レイに気がついた。

「アムロ隊長、聞いてくださいよ！
ミネルバと連絡が・・・」

「ヨウラン！悪いが今はそれどころじゃない！
車を出してくれ！」

「え、ええ？」

アムロは車の後部座席に、チェーンを寝かせると、
通信機を取った。

「こちらアムロだ。大至急・・・ん？」

通信機からは、ずっとノイズばかりがながれていた。

「どうなってる！？つながらないぞ！」

「それが、全くつながらないんですよ！
まるで、電波かく乱を食らったみたいに・・・」

「電波かく乱・・・！？」

チェーンが異世界から転移してきた以上、
何があってもおかしくはない。

「ミノフスキー粒子・・・！」

考えられない話ではない。
チェーンが転移してきたとき、周囲に散布されていた、
ミノフスキー粒子ごと転移したと考えても、不自然ではない。
だとすれば、一刻も早くこの区域から離れ、
通信可能な圏内まで到達する必要がある。
アムロは助手席に座ると、ヨウランに車を出すよう指示した。

「ヨウラン、基地まで頼む！」

「え？でも・・・この女の人って、けが人ですよね？
だったら病院にいったほうが・・・」

「この子は俺と同じ世界から来た人間だ！早く！」

「！？・・・は、はい！」

ヨウランは車を出した。
しばらく走って、ミノフスキー粒子の影響を受けない距離まで来ると、
アムロは通信機を取った。

「こちら、休暇中のアムロ＝レイだ。
ミネルバ、応答してくれ！」

しばらく呼びかけていると、タリアが通信に出る。

「何？どうかしたの？」

「艦長、落ち着いて聞いてくれ。
ディオキア市郊外の森で、僕と同じ世界から来た女性が倒れているのを発見した」

「！？・・・ちょっと待って、何故その女性が異世界から来たとわかったの？」

「彼女は僕の部下です。名前はチェーン＝アギ」

「・・・わかりました。こちらで受け入れの準備をします」

＜１１：００　ザフト軍ディオキア基地　病院＞

軍施設内の病院に搬送されたチェーンは、
幸いにも軽傷で済んだ。命に別状はないとの事だが、
意識はまだ戻っていないらしい。
ヨウランをあのまま車でホームセンターへと向かわせると、
アムロは彼女の病室へ見舞いに行った。
アムロは病室に入ると、目を覚まさないままの、
チェーンを見つめた。
一体、彼女に何があったのか？
そう思いながら、アムロは彼女の傍についた。

「チェーン・・・君と、こんな形で会うなんて・・・」

「・・・う！」

「！？」

眠っていたチェーンが、突如としてうめきを上げる。
その瞬間、急激に苦しみだし、何かをうわごとのように叫んでいた。

「チェーン、どうしたんだ、チェーン！」

「ダメ・・・ダメよ・・・ハサウェイ・・・ダメ！」

「ハサウェイ？」

ハサウェイ＝ノア。

アムロの上司にして、旧友のブライト＝ノア大佐と、
ホワイトベースの操舵士だった、ミライ＝ノア（旧姓ヤシマ）との
間にできた息子だ。
彼はネオ・ジオンとの決戦の直前、サイド1“ロンデニオン”から
ラー・カイラムに密航し、
見つかった直後、ブライトに修正を受けていた。
その彼の名をチェーンの口から聞き、アムロは面食らっていた。

「チェーン、ハサウェイがどうしたって!?」

「ううう・・・ダメよ・・・その子は・・・危険よ・・・！
・・・はうっ！」

チェーンは意識を取り戻し、上体を起こすと、
辺りを見回した。

「ここは・・・」

「チェーン、気がついたかい?」

「アムロ大尉・・・!?
それじゃ、ここは・・・」

「生憎だが、ここは地球連邦軍の病院でもなければ、
ラー・カイラムの医務室でもない」

「え・・・?」

チェーンは首をかしげた。
どうやら、あまり状況を理解していないようだ。

「チェーン、いいかい、よく聞いてくれ・・・」

アムロはこれまでに起きた事や、
ここが別の世界であることを話した。

「そんな・・・信じられないわ、アムロ！」

チェーンの反応は、アムロが予想した通りだった。

「でも、そんなことって・・・」

「・・・僕も、最初はそう思ったさ。
だが、それが現実だと思うと、不思議と違和感を感じなくなる。
そんなものさ」

チェーンは返事をしなかった。
心の整理ができていないのであろう。
しばらくすると、今度は彼女のほうから話題を持ちかけてきた。

「私、アムロの援護に行くために、リ・ガズィで出たんです」

「・・・そうだったのか。戦闘中、微弱だが君の存在を感じた」

「それで、このサイコ・フレームの試料を・・・あれ？」

チェーンは自分の腰に手を回した。

しかし、当然のことに、ノーマルスーツから患者用の寝巻きにきがえているため、
腰につけていたサイコ・フレームの試料はなかった。

「アムロ、私のノーマルスーツに、サイコ・フレームの試料がついていませんでしたか？」

「アナハイムのオクトバーから貰ったっていう、
あのＴ字形の奴かい？
君を見つけたときには、そんなものは持っていなかったが・・・」

「そんな・・・」

この世界に転移してきたときに、どこかへ消えてしまったのか？
なぞはますます深まるばかりであった。

「・・・それで、出撃した後はどうしたんだい？」

アムロは、これ以上この話は進展しないと考え、
元の話に戻した。

「ええ、その後は、ネオ・ジオンのＭＡと戦って・・・それで・・・」

チェーンは話を出し渋っている様子だった。
その後、少し間をおいてから話を再開する。

「あのＭＡに乗ってた子・・・」

「・・・クェスか」

「その子を撃墜したら・・・急にジェガンに乗っていたハサウェイに撃たれて・・・」

「!?」

アムロが予測していなかった言葉だ。
彼はシャアの道具に成り下がってしまっていた少女、
クェス＝パラヤを助け出そうと、躍起になっていた。

（ハサウェイ・・・お前も、死人に魂を引かれたのか・・・）

あの忠告は無駄だったのか。
アムロは自責の念に駆られる。

「それで、ハサウェイが撃ったビームライフルの直撃を受けたの。
私は死んでいるはずなのに、こうして生きているのが不思議よ」

「そうか・・・」

二人がそんな会話をしていると、病室の扉が開き、
一人の女性が入室した。
タリア＝グラディスだ。

「ザフト軍、第９９独立戦隊旗艦、ミネルバ艦長のタリア＝グラディスです」

「え?」

チェーンは再び首をかしげた。

慌ててアムロが補足しようとするのを手で制したタリアは、
半ば自嘲気味の声でこう続けた。

「・・・と、いっても、あなたには何がなんだかさっぱりでしょうね」

「は、はあ・・・」

「・・・チェーン、この女性は僕がこの世界で世話になってる戦艦の艦長だ」

「！・・・し、失礼いたしました！」

慌てて敬礼するチェーンに「いえ、構わないわ」と告げたタリアは、
本題へと入った。

「医者の話では、そう重い怪我ではないようで、
明日には退院できるそうよ。それで、その後のことなんだけど・・・」

「？」

「あなたにも、アムロと一緒に私たちの艦に乗艦してほしいの」

「私に・・・？」

「ええ、実は彼が乗っている機体、νガンダムの整備が思うようにいっていなくて、
メカニックに負担をかけているらしいの」

「・・・」

チェーンもアムロも無言であった。
いくらミネルバの整備員たちが優秀であるといっても、異世界のＭＳとあれば、やはり整備には四苦八苦する。
チェーンは数秒の間をおくと、タリアに返事をした。

「わかりました。その件、承諾します」

「ありがとう。上には私から伝えておきます」

タリアはそういい残すと、静かに退室した。

「チェーン、いいのかい？」

タリアが退室した後、アムロがチェーンの真意を問う。

「いいんです。私はアムロと一緒に居たいですし、力にもなりたいんです」

「そうか・・・ありがとう、チェーン」

「いえ・・・」

アムロは席を立つと、元あった場所に椅子をしまった。

「もういかれるんですか？」

「ああ、書類が山積みになってるんでな。
本当はオフのはずだったんだが、君を見つけてから、

また書類が増えてしまったよ」

「まあ」

苦笑いしたアムロに、チェーンが微笑む。
アムロはチェーンの唇に軽く口付けをすると、静かに退室した。

大量の書類が待つ自室に行く途中、
アムロは数人に呼び止められた。
まずはベリエス＝エバールだ。

「隊長！」

「ん？」

振り返った先には、全速力で走ってきたベリエスの姿があった。

「どうかしたか？」

「隊長がいた世界から、人が飛ばされてきたって話、
本当なんですか？」

「ああ、そうさ」

異世界から来た人間にはやはり興味があるのか、
ベリエスはやや興奮気味で次々と質問を投げかけてきた。

「どんな人です？」

「俺の部下さ。メカニックをやってる女性だよ」
「隊長との関係は？」
「・・・さっき、部下だと言ったが？」
「あ、いや、そういうことじゃなくて・・・」
「・・・そういうことか。君の想像に任せるよ」
アムロはそういい残すと、逃げるように立ち去った。
さっさと部屋に行こう。
しかし、そんなアムロに再び声がかかる。
ハイネ＝ヴェステンフルスだ。
「よう、アムロ！」
「ハイネか。どうした？」
「異世界から来たっていう女性を連れてきたって本当かい？」
「・・・ああ、そうさ」
「もしかして、お前の恋人・・・とかかい？」
「！？・・・ご想像に任せるよ」
「いいじゃないの！仲が良いってのは良い事よ！」

アムロの肩をぽんぽんと叩くハイネ。
アムロはいい加減、疲れを感じた。

ハイネとの会話を適当に済ませると、アムロは誰かに呼び止められる前に、
自室へと逃げ込んだ。

2時間後、書類をすべて片付けたアムロは、
然るべき部署に提出し、昼食を摂ると、再び自室に戻った。

先ほど買ってきたハロの部品は十分にあった。
2日もあれば、1体ぐらいは組み上げることができる。
彼は早速製作を開始した。
アムロが数時間ほどハロ作りに没頭していると、彼に格納庫から呼び出しがかかる。
オフのはずが、とても忙しい一日だとぼやきながらも、
アムロは格納庫へと向かった。

アムロは格納庫のドアが開いた直後、
数人が話しているのを見かける。
ベリエス、ユイ、ヨウラン、ヴィーノの4人だ。
ハイネ隊のメンバーは、既に整備員たちとは打ち解けていた。

「そんな・・・隊長に、彼女がいたなんて・・・」

深刻の顔をして落ち込むユイ。

既に、アムロとチェーンは恋人同士ではないかという噂が広まっていた。
根も葉もない噂だが、一応事実である。

「そういう事！諦めろって！」

ベリエスのあまりにも無神経な態度に、
ユイは「うるさい！」と叫びながら彼を殴り飛ばした。

「・・・ヴィーノ、何か用か？」

チェーンの話をしていた彼らの背後から、
アムロが現れる。

「た、隊長！い、いたんですか・・・？」

「当たり前だろう。そっちが呼んだんだからな。
それと、そこの二人」

ユイと自らの頬をさすっていたベリエスが慌てて敬礼をする。

「どんな理由であろうと、同じ仲間である人間に暴力を振るうのは、
あまりいい事とは思えないな」

「も、申し訳ありませんでした！」

二人はアムロに謝罪すると、そそくさと格納庫を立ち去った。

「・・・ところでヴィーノ、用件は何だ？」

「あ、はい。実は、隊長に見てもらいたいものが・・・」

ヴィーノは数挺のビームライフルを指差した。
それはガイアのライフルに似ていた。

「新型か？」

「はい。議長の置き土産です」

「議長の？」

「νガンダム専用の奴だそうで、俺たちがカーペンタリアから送った、
νガンダムのライフルの解析データを基に作ったそうです。
使用するビームは、メガ粒子って聞いてます」

「ずいぶんと早いな。あちらではミノフスキー粒子の実証はもう終わったのかい？」

「あ、はい。ただ・・・ミノフスキー粒子を縮退させて、
メガ粒子に変換するって事はなんとか実用化できたらしいんですが・・・
レーダーやセンサーをことごとく無力化するその効果や、
従来の兵器との互換性とかで、
どうも実用化についてかなりもめてるらしいんですよ・・・。
それに、メガ粒子砲の運用もまだ実験段階で、エネルギーＣＡＰのほうも・・・
こいつも、送った図面通りに作られて、
理論通りにミノフスキー粒子を充填しただけですから、
実際にテストする必要があるんです」

「そうか、やってみよう」

そういうと、アムロはνガンダムに搭乗し、機体を起動させた。
全天周囲モニターで周りを確認すると、専用のライフルをとった。
更に、ヴィーノから通信が入る。

「サーベルもお願いします！もう既に装備させてあるんで！」

「了解だ、発進する！」

アムロはミネルバから発進すると、ディオキア市から少し離れた海へと出た。
水位は浅く、ＭＳが立っても足首ぐらいまでしか浸からないほどだ。
日は既に西へと傾き、太陽は数分もすれば、水平線のかなたへと沈むようにも見える。

「ここまで来ればいいだろう」

「はい。それじゃ、テストを開始します。
2時の方向にある、あの岩を攻撃してください」

コンソールパネルに岩の位置を示す表示が現れる。
アムロはその岩に照準を合わせ、ビームを放った。
メガ粒子の、ピンク色のビームは岩に直撃すると思えたが、実際には直撃はせず、
かすった程度だった。

「あたらない・・・！？」

「そんな・・・やっぱり、設定が・・・！」

「ヴィーノ、ビーム屈折率を見直す必要があるな。
やはり、大気圏内でのメガ粒子砲の弾道計算があってないようだ」

「そうですか・・・それじゃ次、サーベルのほうもお願いします」

アムロはライフルを腰にマウントすると、
ビームサーベルを引き抜いた。
更にアムロは、ピンク色のビームの刃を発振させると、
目標の岩を切り裂いた。
瞬時に溶解し、真っ二つになる岩。
ビームサーベルのほうは正常に機能しているようだ。

「ビームサーベルのほうは問題ない。こっちの調子は上々だ」

「了解。それじゃ、問題はライフルだけですね？」

「そうだ。帰還する」

アムロはνガンダムのバーニアをふかせ、ミネルバの方向へ飛んだ。
町がよく見えると、再び通信が入る。
タリアからだ。

「アムロ、シンからエマージェンシーコールよ！」

「何ですって？それで、場所は？」

「場所はあなたのνガンダムからそう遠くない場所よ。
アスラン達も向かわせるけど、いち早く、あなたにも向かってほし

いの。
ここはつい先日まで敵地だったこともあって、何があるかわからないわ。
くれぐれも注意して」

「了解」

アムロは進路を変更すると、シンの元へと向かった。
何かよからぬ事でも起こったのか？
アムロはシンの安否を気遣った。
シンが居る場所は、ＭＳの足ならば、そう時間はかからない所だ。
とはいえ、既に日は沈んでいる。
アムロはシンがエマージェンシーコールを出した近くの崖下にたどり着いた。

全天周囲モニターで辺りを見回すと、人影が見える。
シン＝アスカだ。
アムロのνガンダムに気がついたようで、彼はνガンダムに手を振っていた。
νガンダムから降りたアムロは、すぐさまシンの元へ駆けつけた。

「シン、何があったんだ？」

「あ、はい、実はこの子が・・・」

シンは自分の後ろに隠れている少女を振り向き、
「怖くないよ」と声をかける。
金髪の少女で、年はシン達と変わらないように見えた。

「この子がどうかしたのかい？」

「この子が海に落ちて溺れているのを見て、それで助けた後、
ここに這い上がったんですけど、動けなくなっちゃったんです」

「・・・そうか、とにかく安心したよ。君が無事でよかった」

更に、アスラン達が遅れてボートで駆けつける。
シン達はボートに、アムロはνガンダムに乗り、
一行はいったん基地に帰還した。

νガンダムを格納し終えたアムロは、
シン達のボートが係留されている桟橋へと駆けつける。
ボートのほうも、たった今、到着したばかりのようだった。

「シン、この子はディオキアの町の子かい？」

「いえ、それが・・・あんまりはっきりしてなくて・・・。
ただ、多分戦争で酷い目にあって、家族をなくしたんだと思います」

「名前は？」

「ステラ＝ルーシェです。でも、それぐらいしかわかんなくて・・・
」

「そうか・・・ここで身元を調べるしかないな」

ステラはシンにずっとくっついて離れない。
シンの方も、特にそれを嫌がっている様子はない。
アムロは、その少女がシンに何かを求めているように、感じる。
こうしてみると、無口なこと以外は、普通の少女と変わらないよう

に見える。
しかし、アムロはその少女から、妙な感覚を感じ取っていた。
かつてアムロが戦った、“強化人間”に似た感覚を・・・。
数分後、アスランがアムロたちの元へ駆けつける。

「隊長！その子の捜索願が出ているそうです！」

「本当か！？」

「よかったね、ステラ」

ステラはこくりとうなずいた。

そのまた数分後、基地のゲートの前に、迎えが来たという知らせを受けて、
アムロ達はそのゲートへと向かった。
ゲートの前には、二人の男が立っている。
その男たちを見て、ステラは「アウル、スティング！」と叫んだ。

「やはり、引取り人で間違いないようだな。
そこの君たち！」

「ん？」

スティング＝オークレーとアウル＝ニーダはその声に気づくと、アムロ達の元へと走った。

「おいおい、赤服が３人もいるぜ・・・！？」

「・・・黙ってろ。いいか、お前は喋るな」

シンから離れたステラは、彼らの元へと駆け寄った。

「ステラ・・・？」

「その子、海で溺れてたんですよ。
それで、俺が助けて・・・」

シンが彼らに、事の次第を説明する。

「・・・本当にありがとうございます。
ザフトの方々。御礼をしたいところですが、生憎持ち合わせがなく・・・」

「い、いえ、とんでもありません！」

「そうですか・・・では、お言葉に甘えることにします。アウル、
ステラ、いくぞ」

男たちの車に乗ったステラは一度振り向くと、急にシン達の元に戻った。

「シン・・・ありがとう」

「ああ、もう大丈夫だよ。君の兄さんたちが来たから、
もう怖いことなんてないさ。
それに、またいつか会えるよ」

「・・・うん」

ステラが再び車に戻ると、車はすぐに発進した。

「ステラ、いつか会いに行くから！」

その言葉が届いたかはわからなかった。
しかし、後に彼は彼女と再び出会うこととなる。
最悪の形で・・・。

男たちの車が去った後、アムロはアスランに耳打ちした。

「アスラン、気がついたか？」

「・・・ええ、彼ら、だいぶ警戒してましたね」

アムロは彼らから再び、強化人間に似た感覚を感じ取っていた。
これは単なる偶然か。それとも・・・。

アムロは再び自室に戻ろうとすると、
またしても呼び出しがかかる。下手な勤務日より、よほど忙しい。
この日のオフはパーだなと思いながら、アムロはブリッジへと向かった。
ブリッジには、既にハイネとアスランが居た。

「艦長、何でしょうか？」

「ええ、我々に新たな命令が下ったわ。
今朝出発した議長から、地中海に派遣された地球連合軍の増援艦隊の、

討伐命令が出されたの。
規模は我が軍が窮地に立たされるほど多くはないんだけど、
オーブ艦隊も派遣されたとの事よ」

「・・・」

アスランはただ何も言えず俯いている。
彼はかつて、オーブにいた身だ。
迷いを感じているのだろう。

「増援艦隊の相手を引き受けるのは我々よ。
気を引き締めて頂戴。本艦は2日後の9：00に出航し、
ダーダネルス海峡で敵を迎え撃ちます。いいわね？」

「了解！」

3人は声をそろえ、敬礼する。
しかし、その中でアスランの声が弱々しかったのは言うまでもない。

退室した後、アスランは甲板へ出ていた。
冷たい夜風に吹かれながら、オーブに居た日々のことを思い出す。
オーブ軍と戦うなど、考えてもいなかった。
自分の想像力不足を悔いるアスラン。
そこへハイネがやってくる。

「よう、アスラン」

「ハイネ？」

「こんな寒いのに外へ出て、風邪ひくぜ？」

「あ、ああ・・・」

そうも言われながら、アスランはフェンスに両肘をかけて、夜の海を見つめる。
そんな彼の心情を察したのか、ハイネは更に続ける。

「迷ってるのか？オーブと戦うの」

「・・・ああ」

「そうか・・・なら待機しとくか？」

「そ、そんな事は・・・！」

「だよな・・・みんな頑張ってんのに、自分だけ艦の奥で縮んでるなんて、
できるわけないもんな」

一度間をおくと、組んでいた腕を解き、
真剣な表情で続けた。

「だったら割り切れよ。でないと、死ぬぞ」

「！」

「今は戦争で、俺たちは軍人だ。
だったら、上の命令に従って、敵と戦うしかない。

兵士にできることなんてそれくらいだ」

「・・・そうか、ありがとう。
なんか、わかった気がするよ」

「ならいいさ。張り切っていこうぜ」

にこやかな顔で立ち去ったハイネを見送ると、
アスランは再びフェンスに両肘をかけた。
ハイネにああは言われたものの、やはり彼は悩んでいた。
確かに自分は軍人だ。しかし、それだけで討ってしまっていいのか？
ザフトの兵士として動き、ザフトの兵士として敵を討つ。
その行動にアスランは疑念を抱いた。
ただ敵だから討つ。それでは、かつての過ちを繰り返しているだけ
ではないかと。
そんな悩みを抱くアスランの元に、今度はアムロが訪れる。

「アスラン、やはりここにいたのか」

「・・・アムロ隊長？」

「どうやら、迷ってるらしいな」

アムロは穏やかな表情でアスランに問いかける。
アスランは無言で頷いた。

「彼らを討つ事に躊躇いを持っているのか？」

「・・・はい」

「“割り切るんだ、死ぬぞ”」

「え？」

突然のことに、アスランはフェンスから両肘を離す。

「ハイネにこう言われていたな」

「・・・聞いてたんですか？」

「ああ」

「・・・」

再び無言になるアスラン。

何も言わなければ進展しないと考えたアムロは、

更に続ける。

「君は何のためにこの軍隊に戻ってきた？」

「・・・この世界の為に、何かできることはないかと思って、

ここに戻ってきました。ですが、今となってはそれが正しかったか

もわかりません」

「そうか・・・」

アムロは少しばかり考えると、再び話を進める。

「俺も君も、今この状況ではただの兵士だ。それはわかるな？」

「・・・はい」

「だが、君はそうして兵士として戦うことを望んで戻ってきていながら、
一人の兵士以上の事をしたがっている」

「え・・・？」

核心をつかれたアスランは、思わず呟く。

「そんな感情を捨てろとは言わない。
だが、そればかりに囚われていては、仲間を守ることもできない。
ならば、この状況で自分にできる精一杯の事をするしかないのさ。
もっと現実を直視するんだ、アスラン」

「・・・わかりました」

アムロが出来るのはここまでだ。
後は彼に任せるしかない。
アムロは甲板から立ち去った。

「・・・」

一人残されたアスランは、再び夜の海を見つめる。
今の自分にできる事は、敵と戦うこと。
仲間を守ること。
迷いがうっすらとではあるが消えたアスランは、
屋内へと入った。

2日後、補給を済ませたミネルバは、チェーン＝アギの乗艦後、敵艦隊迎撃のため、ダーダネルス海峡へと発進した。

しかし、その戦場で思わぬ“介入者”と遭遇するのは誰も予想し得なかった・・・。

第１０話　二人目の旅人（後書き）

当初の計画では、チェーンではなくカミーユが飛んでくる予定でした。
しかし、そのシナリオで書いていくとき、
主役級同士で出番を食い合う形となりそうだったので、
急遽、チェーンに変更しました。

ミノフスキー物理学の実証・・・速すぎですが、
ご容赦ください。

次回の更新は未定です。
早いうちに更新したいですが、これからまた忙しくなるので・・・。

第１０．５話　緑の魔球（前書き）

第１０話のおまけ（？）です。
あんま真面目じゃないです（笑）

第１０．５話　緑の魔球

これは、ミネルバがダーダネルス海峡へ迎撃に向かう日の前日のことである。
今回は様々な時代を“転がった”魔球を中心の話を進めたい・・・。

＜ミネルバ　アムロの自室＞

チェーン＝アギの発見、シン＝アスカの救助と、
オフの日をほぼ台無しにされたアムロは、
もう一日休日をもらえることとなった。
それでも、一通りある仕事をこなしてからという条件付きだが。
しかし、さほど難しい仕事ではなく、ものの２～３時間ですべて片付けた。

仕事をすべて片付けたアムロには、ある目的があった。

そう、ハロ作りだ。

前日の分では、基盤部分しか作れず、

作業状況も中途半端なままで終わっていた。
出港は明日。それまでに完成させるため、
アムロは急ピッチで製作を始めた。

「ようし・・・今度は発光ダイオードを・・・ん？」

作業を始めてから数分もしないうちに、アムロの部屋に来訪者が来た。
今日はもう仕事はまわさないという約束のはずだが、
また誰かが問題を起こしたのか？
と、思いつつ、アムロは受話器のモニターのスイッチを入れた。
そこにいたのはアスランだった。

「アスラン？」

「おはようございます隊長。ハロを作っているらしいですね」

「ああ。そういえば、君の技術も参考にしたい。
手伝ってくれないか？」

「はい。私もそのつもりで来ましたから」

部屋に入ったアスランは、機材だらけの机の上においてある基盤を手に取ると、
回しながら眺めた。

「どうだい？形は出来ちゃいないが、
基盤部分に関しては、だいぶ力を入れているつもりだ」

「ええ・・・でも、少し大きいですね。
このくらいまで小さく出来ますよ」

アスランは基盤を置くと、手で自分のハロより二まわりほど小さな円を描いた。
丁度掌サイズだ。

「・・・あのラクス＝クラインが持っていたのと同じくらいか。
となると、だいぶ小さいな」

「ですが、このくらい大きくなると、様々な機能をつけられますよ」

「・・・すごいな。俺のハロには、脳波測定装置がついているんだが、
他にはたいした機能はない。いっその事、限界までいろいろな機能をつけてみないか？」

「私も賛成です！早速はじめましょう」

早速二人は作業に取り掛かる。
足りない部品は整備班からもらうなり、買出しに行くなどで、
作業は着々と進んだ。

だんだんと二人の興奮は最高潮へと達し、
あんな機能も、こんな機能もつけてみようと、
機能が過剰に追加されていった。
ＭＳの簡易操縦システム、ノートパソコンの代わりになる電子端末のような実用的な（？）物から、白兵戦用の武装まで、
様々なものが搭載された。
反面、様々な機能を追加した弊害として、

バッテリーが切れやすくなったが、二人は気にも留めなかった。
時はあっという間に過ぎ、ディオキアの町に夜の帳がおりた。

もう何時間ほど作業をしただろうか。
気がつくと、アムロは机に向かって寝ており、
アスランのほうも床に転がって寝ている。
しかし、ある筈の物がない。
ハロだ。

「・・・？」

アムロは部屋中を探し回った。
ベッドの下、パソコンの上、本棚の後ろと様々な所を探し回ったものの、
一向に見つかる気配はない。

「・・・アスラン。おい、アスラン！」

「・・・はい？」

アムロに起こされたアスランは、朦朧とした意識の中、
目を擦りながら答えた。

「大変だ！ハロがいない！」

「・・・え？・・・えっ！？」

アスランは急に驚きの声を上げ、よろけながらも立ち上がる。

「そんな・・・急いで探しましょう、隊長！」

「ああ、何か問題が起きない内にな・・・」

二人は部屋を出ると、二手に分かれて、身近な所からハロを探すことにした。

しかし、アスランが承知する前に、どこからともなく、

「ギャアアアア！」

という叫び声があがる。

シン＝アスカの声だ。

「今のは・・・」

「いくぞアスラン！」

二人は叫び声がしたほうに向かった。

そこにいたのは、廊下に倒れたまま、痺れているシンだった。

「シン！何があったんだ！？」

「た・・・た、隊長ォ・・・。

い、いきなり・・・緑色のボールに襲われて・・・」

「何！？」

シンが言う緑色のボール。
恐らくはハロの事だと確信したアムロは、
シンに事の経緯を話した。
話を聞くと、シンはあきれた顔をしつつも、何があったのかを話し始めた。

この夜、シンは格納庫へ向かう途中、
廊下を歩いていた。すると・・・。

＝＝＝

シンはそう呟くと、ハロを捕まえようとした。
そのときだった。

「ハロ、ホーデン、ホーデン」

「え？」

ボールは急にシンに飛び掛り、スタンガン以上の電流を流した。

「ギャアアアア！」

＝＝＝

「反省してるよ。とにかく、あいつを捕まえよう。
また何か問題がおきたら、まずい事になる。
シン、君も来てく・・・」

アムロがそういいかけたとき、廊下の交差路に、
緑のボールが転がっていたのを見つけた。

「いたぞ！」

「あんな所に・・・！」

三人は走ってハロを追いかけた。
ハロは想像以上に速いスピードで転がっており、なかなか追いつくことが出来ない。
呼びかけても止まらず、逆にこちらに来いと叫ぶと、
放電状態のまま、三人を追いかける。
追って追われてを繰り返していると、ハロの転がる先に、
ジョナサンが現れる。

「ジョナサン、気をつけろ！
そいつに触れると、痺れて動けなくなるぞ！」

アムロが叫ぶ。しかし、ジョナサンは落ち着き払った表情で、

「ご安心ください隊長」

と答えた。
よくみると、その手には昆虫採集に用いられるような網を持っている。

「でかしたぞジョナサン！そいつを捕まえてくれ！」

「了解・・・！」

ジョナサンは網を両手で握りなおすと、ハロに急接近し、
一気にハロをすくい上げて、捕獲した。

「やりましたよ隊長」

「ああ、よくやってくれた。
しかし、どうして網を・・・」

網の中でバタバタと暴れまわるハロを横目に、
アムロはジョナサンに尋ねた。

「ええ、その緑色のおもちゃを隊長がたが追いかけているところを目撃し、
この網を用意して、先回りしていたのです。それで・・・」

あくまでも冷静に話すジョナサン。
しかし、その後の言葉は、急に声を発したシンによって遮られた。

「隊長！ハロが・・・！」

「え・・・？」

アムロが視線を再び網にやったとき、すでにハロの姿はなく、
網のメッシュはスタズタに切り裂かれていた。

「ハロ、アムロ、アムロ」

アムロの足元で、機械的な声がする。
急いで下を見ると、そこにはハロの姿があった。
耳（？）の部分からは腕が伸びており、
その手には小型のナイフのようなものが装備されていた。
アムロは思い出す。
自分がハロに施した装備の内容を。

「うわ！」

ハロはアムロに飛び掛った。
アムロはそれを回避すると、

「逃げろ！」

と叫んだ。
三人は逃げ出し、それに釣られるかのようにアムロも三人と共に逃げ出す。
しかし、ハロも執拗な追跡者の如く四人を追いかける。

「・・・アスラン！あれに施した機能、だいたい思い出したぞ！」

「え！？」

「スタンガンに小型ナイフ、Ｎジャマーやフレアーやチャフに電子端末・・・」

アムロが言い終わらないうちに、ハロが急加速をかけ、
四人に急接近する。

「まずい！」

「ハロ、ホーデン、ホーデン」

アムロに飛び掛るハロ。
ここまでかとアムロは諦め掛ける。
よもや、ハロに殺されるなど、夢にも見なかった。
しかし、いつまでたってもハロは飛び掛ってこない。
反射的につぶっていた目を開くと、アムロの視界に、
空のバケツをもった少女が入る。
ユイ＝ビクトリアだ。

「ユイ・・・！？」

「大丈夫ですか隊長！」

「あ、ああ、すまない」

ハロはユイに水をかけられて、機能を停止したようだった。
ハロに防水加工を施していたら、一体どうなっていたか。
アムロは想像するのも恐ろしいと思い、
それ以上は考えなかった。

結局、この騒動は大きな騒ぎには発展せず、
廊下に設置された監視カメラにも、ハロが電子機器を狂わせながら
逃げ回ったおかげで、
何も映っていなかった。

その後の検証でわかったことだが、ハロの暴走は、
ＡＩの設定ミスが原因だった。

しかし、いざという時にハロが止められなくなるはどの過剰武装は、
アムロもアスランもさすがに自重したのであった。

第１０．５話　緑の魔球（後書き）

ハロの改造が足りない・・・かな？

第１１話　呼ばれぬ客人（前書き）

どうも。今回から新章“介入編”に入ります。
と言っても、章の設定をしてからそんなに時間はたってませんが・・・。

サブタイトルからわかるかもしれませんが、
キラ達が登場します。

第１１話　呼ばれぬ客人

＜ミネルバ　格納庫＞

ディオキア市を出港したミネルバは、地球連合艦隊迎撃のため、
ダーダネルス海峡へと向かっていた。
この地域における両軍のミリタリーバランスは、
いくらザフトが連合の戦力を駆逐したといえども、やはり連合側に
分があった。
そんな状況下での増援艦隊。
とても、ディオキアやマハムールの戦力では対応しきれないのが現
実だ。
そこで、どこの方面軍にも属していない、第９９独立戦隊に白羽の
矢がたった。
他の部隊からの支援はほぼ望めない。
一応、補給についてはディオキア基地がバックアップするというこ
とではあったが、
“その程度”が限界であった。
この作戦も大変なものになりそうだと思いながらも、
ミネルバ第０２ＭＳ小隊隊長、アムロ＝レイは、
各機体の整備状況を確認しに行った。
新規搬入機体のグフイグナイテッドも含めて、
各機体の整備状況はいたって良好。
νガンダムの方も、今まで以上に整備作業の効率が向上していた。
νガンダムの整備効率が上がったのは、二つほど理由がある。
一つは、νガンダムの整備担当に、元地球連邦軍准尉、チェーン＝

アギが加わったこと。
もう一つは、プラント本国から送られてきた、
精密な機体の解析データによるものだった。
アムロは格納庫にそびえ立つ巨人群を一通り見回す。

「このミネルバも、ずいぶんと機体が増えたな」

「そうですね。アムロ隊長が来る前の倍はありますよ」

アムロの呟きに、ヨウランが相槌を打つ。

「そういえば、チェーンがどこに居るか知らないかい？」

「νガンダムの足元ですよ」

「ありがとう」

そう言いながらグフの整備に取り掛かるヨウランを尻目に、
アムロはチェーンの傍らにたった。
チェーンはνガンダムが使用する、
メガ粒子ビームライフルの弾道計算をしていた。

「チェーン、ライフルの弾道計算、うまくいってるかい？」

「・・・ちょっと待って。ええ、順調ですよアムロ」

にこやかな表情を浮かべながら振り返るチェーン。
緑の制服を着こなすその姿は、かつて着ていた連邦軍の制服よりも
似合いの服装だと、アムロは感じる。

「その服、よく似合ってるよ」

「あら、アムロのその赤い服だって・・・」

「・・・これがかい？」

アムロは自分の服の胸先を掴んだ。
実を言うと、アムロはこの赤い軍服を気に入ってはいない。
この色は、彼の宿敵であるシャア＝アズナブルのパーソナリティーカラーなのだ。

「僕はあまり気に入ってはいないんだが・・・」

「シャアのせい？」

「・・・ああ」

まるで子供のような理屈だと自覚しながらも、
どこか納得の行かない自分がいる。

「・・・もう。何時までも彼に捕らわれて・・・！」

「え？」

チェーンはその表情を曇らせ、
徐々に、怒りをはらんだ表情へと変えていく。

「何時までも、昔のことでそんな風にこだわって、
そんなアムロは好きじゃありません！」

チェーンから見舞われたきつい言葉。
そうだ、という思考がアムロの頭を跳ねる。
少なくとも、今ここにシャアはいない。
しかし、アムロの目の前にはチェーンがいる。

「・・・そうかもな。奴はもういない。
だが、僕には君がいる。彼の事に囚われるのはやめるよ。
僕は寝ぼけていたらしいな」

「よかった!だってアムロ、シャアに命を削られているみたいでしたもの」

命を削られる。
削られるどころではない。
シャアの私怨に付き合い、互いに命を削りあって、
そして傷ついていき、ララァを始めとして、
たくさんの命を巻き込んできた。
そんな過去を捨てはしない。
いや、捨てられるものではない。
しかし、そんな責任を背負いつつも、
アムロは前を見ることを決めた。

「ありがとうチェーン。君のおかげで目が覚めたよ」

「私に出来る事なら、何だってお手伝いしますよ」

再びにこやかな表情を浮かべるチェーン。
立ち去る際に、口付けの一つもしたかったアムロだが、
他に多くの整備員がいる中で、そのような愚行は犯さなかった。

＜Ｊ．Ｐジョーンズ　司令室＞

嫌な上司に付き合う気持ちがわかった。
と、オーブ主力艦隊旗艦“タケミカヅチ”艦長のトダカ一佐は思う。
そんな彼の心情を知ってか知らずか（恐らくは後者）、
オーブ外征艦隊の司令、ユウナ＝ロマ＝セイランが咎めるかの如く、
彼を呼びつける。

「ほら、トダカ！なあにをボケっとしてんの？
大佐の今の意見、聞いてた？」

ユウナの言う“大佐”。
地球連合軍第８１独立機動群“ファントムペイン”に所属する仮面の男だ。
オーブは大西洋連邦の要請を受け、地中海へと艦隊を派遣していた。
理念に反する行為と思いながらも、
トダカはこれが国の為になると自分に言い聞かせていた。

「はっ・・・申し訳ありません。聞き漏らしてしまいました。
お手数ではあるが、もう一度お願いしたい」

「ええ・・・ま、それほど重要なことじゃあありませんが、
あの艦を侮るなかれと申し上げただけです、一佐」

「いやいや、大切なことだよ。
全力でお相手をしないと、相手に対しても失礼だからねえ」

「・・・」

再び無言に立ち返るトダカ。
ユウナの発言は、まるで戦争をゲームのように思っている口ぶりだった。
無論、トダカ自身は実戦経験が豊富なほうではない。
しかし、戦争がどういうものであるか、十分に知っていた。
そう、戦争は全てを奪い去っていく。
トダカ自身の家族や、“あの少年”の家族の命が奪われたように。

「では、僕はタケミカヅチに帰るよ」

「はっ。この戦力ならば、必ずや、あのミネルバめを沈められましょう」

「そうだとも！ハハハ！」

笑いながら去っていったユウナを見送ったトダカは、
嫌な時間が過ぎたと思った。
ほっとため息をつくと、トダカもまた、
タケミカヅチへと戻った。

オーブ軍の将兵達が引きあげる。
その様を見守っていたクリストは、

不意に、レーナの体調が優れないのに気がついた。

「レーナ、大丈夫か？」

「ええ、平気よ・・・大丈夫」

やはり、“例の感覚”を感じているせいか。
それもこれも、全ては“奴”のせいだ。
“奴ら”を倒さない限り、“彼女”は本当の意味で、
自分に振り向いてはくれない・・・。

＜数時間後　ダーダネルス海峡＞

両軍は遂に衝突する。
黒海に入るためには、ダーダネルス海峡を抜ける必要があるため、
迎撃を行うには、もってこいの場所だった。
逆に、連合側はここさえ抑えてしまえば、
一気に黒海へなだれ込むことが出来る。

ミネルバのＭＳ隊は発進準備に入った。
アムロ達がパイロットスーツに着替える中、
急に、シンがロッカーの扉を叩く。
先日見た、アスランの弱気な表情とは対照的に、

鬼気迫るその表情は、明らかに苛立ちを含んでいた。

「シン、少し力み過ぎだ。頭を冷やさないと、思わぬやられ方をするぞ」

「大丈夫ですよ！俺は冷静ですって！」

二人は、先にＭＳで待機している他の隊員に遅れをとりつつも、その間を埋めようとするかのように、格納庫行きのエレベーターへ駆け込んだ。

その最中、シンがこんなことを呟く。

「あの国・・・こんな所に来ないで、寝てりゃいいんだ！理念とかいうのを貫いて！追い払ってやる！」

そう言いながら、シンはドアが開くと同時に、インパルスへと向かった。

このシンの言動で、アムロはあることに気がつく。

彼は“追い払う”とは言ったが、“叩き潰す”や“捻り潰す”とは一言も言っていなかった。

連合と戦うときには、その気合も相まってか、そのようなことも言っていた。

しかし、このオーブ軍に対しては、決して弱気ではないものの、気合の入れ方が違った。

これらから導き出される選択肢は、決して多くはない。

（表面上はオーブを嫌っていても、深層心理ではオーブを嫌ってはいないということか・・・）

あの国はもともと、彼の祖国だ。

家族を失ったという事実（もちろんこれは重要なことだ）が邪魔をして、
見え隠れするシンの心情。
アムロはその一部を垣間見た。

ミネルバのＭＳ隊は出撃した。
この作戦では、ルナマリアのザクウォーリアはスラッシュウィザードを装備し、
グゥルを使用して、空中戦を行うことになった。
これは、ルナマリアが格闘戦向きだということを考慮した、
アムロの提案によるものである。
同様に、レイのブレイズザクファントムも、
グゥルを使用することとなる。
もちろん、νガンダムもグゥルを使用する。

アムロは出撃後まもなく、先行して出撃したルナマリア機に、
通信回線を開いた。

「ルナマリア、そちらの状況はどうだい？」

「いたって良好ですよ、隊長！
私、こっちの方が向いている気がするんです」

「そうか・・・レイ、そちらは？」

「問題ありません。いきましょう隊長」

アムロ隊はＭＳ隊の迎撃、ハイネ隊は、
艦の護衛を担当する。
そして、オーブ・地球連合艦隊が密集した所を、

ミネルバのタンホイザーで一蹴するという手はずだった。

「オーブ軍、ＭＳ隊接近中！
数は３０。ムラサメとＭ１アストレイです！
更に、連合の空母を中心とした艦隊が後方に控えています！」

メイリンからの通信が、各機に届く。
敵ＭＳ隊は二手に分かれた。
恐らくは、遊撃隊と対艦攻撃部隊だろう。
戦闘機のような機体がアムロのνガンダムにミサイルを放つ。
それを軽々と回避したアムロは、
続けて変形したその戦闘機――――ガンダムの顔を持つ可変ＭＳを見て呟いた。

「“Ｚ”・・・？」

その可変ＭＳは、かつてアナハイム・エレクトロニクス社が、“Ｚ計画”で開発した名機、Ｚガンダムによく似た変形機構を持っていた。
しかし、その動きのキレは、とてもＺガンダムのそれには及ばなかった。

「遅い！そんな動きで！」

アムロはビームライフルを放った。
真っ直ぐに伸びたその光の筋は、きちんとした弾道設定がなされていることを表す。
そのビームで貫かれたムラサメを確認すると、
アムロは次々と敵を撃墜した。

ルナマリアのほうも、次々と大型ビームトマホークによる斬撃で敵を仕留めていき、
これまで以上の戦果を挙げていた。
一方で、シンの方も、次々と敵を撃ち落としていく。
アスランの方も、その迷いを持ちつつも、
いつも通りの働きをしていた。

次々と落とされていくオーブ軍機。
そんな中、アムロのνガンダムに、数機のＭＳが接近する。

「ん・・・？」

アムロは警告音に気がつく。
連合のＭＳ隊だ。
その中には、インド洋で見た、
あの黒いガンダムと紅白のウィンダムが居た。

「あの部隊か！」

アムロはグゥルから離れ、ビームライフルを一般機のウィンダムに放つと、
同時に、黒いガンダム――――クリスト＝イェーガー少佐が搭乗する、
ストライクノワールにビームを放った。
ストライクノワールはそれを回避すると、
レールガンとビームライフルショーティーの一斉射撃を放つ。

「今日こそ貴様を・・・！」

牽制のつもりで撃った一斉射は、
やはりνガンダムに当たることはない。

対艦刀を一振抜いた

「倒させてもらう！」

νガンダムに切りかかるクリストのストライクノワール。
以前のように、捕獲などという生温い戦い方はしない
危険と判断された以上、破壊する。
νガンダムはその攻撃を回避すると、
一度離脱し、距離を置いてライフルを放った。
ビームが黒い機体をかすめ、装甲を焼く。
致命傷ではない。

「確か、クリスト＝イェーガーと言ったな・・・？」

アムロはインド洋での戦闘を思い出す。
あまりこの機体に構いすぎて、艦を危機に晒してしまった。
なるべく早く倒したいところだが、そう簡単には行かない。
アムロはまずはじめに、周りを飛び回るウィンダムと、
その首領ともいえる紅白のウィンダムを狙った。
一般機を切り倒し、レーナの紅白のウィンダムに切りかかるアムロ。

「もらった！」

「！」

レーナはそれを回避しきれず、シールドごと腕を切られる。

「レーナに手を出すな！」

その光景を目の当たりにしたクリストは、

抱きつかせる形で、機体をνガンダムに衝突させた。

「コイツ・・・！ん？」

アムロは違和感を感じる。
不思議と、このＭＳのパイロットを知っているような気がするのだ。
それどころか、紅白のウィンダムからも、
知っている“誰か”に似た感覚を感じる。

「誰だ・・・？」

危機的状況の中、呟くアムロ。
しかし、戦闘の最中に、操縦を忘れるほど、
アムロは愚かではなかった。
νガンダムに抱きつくストライクノワールの股にあたる部分を蹴り飛ばすと、
アムロはバーニアを起動させて、それから逃れた。
今のが生身の人間同士の戦いならば、かなりのダメージを与えられたはずだが、
ＭＳ同士の戦いでは、そんな生物的な効果は期待できない。
何とかストライクノワールから逃れたその時、メイリンからの通信が入る。

「タンホイザーを使用します！射線軸にいる機体は離れてください！」

オーブ艦隊が密集したところで、ミネルバはタンホイザーの発射体制に入った。

「プライマリ兵装バンク、コンタクト、出力定格、セーフティー解

除！」

アーサーの指示と共に、強力な陽電子砲、
タンホイザーが顔を出す。

「照準、オーブ艦隊旗艦、タケミカヅチ！撃て！」

タリアの叫びと共に、タンホイザーがエネルギーの渦を解放する。
しかし、その解放されたエネルギーは、オーブ艦隊に届くことはなかった。

発射の瞬間、突如飛来したビームがタンホイザーを貫く。

戦場が、止まった、凍りついた。

そして、戦場に青き翼を待ったガンダムが舞い降りた。

「キ・・・ラ・・・？」

アスランがかすれた声で呟く。
舞い降りたガンダムは、“自由”の名を冠する機体、
フリーダムだった。

その直後、タンホイザーをやられたミネルバが着水する。
次々と誘爆を起こし、かなりの損傷を受けたのが、
アムロをはじめとして、殆どのパイロットにわかった。

「な、何が・・・！」

フリーダムの後ろの海面から、
突如、戦艦が浮上する。
流線型のフォルムに白い艦体。
その姿は、一年戦争時、アムロが乗艦していた、
ペガサス級強襲揚陸艦“ホワイトベース”にそっくりだった。

「ホワイトベース・・・！？」

そのホワイトベースに似た戦艦――――――アークエンジェルから、
一機の、紅いガンダムが発進する。
その紅いガンダム、ストライクルージュは、
フリーダムの傍まで来ると、通信回線をオープンにして、
こう呼びかけた。

「私はオーブ連合首長国代表、カガリ＝ユラ＝アスハだ！
その名において命ずる。オーブ全軍はこの理念にそぐわぬ戦闘を中止し、
直ちに軍を退け！」

「え・・・？」

皆一様に呟く。

ちょうどその頃、タケミカヅチでは、

ユウナに対し、ネオが通信を入れていた。

「ユウナ＝ロマ＝セイラン。これは一体どういうことですかな？」

「こ、これは・・・その・・・」

恐喝とも思えるネオの口ぶり。
ユウナの額に汗が流れる。

「あ、あれは偽者だ！」

「ユ、ユウナ様・・・！」

ユウナのその返答に対し、トダカが戸惑いに溢れた顔を向ける。

「あ、あの機体はカガリ様のストライクルージュ！
それを・・・」

それに続いて詰め寄るアマギ一尉に対し、
遮るかのようにユウナが叫ぶ。

「アマギ！あれが本物かどうかは重要じゃないんだよ！
もしここで、大西洋連邦と結んだ条約を今更蹴ったらどうなるか！
単に、ハイ、やめますで済む問題じゃあないんだよ！」

ユウナの言うことはまっとうである。
もしここで退がれば、オーブは連合から、国際的な信用を失う。
そうなれば、また連合に刺されるかもしれないのだ。

「し、しかし・・・！」

「トダカ！さっさとあの目障りな連中を落とせ！
あんな連中をのさばらせて置いたら、オーブはお終いだ！」

ユウナに気圧されたトダカは、静かに目を閉じ、
再び開くと、攻撃指示をした。

「全艦、ミサイル照準、目標、ストライクルージュ！」

オーブ艦隊のミサイル群が、ストライクルージュに殺到する。
しかし、そのミサイル攻撃は、
フリーダムのハイマット・フルバーストによって阻止された。
オーブ軍は相変わらず棒立ちのままだ。
その隙を狙って、アムロ達は次々とオーブ軍機を撃墜した。

フリーダムが動き出す。
ストライクルージュが後退すると、
フリーダムは次々と連合、ザフト、オーブのＭＳを手当たり次第に襲う。
ベリエスとジョナサン、そしてシンのインパルスも、
その高機動戦闘能力を活かした一撃離脱戦法で、
“武装のみ”を失った。

「なんだあいつ・・・速い！」

シンはそれに対応するまもなく、襲い掛かってきたウィンダムの応戦をする。
ライフルを失った以上、サーベルで戦うしかない。
それは相手側も同じだった。
メインカメラや武装“だけ”をやられて、既にまともに戦闘も出来ない機体もいる。
フリーダムは、あえてコクピットだけをはずしているのだ。
そして、直接殺しはせず、武装を失ったところを他の者に撃たせたり、
地面や海面に叩きつけたりと、じわじわと、
体中に毒が回っていくかのようにパイロットを殺していく。
その姿は、天使のような翼を持った死神とでも形容すべきか。

あの連合の二機は後回しだ。
アムロはフリーダムを狙う。
あの機体を仕留めなければ、戦場は混乱したままだ。

「あのＭＳ・・・！」

アムロは、こちらにフリーダムが急接近していることに気がついた。
どうやら次の獲物にされたらしい。
フリーダムは、多くの機体を仕留めてきた秘技の一つである、
すれ違いざまにサーベルを繰り出す攻撃をνガンダムに仕掛けた。

「甘い！」

アムロのνガンダムは、しなやかな身のこなしでそれを回避した。
フリーダムのパイロット、キラ＝ヤマトは、
今までどんな敵にも有効だったこの攻撃をかわされたことに、
違和感を覚える。

（避けられた・・・？）

しかし、キラもこの程度のことでは焦りはしない。
目を閉じ、頭をクリアにすると、再び目を開ける。
その瞳は輝きを失った。
代わりに、キラの反射神経が研ぎ澄まされる。

「チィッ、この敵、殺意を感じにくいぞ。
厄介な奴だ！」

アムロはビームライフルの照準をフリーダムに向け、
トリガーを引いた。
しかし、フリーダムはその攻撃を回避する。
再び最接近してきたフリーダムを視界の中央に捉えると、
アムロはビームサーベルを引き抜いた。
ほぼ同時にフリーダムもサーベルを引き抜いたようで、
二機は鍔迫り合いを繰り広げる形となった。
その最中、アムロは若い男の声を聞く。

「退がれ！」

「何！？」

無線の混線によるものかどうかは定かではないが、
アムロは目の前のＭＳのパイロットが発したと思しきその言葉を聞いた。

「退がれと言っているだろう！」

「何が・・・！」

フリーダムはもう一本サーベルを引き抜いて、
νガンダムの腕を切断しようとする。
しかし、それよりも速く反応したアムロが、
フリーダムを振り払い、逆にまわし蹴りを決める。
弾きとんだフリーダムに接近すると、アムロはこう叫んだ。

「貴様らの目的は何だ！答えろ！」

すると、フリーダムは体勢を立て直し、
再びサーベルを振り回すと、キラはこう叫んだ。

「この戦闘を止めたいだけだ！邪魔をしないでくれ！」

「こんなやり方で、戦闘を止められるものか！」

例え暴力で戦闘を止めたとしても、それはロクな結果を招かない。
先ほどの呼びかけといいこの行為といい、
こいつらはどうかしている、というのがアムロの気持ちだった。

「ならば、この戦闘を止めてどうするつもりだ！」

「僕はオーブに撃たせたくないんだ！
その為に、この戦闘を止める！」

「貴様らの行為は、ただ戦場を混乱させているだけに過ぎない！
オーブに戦争をやらせたくないというのなら、もっとマシな手段が・・・！」

「アムロ隊長！」

突如、ユイのグフイグナイテッドが二機の間に割り込む。

「！？・・・ユイ、来るんじゃない！」

「フリーダム・・・あいつさえ落とせば！」

ユイのグフはテンペストを引き抜く。
フリーダムに横合いから切りかかろうとしたユイだが、
逆にその攻撃をかわされ、ビームライフルでメインカメラに直撃を食らう。

「きゃっ・・・！」

「ユイ！」

「アムロ！」

後方からやってきたハイネとアスランの一斉射撃が、
フリーダムを追い払う。
アムロはその隙に、損傷したユイのグフを抱きとめた。

「ユイ、大丈夫か！？」

「だ、大丈夫です・・・」

力なく返事をするユイ。
いきなり彼女が割り込んでくるとは、アムロも予想だにしていなかった。

その後もフリーダムは、戦場で思う存分暴れまわり、
オーブ・地球連合艦隊の撤退で戦闘は終了した。
フリーダムの方も、それを確認すると、アークエンジェルと共に海
へと消えていった。

「クッ・・・またしても奴を仕留めきれないとは・・・・！」

クリストは撤退の最中、こんな事を呟いていた。

「アムロ＝レイ・・・次こそは貴様を・・・・！」

第１１話　呼ばれぬ客人（後書き）

ついに登場したアークエンジェル。
やっとここまで来た・・・。

次の更新ですが、３月中旬頃を予定しております。

第１２話　介入者の影（前書き）

どうも、第１２話の投稿です。
そんなに長くないと思います。

第12話　介入者の影

＜ポートタルキウス＞

地球連合・オーブ軍艦隊、そして、思わぬ乱入者、
アークエンジェルとフリーダムとの戦闘によって、
甚大な被害を負ったミネルバは、すぐにプラントよりの港、
“ポートタルキウス”に立ち寄った。
幸い、戦場からそう離れてはいなかったため、ミネルバはすぐに入港する事が出来た。

格納庫を訪れたアムロは、つい数時間前にそうしたように、
格納庫に収まる、手負いの巨人群を見回した。
損傷を負っていないのは、νガンダムとセイバーだけのようで、
皆、武装を持っていたであろう腕や、メインカメラなどを失っていた。
普段とは各機の損傷の仕方が違う。
一目で、あの青い羽付きのガンダム、フリーダムの仕業とわかった。

見回していくうちに、一機のグフの足元に視線を落とすと、
一人の少女がグフを見上げているのが目に映る。
先ほどの戦闘で、フリーダムとの戦闘に割り込んできた、
ユイ＝ビクトリアだ。

アムロは彼女に聞きたい事があった。
何故あんな無茶な割りこみをしたのか。
彼女と初めて会った時、彼女はとても勝気な少女であった。
恐らくはその性格がそうさせたのだろう、
と、アムロは推測する。
しかし、同時にそれは危うい部分でもある。
彼女に注意する事の必要性を改めて感じたアムロは、
彼女に歩み寄ると、声をかけた。

「ユイ」

「あ、アムロ・・・隊長・・・」

振り返るユイ。
その表情はあまり普段彼女が見せるような、
勝気な表情ではなく、
以前、アムロがＭＳシミュレーターでユイと対戦した直後の
表情に似ていた。
むしろ、その表情はあの時よりも暗い。
まるで自信をなくしたかのような姿だ。

「こんな所で、どうしたんだい？」

「・・・私のグフ、直るかなって。
そう思ってた所なんです」

「心配ないさ。ミネルバの整備員は優秀だ。
それよりユイ・・・」

「え・・・？」

関係のない話を片付けると、アムロは本題に入った。

「あの戦闘の時のことだが・・・あんな無茶な乱入はやめた方がいい。
自分の力を過信しすぎると、足もとをすくわれるぞ」

「・・・」

ユイは答えない。
しかし、しばらく間を空けると、口を開いた。

「・・・隊長」

「・・・？」

「隊長にはお話しします。私が何故この軍に入ったのかを」

「え・・・？」

あまりにも唐突な話題にアムロはただ困惑する。
一体、彼女の中の何がそうさせたのか。
それを考える間もなく、彼女は淡々と話し始める。

「二年前、私は戦災孤児でした。
気がついた時には、私はもう独りぼっちでした。
でも、もともと独りだったか、家族がいたのかもわからない」

「・・・」

無言で聞くアムロ。
彼女自身、このことは、ハイネも含めて、他人には殆ど話してはいない。

「私には記憶がありませんでした。
自分がどういう人間で、家族がどういう人間だったかもわからない。
ただ彷徨いながら、二年前の戦争を生き延びました。
このユイ＝ビクトリアという名前も、施設でつけてもらった名前です」

自らの過去を惜しみなく話すユイ。
同時に、アムロはユイから悲しみに溢れた感覚を感じ取っていた。

「ずっと独りぼっちだった私は、常に自分の技術を磨き続けました。
頼ることができるのは自分だって。
ザフトに入っても、どんな相手でも負けなかった。
周りとの協調性がないと言われて、考課表に×をつけられても気にしなかった。
ただ、自分のプライドだけは守ってようって。
でも・・・」

「でも？」

「アムロ隊長に負けたとき、私は何かから開放された気がしたんです。
自分の首を絞めていた何かから。
今考えると、私はずっと寂しかったんだったって思うんです。
それを紛らわすためにずっと虚勢を張り続けてきた。
あの時フリーダムに仕掛けたのも、
そんな虚勢を未だに張ろうとする自分の、

衝動的な行動だったんだと思います」

そして最後に、ユイはこう付け足した。

「それに、隊長の助けになりたいと思ったんです。
隊長なら、私の“光”になってくれるんじゃないかって・・・」

「“光”・・・？」

その言葉を繰り返すアムロ。

「！・・・すいません、意味のわからないことを・・・。
と、とにかく、ご心配をおかけしました。失礼します・・・」

ユイはそう言うと、顔を赤らめながら去っていった。
彼女が自分に何を求めているのか。
アムロは確信はしないものの、大方の見当はついていた。

シャアとの決戦の数日程前、アムロが出会った少女がいる。
地球連邦政府のアデナウアー＝パラヤ参謀次官の娘、クェス＝パラヤだ。
彼女は自分の父親に愛想をつかし、最終的にシャアの元へと走った。
彼女が求めていたもの・・・。

それは“父親”だったのだ。
シャアに父親像を求めて、彼にクェスはついていった。
しかし、シャア自身にそれほどの器量の大きさはなかった。
このことだけは、アムロにも最後までわからなかった。

ユイが求めているものも、恐らくはそれと似ているもの。

いや、彼女は“家族”をに近いものを求めているのかもしれない。
ずっと独りぼっちだった自分の拠り所として。

しかし、アムロは意識せずに、それを拒んでいた。
かつて、クェスの気持ちを、“俺はマシーンではない”と拒んだように。

しかし、自分はシャアとは違う。
人の死に乗ったやり方しか出来ず、周りの期待から逃げ、
クェスを道具として使った奴とは・・・

「・・・」

――――――また だ。
またシャアの事を考えている。
つい数時間前にチェーンと約束したばかりの事を、
こんなに早く破ることになろうとは。
自分は永遠に彼の呪縛から逃れられないのか・・・。

ただ呆然と、グフの前に立つアムロに気がついたシンは、
彼に声をかける。

「隊長?」

「・・・ん? ああ、シンか」

「どうしたんですか、こんな所で」

「いや、少し考え事をしていただけだ」

彼女とは、いつか話す機会を設けよう。
ひとまずその問題を頭の隅に追いやると、
アムロはシンの視線から逃れるように、格納庫から出て行った。

外に出たアムロは、黒くこげ、破壊されたタンホイザーを見た。
手ひどくやられたものだと感じたアムロは、
その傍に並べてある数体分の黒い袋――――骸を入れる、
死体袋に視線を移した。
タンホイザーの誘爆に巻き込まれて散っていった仲間達。
アムロはあの戦闘の介入者達の事を考え始めた。

連中の目的は何か。
それは分からないでもない。
紅いガンダムのパイロット、自らをオーブの国家元首と名乗る、
カガリ＝ユラ＝アスハと、あの羽付きのガンダムのパイロットが叫
んだとおり、
オーブ艦隊を撤退させることが目的だったのであろう。

しかし――――それを達するための行動が、あまりにも短絡的だ。
撤退勧告が失敗した後は、
両軍のＭＳの武装を壊していくだけで、その行動に論理性が見られ
ない。
単に撤退しろと叫んだところで、一軍が撤退するとは考えがたい。
あまりにも浅はかな行動だ。
ある意味、もっとも厄介で、始末の悪い敵だといえる。

（奴らの活動がこれで終わりだといいが・・・ん？）

アムロは、遠くの海を見つめるアスラン＝ザラの姿を見た。
その表情はどこか寂しげだ。

「アスラン」

「・・・キラ、何故お前が・・・。
あんな所に出てくる・・・！」

アムロの声に気がつかず、アスランは独り言を口にしていた。
“キラ”という単語を明確に聞き取ったアムロは、
再度アスランの名を呼んだ。

「アスラン！」

「！・・・アムロ隊長。
何か御用ですか？」

「キラ・・・といったな。
もしや、あの介入者の名前か？」

独り言を聞かれていたことに気がついたアスランは、
変にごまかしはせず、はっきりと認める。

「・・・はい。私の推測に過ぎませんが、あの青い羽のＭＳ、
フリーダムのパイロットです。名前はキラ＝ヤマト」

「・・・そうか。彼とはどういう関係だ？」

「昔の友人です。戦いが嫌で、平和を望んでいたのに・・・。
何故あんな行動に出たのか、理解に苦しみます」

「ああ、確かにな・・・」

アムロはそう呟くと、再びタンホイザーを見る。
丁度、タンホイザーの修理作業が始まったところで、
ディオキアから送られてきた資材を積んだ大型の輸送トラック群が、
次々と出入りを繰り返していた。

「アスラン、昔の友達が敵として出てきて、
辛いのは分かるが、あまり気後れするなよ」

「・・・はい」

力なく頷くアスラン。
アムロに出来るのはここまでだ。
後は彼自身で考えるしかない。

その日の夜、全ての仕事を終わらせ、
自室に戻ったアムロは、まだ戦闘の疲れが残る体を癒すため、
ベッドに横たわった。

予想以上に疲れが溜まっていたのか、アムロはものの数分で意識を
失った。

＜港町＞

ダーダネルス海峡での戦闘の後、ミネルバと同じく、
かなりの痛手を負った地球連合・オーブ艦隊は、
ユーラシア連邦の勢力圏内の港町に停泊した。
指揮官のネオ＝ロアノーク大佐が、スエズ基地に戻るか否かを検討した結果、
スエズに帰るほど消耗していないと判断したためだ。

夜闇に包まれた港町は、所々明かりを灯していた。
しかし、そんな人工的な光には目もくれず、
ただ月を見上げる男性がいる。
宇宙に上がって見る月とは違う。
しかし、その月は“あの頃”見ていたものとなんら変わりはない。
“彼女”もそう感じているのだろうか。
家族で地球暮らしをしていた“彼女”にとって、この月はどう映るのだろうか。
その男性――クリストは、何かが後ろにいるのを感じると、
すばやく振り返った。
レーナの姿だ。

「“クリスト”・・・ここに居たの？」

「・・・ああ、月を見ていたんだ」

「あら、本当は植物を見るほうが好きなんじゃないの？」

港の灯りと月明かりに照らされ、
ぼんやりと映るレーナの姿。
いつもとは違い、単なるセミロングヘアーではなく、
かつてしていたツインテールにしているのが分かった。

「“レーナ”、その髪型は・・・」

「そんな呼び方じゃなくてもいいでしょ、『　　』」

「・・・その名前で呼ばれるのは久しぶりだな、『　　』」

お互い、自分が持つ本当の名前で呼び合う。
軍に入るため、捨てた名前だ。

「『　　』、無理しないで。
あなたがアムロを倒そうと焦っているのを感じるわ」

アムロ――この世界の人間の殆どが知りえぬその名を聞いたクリストは、

「僕は焦ってなんかいない。今度の戦いで決着をつける。
例え刺し違えてでも奴を倒す」

と返した。

「何でさ！何でそんなこと言うの！？
そんな事言わないでよ！」

レーナの口調が、“あの頃”と同じような、

幼い口調へと変わっていく。

「覚悟の問題さ。死ぬつもりはない」

アムロを倒す――――これが、クリストの長年の目標だった。
アムロ、そしてもう一人の“奴”を倒さなければ、
“彼女”は自分から離れてしまう。
折角、自分に振り向いてくれた“彼女”が、
自分に見限りをつけて、“奴ら”の元に走ってしまうかもしれない。
それを防ぐため、“奴ら”を倒す。

しかし、客観的に見てみれば、
これは自己中心的なエゴだ――――――いや、この際そうでもいい。
それだけの覚悟がなければ、アムロと“奴”は倒せない。
その片割れが、のこのこと自分の前に現れたのだ。
この好機を逃すわけにはいかない・・・。

||||||

アムロはコクピットに座っていた。
何時から座っていたのかは分からない。
ただ、今自分が座っているのは、一年戦争時のアムロの愛機、
ＲＸ－７８－２“ガンダム”のコクピットだという事は、はっきり
と知覚していた。

「僕は・・・何故こんな所に・・・？」

「フフフ・・・フハハハハ！」

不意に、誰かの笑い声が聞こえる。
正体などすぐに分かる。
あの赤い彗星だ。シャアだ。

「シャア・・・！」

今まで黒い闇で塗りつぶされていたモニターが点灯する。
そして、そこには、一年戦争時のシャアの愛機、
赤いザクの姿があった。
それはガンダムよりも少し高い位置で、腕を組みながら、
まるで見下すかのように、アムロを見ていた。

「シャア、何をしに来た！
貴様はそうやって、人を見下すことしか出来ないというのか！」

「そうさ。私は貴様を見下している。
自分では何一つ決めようとせず、ただ震えながら流されるだけの貴
様をな！」

「何が！」

ガンダムの腕が反射的に動く。
しかし、ガンダムの腕は空を切り、
どういうわけか、シャアのザクは一層遠のいた。

「私には手に取るように分かるのだよ、アムロ。
貴様はあの少女を拒み続け、その想いを反故にする！」

「貴様がそれを言うのか！」

必死に腕を伸ばすアムロ。
動いたのはガンダムの腕ではなく、自分の腕だった。
しかし、その腕を伸ばしたとき、目の前に広がっていたのは・・・

＜ミネルバ　アムロの自室＞

天井だった。
夢を見ていた、と眠気の残る重い頭が判断する。
カーテンを開けると、既に朝日が昇っていた。

アムロはすぐに着替え、歯磨きや洗顔をすると、食堂へ向かった。
シャアが言ったあの言葉が頭に響く。
あの少女を拒むな・・・という警告だろうか。

いつもより重い頭を抱えながら食堂に入ると、
アムロは誰かとぶつかってしまった。
相手が転んだのがわかる。
相手がすでに注文したものを持っていようものならば大惨事だが、
幸いその心配はなかった。
ぶつかった相手、それはチェーン＝アギだった。

「すまないチェーン！大丈夫か？」

「は、はい・・・ごめんなさい、アムロ」

「いや、いいんだ。前を見ていなかった僕に非がある」

ゆっくりと立ち上がったチェーンを見たアムロは、
そのまま日替わりの定食を頼みにいく。

二人は同じテーブルに、向かい合う形で座った。
チェーンの方は、ディオキアでシンとアムロが食べていた例の定食、
“ニッポン定食”を頼んだようだった。
チェーンがコロッケにウスターソースをかけながら、
不意にこんな話を始める。

「アムロ・・・あの娘の事、どう思っているんですか？」

「え？誰の事だい？」

ウスターソースのキャップを閉め、チェーンは続けた。

「ユイって娘の事」

「・・・あの娘か」

「昨日、あの娘と話をしていたでしょ？
その後、彼女が私のところに来て・・・」

「？」

＝＝＝

それで、聞きたいことがあるんですけど・・・」

「・・・何？」

その少女は少し黙ってから、再び喋り始めた。

「アムロ隊長とは、どういう関係なんですか！？」

「どういうって・・・彼は信頼できる上司よ」

「そういうことじゃありません！」

やや強く言い放つユイ。
チェーンの勘が働く。
この娘が何を言いたいのか。

（あの娘と同じね）

チェーンが言う“あの娘”。
クェス＝パラヤの事だ。

「・・・どういうつもりかは知らないけど、
そういう事、直接聞くのはどうかと思うわよ」

「でも・・・！」

再び口を閉ざすユイ。
しかし、引き下がる様子はない。

「じゃあ、これだけは聞かせてください。

チェーンさんは・・・隊長の事・・・どう思ってるんですか・・・？」

「・・・私は、彼に好意を抱いているわ。
上司としても、一人の男性としても」

「・・・私もです」

そういい残すと、彼女はそそくさと格納庫から出て行った。

＝＝＝

そう言いながら、次々と白菜の漬物を食べていくアムロ。
もとより、漬物の味などどうでもいい。
問題は、チェーンから聞いたこの話だ。

「・・・彼女の気持ちには応えられそうにない。
それに、僕には君がいる」

「・・・フフ、フフフ」

クスクスと笑い出すチェーン。
アムロは狐につままれた表情をチェーンに向ける。

「不器用なんですね、アムロ。
彼女の気持ちは、単なる憧れのようなものだわ。
彼女の相談に乗ったり、支えてあげたり・・・それだけで十分」

「不器用・・・か」

今まで全く意識していなかった言葉。
以前、ハヤト＝コバヤシにも言われたことがある。
『お前は女の扱いに疎い』と。
ベルトーチカ＝イルマが自分の元から離れていったのもそのせいかも知れない。

「でも、安心しました。
アムロが私を一番に見てくれているのが分かって」

いつものように微笑んだチェーンは、
食事を終えると、その食器を返却口に戻しにいった。

「・・・」

アムロもまた、食器を戻しに言った。

共に食堂を出ると、窓の外の空を、
セイバーが飛んでいったのが目に映った。
アスランは昨日から一時、艦の離脱を申請している。
それでも、補給のため、ミネルバに戻ってくることはあるが。

「アスランの奴・・・どういうつもりだ・・・？」

本人はアークエンジェルの行方について調べると言っていたが、
それを調べるアテがあるとは思えない。

「・・・アムロ、この前の約束、覚えてますか？」

考えるアムロの顔を覗き込むように、チェーンが呟く。

「約束・・・デートの事かい？」

「当たり。海の方に行きましょう」

頷いたアムロは、チェーンと共に、
オープンカーを借りに行った。
ディオキアの時のようなジープは流石に気が引ける。

オープンカーに乗った二人は、旧世紀の遺跡が数多く残る地域に行った。
UCの世界では、ジオンの降下作戦や、オデッサ作戦の際に破壊さ

れてしまったものが多い。
しかし、この世界では、“ブレイク・ザ・ワールド”の後でも、何とか残っている遺跡が多く、この情勢でも、観光客がわらわらといた。

二人は夕方頃になるまでここで観光をしていた。
海岸線沿いの帰り道で、チェーンは夕陽を眺めながら呟いた。

「きれいな夕陽・・・アムロ、楽しかったわね」

「ああ・・・ん?」

アムロは前方に、赤い巨人が立っているのに気がつく。
よく見ると、それはアスランのセイバーだった。

「セイバー・・・!?」

「あれって・・・行ってみましょう」

近くに車を停めると、アムロとチェーンは忍び足でセイバーの元へと歩いた。
誰も乗ってはいない。
岩陰に隠れながら海のほうを見ると、ジープの周りに男性と女性がいる。
女性が誰かは分からないが、男性の方はアスランだ。

「何して・・・」

アムロが二人の前に出ようとしたとき、海のほうから、別の男女が現れる。

アムロが再び隠れたとき、アスランはその二人に向かってこう叫んだ。

「キラ、それにカガリ！」

「・・・アスラン。やっぱり君だったんだね」

海から上がってきた青年――キラと呼ばれたその青年の声は、まさしく、戦闘中に聞いたものと同じだった。

第１２話　介入者の影（後書き）

次回の更新は未定です。

第１３話　強化人間（前書き）

震災後初めての投稿です。
書き忘れていましたが、ハイネは生存しています。

次の更新は４月中旬頃の予定です。

第１３話　強化人間

＜ポートタルキウス近郊　海岸＞

「・・・アスラン。やっぱり君だったんだね」

海の方向から上がってきた青年、キラ＝ヤマトと、
彼に連れられてきたカガリ＝ユラ＝アスハの二人を見たアムロは、
チェーンに「ここにいろ」と手で指図すると、隠れていた岩から少し離れ、
二人が上がってきた方向を見た。

（・・・この機体は！）

アムロが見たのは、先日の戦闘で交戦したガンダム、
その翼をなるべく縮めて隠れているフリーダムだった。
その姿は先日のような青ではなく、モノトーンの機体に真っ赤な夕陽が照りつけていた。

（こんな所にＭＳで来るとは大胆だな・・・）

彼らの大胆な移動手段に、さすがのアムロも驚嘆を隠せなかった。
中立に近い都市とはいえ、ここはザフトの勢力圏内になりつつある地だ。
元居た場所に戻ると、アムロはアスラン達の会話に聞き耳を立てた。

やましいことをしているという自覚があったものの、
アスラン達の会話に興味を持たずにはいられなかった。

「アスラン、ザフトに戻ったって本当なの？」

キラが口を開く。

「ああ・・・本当だ」

「何でそんなことを・・・！」

「そのほうがいいと思ったからだ。オーブやプラント、ひいてはこの世界のためにも。
勝手に復隊した事については済まないと思っている」

すばやく反応したオーブの代表首長、カガリの声を遮るようにして、
アスランが答える。

「何がオーブの・・・！」

「待って」

再び激昂したカガリを制したキラは、一歩前に出る。
キラはその目線をセイバーに向けた。

「あの機体は君の？」

「そうだ。この前の戦闘では俺もいた。
お前を見て、話そうともした」

（・・・）

じっと石のように静止しながら聞くアムロ。
アムロが気がつかなかった事実だ。
もっとも、戦闘中で気がつく由などなかったが。

「何故あんな馬鹿なことをした！
あの介入で、戦場は混乱し、いらぬ犠牲も出たんだぞ！」

二人に向かって、アスランが叫ぶ。
アムロはタンホイザーの誘爆で死んでいったクルーたちのことを再び思い浮かべた。
それだけではない。フリーダムの介入で目や耳に当たるメインカメラや飛び道具を潰され、
ろくな抵抗も出来ずに死んだ、名もなき連合軍の兵士達もその犠牲のうちに入る。
例え敵の兵士だとしても、その犠牲者として数えずにはいられない。

「馬鹿なことだと！
あの時ザフトが戦おうとしていたのはオーブ軍だったんだぞ！？
私たちはそれを止めようとしたんだ！」

（それが馬鹿なことだというんだ・・・！）

あまりにも無計画なカガリの発言に、アムロは苛立ちを覚えた。
あの行動が本当にそんな思慮のもとに行われたというのならば、
散っていった者達が浮かばれない。

「あそこでお前が出た所で、艦隊が撤退するはずがないだろう！
それで済むなら、オーブは最初から外征などしない！

お前たちがしなければいけないことは、そんなことじゃないだろう！
あんな事になる前に、オーブを同盟に参加させるべきじゃなかった
！」

「そ、それは・・・」

アスランに気圧されたカガリは、再び黙り込んだ。
しかし、アスランの方も今更分かりきったことを言っても仕方がな
いという念があった。
問題はこの先どうするかだ。

「だけどアスラン。君がザフトに戻ったって言うんなら、
僕達を探していたのは何故？」

畳み掛けるようなアスランの言葉に黙り込むカガリに取って代わる
ように、キラが問う。

「あんな事などやめさせたいと思ったからだ。
ユニウス７の事は判っているが、その後の混乱は連合側に非がある。
プラントはこんなことなど早く終わらせようと努力している！
だが、それに対してお前たちはどうだ。
お前達の行動は、状況を悪化させているに過ぎない！」

「・・・」

キラの悪びれる様子のない態度に、アスランはもちろん、
アムロも苛立ちを募らせる。
しかし、キラの口から出た言葉はアスランが予期した言葉とは正反
対の言葉だった。

「・・・本当にそうなの？
プラントは本当にそう思っているの？
早く戦争を終わらせて、平和な世界にしたいって。
僕は信じられないよ」

「・・・どういう事だ、キラ？
一体プラントの何が信じられないって言うんだ！？」

キラは疑うようにアスランを見る。
アスランもアムロも、一体彼が何を言っているのか、
意味がわからないという様相を示していた。
プラントのデュランダルが信用ならない男である事は、
アムロも十分に感じていたが、それだけでプラントも信じられない
という、
突拍子もない発想には行きつきにくい。
何かがある――――二人は反射的にそう考えた。

「じゃあアスラン。あのラクスは何なの？」

「？」

（あのラクスだと？）

アムロはディオキアで会った小型ハロの持ち主、
桃色の髪の女性、ラクス＝クラインの姿を思い浮かべた。
思えば、ずいぶんと派手な衣装だったと感じる。

「そして、何で本物の彼女がコーディネイターの部隊に殺されそう
になるの？」

「！？」

（本物・・・殺されそう・・・？）

それが何を意味しているか。
アムロの直感が答えを導き出す。
もしそうならば、ディオキアのコンサート会場でのアスランの態度にも説明がつく。
仮に、キラが言う事が本当ならば、プラントの“ラクス”は“偽者”なのだ

「どういう事だ・・・キラ！」

「君が宇宙に上がってから、
僕達はコーディネイターの特殊部隊に襲撃されたんだ。
狙いはラクスだったんだと思う。
それに、彼らはＭＳまで用意していたんだ」

「ＭＳ・・・だと・・・！」

驚きを隠せない表情のアスラン。
それはアムロの方もそうだが、一つ腑に落ちない事があった。
つまり、彼らはその“特殊部隊”を退けたことになる。
しかし、“特殊部隊”というからにはシンやレイよりも戦闘能力は上だ。
どんなに堅牢な防衛網でも、
各人が並みの人間よりも優れたコーディネイターの特殊部隊を退けられるとは到底考えられない。
となれば、正規軍である可能性は低い。
ＭＳを用意していたという点を除けば。

「だから僕はまたフリーダムに乗ったんだ。
誰も死なせたくなかったから・・・。
ラクスが誰に、何で命を狙われなければならないの？
それがハッキリしないうちは、僕はプラントも信じられないよ」

「・・・キラ、それは確かにとんでもない事だが、その犯人たちの行動だけで、
プラントも信じる事が出来ないというのは、いささか早計過ぎるんじゃないのか？
プラントにだって、様々な思いの人間がいるんだ。
あのユニウス７の時の犯人達の様に！
そして、それを阻止しようとした人々だっているんだぞ！？
お前はそんな人々の思いまで無視するというのか！？」

「・・・ごめん、そうだけど・・・」

「・・・ん？」

何かの気配を感じたアスランは後ろを振り返った。
一瞬、まずいと感じたアムロは、思わず反射的に体をすくめた。
その時、足元の小石を軽く蹴る失態を犯したのは、アムロにとっての不運だった。

（しまった・・・！）

「誰だ！」

その音に反応したアスランが叫ぶ。
観念したアムロは静かに立ち上がり、両の手を挙げて、

岩の陰から出た。
それに続くように、チェーンもアムロの陰に隠れるように現れる。

「た、隊長・・・？」

「済まないアスラン。また立ち聞きをさせてもらった」

呆気に取られたアスランは、しばらく唖然としていたが、
やがて口を開いた。

「な、何故ここに・・・？」

「あんな目立つもので来ていたら、嫌でも目に付く」

「あ・・・」

しまったという表情と共に頭を抱えるアスラン。
後ろに立つ二人組みとアスランの傍に立つ女性は、一体どうなっているのか、
見当もつかないという表情をしていたが、
アムロからは夕陽が作り出す陰に隠れて、その表情はよくわからなかった。

「た、確か、ミネルバに救助された漂流者のアムロ＝レイ大尉だったな！？」

「その通りだ」

アムロの顔を思い出したカガリが言う。
アムロの方も再びこの女性と会うとは思っていなかった。

「アスラン、その人は？」

「・・・俺の部隊の隊長だ、キラ」

振り返って答えたアスランは、再びアムロに視線を向けた。

「隊長、彼らは・・・」

「わかっているさ。この前の・・・」

「・・・はい」

敵と内通していたとも取れる状況だが、
アムロはアスランがスパイであるとは思っていなかった。
どんな手段でコンタクトしたかはわからないが、介入者と会談する機会ができた以上、
これはある種のチャンスとも思えた。

「・・・そこの君、キラといったな」

二歩前に出たアムロは、未だ黙り込んだままの青年を見て言った。

「はい。あなたは・・・」

「アムロ＝レイ。この前の戦闘で、君の声を聞いた者だ」

「あの白い機体の・・・ですか？」

「そうだ」

淡々と会話を続けていくアムロとキラ。
キラの言い分は大まかに分かった。
後は何をすべきか、それは分かっていた。

「キラ君、君はラクス＝クラインが誰に何故命を狙われるか、分からないと言っていたな？」

「・・・はい。ラクスは平和のために戦っただけです。それが何故・・・！」

アムロはその態度に再び苛立ちを覚えた。
しかし、そんな事などいちいち気にしては入られない。

「聞いたところによると、君たちは前大戦で、ザフト、連合の両軍に攻撃を仕掛けたようだが？」

「・・・はい」

「・・・」

キラが答えると同時に、アスランも頷いた。

「ならば、君たちはその行為が元で、様々な組織や人物から恨みを買っている事だって有り得る。君はそれを考えたのか？」

「！・・・それだって、考えはしました！でも僕は・・・」

キラは答えに詰まってしまった。
ラクスが常に正しいと考えてしまった節はキラ自身にもある。

「・・・やはりな。不遜を承知で言わせてもらうが、
上っ面だけ分からないように見せて、
本当は答えなんて出ているんじゃないか？」

「そんな事・・・！」

キラは遂にぐうの音も出なくなった。
周囲の人物も、皆一様に俯いていた。

「プラントのデュランダルが信用ならないのは、俺自身も感じているし、
ラクス＝クラインの替え玉を使うのは確かに姑息だと思う。
だがキラ君。これで分かったろう。
君たちの行為は、主観のものさしで物事を図っただけの、
勝手な空想から来る行為だ。それが分かったなら・・・！」

「・・・アムロさんの言う事、少し、考えて見ます」

キラは静かに答えた。

「アスラン、僕たちはもう戻るよ」

「あ、ああ」

「ミリアリアも」

「ええ」

キラはカガリと共にフリーダムのコクピットに入り、
ハッチを閉めた。

「・・・カガリ」

「・・・なんだ、キラ？」

不意に、キラがカガリに尋ねた。

「僕達のやっていた事、本当に正しかったのかな・・・？」

「・・・それも、また考えよう」

小さく頷いたキラは、フリーダムを起動させ、海中へ潜って行った。

「・・・それじゃ、アスラン。私はそろそろ戻るわ」

「ああ、今日はありがとう。ミリアリア」

ミリアリアと呼ばれたその女性は、自分のジープに乗ると、
すぐさま発進させた。
恐らく、彼女を通して彼らとコンタクトを取ったのだろうと、
アムロは勝手な想像を膨らませていた。

「すまない。だいぶ話の腰を折ってしまったな」

「い、いえ、私の目的も、彼らを国へ返す事でしたから・・・」

「しかしアスラン、君も随分と無茶をするな」

「無謀なのは昔からです。今では私の長所であり、短所だとも思っていますよ。
では、私は先に艦に戻ります」

「ああ、ミネルバで会おう」

アスランは軽く頷くと、セイバーの搭乗用ワイヤーに掴まり、コクピットに入った。
セイバーは発進すると、戦闘機にも似たＭＡ形態に変形し、ミネルバの方向へと飛んでいった。

「チェーン、行こうか」

「・・・ええ」

（ん・・・？）

一瞬だが、アムロは誰かに見られているような感覚を感じ取った。
特に気にはならなかったものの、誰かが見ていたかもしれないという事は、
今になって気付かされた。
二人はオープンカーに乗ると、再びミネルバへの帰路に着いた。
しばらく走っていると、既に夕陽は沈み、冷たい夜風が吹いた。

「寒くないかい？」

「平気です。そっちこそ」

「大丈夫さ・・・ん？」

「どうしたの？」

アムロは再び妙な感覚を覚えた。
ディオキアで何度も感じたものと同じ感覚。

（どういう事だ・・・？まさか“奴”が・・・）

「・・・アムロ？」

「いや、何でもない。気にしないでくれ」

アムロは運転に意識を戻した。
チェーンがこの世界に来ている以上、“奴”が来ていてもおかしくはない。
もし“奴”に会ったら、自分はなんと言うだろうか。
状況にもよるが、“あの時”のように殴りかかるだろうか・・・。
少なくともそんな衝動的な行為だけはごめんだと、アムロは心中で呟いた。

ミネルバについたアムロは、早速艦長に呼び出された。
厳密に言うと、アムロ、アスラン、ハイネの三人だ。
アムロはブリッジに入ると、いつぞやの呼び出しの時のように、既に二人と、アーサー、タリアの姿があった。

「艦長、何か？」

「ええ、実はディオキアの作戦本部から命令があったの。

ここから少し行った所の、ロドニアと言う地域に行ってほしいの。
その地域に大規模な施設があるんだけど、
以前は連合の航空機や車両、それにＭＳが出入りしていたらしいわ。
でも、最近静かになったって。
調査隊が派遣される手はずになっているんだけど、
その前に、私たちに哨戒任務が与えられたわ。
そこで、明日の０９：００にアムロ隊に現地に行ってもらいたいの」

「了解。ですが、僕とシンとレイだけで十分でしょう。
大人数で行っても、艦の防衛能力を薄くするだけです」

「ええ、頼んだわ」

「艦の事は任せてくれ、アムロ」

「ああ、頼んだぞハイネ、アスラン」

翌朝、アムロ、シン、レイの三人は各々の機体に搭乗し、
ロドニアの施設に向かった。

「隊長、なんで俺たちがこんな事・・・」

シンが不平不満を口にする。
彼の性格を踏まえると、あまり適任ではなかったかもしれないと、
アムロは今になって気がついた。

「そうぼやくな。これも軍人の仕事の内だ」

「隊長、見えました、あれです」

情報どおりに山間部にそって進むと、確かに大規模な施設が見えた。
迎撃などはなく、いたって平穏な空気が漂っていた。
施設には明かりすら灯っておらず、人がいる様子もなかった。

「何もないな・・・ん!?」

アムロは強烈な負のオーラを感じた。
尋常ではないレベルの不快感がアムロを襲う。

（この感じは・・・ニタ研だと!?）

ニュータイプ研究所。
縮めて“ニタ研”とも呼称されるその施設は、
人工的にＮＴを作り出す、忌まわしき技術の権化だ。
それと似た感覚。

（嫌な予感がするな・・・）

この世界にも強化人間はいる。
インド洋での戦闘で遭遇した部隊の緑色のガンダムのパイロットのように。
νガンダムを着陸させると、それに続いてインパルスとザクが着陸した。
辺りを見回しつつ、警戒しながらコクピットから出たアムロは、
ミネルバに通信を入れた。

「艦長、施設に到着した。人がいる気配はない」

「ええ。施設内の様子は？」

「明かりの類はついていないが、ここからだとよく分からないな。どうします？」

「一応、内部も見てみて。慎重にね」

「了解。なにかあればまた報告します」

通信を切ると、アムロはシン、レイと共に施設の入り口に近づいた。

「本当に何かいるんですか？」

「それを今から調べるんだ」

未だに不満げな表情を浮かべるシンを尻目に、アムロはゆっくりとドアを開けた。
鍵はかかっておらず、施設内も閑散としていた。
しかし、様子がおかしい。
あたりには強烈な異臭が漂っていた。

「なんだ・・・これ・・・！」

「！」

思わずヘルメットのバイザーを閉めるアムロとシン。
昼間とはいえ、内部は暗い。
中に入り、懐中電灯のスイッチを入れたアムロは、

何かが横たわっているのを見た。

「・・・？」

ゆっくりと近づくと、それは人だった。

「・・・！死んでる・・・！？」

１６歳ぐらいと思われる少年の遺体。
全身は血まみれで、見開かれた目は瞳孔が開いていた。
思わずのけぞったアムロは、辺りを見回す。
よくみると、数体分の遺体がそこらじゅうに倒れていた。

「一体なんだというんだこれは・・・！」

「隊長、レイが！」

アムロはレイを見た。
力が抜けたように膝を折り、呼吸は不規則で荒く、
シンが支えていて精一杯に見えた。

「はあ、はあ、はあ、はあ！うぐ・・・！」

「レイ、どうしたんだよ、レイ！」

「シン、レイのバイザーを閉めろ！」

開いていたレイのバイザーを閉めると、二人はレイを抱えて外に出た。
レイをνガンダムの足元に寝かせると、アムロはすぐにミネルバに

通信を入れた

「艦長、緊急事態だ！レイが・・・」

しばらくすると、急ピッチで修理を終えたミネルバが、調査隊と共に到着した。

とはいえ、タンホイザーの修理は終わっていなかったようだが。

アムロとシンは軍医の診察を受けた。

レイの方は、軽度のパニック状態になったのではないかという診断を受けていた。

あの凄惨な光景を目にしては、無理もない。

ＭＳパイロットともあれば、前線であのような光景を見る事も少なくはないが、

流石にこれはこたえたかもしれない。

医務室から出ると、タリアとアーサーの姿があった。

「ご苦労様、アムロ、シン。レイの様子は？」

「軽いパニック状態になっただけで、

心配は要らないらしい。ですが、あの施設は・・・」

「ええ、ただの軍事拠点ではなさそうね。

あなた達も来る？」

「そうさせていただく」

内部の安全確認は終わっており、

ハイネやアスランなどもその組に加わった。

内部に入ると、アムロは先ほどと同じ不快感を感じた。
あたりにはアムロが確認した以上の遺体が横たわっていた。
視察する一行も血の気が引いた表情を見せており、
アーサーは文字通り顔面蒼白の様相を呈していた。

「か、艦長・・・こ、こ、ここは・・・？」

「・・・恐らく、連合のエクステンデッドの研究所ね。
遺伝子操作を忌み嫌うブルーコスモスが、
コーディネイターの先天的優位性に対抗するため、
薬物などで肉体を強化して殺人兵器としての人間を造り上げているらしいわ。
ここはその実験場といったところかしらね・・・」

「・・・」

タリアの話を聴いたアムロは絶句した。
以前から強化人間の存在には気づいていたものの、
どの世界でも人は過ちを繰り返すという事を改めて実感する。
自分の住んでいた世界と変わらない、過ちを繰り返していくこの世界に、
アムロは酷く傷心した。

「こりゃ、ひでえな・・・」

普段は明るくふるまっているハイネでさえ、この時は表情が違った。
アスランは暗い表情のまま無言であたりに懐中電灯を照らしており、
シンとベリエスは怒りを露にしていた。

「こんなの・・・こんなの信じられませんよ！」

「チッ、一体なんでこんな事しやがる！」

いきり立つ二人とは裏腹に、チェーンとユイの方は一目で調子が悪いとわかった。
彼女たちを連れてくるべきではなかった、と気がついたアムロは、その二人に声をかけた。

「チェーン、ユイ、君たちはもう見ないほうがいい。艦に戻るんだ」

「は、はい・・・隊長」

「ええ・・・でもアムロ、どうしてこんな・・・・」

「どの世界でも、人は同じ過ちを繰り返す。やりきれないな」

ジョナサンをつけて二人を帰すと、アムロ達も程なくして外に出た。

自身もかなり気が滅入ったアムロだったが、怯えきった表情のユイを見つけると、アムロはやさしく声をかけた。

「ユイ、大丈夫か？」

「はい・・・あんなの初めて見ました。あんな事が出来るなんて・・・考えられません」

「ああ・・・俺のいた世界と、悪い面は共通しているようだな。この世界も」

「隊長の世界にも・・・？」

「悲しいことにな」

何気ない会話が進む中、急に警報がなる。
驚いて椅子から飛び上がったユイに一瞬気を取られ、
アムロは最初の艦内放送を聞き損ねたものの、
直後に続いたメイリンの声で内容は分かった。

「・・・敵機接近、直ちに配置についてください！」

「敵が！？」

「いくぞユイ！」

アムロはパイロットスーツを着ずに、そのままνガンダムに乗った。
不在のルナマリア、レイ、まだ修理中のハイネやベリエス達のグフなどを除くと、
迎撃可能なのはνガンダムとインパルス、セイバーのみであった。
大部隊で攻め込まれては不利だが、その可能性は直後のタリアの通信で打ち消された。

「アムロ、敵は一機。ガイアと断定されたわ」

「ガイア一機・・・？間違いはないんですね？」

「ええ、敵の目的が分からない以上、警戒するに越した事はないわ。出来れば、この機に捕獲してちょうだい」

「了解。シン、アスラン、いくぞ！」

「「了解！」」

ミネルバから発進した三機は、散開してガイアに接近した。
猛スピードで接近するＭＡ形態のガイアは、まるで犬のようにも見える。
情報どおり、本当に単機で仕掛けてきたようだ。
こんな真昼間にしかも単機で攻撃を仕掛けてくるには、敵側にも何かしらの思惑があるかもしれない。
施設の破壊、陽動といくらでも考えようはある。
しかし、突如変形したガイアは、まるで腹をすかせた猛獣のように、インパルスに飛び掛った。

「うわ！何だコイツ！？」

ビームブレイドを回避したインパルスに、続けざまに攻撃を行うガイア。
一心不乱に攻撃を続けるその様は、計画性などを感じさせない。
何かがおかしい。アムロは牽制のライフルを放ち、徐々にガイアとの距離を縮めていく。
そのうちの一発が肩に当たった瞬間、直後にサーベルを引き抜いたアムロは、
ガイアのビームライフルを手首から切り飛ばした。
更に蹴り飛ばし、地面に叩きつける。
体勢を立て直し、飛び上がったところを後方から接近したセイバーが、

サーベルで右足を弾き飛ばし、更に大きく体勢を崩したところを、
シンのインパルスがサーベルでガイアのコクピットハッチを抉り飛ばした。

「いい腕だ、シン。ハッチだけを弾き飛ばすとはな」

「えへへ・・・ん？」

シンは地面に叩きつけられたガイアのコクピットに、
カメラを向けた。ズームインすると、コクピット内の様子が分かった。
そこに映っていたのは、頭から血を流して気絶している連合軍の女性兵士（エーブウ）。
しかし、それはシンが知っている人物だった。

「ステラ・・・？」

幼い顔立ちに金髪の少女。
その姿は正しく、ディオキアでシンが出会った少女、ステラ＝ルーシェだった。
インパルスを着地させたシンは、そのままコクピットから飛び出し、
尻餅をつきながらもガイアのコクピットに駆け寄った。
灼熱のビームサーベルで溶解した装甲は、未だに冷めず、
長くは触っていられないほどだ。
ステラはぐったりとしている。

「！」

シンはコクピットからステラを担ぎ出すと、
そのままインパルスのコクピットに連れて入り、

ミネルバの方角へ飛んでいった。

「シン、何をしている！」

アムロの声はシンの耳には届いていない。
ただ、彼女を救いたいという感情にとらわれて動いていた。
格納庫に機体を放置すると、シンはそのまま医務室へと走った。
続いてミネルバに帰還したアムロとアスランは急いで機体から降りた。

「ヴィーノ、シンは！？」

「えっと、医務室の方に駆けていきましたけど・・・。
でもあれって・・・」

「ああ、済まない」

アムロとアスランが医務室に駆け込んだとき、
シンは医師に喰いかかっていた。
ステラはベッドに横たわっている。

「シン！貴様、何を勝手に・・・！」

「た、隊長・・・！」

「敵兵を勝手に艦内に連れ込んで、どういうつもりだ！」

「でも、目の前で死にそうになっている人間を、
放っておく事なんて出来ません！
それに、俺は約束したんです！ステラを守るｔ」

その言葉は、突如飛び掛ってきたステラによって打ち消された。
目が覚めたようで、医務室の中を驚異的な身体能力で飛び回っていた。

「ス、ステラ・・・？」

「この感じ、やはり強化人間か！」

暴れ続けるステラを、シンが何とかして取り押さえようとする。
しかし、ステラは逆にシンの首を強く締める。

「ス・・・テ・・・ラ・・・！
俺が・・・分からないの・・・か！？」

「知らない！知らない知らない知らない！
あんたなんて知らない！ネオはどこ！ネオ！」

首を絞める手に、ますます力が入る。
シンの意識が遠のいていく感覚の中、医師が注射した精神安定剤で、ステラは再び気絶した。

その後、シンは艦長室に呼び出された。

「シン＝アスカ！あなたのやった事は、重大な軍規違反よ！
艦内に甚大な被害が出ていたら、あなたはどうするつもりだったの！？」

「・・・申し訳ありません」

「それと・・・検査の結果、あの娘はエクステンデッドである可能性が高いわ」

「！」

「事の重大さが分かったかしら?処分が決定するまで、反省していなさい」

艦長室から解放されたシンは、しばらく、ただ呆然と立ちすくんでいた。
ステラがエクステンデッドだった・・・。
この事実は彼の中では非常に大きい。
あの研究所で育った者の一人だったのだ。

（ステラ・・・俺は、君に何をしてあげたらいいんだ・・・！）

シンは医務室に立ち寄った。
ステラは拘束具をつけられ、ベッドに寝かされていた。
頭に包帯を巻かれ、ステラはどこにも焦点が合っていないかのように天井を見ていた。
シンにできる事は見守っている事ぐらいだ。
彼にとっては、それが精一杯だった。

（クッ・・・！）

シンは静かに医務室から出た。

ガイアの収容後、施設は調査隊に委ねられ、ミネルバはポートタルキウスに戻った。
次なる戦火は着々と近づいていた。

第１３話　強化人間（後書き）

この場を借りて、２０１１年３月１１日の東日本大震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。
また、被災された方々にお見舞い申し上げます。

第１４話　ユウナの奇策（前書き）

前回、４月中旬ごろの更新と予告しましたが、
諸事情により、更新が遅れてしまいました事を、
深くお詫び申し上げます。

第１４話　ユウナの奇策

＜ミネルバ　医務室＞

ステラ＝ルーシェがミネルバに収容されてから3日の時が流れた。

シンはステラが収容された日以来、頻繁に彼女の見舞いに来ていた。
苦しそうな顔をしながら、時折呼吸が乱れ、異常な心拍数が計測されるなど、
その容態は決して安定してはいなかった。

「ステラ・・・なんで・・・こんな・・・！」

シンがステラの手を握ると、ステラも握り返す。
しかし、とても弱々しい握力が逆にシンの心に響く。
悲しい現実であった。
ステラのつらそうな顔に耐えかねて、シンは医務室を出た。
垂れていた頭を上げると、誰かが壁に寄りかかっている事に気がつく。
アムロ＝レイだ。
シンが出てきた事に気がついた彼は、シンに歩み寄りながらこう言った。

「シン、彼女の様子はどうだ?」

「・・・あまり、安定してません。

先生のほうも、あの研究所のデータを合わせてもよく分からないって・・・」

ステラが辛い目にあっている事で、シンも辛い気持ちである事は、アムロにはよく分かった。
しかし、何故そこまで彼女にこだわるのか。
ディオキアで助けただけの少女に。
それが疑問であった。

「一ついいか？何故彼女にそこまでこだわる？」

「・・・守るって、約束したからです。あの子と。
その時は、彼女が戦争で辛い目にあった子だって思ったからです。
でも、こんなのは酷すぎます！
エクステンデッドなんかにされて、人殺しをさせられて！
そう考えたら、ステラがかわいそうで・・・！」

「・・・そうか。いや、すまない。妙な質問をした」

彼の境遇は、グリプス戦役の時に会った少年、カミーユ＝ビダンに似ている・・・。
それがアムロの持った感想であった。
彼は最後まで報われなかった。
カミーユも、今のシンと同じように、
地球連邦軍特殊部隊“ティターンズ”の強化人間の少女と心を通じ合わせていた。
アムロがララァと心を通じ合わせたように・・・。
しかし、その最期はどちらも報われないものだった。
その悲劇が繰り返されるのは、アムロも避けたかった。
せめて、シンにはそんな思いをさせたくない。

悲しみを背負うのは自分だけでいい。
アムロはそう考えていた。
しかし、アムロやカミーユのように、
彼女に情を移しすぎれば、シン自身も悲惨な運命をたどる。
それもまた避けたい事である。
そして何よりも、この少女は地球連合軍の特殊部隊のパイロットであり、
多くのザフト軍将兵の仇でもあるのだ。
単に「守る」や「助ける」といっても、それ以前にシンはプラントの防衛軍、
“ＺＡＦＴ”の士官なのだ・・・。

「シン、忠告したい事がある。
彼女に殺された兵士がこのザフトに大勢居る事を忘れるなよ。
辛いだろうが、あまり情を移しすぎるな」

「わかってますよ！わかってます。わかってますけど・・・だけど・・・！」

シンも複雑な心境なのだろう。
アムロがかけられる言葉も、今はこれだけであった。
シンに対してできる事。
それはアムロの中で命題となっていった。

ポートタルキウス出港の前日、アムロは格納庫に呼び出された。
奪還した黒いガンダムタイプ「ガイア」の件だった。

「ヴィーノ、ガイアの修理はどうなっている？」

「正直言って、ダメです。
何だかんだ言って、吹っ飛ばしたのはコクピットの前面装甲だけですけど、
パーツがありませんし、インパルスやセイバーのパーツも合いませんよ。
ここでνガンダムの整備が出来たのが奇跡みたいなもんです。
少なくとも、ジブラルタルに着くまではダメでしょうね。
でも、どちらにしろ、パイロットが居ません」

「構わないさ。何かの役に立つ事もある。
中を見てもいいかい？」

「どうぞ」

好奇心からか、アムロはガイアのコクピットに上がった。
コクピットハッチはなかった。

「しかし変わったコンセプトの機体だな。
陸戦用のＭＡ形態か・・・ヨウラン、こいつについて、
何か知っている事はないか？あれば聞かせてくれ」

「え？あ、はい。
コイツは、うちの量産型の“バクゥ”の四足獣形態をＭＳに組み込んだヤツです。
もっとも、“バクゥ”みたいな陸戦用より、
今はフォースインパルスみたいな空戦用が主力ですけどね」

メインカメラの掃除をしていたヨウランが答える。
アムロはガイアのコクピットの内装を一通り見ると、

ガイアから降りた。
本部から指令が来るまで、予備機として置いておくか、
強引に修理して、誰かをシフトチェンジするか迷っていると、
グフ・イグナイテッドの調整作業を終えたハイネが寄ってきた。

「おう、アムロ。ガイアの運用、艦長から任されてんだろ?」

「そうだ。だがパイロットが居ない以上、宝の持ち腐れだな。
下手にルナマリアやレイをシフトしても、慣れんだろうし、
正直扱いに困るよ」

「そうか?この前の戦闘、ルナマリアはいつものと違う装備で戦っていたが、
特に問題はなかったと思うぜ?」

「・・・そうかもしれんな。参考にさせてもらうよ」

「そういや・・・」

ハイネは言いかけたところで口ごもった。

「なんだ?隠さないで言ってくれ」

「ああ・・・この機体、あの嬢ちゃんが乗ってたんだってな」

ハイネの口調が真剣実を帯びる。

「・・・そうだ」

「シンの事・・・どう思う?」

「・・・良い傾向とは思えんな。
あれでは彼女に魂を引かれて、悲惨な運命をたどる」

「辛口なんだな」

「現実を言っているまでさ」

シン＝アスカの違反行為に関する、プラント本国からの通達はなかった。
唯一来た指令も、第９９独立戦隊は現行の任務を破棄し、
ザフト軍ジブラルタル基地へ向かえという内容だった。
艦長以下各所責任者達と直接の上官であるアムロ＝レイは即座に軍法会議を開き、
被告であるシン＝アスカは計一週間の独房入りという判決を下された。
シンはそれを拒みはしなかった。
ステラに会うことが出来ないのは辛いだろうということは、
アムロにも容易に想像できた。
アムロとて人の子である。本来ならこのような処置など取りたくはない。
しかし、艦の規律は守らなければならない。
シン＝アスカの為の軍隊ではないのだ・・・。

余談だが、その軍法会議の中、アムロはシンを弁護する立場でこう発言している。

「グラディス艦長、そして皆さん。
被告の行動は確かにこの艦を危機に晒す可能性のある、
極めて重大かつ軽率な行動でした。
しかし、それは決して被告に悪意があった訳ではない事を忘れないでいただきたい。
被告は人道的な立場から、“一人の人間”として、“一人の少女”を救助したのです。
その事を、どうかお忘れなく」

＜J．Pジョーンズ　艦長室＞

「“ニューガンダム”？」

ネオはクリストが提出した書類を見ながらそう呟いた。
その表情は、仮面に隠れていてもわかるほど驚いているようだった。

「はい、敵のミネルバに搭載されている“謎のMS”の名前です」

クリストは更にもう一つの書類を提出しながら答えた。

「これは？」

「νガンダムに搭乗しているザフトの兵士についてです。
私の知っている範囲で文章にまとめました」

ネオはその文章に目を通すと、再びクリストを見た。

「にわかに信じがたいが・・・このアムロ＝レイという男が、
仮にこの報告書どおりの人物ならば、俺たちは相当追い詰められて
いるな。
だが少佐、この情報、どこから仕入れてきた?」

「始めに渡した書類の最後のページをご覧ください」

クリストに促されるままに、ネオは該当するページを読んだ。

「!・・・少佐、これは・・・」

「事実です。そして“彼女”も私やアムロ＝レイと同様に・・・

・・・この世界の人間ではないのですから」

＜タケミカヅチ　ブリッジ＞

ユウナは天井を見ていた。
特にやる事がないからである。
その格好は、とても一軍の司令官とは思えない、
だらしのないものであった。
司令席には寝そべるように座り、前の台には足をかけ、
ミニテーブルには飲みかけのコーヒーを放置していた。
暇を潰そうにも、空母の中では特に面白いものもなく、
できる事といえば、新聞か何かを読むか、
ただじっとしている事ぐらいだった。

「おいトダカ。ミネルバの動きについて、大佐から報告はないのか？」

「いえ、まだありませぬが」

「ふうん・・・」

ユウナは一つ大きなあくびをすると、席から立ち上がり、
窓の外を見た。
空は一面雲に覆われており、とてもよい天気とはいえなかった。

「やんなっちゃうなあ、この天気。トダカ、この天気は何時まで続くんだ？」

「・・・最新の予報によりますと、後五日は続くとのことですが」

「ああ、まったく！ホンットにやんなっちゃ・・・うわ！」

ユウナは足元の段差に躓き大きく転んだ。
そして、その頭を頑丈なブリッジの床にぶつけてしまった。
慌てて近くの士官達が駆け寄る。

「ユウナ様、お怪我は!?」

「イタタタ・・・大丈・・・ん?」

その時、ユウナの頭の中で何かがはじける。（※ＳＥＥＤが発現にあらず）
彼は手を差し伸べる士官達の手を払って、再び窓の外に視線を向けた。
そして一考すると、ユウナはトダカを振り返った。

「トダカ、この前届いた“八式弾”とかいうのは使えるのか?」

“八式弾”。
目標への着弾前に炸裂し、大量の鉄球を広範囲に降り注がせる砲弾、
“自己鍛造弾”の事だ。
オーブ本国からの補給の折、届いた兵器である。
本来、自己鍛造弾は砲弾に使うようなものではなく、
専らミサイルなどに使われるのが一般的であった。
しかし、オーブの火薬技術の進歩により、護衛艦クラスの砲弾でも、
使用が可能となった。

「全艦への供給は完了していますが・・・ユウナ様、何か策でも?」

「思いついたんだよ。取って置きの策が。
聞きたい?」

いかにも言って聞かせたいという表情のユウナに、
トダカは不気味な感覚を覚えた。
頭をぶつけて、どこかがおかしくなっているのではないだろうかと、
まるで一昔前の漫画のような展開が、彼の頭に浮かぶ。

「は、はあ・・・して、その策とは？」

「おっと！今は秘密。大佐を呼んできてくれ」

気分よくブリッジを出て行ったユウナ。
一体その策とは何なのか。
所詮は政治屋の考える策と軽んじながらも、
トダカの興味は図らずもそちらに向いていた。

＜翌日　ミネルバ　アムロの部屋＞

ミネルバはジブラルタルへ向けて出航した。
現行の、地中海の地球連合・オーブ艦隊駆逐の任務は、
オリエント地方、黒海・地中海沿岸地域のザフト軍戦力が充実してきたため、
各地の部隊が引き継ぐ事となった。
ミネルバがジブラルタルへ向かう理由は三つほどある。
一つは、地球連合軍の生体兵器“エクステンデッド”のサンプルの輸送。

もう一つは、西ヨーロッパ地方に居座る地球連合軍部隊への牽制。
そして最後に、デュランダルが発案した“地球連合軍中枢に対する大反抗作戦”の為、
重要拠点であるジブラルタル基地の戦力増強が図られたのだ。
現在の、ミネルバを旗艦とした第９９独立戦隊の立ち位置は、
議長直属の“便利屋部隊”という色合いが濃かった。
その戦力は、ザフト側に大きな恩恵をもたらしたのだ。

逆に、単体で一個師団以上の戦力を兼ね備えていると言われ、
尚且つ、どんな戦場へも赴ける機動性は、地球連合軍からすると、
大きな脅威であり、この部隊による被害は、
全軍の総被害の二割以上に達するのではないかという説が出るくらいの勢いだった。
それだけに、この部隊の撃破は、地球連合軍にとっての死活問題となりつつあった。

そのような経緯から、“ファントムペイン”にはミネルバ撃沈の厳命が出された。

アムロは自室のベッドで横になっていた。
部屋の床では、大幅に機能を縮小し、
殺傷能力のある武装のうち、どうしても解除できなかったスタンガンを装備した、
例の暴走事件のハロが転がり、時折「アムロ、元気カ？」と、
いたって平和に、いかにも機械的な合成音を出していた。
しかし、アムロがそれに気がつく事はなかった。

＝＝＝

＝＝＝

「この濃密な敵意、待ち伏せか！」

アムロは更衣室でパイロットスーツに着替えると、
独房から一時的に出てきたシンに声をかけた。

「シン、やってくれるか？」

「大丈夫です。相手が連合でもオーブでも、俺は戦います」

その表情には、決意が見えた。
何かを守りたいという、強気な表情。

「・・・ならいい。今回も頼むぞ」

二人は各々の機体に搭乗した。
ルナマリアのザクウォーリアは前回と同じくスラッシュウィザードを装備、
レイの方はいつも通りだが、ＳＦＳを使用した戦法が有効である事が、
前回の戦闘で証明されたため、両機ともグゥルを使用する。
また、インパルスはいつも通りのフォースシルエットを装備して出撃する。
νガンダムに火をいれ、全システムを立ち上げると、
アムロはアスランのセイバーに通信を入れた。

「アスラン、君に聞きたい事がある。
仮に、あの介入者・・・キラ君が出てきても、君は戦えるか？」

「・・・」

アスランは無言を返事にする。
しかし、数秒間をあけると、こう答えた。

「私は、彼らの行動が正しかったとは思えません。
敵として出てきたのなら、私は彼らを討ちます。
それが、今私にできる精一杯の事だと思うからです」

「君の決意は受け取った。あてにしている」

アムロは通信を切ると、アームレイカーを強く握った。

「各機へ通達。敵はオーブ艦４隻。恐らくは待ち伏せと思われ、
伏兵の存在する可能性も否定できない。
アムロ隊は発進後、オーブ艦へ攻撃を開始、ハイネ隊は本艦の直衛
について」

タリアからの通信が入る。
ここまで来て、オーブの艦隊だけが待ち受けるとは考え難い。
何かの罠がある。そう考えるのが妥当だった。

全機は発進体勢に入った。
しかし、ハッチが開いた瞬間、コクピットに衝撃が走る。

「!?・・・メイリン、今のはなんだ!?」

「て、敵の砲弾が・・・炸裂しました!自己鍛造弾のようです!
更に、今の攻撃で、ＣＩＷＳの３０％が使用不能になりました!」

「何だと!」

メイリンの口から出た信じがたい情報に、アムロは驚愕した。

「隊長、すぐに出ましょう！これ以上好きにさせるわけにはいきません！」

「よし、全機発進だ！」

ミネルバのＭＳ隊は急ピッチで出撃した。
その瞬間、自己鍛造弾の第二波が降り注ぐ。

「うわ！」

フェイズシフト装甲をもったインパルス、セイバーはともかく、
フェイズシフトを持たないグフやザクには、この攻撃はこたえた。
自己鍛造弾攻撃の目標はミネルバ。
威力自体は大したレベルではないものの、その広範囲にわたる砲弾の攻撃は、
ＣＩＷＳやレーダーを潰すくらいなら十分な威力だった。
状況が混乱する中、タリアから再び通信が入る。

「全機、ミネルバから離れて！
作戦変更、本艦は上空へ退避し・・・」

しかし、その声は遮られる。
突如、後方の水中から接近してきたアビスが、後部推進スラスターを撃ったのだ。

「ハハッ、まるでアヒルだな！北京ダックにしてやるよ！」

アウルはそう宣言すると、バラエーナ改の照準をミネルバへ向けた。

「させるか！」

それにいち早く気がついたシンのインパルスが、ビームサーベルを引き抜き、
アビスに切りかかる。回避したアビスもビームランスを引き抜き、
インパルスとの切り合いを始めた。
その間も、ミネルバへの自己鍛造弾攻撃は続く。

「クッ・・・索敵、何をしていた！」

「申し訳ありません！自己鍛造弾直撃時の混乱に付け入られました！
さ、更に、オーブ艦、および地球軍艦多数出現！囲まれています！」

「！」

完全にしてやられた、という実感を持つ暇もなく、
タリアは半ば呆然と艦長席に座り込んだ。
エーゲ海から、クレタ島と旧ギリシャのペロポニソス半島の海峡を通るルートには、
キクラデス諸島と呼ばれる、多数の島がある。
この戦闘の前、ミネルバはキクラデス諸島と旧ギリシャの間の海域に、
多数の水中機雷が散布されているのを発見し、
キクラデス諸島の間を航行することとなった。
オーブ艦はそれらの島の陰に隠れ、待ち伏せをしていた。
ミネルバの後部推進スラスターを破壊したアビスも、
自己鍛造弾の第一波の弾着と共に、潜伏していた島から発進したのだ。

丁度、敵艦隊はミネルバを中心として、円を描くように布陣し、四方八方から砲撃を浴びせてくる。
そして、自己鍛造弾攻撃で、ＣＩＷＳやレーダーをじわじわと剥ぎ取られていく。
敵はタンホイザーを警戒してか、分艦隊単位で横一列に並んでいた。
つまりは、以前のように敵艦が密集陣形を取っていないため、タンホイザーによる攻撃によるも、効果が薄いのだ。
そもそも、タンホイザーの調子も、完全ではなく、
ジブラルタル基地で大規模な修理を施す必要があった。
更に、地球連合軍の艦隊が、右翼のクレタ島とペロポニソス半島の海峡、
左翼の旧トルコのアナトリア半島側に位置するロードス島側の海峡を封鎖し、
ミネルバの突破を妨げていた。
後部の推進スラスターにダメージを与えられている以上、下手に飛行は出来ない。
突破しようとすれば、徐々に追い詰められて更に厚い集中砲火を喰らい、
逆に転進しようにも、再びこの艦隊と対峙することになる。
そうなれば、ミネルバはこのエーゲ海で立ち往生する破目となり、ジブラルタル基地への到達が遅れてしまう。
多少強引にでも、突破するしか方法はない。

「全機、本艦は右翼の艦隊を突破する。ＭＳ隊の迎撃を行って！」

タリアの命令はもはや作戦と呼べるものではなかった。
この状況において、必勝の策は相手方が握っている。
結局のところ、アムロ達のＭＳ隊に賭けるしかなかった。

アムロは敵のウィンダムの部隊と戦っていた。

アムロ隊はＭＳ隊との戦闘を行い、ハイネ隊は艦船への攻撃を行っており、
シンとルナマリアはアビス、アスランとレイはカオスと戦い、
敵高性能機を他の隊員に任せたアムロは、
４０機近い敵量産型ＭＳ部隊と、単機で戦う事になった。

「数が多い！だが・・・」

アムロは小刻みにアームレイカーを動かし、
不規則にライフルのトリガーをひく。
時折、ビームサーベルとビームライフルを同時に使いながら、
次々とウィンダムを落としていく。
その姿は一騎当千の鬼神、正に“白い悪魔”であった。
もはや、この部隊の三機、νガンダム、インパルス、セイバーに、
“多勢に無勢”という言葉は通じなかった。

「ここで退く訳には・・・ん？」

後方からのミサイル群をかわすと、アムロの視界に、
再びあの黒いＭＳ、ストライクノワールと、
紅白のウィンダムが飛び込んできた。

「黒いヤツか！」

「・・・」

クリストは無言でビームライフルショーティーを構える。
牽制射撃を放ちつつ、時折本命を混ぜ込みながら、
νガンダムとの距離を縮めていった。

「クッ、コイツだけに、何時までも構っていられるか！墜ちてもらう！」

アムロは一般機のウィンダムにライフルを3連射して撃墜すると、ストライクノワールにビームサーベルで切りかかった。
相手方はビームブレイドを抜かず、サーベルを回避すると、あろうことか、通信を入れてきた。

「・・・聞こえるか、νガンダムのアムロ＝レイ」

「何！？」

思わず呆気に取られるアムロ。
無線の混線ではなく、相手方からわざわざ通信回線を開いたのだ。

「どういうつもりだ！いや、何故俺の名を知っている。答えろ！」

アムロは、通信しつつもビームライフルショーティーで攻撃を仕掛けてくる、
黒いガンダムのパイロット装甲越しにを睨み付けながら叫んだ。
思えば、誰かの声に似ていると感じる。
インド洋の時は気がつかなかったが、アムロは確かに、
この声を聞いた覚えがあった。

「答える必要なんて・・・ない！」

クリストはアムロの問いを一蹴すると、レールガンを放った。
アムロはあえて避けずに、シールドで防ぐ。
この程度の事で壊れるシールドではない。

その後、あえて直撃と思わせるため、アムロはνガンダムを微妙によろけさせた。
ただでさえ空戦での安定性が低いため、一歩間違えば自殺行為とも取れるが、
アムロの技量がそれを補った。

「やったか!?」

ストライクノワールは案の定油断して、νガンダムに止めを刺しにかかるが、
それよりも早く反応したνガンダムのビームライフルから伸びた光軸が、
ストライクノワールの右肩を吹き飛ばす。
更に一回転しながらビームサーベルを抜き、
急加速したνガンダムが、ストライクノワールのコクピットに、
すれ違いざまにサーベルを突き立てようとした。

「落ちろ!」

「・・・!」

ギリギリで後退したストライクノワールだが、ガイアの時のように、
コクピットハッチだけが吹き飛んでしまった。
しかし、ガイア撃墜時の損傷とは幾分か状況が違い、
どちらかといえば、一年戦争時、アムロが戦った、
ランバ＝ラルのグフのコクピットハッチを溶かしたときの状況に似ていた。

「チッ・・・なめたマネを!」

「コイツ、まだ動けるのか・・・！」

再び攻撃を仕掛けるνガンダムだが、
横合いから攻撃してきたレーナ機がそれを阻む。

「“　　”の邪魔をした奴・・・消えちゃえ！」

「何だ、何を言っているんだコイツは！」

サーベルを抜きつつ、急接近してくるレーナのウィンダム。
アムロは、そのサーベルを掴む腕を逆に掴むと、
間接部分から腕を引きちぎった。

「無駄な抵抗をするんじゃない！」

そのままジェットストライカーも引きちぎり、
レーナのウィンダムを地面に叩き落す。

「きゃ・・・！」

落下時の衝撃で、レーナは気絶した。

「そんな・・・『　　』！」

クリストは叫んだ。
彼女の本当の名前を。

「・・・なんだって・・・！？」

アムロは驚愕した。

その人物は、アムロが知る人物。
あまり交流はなかったものの、その存在は少なからず、大きかった。
そして、その名を叫んだ男性の正体。
アムロは確信した。

「ハサウェイ・・・なのか！？」

アムロはその意思とは関係なく、口にしていた。

「・・・やっと、僕の正体に気がついたか、アムロ！」

＜タケミカズチ　ブリッジ＞

ユウナ＝ロマ＝セイランの作戦は一応の成果を見せた。
やはり頭を強打したのがだいぶ効いたらしい。
ユウナ自身も、作戦の推移を見て有頂天になり、
思わず司令席から立ち上がっていた。

「ようし！ほら、間髪入れずに第６波発射だよ」

「・・・了解。八式弾、第６波、撃て！」

トダカは複雑な心境で叫んだ。

もしこの作戦がうまくいけば、ミネルバは撃沈され、
オーブは完全にその理念を反故にしてしまう。

（理念も終い・・・か）

そもそも、外征を行っている時点で、
オーブの理念は意味を成していない。
それは崇高な理想であり、誰もが望む事だが、
あまりにも現実的ではない。
“他国へ干渉せず、中立を貫く”。
それは本当に平和をもたらすのかと、改めて考えたトダカは、
思わず自嘲して思考を止める。
一介の将校であり、あくまでオーブ軍の歯車である自分が、
そのような感情を持つ必要はないのだ。
それは政治家の役目。
ならば今自分に出来る事をし、理念については、
戦いの後で考えようと、トダカはそう思うのであった。

「おいトダカ。そろそろ潮時だ、ムラサメ隊に攻撃指示を出せ」

「・・・了解」

トダカはムラサメ隊に攻撃指示を出した。

「ムラサメ隊、突撃！」

第１４話　ユウナの奇策（後書き）

終わり方が中途半端ですが、
ここまでで一度終わりとさせていただきます。

次回の更新は・・・未定です。
待ってくれている方々、申し訳ありません

第１５話　邂逅（前書き）

どうも、３ヶ月ぶりの更新です・・・いろいろすいません。
予定倍増＋話が煮詰まる＋最悪なサボり癖でこんなにも間が開いてしまいました、
前後編にする予定が、これまたこっちが長すぎるので、前後編は諦めました。
この３ヶ月間で、私もだいぶ変わりました。
新しい部活に入ったり、思想もこれまで以上に右傾化したりと・・・
もともと私自身は右翼的な考えでしたが。
まあガンダムの話ではそんな事関係ないですけどね、
では本編をどうぞ。

第１５話　邂逅

＜クレタ沖＞

ミネルバは敵の砲撃に曝されながらも進む。
この時、艦の損傷率は５０％を上回り、ＣＩＷＳやレーダーといった“傘”も、
殆どが死に体だった。
このままオーブ軍が自己鍛造弾の攻撃を続ければ、ミネルバはほぼ確実に、
海の藻屑となる。
空は数日前から厚い雲に覆われ、希望の光を照らす太陽を隠していた。

アムロ達が連合のＭＳ隊の相手をしている間に、ハイネ隊は対艦攻撃をする事となった。
しかし、グフ・イグナイテッドは対ＭＳ戦闘を主眼に置かれた白兵戦用ＭＳ。
本来、グフは対艦攻撃のような大火力での戦闘をするような代物ではなく、
インパルスのエクスカリバーのような規格外の武器も持ってはいなかった。
この時点で、既に戦法が破綻をきたしていることは誰の目にも明らかだった。

――――しかし、それはあくまで、
敵艦の装甲が重戦艦・重巡洋艦レベルのものだと仮定した場合である。
オーブ艦の殆どは護衛艦のような中型艦艇。
装甲的には、グフのビームガン程度でも、なんとか通用するレベルだった。

ハイネ隊は、ミネルバ前方の右翼に展開する分艦隊を攻撃した。
後方に位置する艦隊は手のつけようがなく、
ミネルバは傷だらけの韋駄天の足を酷使して、逃げの一手にまわるしかなかった。

ハイネ隊は個々の判断で攻撃を仕掛ける戦法を取った。
ハイネ自身、集団での連携を取る事はあまり重視せず、
各々の戦闘力が勝敗を決するという考えがあり、
更にこの物量的不利な状況が拍車をかけた。
しかし、この策は思わぬ失敗を招いた。

「そこだ！」

ベリエスのグフイグナイテッドは、敵の護衛艦に突進した。
３艦構成の分艦隊は、三角形をつくるように航行し、
ミネルバの動きにあわせて後退を行っていた。
せめてミネルバを傷つける砲台だけでも無力化する必要がある。
ベリエスは４連装ビームガンの照準を護衛艦に合わせた。
しかし、飛行ユニット“シュライク”を装備した、
Ｍ１アストレイの３機小隊が行く手を阻み、ビームライフルの一斉射を放つ。
ベリエスは舌打ちをしてそれを回避すると、ビームガンを撃ちつつ、
ビームソード“テンペスト”を引き抜き、その小隊に突進した。

そのうちの一機を捉えたベリエスは、撃墜を確信した。

（行ける！）

しかし、その小隊は散開すると、すぐさま上昇し、
手際よく陣形を整えた。
代わりに、別の3機小隊がベリエスにビームライフルの攻撃を仕掛ける。

「！」

一瞬何が起こったか理解できず、硬直してしまったベリエスだが、
我に返ると、すぐさまスロットルを全開にしてその攻撃を回避する。
避けきる事は出来ず、右脚と左腕に被弾した。

「何だってんだこりゃ！」

ユイやジョナサンも同じ目にあっているようで、
ハイネが辛うじて一機撃墜した程度だった。

「コイツら、前とは比べ物にならないくらい強いじゃないの！」

叫ぶユイをかばいつつ、ジョナサンは敵の戦力向上の理由について、
冷静に考え始める。
短期間に、将兵たちのパイロットスキルを底上げできるとは思えない。
そう、これは戦法の問題なのだ。
オーブ軍はそれぞれの分艦隊に数機のＭＳを護衛につかせ、
その行動目的を防御だけに置き、極力単独行動をしないようにさせている。

そうなれば、単独で攻撃を仕掛けるハイネ達は不利だ。
例えるなら、ラグビーの選手たちが組んだスクラムを、数人の人間達が闇雲に叩いているようなものだ。

「ハイネ、頭を切り替えよう。こちらも束になってかかる必要がある」

「ジョナサン・・・!?クッ・・・だが、その通りみたいだな」

ハイネはグフの右腕で合図をすると、ジョナサンを基点にして密集陣形を取るように誘導した。
しばらく戦闘をして、何とか一隻の護衛艦のブリッジを潰すと、ベリエスがあることに気がつく。

「・・・ムラサメが居ない?」

「え?何て言ったの?」

「気がつかないのか!?ムラサメが居ねえんだ!」

ベリエスが言った通り、現行の主力ＭＳであるはずのムラサメは一機も居ず、
前大戦時に開発された、旧式のＭ１アストレイの飛行タイプしか護衛にはついていなかった。
ハイネ隊が襲撃した分艦隊に気がついた周りの分艦隊が護衛機と共に接近してくるが、
その中にムラサメの姿は確認できない。

(何でだ?・・・まさか!)

二人のやり取りを聞いていたハイネは、上を見上げた。
分厚い雲の向こうを、見つめた。

「ハサウェイ・・・なのか!?」

「・・・やっと、僕の正体に気がついたか、アムロ!」

内面装甲までも吹き飛んだコクピットからクリスト――――ハサウェイ＝ノアが叫ぶ。
ハサウェイは操縦桿を半ば強引に動かし、
満身創痍の機体を酷使すると、残った左腕で、νガンダムにビームブレイドをつきたてた。

CG合成ではなく、実景を見ながら操縦する事になり、
彼には大きなハンデになった。
通信機は生きている。
レーナの生体反応も消えてはいない。
νガンダムだけでも倒して、早急にレーナを連れて帰る必要があった。

「やめろハサウェイ!」

νガンダムはそれを難なくかわすと、逆にその手首に当たる部分を握り、
柔道で言うところの、引き手の要領で引っ張り出して体勢を崩すと、背部のスラスターに、所謂“空手チョップ”を見舞った。
ビームサーベルは抜かない。
ハサウェイと、“彼女”を捕まえようという意識が働いていた。
“空手チョップ”による衝撃で、スラスターは調子を狂わせたようで、
視認できるほどのプラズマを放出していた。

「自分のやっている事がわかっているのか！」

「的外れな事を！」

「そうかい！」

アムロはストライクノワールの手首から先を強引に引きちぎり、更にかかと落としを喰らわせた。

「何時までもそんなもので！」

物理攻撃でシステムの大半が死んだストライクノワールを、ハサウェイはスラスターを全開にしてνガンダムにぶつけた。
体当たりをシールドで防いだものの、νガンダムにもかなりの衝撃が伝わった。

「貴様を倒せば、僕は“彼女”に・・・！」

「チイッ、子供に付き合っていられるか！」

業を煮やしたアムロは、ストライクノワールを無理やり引き剥がし、地面に叩き付けた。
頭部バルカンを最後の抵抗として撃ったハサウェイだが、右ストレートを顔面に喰らい、メインカメラは見るも無残なスクラップへと転じた。

「うわ……！」

これまでにない衝撃がハサウェイを襲い、気絶した。

「……ハサウェイ」

アムロは未だ健在なウィンダム隊のビームライフルの斉射を避けながら呟いた。
この世界にハサウェイと“彼女”が飛んできた以上、是が非でも話を聞きたいと、
アムロはそう思った。
今は戦闘中である。
戦闘終了後に回収しようと考えたアムロは、アームレイカーを握りなおしたとき、
突如、上空の厚い雲の上から、敵意を感じ取った。

「敵……？」

アムロはウィンダムを退けつつ、雲の上を見上げた。
何かの群れが急速にミネルバに近づいているような感覚。
生憎、アムロはそれが何であるかを、
はっきりと認識するだけの勘の良さは持ち合わせていない。
しかし。その敵意がミネルバへと向いていることだけは、はっきりと認識できた。

「！……そうか！チイッ、やられたか！？」

ウィンダムにかまっている暇はないと判断したアムロは、νガンダムのバーニアをフルスロットルで稼動させ、ミネルバへ接近し、通信回線を開いた。

「艦長、罠だ！敵の攻撃隊は上から来る！」

「アムロ、それはどういうこ……」

タリアが呟いた時だった。
オペレーターの一人が声を上げ、タリアを振り返る。

「艦長、多数の熱源を探知！十二時の方向、距離９００、高度約１１０００フィート！」

「！……索敵、何をしていた！」

「そ、それが、レーダーがほとんど破壊されて……！
また来ます、三時の方向と九時の方向より、多数の熱源を探知！
全て雲の上です！」

「クッ……！」

タリアは年甲斐もなく歯軋りする。
結論から言おう。奇跡でも起こらない限り、ミネルバは沈むほかないのである。
三方向から来た敵が全てミネルバを標的として編成された部隊だった場合、

ミネルバにはそれを迎撃できるほどの力はもう残されていないのである。
艦載機は敵の応戦で手一杯、敵もこれを狙って、
執拗な妨害をしてくるのは目に見えている。
唯一この状況に気が付き、艦の直衛に付こうとするνガンダムと、
雀の涙ほどの迎撃システムしか残されていないミネルバでは、とても捌ききれない。
攻撃隊は程なくして雲海から飛び出す。
案の定、一撃離脱戦法を得意とし、高威力の実体弾ミサイルを搭載した、
ＭＡ形態のムラサメだけで編成された部隊だった
悪天候を利用し、レーダーや対空防御火器の無効化と合わせた作戦。
細かいところ以外は、ユウナが考えた作戦である。

「か、か、か、艦長！」

「総員、衝撃に備えよ！ＭＳ隊を全機呼び戻して！
ダメージコントロール班は指示があるまで待機！取り舵十！最大戦速！」

「チイッ、間に合え！」

アムロは左舷からミネルバを攻撃するムラサメ隊にビームライフルを数発放った。
一発は見事に命中し、ムラサメを貫通、もう二発がムラサメに掠る。
しかし、他は健在のままであった。

ムラサメ隊のパイロット達やユウナは勝利を確信した。

（これでチェックメイト……そう、オーブの手であの艦を沈める

んだよ！）

オーブが手を下すことで、連合に対して意識的な貸しを作る。
これがユウナの狙いの一つだった。
もちろん、オーブが直接手を下すことに難色を示す将校たちもいたが。

「このままではミネルバが沈む！何か策は……！」

アムロは頭をフルに回転させて策を練るが、ムラサメ隊はそれを嘲笑うが如く、
ミサイルを発射した。

「……ッ！」

「そんな……！」

無意識に手を伸ばすアムロ。
数多のミサイル群がミネルバに殺到する。
指令を受けたシン達やアムロも含め、全員が諦めかける。

その時だった。

どこからともなく発した七色の閃光が、ミサイル群を貫く。

数発はそのままミネルバへと着弾したものの、ミネルバを沈めるまでには至らなかった

「なんだ……助かったのか？」

頭を抱えていたアーサーが辺りをキョロキョロと見回す。

“あの時”と同じく、戦場が凍りついた。

再び、あの“ホワイトベース”に似た白亜の戦艦と、
青き鉄の翼を持ったガンダムが舞い降りたのだ。
あわててムラサメ隊は手はず通りの高速離脱を行う。
他の二隊もそれに気が付いたようで、波状攻撃を断念し、高速離脱態勢をとった。
しかし、そのガンダムはそれを許さず、再びＭＳのコクピット以外を攻撃し始めた。
同時に、再び現れたストライクルージュに乗るカガリ＝ユラ＝アスハから、
オーブ軍の撤退を促す声明が全周波通信で発せられる。

「また奴か！」

苛立ちを募らせたアムロは、標的をフリーダムに切り替える。
ミサイル群を叩き落してくれたのはありがたいが、
それはあくまで彼等が“オーブの戦闘行為を阻止する”ためである。
アムロは納得せずともそれは理解していた。

（だが青いな。そんな手段では、真に彼等の行動を止める事など叶わない。
押し付けの正義感など、所詮エゴに過ぎないんだ……！）

アムロは臍を固めると、ビームライフルを構え、
フリーダムへと突進した。
そのνガンダムの後方に、アスランのセイバーが付き従うように続く。

「アスラン？」

「隊長、フリーダムの相手は私がします！
隊長はシン達の指揮を！」

「いや、俺からも言いたい事がある。彼等には既に艦の直衛につくよう指示してある。
いざというときにはハイネも居る。アスラン、君はシン達と共に艦を守れ」

「隊長、ですが」

「これは命令だアスラン。君の事もわかるが、ここは俺に任せてくれ」

「……了解！」

アスランは承諾すると、セイバーを変形させ、シン達の支援に向かった。
アムロがアスランをフリーダムと対峙させなかった理由としては、単純にシン達だけでは防ぎきれないかもしれないという不安と、もう一つは彼自身がまだ迷っているかも知れないと思ったからだ。
口では決心したように思えても、人間はいざその状況に立つと弱いものだ。

特にアスランのような場合は。

（すまないなアスラン。だが彼は強敵だ。
君に任せられないのも信用していないようで辛いが……ここは僕が引き受ける。
彼には荒療治が必要かもしれないし……殺さなければならないかもしれないんだ）

ＭＡ形態のセイバーを見送り、先ほどの戦闘からついてきたウィンダムの一機を潰すと、
改めてフリーダムを視界に捕らえた。

ここで、νガンダムとフリーダムの戦闘能力差について考察してみようと思う。
私見であるが、結論からすれば、この戦い、フリーダムが有利である。
設計段階から高々度高機動空中戦闘を想定されて開発されたフリーダムに対し、
νガンダムは宇宙戦闘用ＭＳに無理やり空戦用にバーニアを改造・調整しただけの、
お世辞にも扱いやすいとは言えない、安定性の低い機体であった。
いくら拡張性に余裕がある構造といえど、元々想定されていない戦術に対応させるのは、
やはり少しばかりの無茶があったのだ。
常人が使うならば、空戦特化型のセイバーやインパルスを使ったほうが、
よっぽど戦果を残せるといった状況だった。

また、ここは海上。必然的にνガンダムは相手の土俵で戦うことになる。
まともに戦っては、νガンダムに勝ち目はないのだ。

ちなみに、アムロが未だνガンダムを使っている理由は、
アムロの反応速度についてこられる機体が、νガンダムくらいしかなかったという理由と、
機体自体に愛着がわいて来たからである。

もう一つ重要な要素としては、やはりキラの鋭敏すぎる反射神経がある。
あらゆる攻撃を回避するその反射神経は、アムロが遭遇した敵の中でも、
おそらく高いほうであろう。
数々の敵をいなしてきた彼でも、この一騎討ちは大苦戦することは明白であった。

まず手始めに、牽制射撃も含めてアムロは数発のビームを発射した。

「何!?横合いから来るの?」

フリーダムはそれを全て避けると、ビームサーベルを抜刀し、
そのビームの発射源を探した。ものの数秒でそれを発見したキラは、
その機体を見て一人呟いた。

「あの機体は……!」

以前の会戦で、彼が苦戦した白亜の大型ＭＳ。

フリーダムと同じ「ガンダムタイプ」のＭＳ。
決して侮れぬ相手と自覚したキラは、そっと目を閉じ、精神を集中させた。
瞳の中で何かが弾けるような感覚と共に、再びキラの瞳は輝きを失った。
間髪をいれずフリーダムに急制動を駆けたキラは、
火器管制の照準をνガンダムのメインカメラに合わせた。

「そんな手に乗るものか！」

フリーダムが音速を超えんばかりの速度でνガンダムの横をすり抜けると同時に、
エネルギーの渦がνガンダムのメインカメラに殺到する。
あまりにも速いスピードに、アムロは一瞬焦りを感じたが、
何とかメインカメラを持っていかれるような事態は防ぐことができた。
単純な攻撃だが、対応もできないほどのスピードで迫られると恐ろしいものだ。
すり抜けた後の機体は無防備。
すぐに真後ろに向かってビームライフルを発射しようとするが、
既に敵意はそこには存在していなかった。

再び焦りを覚えた刹那、真下からの強力な敵意を“全身”に感じた。
ここで言う“全身”とは、即ちアムロ自身の肉体のことではない。
νガンダムの腕、脚、メインカメラなどの事だ。

キラはフリーダムの、常人の理解を超えた急制動や急加速を実現するその機動性を駆使し、
νガンダムの死角に回り込んだのだ。
アムロが気が付いたときには、フリーダムは既に、

“ハイマット・フルバースト”の発射体勢に入っていた。

「クッ……！」

宙返りの要領で緊急回避するアムロだが、
その直前に発射された七色の光線の一筋が、νガンダムの右脚を掠る。
一方のアムロもただやられるだけではなく、半回転したときに、
全弾発射で完全に無防備になったフリーダムに対し、ビームライフルを放った。

「！」

流石のキラでも反応することはできたがコンマ一秒程遅く、
右肩をピンクの閃光が焼いた。

「右肩が、やられたの！？」

思いがけぬ被弾に困惑するキラに、アムロは更に追い討ちをかける。

「動きを止めた…！ならばやらせてもらう！」

左手でビームサーベルを引き抜き、発振すると共に、
ビームライフルを腰にマウントすると、バーニアをフルスロットルで噴射し、
自由落下も加わって、νガンダムは音速に迫る勢いでフリーダムに肉薄した。
狙いはただ一つ。生身の操縦者が収まるコクピット。
キラもそう予測したようで、フリーダムは体をよじらせ、
その攻撃を避けた。

はずだった。

突如フリーダムのコクピットに響いた激震と、体勢を大きく崩した機体に、
キラは困惑する。

（そんな…避けたはずなのに……！）

そう、キラはビームサーベルの突き自体は回避しているのだ。
しかし、アムロはビームサーベルが避けられたと知覚すると、すぐさま、予め空けておいた右腕で、首元にあたる部分に、ストレートを放ち、そのままフリーダムに組み付いたのだ。

「このまま！地上にさえ叩きつければ！」

フリーダムはνガンダムに組み付かれた状態で自由落下を続け、ちょうど、クレタ沖の数多の島々の一つに衝突した。
衝突する直前、キラがバーニアペダルを強く踏み込み、
フリーダムは、その機体を母なる大地に投げ出す行為だけは避けられた。

しかし、体勢を立て直した瞬間、ピンクの刃が、
シールドの表面をうまく避けながら、ビームコーティングがなされていない裏面からその半分を攫う。
シールドの半分が無くなったと知覚した瞬間、今まで眠っていた何かが目覚め、
キラは急いで、フリーダムを羽ばたかせようとする。

それとほぼ同時に飛び上がったνガンダムがフリーダムの視界を遮り、
今度はシールドアタックで機体を弾き飛ばす。

アムロの目的はこれだった。
わざわざ相手の土俵では戦わず、地面に叩きつけることで、
比較的得意である陸戦に持ち込む。

度重なる衝撃で危うく舌を噛みそうになったキラは、こう呟いた。

「クッ…どうしてこんな！」

「その声、やはりキラ君か！
チイッ、やはりオーブには戻っていなかったという事か！」

「！」

回線をオープンにしていたアムロは、キラの声を拾ったようで、
キラにも彼の呟きは聞こえていた。
もっとも、アムロはフリーダムから前回の会戦時に感じた敵意、
そして、ディオキアで彼とあったときの感覚と似たものを感じ取っていたため、
薄々感づいてはいたが。

「その声は、やっぱりあの時の！」

「答えろキラ君！なぜこんなマネをする！
戦闘に介入し、武力で両陣営を引っ掻き回したところで、
大勢には大して影響などしない！貴様の行為は無意味だといったはずだ！」

「クッ……！」

空に離脱することを諦め、フリーダムはビームサーベルを引き抜き、νガンダムに切りかかった。
νガンダムはホバーを起動させ、それに応戦する。
ここからはＭＳ戦闘特有の白兵戦だ。

余談だが、ＵＣ世界のＭＳはグリプス戦役の頃から、地上や月面での移動手段として、脚部バーニアによるホバリングが主流となっている。
νガンダムとて例外ではない（はずだ）。

お互いのビームの剣がぶつかり合い、鍔迫り合いが展開する。
高温の微粒子が飛び散り、双方の機体の表面装甲を焼く。
フリーダムのほうも、衝撃でフェイズシフトの出力が低下し、システムがダウンしかかっている部分もあった。

「僕は……それでも僕は……この戦いを放置しておくわけには行きません！」

フリーダムは一度はじき返されたビームサーベルをもう一度振りかざし、それを囮にして、
もう一本サーベルを抜刀し、νガンダムの左腕の付け根、つまりビームサーベルを持つ腕を元から絶とうとした。
νガンダムは囮のビームサーベルに反応し、キラの目論見は成功したかに思えたが、
νガンダムは本命の攻撃まで防いだ。
ビームサーベルをマウントする腰から繰り出した斬撃を、フリーダムの手首にあたる部分を掴む事で食い止めたのだ。

お互いに腕を突っ張りあい、膠着状態が続くと思われた張り合いだが、
νガンダムがフェイントつきの十六文キックをフリーダムの胸部に打ち込む事で、
この状況は打破された。

十六文キックとは、旧世紀のとある日本人プロレスラーの使った技である。
本来はハイキックという蹴り技である。

「チィッ・・・！貴様らのエゴに付き合えるものかよ！」

そんな往年の必殺技を繰り出したアムロは、
腰にマウントしていたビームライフルを装備し、
フリーダムのコクピットに照準を向けた。
当然、これにキラが気付かないはずもなく、すぐさまバーニアを噴かして、
空へ舞おうとする。
それを阻止せんと、アムロはビームライフルのトリガーを引いた。
命中するかと思われたビームの閃光だが、キラとて非凡なる才能の持ち主。
廃熱によってビームのダメージを軽減、もしくは無効化する、
「ラミネート装甲」が施されたシールドを突き出し、そのビームを無効化する。
その時である。

「僕は・・・」

「？」

フリーダムの回線から流れてきた擦れた声色の呟きに、アムロは一瞬だが気をとられる。
不思議なことに、一秒にも満たない時間が、アムロには一分、一時間に引き延ばされて感じた。

「僕には・・・もうこの方法しかないんじゃないかって思えてきたんです。
あの時もそうだった。僕達があの戦争を止めた。
僕達なら出来るんだって。それだけの力があるんじゃないかって。
だから僕は、もう一度戦ってみようと思ったんです。もう一度オーブを止める為に・・・」

「・・・」

アムロはただ無言であった。

「だからアムロさん。僕はこのやり方が間違っているとは思えません。
あなたが僕達の前に立ちはだかるのなら、僕はあなたを討ちます！」

キラがそう宣言した瞬間、意識が急に生身の刻の流れに引き戻され、フリーダムが先ほどよりも更に早い動きでνガンダムに襲い掛かる。
サーベルを抜くスピード、それから斬撃に入るまでのタイムラグ、ライフルを構えてから撃つまでの差。全てが違った。

しかし、アムロは決してそれに焦る事はなかった。

そうだったのか。そういう事だったのか。と。
そう、少なくともキラは負けたことがないのだ。
自分の能力をどこかで過信し、それを必勝の策として戦いに臨む。

彼を動かしているもの、それは彼自身の絶対的な力であった。
アムロに戦いを挑んだあのシャアと同じで、自分ならば出来ると思い込んでいる根性。
そうとなれば、ここは“あれ”が必要と相場が決まっている。
アムロはアームレイカーに力をこめ、変態としか言いようのない動きを繰り返すフリーダムに、
ビームライフルを向けた。
当然、フリーダムはそれより先に回避し、そのままの勢いでνガンダムの懐に飛び込んでくる。
フリーダムのビームサーベルが光る。その得物は確実に標的であるビームライフルを火球に転じさせた。

しかし

「ライフルが欲しいのなら・・・!」

その爆発の中から飛び出した鉄拳が、フリーダムのメインカメラを殴り飛ばす。
続けてバーニアを吹かせて突進したνガンダムが、腹部に正拳突きを打ち込む。

「ガンダム、もってくれよ!」

いきなりの出来事にフリーダムは完全に体勢を崩した。

「聞け、キラ君!自惚れるんじゃあないぞ!
自分の力量を、観念や思想を裏付ける道具にする!
この期に及んでそのエゴを振り回すというなら、その根性・・・」

「!」

νガンダムの体を深く沈め、アムロはバーニアの噴射と共に、フリーダムのメインカメラを再び殴り飛ばした。

「修正してやる！」

フリーダムのメインカメラは遂に砕け散り、コクピットにはなんら外の情報が伝わらなくなった。

確かにフリーダムの動きは早い。
しかし、単に動きが早くなっただけで、攻撃パターンは変わらなかった。
それだけに、戦闘経験を一年戦争の時から積んできたアムロに、それを見破られてしまったのだ。
フリーダムの大火力・大出力を生かした戦法に固執し、ＭＳ本来の戦術的な創意工夫を忘れたキラには、即座に戦術を変えるという芸当は至難の業であったのだ。

「や・・・やられた・・・の・・・？」

キラには信じられなかった。いや、考えても見なかったというべきか。
手を伸ばし、キーボードを取り出す。
システムの再構築をほぼ一瞬で終えたキラは、サブカメラをフルに活用し、
外の状況を映し出した。

そこに映っていたのは、ビームサーベルを今まさにコクピットに突きたてんとするνガンダムだった。

「死んでくれ・・・！」

「！」

もう戦えそうにない。そう判断したキラは、スラスターを最大出力で噴かし、
νガンダムの斬撃を回避し、そのままの勢いでνガンダムから遠ざかっていった。

「キラ君！？」

フリーダムの撤退に気が付いたアークエンジェルの艦長、
マリュー＝ラミアス三等海佐からの通信がキラの許に届く。

「すみませんマリューさん。僕に出来るのはここまでみたいです」

「こちらもだいぶ押されているわ。ここは撤退すべきでしょうね。
それに、ここであなたを失うわけにはいかないわ」

「はい、回収をお願いします！」

フリーダムとアークエンジェルは戦線を離脱、アークエンジェルは潜行し、
フリーダムは姿をくらました。

小島に独り取り残されたアムロは、ビームサーベルを収め、
その様子を見送った。
息を切らし、ヘルメットを取ると、アムロは額に流れる汗を拭った。
下着もだいぶ汗でぬれていて、気色が悪い。

（一瞬でも気を散らせば、やられていたかもしれないな・・・）

思えば恐ろしい相手だった。
殺気は感じにくく、それでいて反射神経が恐ろしく鋭敏。
やはり厄介な相手だったとアムロは振り返る。
後方でひときわ大きな爆発の光輪が咲くのを知覚すると、
アムロはすぐにミネルバの救援に向かった。

フリーダムは撤退した。
うろたえたままだったオーブ軍に対し、ザフト側はすぐさま体勢を立て直し、
反撃へ転じた。
フリーダムの介入も、決して災いばかりをもたらしたわけではなかったのだ。
ミネルバ攻撃部隊のムラサメ隊は今や風前の灯である。
混乱で命令がいきわたらず、彼等は空母に帰還するタイミングを失ったのだ。
ユウナの作戦は完璧だったはずだった。
しかし、彼も所詮はただの政治家。
戦争のプロフェッショナルではない。
想定していない事態に、極端に弱かったのだ。
混乱したムラサメ隊は独自行動をとり始め、そこをシンやハイネ達に各個撃破された。

アムロが駆けつけたとき、大体の敵は片付いていた。

「アムロ隊長、こちらの戦果は上々です。フリーダムは？」

ミネルバに飛来したミサイルを撃ち落したセイバーから通信が入る。

「撤退したよ。あの戦艦と共に」

「・・・わかりました」

アスランも、殺さなかったという事実はつかんだようだった。

現在、ミネルバの直衛についているのはアスランのみ。
シンはフォースシルエットに換装、直接旗艦を目指し、レイとルナマリアは損傷でミネルバ内に退避。
ハイネ隊は再び護衛艦群を潰しにかかっていた。
護衛艦群も５０％以上が戦闘不能に陥り、自己鍛造弾攻撃は中断、オーブと連合のＭＳも、アムロが撃墜した分も含めて、ほとんどの戦力が消滅した。
カオスはシンのインパルスを追いかけ、アビスはシンとの戦闘の最中損傷、撤退した。

もうオーブ側に戦力は残されていなかった。

しかし、封鎖を行っていた地球連合艦隊は突撃を敢行したのだ。
オーブ艦が後退する中、連合の艦隊戦力はまだ残されていた。
ＭＳは僅かに１０機弱。しかし、艦砲射撃とミサイル攻撃さえあれば、
既に弱りきったミネルバを撃沈するには十分だった。
これを指示したのは他でもないファントムペインの指揮官、
ネオ＝ロアノーク大佐だ。
ネオは受話器をとり、ユウナの座乗艦、タケミカヅチへ通信を入れた。

＜タケミカヅチ　ブリッジ＞

ではそのタケミカヅチの艦内はどうか。
フリーダムの出現を完全に計算に入れていなかったユウナは、
ザフト軍に押されて撤退するオーブ護衛艦群を見て、怒りを露わにしていた。

「何をしている！僕は撤退を許可した覚えはないぞ！
護衛艦群は・・・！」

「ユウナ様！ご覧になられてわからないのですか！」

声を荒げるユウナを、制帽を直したトダカ一佐が振り返る。
ユウナは既に氷しか入っていないコーヒーの紙コップを握りつぶし、
自分の軍服に、氷をこぼしていた。

「何を言っている！この作戦の発案者は僕！
そして、責任を取るのも僕なんだぞ！
あの仮面の男に刺されたいのか！」

「ユウナ様！落ち着いてくださ・・・」

シートを立ち、紙コップをトダカに投げつけようとするユウナを、
アマギ一尉がなだめようとした時だった。

「ユウナ様、Ｊ．Ｐジョーンズより通信が入っております！」

オペレーターの一人が声を上げ、ユウナは我に返って、
振り上げた腕を下ろした。
モニターがつき、仮面の男が映る。

「ユウナ＝ロマ＝セイラン。何故艦を下がらせるのです。
ミネルバはもはや風前の灯。このまま押せば、
わが艦隊の勝利は確実のものとなりますが？」

「私の命令したことではない！
それに、御宅のＭＳ隊はどうなっているんだ！」

「それは・・・まあ・・・結果的に、オーブも連合も痛みわけ、
ということで・・・」

「味方同士で痛みわけだと！？
ふざけたことを言うんじゃあない！」

つい先日は一方的に気圧されていたユウナだが、
今回は逆に圧倒している。
作戦自体は失敗したものの、やはり頭を打ったのが効いたか？
と思うトダカだった。

「ですがユウナ様。そういう事態になったのも、
貴官の発案した作戦が失敗に終わったからでありますが？」

「わぁかっている！作戦失敗の責任は僕が取る！
手柄は大佐に譲るよ！」

一方的に通信を切ると、ユウナは受話器を置いた。
それと同時に、モニターが切れる。

「ご、ご立派ですユウナ様！
自ら責任を取るとおっしゃられるとは！」

「・・・え？」

その瞬間、ブリッジが凍りついた・
なんとこの男、怒りのあまり言ったことを忘れたようである。
頭に昇った血が段々とさがるにつれ、ユウナは落ち着きを取り戻し、
事の重大さにやっと気が付いた。

「ま、まあ・・・ＨＡＨＡＨＡＨＡ・・・。
だいぶ取り乱したみたいだ・・・ねえ？」

「はい。仰られるとおり」

冷や汗を拭うユウナに対し、トダカが頷く。

訂正しようにも、後の祭りであった。

タケミカヅチのプランが失敗したとはいえ、
地球連合軍が優位に立っていることには変わりはない。
インパルスはタケミカヅチと残ったＭＳ隊に気を取られ、
連合艦隊の進撃には気が付かなかった。

そして、その連合艦隊は特攻を覚悟で進撃していたのであった。
沈没寸前のミネルバのブリッジでは、確実にその姿を捉えていた。

「艦長！封鎖を行っていた連合艦隊が動きました！
まっすぐこちらへ向かってきます！」

「この動き・・・やつらは特攻を仕掛けるつもりです艦長！」

涙目のアーサーが、歪んだ制帽を直さぬままに振り返る。

「・・・こうなれば最後の手段ね。タンホイザー、強制起動！」

「いけません艦長！まだ修理は済んでませんし、使ったら何が起こるかわかりませんよ！」

「ここで撃沈されては元も子もないでしょう！」

「で、ですが・・・！」

「迷っている暇はないわ。起動！」

タリアの命令で、タンホイザーが艦最前部から姿を現す。

「何！？タンホイザーを使うつもりか！？
いけない艦長！何が起こるか・・・！」

「でもアムロ、これ以外に有効な手段はないわ。
目標、右舷前方、地球軍艦隊！」

タリアの命令と共に、タンホイザー内のエネルギーが上がっていく。
しかし、ここで予期せぬ事態が起こった。

「艦長！エネルギー変換効率が極端に落ちています！
平常時の１９．９％！」

「何ですって！？」

タンホイザーを無理やり起動させたが故の弊害であった。
その間にも、連合艦隊は段々と、着実にミネルバへ向かってくる。

「・・・アムロ、頼みたいことがあるの。
艦隊の足止めをお願いできる？」

「了解だ艦長。ミネルバを沈めさせやしない」

了解すると、アムロはすぐにスラスターを噴かし、
艦隊へ向けて突っ込んでいった。

エネルギーチャージが終わるまで２００秒。
短いようで長い時間。
ものさしを変えただけで、短いか長いかは変わって来る。
この場合、νガンダムからすると短い、
ミネルバからすると長いという風に見れるだろう。

νガンダムの接近と共に、艦隊からハリネズミの如き弾幕があがる。
残ったＭＳも総動員でνガンダムに襲い掛かる。
νガンダムはそれを無視しながら、一隻のダニロフ級イージス艦を
狙った。
ミサイル群がνガンダムに噛み付く。

νガンダムはそれを一蹴する。
ミネルバから射出してもらったビームライフルを艦橋に向け、
アムロは引き金を引いた。
まっすぐ伸びたその光線は艦橋を直撃し、艦長もろともクルーを蒸発させた。

「艦長！ザフトの大型です！」

「構うな！ＭＳ隊はなんとしてでもあいつを止めろ！
我々はミネルバを沈める！」

分艦隊司令のダニロフ級艦長の命令で、全艦が機関最大出力で、
ミネルバに突っ込む。

「やらせるかよ！」

艦橋を潰したダニロフ級のビーム砲を蹴り飛ばすと、
アムロはすぐさま別の艦を潰しにかかった。
しかし、特攻してきたウィンダムが、νガンダムに組み付き、
νガンダムは海中へ叩きつけられた。

「！？」

「残念だったな！貴様も俺と心中だ！」

別のウィンダムが上空に現れ、νガンダムに組み付いたウィンダムを狙う。

「！・・・味方を撃つつもりか！？」

「そこだ！コーディネイターのＭＳ！」

そのウィンダムは躊躇なく味方のウィンダムを撃った。

「やられる！？」

スラスターを全開にして海中から飛び出すと、ウィンダムを反転させ、
突き飛ばして盾にし、更にＡＢＣシールドを奪って目の前にかざした。

「な、何だと・・・」

撃ち抜かれたウィンダムのパイロットは、状況を理解できぬまま死んだ。
撃ったほうのウィンダムも凍りつき、隙ができたところを、
νガンダムに撃ち抜かれた。

「次だ！」

アムロは改めて次の標的を狙った。
しかし、ミネルバからの通信がそれを制した。

「アムロ隊長、時間です！
射線上から離れてください！」

「時間か・・・了解、退避する！」

タンホイザーのチャージが完了した。
後は発射するだけだ。

発射が成功すれば、大勢は決する。第９９独立戦隊の勝利だ。
アムロはビームライフルを腰に収め、退避行動をとった。
その時だった。

「ん？」

突如、警告音がコクピット内に響く。
なんと、推進剤の残量がわずかしかないのだ。
更に悪いことに、酷使していた機体が遂に限界を迎え、
スラスターが故障、脚部バーニアからも黒煙が上がった。

「チィッ、バーニアが！」

アムロはアームレイカーを何度も動かしたが、反応はなかった。
浮力を失い、νガンダムが落下していく。

「アムロ！」

「艦長、撃て！今を逃せばミネルバは沈む！
僕に構わないでくれ！」

アムロは力いっぱい叫んだ。
ここで終いなのかもしれない。
シャアと共に、様々な命を巻き込んできた、
自分自身の人生の。
名残惜しい事はいくらでもある。
しかし、その為に、アムロはミネルバのクルーたちまで巻き添えには出来なかった。
だが、アムロは希望を捨てることはなかった。

何かあるはずだと、頭をフルに使った。

タンホイザーの砲門が光り始める。
不安定な修理状況の為、５０％の出力で発射することになるが、
密集して突っ込んでくる艦隊をまとめて蹴散らすには十分だった。
もちろん、制御を失ったＭＳを消し炭にするにも。

「クッ・・・タンホイザー撃て！」

タリアの号令と共に、先の会戦での無念を晴らすかのように、
タンホイザーが発射される。
それは連合の艦隊に殺到し、その鉄の船を一瞬にして消し炭にした。

「蒼き清浄なる世界の為に！」

連合軍の士官の叫びがとどろき、光の渦の中に消えていく。
そのエネルギーの渦は、νガンダムにも殺到した。

「・・・！」

アムロは目を瞑った。
後は死を待つのみ。

（・・・）

無の時間が過ぎていく。
アムロは未だ来ぬエネルギーの渦を見遣った。

そこに居たのは、シールドをかざしたインパルスとセイバー、
そしてハイネのグフイグナイテッドだった。

「!?」

信じられない光景に、アムロは自分の目を疑った。
目を擦った刹那、アムロの視界が流れ、
インパルスとセイバーが右に流れていく。

次に気が付いたとき、νガンダムは3機のグフにつかまれ、
空を浮かんでいた。

「アムロ隊長、大丈夫ですか!?」

若い女性の声ーーーーユイと知覚した瞬間、
アムロは事態を悟った。

「助けてくれたのか?」

「ええ、みんなで!」

「みんな?」

アムロは辺りを見回した。
全天周囲モニターに移ったMS達は、文字通り“皆”だった。

そう、緊急発進したレイとルナマリアが周囲の敵をひきつけ、
シン、アスラン、ハイネが一時的にタンホイザーを防ぐ。
そして、ベリエス、ジョナサン、ユイの三人で、νガンダムを押し出したのだ。

「アムロ隊長、ご無事で何よりです!」

「シン、君も無茶をする。皆も！」

「ですが隊長。隊長はザフトにとっても我々にとっても、大切な存在です。失うわけには行きません」

ジョナサンが言う。

「皆若いんだ。俺みたいな老いぼれなんか・・・」

「なあに言っちゃってんの！
老いぼれとか何とか、心が爺さんみたいなこと言っちゃってどうすんのよ！？
アムロならもっと前向きだろ？」

相変わらずの口調とテンションで語りながら、
ハイネのグフが横に出る。

「そうですよ隊長！だから、そんな弱気な事言わないでください！」

グゥルに乗ったルナマリアのザクもまた横に出る。
片腕は失っているようだった。

「それが信頼というものです、隊長」

「ルナマリア、レイ・・・！」

「みんな隊長の事、信頼してるからこんな事言うんですよ！
もっと自分に自信を持ってください！
老いぼれとか爺さんとか、そんな事誰も思ってませんから！」

「べりエス・・・！ははは・・・俺もまだ戦えるってことかな。信頼してくれる部下がいる。隊長として、こんなにうれしい事はない」

「ありゃ！？俺まで部下認定！？」

「もうハイネ！いいところで何言ってんのよ！」

「ありゃりゃこりゃ失敬」

「もう・・・」

「ははははは・・・！」

暖かい雰囲気に包まれながら、この会戦はザフト側の勝利で終わった。

地球連合・オーブ同盟艦隊は大打撃を受け撤退。

ミネルバもかなりの損害を被り、多くの怪我人を出したものの、奇跡的に死者は出さなかった。

＜ペロポネソス半島　エーゲ海沿岸＞

「大佐、連合が撤退するようです」

この会戦を、旧ギリシャのペロポネソス半島から見守るものたちがあった。

一人は双眼鏡を覗いている若い男、もう一人の男はサングラスをかけたブロンドの髪で、
ジープの中でラジオを聴いていた。

「“木馬もどき”は？」

「見当たりません。羽のガンダムも消えたようです。
ですが、νガンダムは健在。ザフトのＭＳ隊に囲まれてますが、
どうにも不調のようです」

「わかった」

ブロンドの髪の男はジープから降りると、
若い男から双眼鏡を受け取った。

「・・・あれか」

「でもまさか、大佐がここまで偵察するとは思いませんでしたよ。
スエズの戦力を偵察すると思ったら、いきなりディオキアですからね。
それからスエズ、ダーダネルス、クレタ沖と・・・」

感慨深い面持ちで覗く男に、若い男が言う。

「不服か？」

「とんでもありません！ですが、大佐がなんで、
そこまであのガンダムに固執するかがわかりませんよ」

「いや、νガンダムが現れたというなら、
この目で見ておきたかったのだ。わがままが過ぎたかな？」

「そりゃあ大いに。でもまあ、
これでνガンダムとあの部隊の戦力が測れたって言うなら、
儲けもんですがね！」

若い男は先にジープに乗ると、エンジンをかけた。
しかしサングラスの男性は未だ双眼鏡を覗きながらこう呟いた。

「アムロ、また会えたな」

第１５話　邂逅（後書き）

ハサウェイ、キラ、そしてサングラスの誰かさん。
とまあいろんな人との邂逅、という事で、このサブタイトルをつけさせてもらいました。（アムロがキラと会ったのはホントについ最近ですが・・・）

第１６話　白兵戦（前書き）

どうも、寒くなってきましたね。
私もその影響で風邪ひきました。

一つおことわりしたいことは、この作品のハサウェイは、「閃光のハサウェイ」に登場したハサウェイとは全くの別の人間ということです。
「閃光のハサウェイ」のストーリー自体が「ベルトーチカチルドレン」からつながる話になっている為、劇場版の「逆襲のシャア」とはつながりません。
この作品のハサウェイは劇場版のＵＣ００９３年から直接ＳＥＥＤ世界に来たので、シャアを敵視しています。

第16話　白兵戦

＜ミネルバ　格納庫＞

「ここも駄目・・・まあ、ここも歪んでる。
アムロ！」

戦いの熱覚めやらぬ中、かの激闘を乗り越えた巨人達が並ぶ格納庫に、
技術士官、チェーン＝アギの声がこだます。
その女性が呼ぶ者の姿は、そこにはなかった。

「・・・？　さっきまでそこに・・・」

手にしていたスパナを置き、アムロが居たνガンダムの右足の下へ行く。
チェーンはそこに人影を見た。

「アムロ、何で無視して・・・あら？」

そこに居たのはアムロではなかった。
黒い髪の少女、ユイだ。

「あっ・・・チェーン・・・さん」

「あら、何してるのユイ？」

隠れていたわけでもない。
しかし、チェーンに見つかったユイは、
あわてた様子を見せていた。

「な・・・た、ただ、アムロ隊長のＭＳの状況が気になっただけです！
共に戦う仲間の事を憂うのは、当然の事でしょう！？」

「そういう事は私達整備士に任せてくれればいいわ。
余計な心配事ばかり溜め込んでいたら、動けなくなるわよ」

「余計！？　余計なんて、そんなこと言うんですか！？」

「余計」という言葉にユイが声を荒げる。
他のクルー達が何人か振り返ったほどだ。

「そういうことじゃないわ。個人の不安や心配は、チームに影響する。
あなたの心配事が、みんなの死に繋がるのよ？
アムロもハイネも艦長も、皆を纏め上げる立場として、
あなた達に不安を与えないようにしてるわ。
そのあなたが、隊長の事を心配していては、本末転倒もいいところよ」

「で、ですけど・・・」

言葉に詰まるユイ。
周りの整備士達が見守る中、アムロが格納庫に戻る。

「チェーン・・・ん？　ユイ、νガンダムがどうかしたかい？」

「た、隊長！　聞いてください、チェーンさんが、
私がアムロ隊長の事を心配するのを、余計な事だというんです！」

アムロは首を傾げたが、幾秒もしないうちに意味を理解し、
少し困った様子のチェーンを一瞥した。
そして、アムロより少し身長が低い、ユイの肩に手を置く。

「ハハハ・・・ユイ、僕への気遣いはうれしいよ。
その気持ちはありがたくもらうさ。
だがユイ、それで君が死んだりしたら、僕はその方が悲しい。
だからこそ、君には自分の身を案じていてほしいのさ。
それに、僕はそう簡単に死ぬつもりはない。
あんな姿を晒しておいて、何を言うかと思われるかもしれないがな」

アムロは肩に置いていた手を、その長い髪に回してから、
彼女に微笑んで見せた。

「・・・隊長が、そういうなら・・・」

「ああ。それに、君の直属の上官はハイネだ。
僕の心配をするなら、ハイネにも気をかけてあげるといい」

「え、ハイネにですか？」

「嫌いかい？」

「そんな事ないですけど・・・でも、それはまた別の話です！」

顔を仄かに赤らめながら、彼女は頬を僅かに膨らませた。
機嫌を損ねたかな、と、アムロは自らの発言に少し後悔した。
もちろん、ハイネへの配慮は嘘偽りのない感情である。
部下に気遣ってもらえない上官の気持ちは、アムロも十分に理解していた。

「そう膨らむな。それより、君をヴィーノが呼んでるようだ」

「え？」

「ほら」

アムロはユイの後方を指差した。
振り返ったユイの瞳には、確かに彼女の名を呼ぶヴィーノの姿が映り、
ユイは「今いくわ！　それじゃ隊長、いろいろすみませんでした」
と言いながら、
走り去っていった。

（助かったぞヴィーノ・・・）

内心そう思い、これではやはりシャアと変わらないなと自嘲しながら、
アムロはチェーンの許に駆け寄った。

「すまないチェーン。ブリッジに行っていた。
それで、νガンダムの状況は？」

「あ、はい。間接部分への負荷、それと、マニュピレーター付近の

破損やフレームの歪みが特に甚大です。
幸いνガンダムは構造が単純ですから、ある程度の格闘戦にも耐えうる事が出来ますが、
今回はＰＳ装甲相手に頑張りすぎたせいで、許容値を超えてるわ。
これがリ・ガズィかジェガンだったら、脚部と腕部は丸ごと取り替える必要があったかもしれないわね」

チェーンから渡されたメモを開き、近くにあった工具箱に腰をかけ、
アムロは一通りそれを読んだ。
νガンダムの設計者であるアムロが、そのメモに羅列された文字列の意味がわからないはずがなかった。

「だいぶ酷いな・・・すまない、僕も整備を手伝おう」

「お願い。こんな事をＭＳパイロットに頼むのは不本意だけど、
今回ばかりは骨が折れそうだわ」

早速スパナを取って、チェーンは修理を再開した。
彼女の横に工具箱を置くと、アムロは装甲内の部品群に首を突っ込む彼女に、
頼まれた工具を渡しながら囁いた。

「あのＭＳに乗っていたパイロット、ハサウェイだった。
今はまだ気絶して、ベッドで横になっているらしい」

「ハサウェイって・・・あのガンダムの！？」

「ああ、何故ハサウェイが連合にいるかはわからない。
だが彼はいつか、クリスト＝イェーガー少佐と名乗っていた。
シャアが使った手段と同じように、赤の他人の名を借りたか、

それとも単なる偽名かはわからないがな」

正直、ハサウェイが目覚めた時、アムロは自分なんと言えばいいか思いつかなかった。
ブライトの息子、チェーン殺しの張本人、敵対する地球連合軍士官。
ハサウェイは既に、アムロが知っていたジュニアハイ位の子供ではなかった。

「でも、そのハサウェイだったとして、彼をどうすれば・・・」

作業する手を止め、アムロを見る。
アムロは回収されたボロボロのストライクノワールを眺めながら答えた。

「まずは話を聞きたい。乗っていた機体や、率いていた部隊からして、
正規軍とは思えない。
あのファントムペインとか言う部隊の事も、いろいろとわかるだろうしな」

「私もいい？」

「かけあうさ・・・だが君を殺したのも彼だ。
それでも・・・いいかい？」

アムロはチェーンの心情が不安だった。
彼がチェーンを、もといたＵＣの世界で殺したのは事実。
チェーンがハサウェイと対面する以上、
決して避けて通る事のできない事実だ。

「不安なのアムロ？」

「あまり賛成できないな」

「怨んでいませんよ」

νガンダムの装甲内から這い出たチェーンが即答した。。

「何だって？」

アムロは思わず二度聞きする。

「怨んでませんって言ったんです。
少なくとも私はもう彼を怨んだりはしていないわ。
ハサウェイもきっと、湧き上がる感情に振り回されただけなんだわ。
そして私は、こうして生きて、またアムロと会話している。
それだけで十分よ」

「・・・なら、心配はないな。
わかった、後で・・・」

アムロが言いかけたとき、艦内放送が流れる。
アムロに呼び出しがかかったのだ。

「早いな」

手にしていたペンチを置くと、アムロはチェーンを連れ、
医務室へ向かった。

チェーンを外で待たせ、アムロが医務室に入ると、ハサウェイは先ほどまでつけていた酸素マスクの類を外され、ただ呆然と、どこにも焦点が合わないまま、天井を見つめていた。

「ハサウェイ」

アムロが彼の名を呼ぶ。
それに気づいたのか、ハサウェイは腕をピクリと動かし、上体を起こし、ゆっくりとアムロの方を向いた。

「・・・？　アムロ、アムロ＝レイなのか！？」

「久しぶりだな、ハサウェイ」

「・・・」

ハサウェイは無言を返事にすると、自らの手のひらを見た。
アムロが来るまで、意識がハッキリしていなかったようだ。

「・・・！　“彼女”は！？」

「無事さ。意識は戻ってはいないがな」

「・・・」

再び無言で視線をそらすハサウェイ。
アムロが彼を最後に見たのは、つい数ヶ月ほど前の事だが、彼にとっては違う。
それは彼の身体的な成長からも見て取れた。
声はＵ．Ｃ．００９３に再会した時よりも更に低くなり、身長はア

ムロと変わらないくらいだった。
グリプス戦役の時、荒れ狂う海の中でアムロが救助した少年の面影はほぼなかった。

「ハサウェイ、いや、イェーガー少佐と呼ぶべきか？」

「どちらでも構わない。貴方が望むように呼べばいいんだ」

口調も堅い。
赤の他人を相手にするように接するべきか、それともハサウェイの知人たるアムロ＝レイとして接するべきか、
アムロは迷った。
ここで他人のように扱って、ハサウェイの話を聞けなくなるよりは、親身になって話すほうが得策だ。
そう考えたアムロは、ドアの向こうにいるチェーンを招いた。

入室したチェーンを見たハサウェイは、ただ驚くわけでもなく、ぽつりと呟いた。

「・・・貴女も居たのか」

「驚かないのね」

「“彼女”も一度は死んだ身だ。今更驚きはしない」

「？」

やはりそうだったか、とアムロは独り納得した。
確信を持てなかった事柄が、今それを得たのだ。
無表情を貫くハサウェイに、チェーンが歩み寄る。

「ねえハサウェイ、私を殺した事。覚えてる？」

チェーンの問いに対し、ハサウェイは顔をしかめたが、小さく頷いた。

「何故私を殺したの？」

わかりきった事かといえば嘘になる。
やはり本人の口から聞きたいところだった。

「・・・あの時、僕は貴女にクェスを殺されて、頭に血が昇っていた。
あの時、僕が説得していれば、彼女は治まったかと言えば、それは嘘だ。
浅はかだったよ、僕は」

「後悔してるの？」

「・・・わからない」

ハサウェイは静かに告げた。
彼自身、彼女に何の罪もなかった事は、後から気がついたようだった。

「私は・・・あなたを怨んだりはしていないわ。
見返りは求めない。それだけは覚えておいて」

ハサウェイの返事を確認することなく、チェーンは椅子に腰をかけた。

「ハサウェイ、質問ばかりですまないが、君はいつこの世界に来たんだ？」

アムロが訊く。
ハサウェイの姿は既に成人。
この世界に来てから、だいぶ時間が経っているように思われた。

「・・・今から１１年前、僕はこの世界で目覚めた。“彼女”と一緒に」

「１１年前？　すると今は・・・」

「僕も彼女も、今は２４才の筈だ」

１０年以上が経過しているという衝撃の事実に、チェーンは驚きを隠せなかった。
一方のアムロは、更に質問を続ける。

「この世界に来てから何があったか、具体的に話してくれないか？」

「随分と詮索するんですね。それはＭＰの仕事でしょう？
少なくとも、貴方にお話しする必要は感じられない」

「個人として聞いている。嫌なら答えなくてもいい。
同じ世界に住んでいたものとして、興味がわいただけさ。
だが・・・ここはザフトの艦。そして君は捕虜だ。
自分の立場を、きちんと認識したほうがいい」、

アムロは呼び出しスイッチをちらつかせながら穏やかに答えた。

脅しをする気などはないが、ハサウェイが顔をしかめた事で、効果は十分にあった事が伺えた。
何が親身かと思いもしたが。

近くにおいてあった水が入った紙コップを手に取ると、ハサウェイは淡々と話を始めた。

「この世界に来てから、僕達は生きるために、当時の国連軍に入隊した。
反政府ゲリラや活動家達と戦いながら、僕達は着実に軍内部での地位を高めていった。
ある日の事、戦闘機のパイロットだった僕達は、国連軍の極秘プロジェクトに参加させられた。
プラントが新型機動兵器の開発を始めたという情報を察知し、国連の中心とも言えるあの国、
大西洋連邦を中心とした国家群はカウンタープロジェクトを始めたんだ。
アムロ、貴方にこれの意味がわかるか？」

「・・・ザフトのＭＳ開発、いや、兵器転用計画か。
僕達の世界でも、ジオンがＭＳ開発を始めた時、連邦はＶ作戦・・・
違う、ＲＸ計画でそれに対抗した。
どの世界でも、どんな時代でも起こりうる理だ」

「その計画に参加してまもなく、ブルーコスモスのユニウス７攻撃が行われた。
当時の僕は、プラントにジオンの影を見出して、その行為にたいした嫌悪感を抱かなかった。
そうだろう？　勝手にコロニーを占拠し、そして何十億人もの人間を殺して・・・。

やっている事の本質は、あのシャア＝アズナブルと変わりはしないんだ！」

声を荒げたハサウェイは、紙コップの水を飲み干した。

「ハサウェイ・・・少なくとも、僕には君の感情や怒りを否定する権利はない。
だが、それでブルーコスモスか。
僕にはあの組織が、ティターンズにしか見えない」

「何が・・・僕にあの国・・・オーブに身を寄せろとでも言うつもりか？」

「そういうことじゃあない。
連合のバックの危惧性について述べただけさ」

「それがどうした。軍を裏切れとでも言うのか？
危険を冒してまで、“彼女”を危険に曝してまで」

痛いところを突かれ、アムロは押し黙る。
自らが身を寄せていた地球連邦軍も、決して健全とはいえない。
むしろ、見方によってはシャア＝アズナブルのネオ・ジオン以下の存在であった。
だからこそアムロは、中央から遠ざかり、同じく中央を好まないブライト＝ノア大佐がいる、
出世街道から外れたロンド・ベルに入隊したのだ。
もちろん、一年戦争以来のアムロとブライトのタッグの力を、中央が畏れたことによる、
利害関係の一致もあったが。
そんなアムロが、組織を見て大局を見極めろなどと、言えるはずが

なかった。

「・・・いい。貴方の気持ちはわかる。
話を続けても？」

「ああ、続けてくれ」

「・・・それで、そのまま僕達はあの戦争に参加した。
当時、僕は中尉、“彼女”は准尉だった。
その戦いの最中、連合は遂にＭＳを開発した。
それから僕は、そのＭＳで戦うようになって、いつの間にか、
通り名ができていた。“黒き狩人”という名が」

ハサウェイは何故か悲しげな顔を見せた。

「狩人・・・“イェーガー”はドイツ語で狩人という意味だったな。
そのクリスト＝イェーガーという名前はどこで？」

「完全な偽名さ。当時は兵士が足りなかったみたいで、
僕みたいなどこの馬の骨かもわからないような男でも簡単に入れた。
僕も“彼女”も、これからは新しい人間として生きていこうと名前
を捨てたんだ。
特に“彼女”は自分の家の名前を嫌っていた。
ファーストネームはそこまで嫌いではなかったみたいだが・・・な」

「ああ、“彼女”は父のアデナウアーを・・・」

「え？」

知っている名前が何の脈絡もなく出た事で、チェーンは混乱した。

振り返ったアムロは、目を丸くしたチェーンにこう答えた。

「君にはまだ言っていなかったな。
もう一人、回収したＭＳがあったろう？」

「・・・！　まさか！」

「ああ・・・」

アムロは席を立つと、もう一つのベッドを隠すカーテンを開放した。
そこに横たわっていたのは、水色の髪の女性。
年はハサウェイと変わらない。
運ばれてきたときはツインテールだったが、ヘアバンドを外され、
そのセミロングヘアーはナチュラルな状態だった。

「・・・ハサウェイ、彼女は・・・」

「・・・」

いびきも寝息も立てずに眠る様は、まるで死んでいるかのようだったが、
胸の膨らみが上下するのが確認できる。
ちゃんと生きている。ハサウェイは安心した。

「アムロ、この娘、まさか・・・」

歩み寄るチェーン。
ベッドを覗くと、そこにはラー・カイラムで彼女に突っかかった少女の面影があった。

「ああ・・・彼女はアデナウアー＝パラヤの娘、クェス＝パラヤだ」

＜地球連合軍第８１独立機動群　旗艦Ｊ．Ｐジョーンズ　通信室＞

「さて・・・私は何が言いたいか・・・わかるな？」

暗い通信室の中、ネオ大佐はモニターに映るブルーコスモス盟主、ロード＝ジブリールからの通信を受信していた。

「はっ・・・この作戦の失敗の原因は・・・」

「貴様はクビだ！」

「！」

きっぱりと言い張ったジブリールは、ワイングラスを揺らしながら、

更に続けた。

「ユウナ＝ロマに全て擦り付けられるとでも思ったか？
ガッカリだなロアノーク。貴様の後任はすぐに来る。
次の作戦を終えたときにはな！」

「次の作戦？」

「デストロイが完成した」

デストロイ。
彼の言葉に、ネオは戦慄した。
あの連合史上最大規模の機動兵器が完成したのかと。
実際は戦略兵器といっても差し支えないが。

「では、そのデストロイを私に・・・？」

「試作品を送ってやる。
貴様の任務はこれだ・・・」

ネオの許に文書が送付され、それは直ぐにプリントアウトされた。
ネオは一通り目を通すと、モニターごしにジブリールへ敬礼した。

「名誉挽回の機会をお与えくれた事に感謝いたします！」

「フン、死んでこい」

通信はそこで切れた。

「・・・死んでこいねえ」

ネオに与えられた作戦。
それは・・・ジブラルタル基地への特攻だった。

「さて、その前に・・・あの獰猛な子猫ちゃんをなんとかしないとな」

通信室から出ると、ネオはブリッジへ向かった。
すると、一人の兵士がネオの許に駆けつけた。

「大佐！　ミネルバに関する情報をキャッチしました！」

兵士はファイルを手渡した。
それを見たネオは、ある作戦を思いついた。

「・・・まだ運は尽きてないって事か・・・」

＜ミネルバ　医務室＞

「ああ・・・彼女はアデナウアー＝パラヤの娘、クェス＝パラヤだ」

チェーンは驚きを隠せず、口に手を当てた。
その仕草が愛おしく見えたアムロだが、顔を綻ばせず、
アムロはハサウェイを見た。
ベッドから出たハサウェイは、同様に彼女が寝るベッドを覗きこんだ。
拘束具の類はつけられてはいない。
お人よしが過ぎる艦だとハサウェイは思う。
が、妙な動きをとれば、すぐにでも警備兵が来るシステムになっていた。
現に、アムロは緊急呼び出しスイッチを持っており、扉の向こうには二人の警備兵がいた。

「ん・・・んん・・・あら？」

「！？」

その女性、レーナ＝サヴィン改め、クェス＝パラヤは不意に目を開いた。
布団をまくり、あたりを見回す。
その視線は、ハサウェイに固定された。

「クリスト！　ここは・・・」

「今はハサウェイでいい」

「え？　何言ってんのよハサ・・・　！？」

クェスは懐かしい感覚を覚えた。
その感覚の先には、伝説の連邦軍ＮＴパイロット、アムロ＝レイの姿があった。
もう一つ、不愉快な感覚も感知したが。

「・・・アムロ！？　貴方、アムロなの？」

「そうさ、クェス。ここはミネルバの医務室だ」

「医務室って・・・アタシ達、捕まったの！？」

起きてからすぐの事態に、クェスは困惑を隠せなかった。

「・・・そうだ、クェス」

ハサウェイが不甲斐なさそうな顔で答えた。

「安心しろ。君達を悪いようにはしない。
ＭＳ隊隊長として保障する」

「悪いようって・・・」

「すくなくともこの艦内ではな。
それ以降のことは正直言って保障しかねるが・・・」

新たな紙コップに水を入れながら言う。

「クェス、君からも少し話を聞きたい。
協力してくれるかい？」

アムロは紙コップを差し出す。
「飲むかい？」と一言かけると、クェスはそれを受け取った。

「・・・答えられる範囲なら」

「ありがとうクェス。ハサウェイ、続きを・・・」

アムロがそう言いかけたとき、医務室の自動ドアが開いた。
一同の視線がドアに集まる。
入ってきたのはシン＝アスカだった。

「ア、アムロ隊長・・・すいません！
また改めて・・・」

「構わないさ。“彼女”が気になるんだろう？」

「・・・そ、それじゃあ」

医務室に入ったシンは、もう一つの見慣れない機器が置いてあるベッドに駆け寄った。
クレタでの戦闘で怪我を負った将兵達は、他の場所で治療されていたが、２人とステラは特別だった。
不審そうにシンを見るハサウェイに、アムロが耳打ちした。

「そっちの強化人間、一人行方不明になっているんじゃないのか？」

「・・・そういうことか」

ハサウェイはその意味を悟った。
お人よしの集団は、強化人間でも医務室に置いておくのかと、

かえって呆れたほどだった。
もう一度ベッドに戻り、ハサウェイは寝転がる。
あまり休んでいない。そう考えると、自然とベッドに潜りたくなるのであった。
そんな様子を見て、アムロは少し二人が可哀想になった。
あと二時間で、二人は営倉入りなのだ。

「生憎だが・・・二人には後二時間で営倉に移ってもらう。
話はまた今度。今は休むといい」

「・・・勘弁してもらいたいな」

ハサウェイはそれっきり一言も喋らなかった。
すぐに寝息を立て、少しの休息を無駄にはしなかった。
それに対して、クェスの方はまだピンピンしていた。

「ハサウェイ、寝ちゃったの？」

「そのようだ。クェス、君達の事はハサウェイから大体は聞いた。
随分と苦労したようだな」

クェスは顔を曇らせ、紙コップを両手で持ち直した。
思うことがあるのか、クェスの表情はどこか暗かった。

「・・・同情なんていらないわ」

「クェス、そりゃあ・・・」

アムロは椅子を持ってクェスの方に寄った。
その時

「・・・!?　大佐・・・?」

クェスのもつＮＴの第六感が、アムロ以外の懐かしい感覚を捉えた。

「・・・なんだって?」

クェスはその感性を研ぎ澄ませ、目を閉じた。
いろいろな人の意志が入ってくる。
その中に感じた、懐かしい感覚。
以前、彼女は原因不明の頭痛をなんども感じていた。
それの原因を、ハサウェイはアムロと捉えていたようだが、
原因はそれだけではなかった。
その懐かしい感覚の正体が、彼女には今わかったのだ。

「クェス、まさか“奴”が・・・」

「え・・・?」

クェスは目を閉じたまま彼の言葉に返事をした。

「・・・わからない。でも、もしかしたら・・・」

「やはり来ているという事か。この世界に奴が・・・シャアが」

シャアはやはりいる。アムロは確信した。
目を開けると、クェスはアムロの表情を伺いながら、こう聞いた。

「殺すの?　大佐を」

「・・・ああ、やはり奴は放っては置けない」

いつの間にか拳を握り締めていた事に気がついたアムロは、
椅子に座ってクールダウンした。
“彼”・・・シャア＝アズナブルの事になると、やはり少しばかり
感情が表に出る。
避けられないことかもしれないとアムロは思った。

「大佐を殺すんなら・・・」

「？」

クェスが呟く。

「アムロ、やっぱりあんたセコイよ」

「・・・言ってくれるな」

クェスが彼をセコイと評するのはこれで二度目だ。
結局のところ、クェスにとって、アムロは単に奇麗事を並べている
ようにしか映っていないのかもしれない。

「大佐と貴方、ずっといがみ合って・・・ララァの取り合い？」

「言うな！」

アムロは声を荒げた。
声を上げて、すぐに取り乱したと気がつくと、
アムロは後ろのチェーンの視線が痛かった。

「クェス＝パラヤ、貴女、アムロを怒らせて楽しい？」
事態を見かねたのかチェーンが、クェスに言い放つ。
アムロに向けていた表情を一瞬で崩し、クェスはチェーンを睨んだ。
「喋りなさんな。アンタには聞いてないわ」
「・・・！」
全く相手にされない以上、チェーンは黙り込むしかなかった。
これ以上は、彼女の神経を逆なでさせるだけである。
「クェス、ララァの事・・・誰から聞いたかは知らないが・・・。
ララァは死んだ人間だ。その人間の取り合いなど、不毛でしかない」
「いいえ。ララァは大佐の中で生き続けてる。
だから、ララァを盗った貴方を怨み続けるんだわ。
そう、ララァが常に間にいたのよ。違う？」
「・・・十年考えた結論がそれか」
湧き上がる怒りを抑えながら、アムロは答えた。
ララァが常に二人の間にいることなど、自覚していたはずなのだが、
それを、事情も知らない小娘に言われるとなると、アムロもやはり
仏ではいられなかった。
「だから、大佐にまた会えるんなら、今度こそララァを追い出すんだわ」
クェスはきっぱりと宣言した。

ステラについていたシンが、何やらアムロ達の方を伺っていたが、すぐにステラの看病（？）に戻った

（・・・利用されるわけだ）

十年経ってもこのザマ。
アムロはクェスの父親代わりになれない。
シャアもなれなかった。
それに気付かず、クェスがよく懐いた。
その懐いた先がシャアで、利用された。
彼女は十年経ってもそれに気がつかないのだ。

それと同時に、クェスの父親へのコンプレックスが、
アムロには以前よりも強力に感じられた。
十年経ってもこの執着心。
ハサウェイが起きていたらどう思ったか。アムロには想像もつかなかった。

これをクェスに伝えるべきか。
アムロは悩んだ。
しかしこれは、クェスのアイデンティティーにまで関わる問題。
より強い反発を喰らうか、はたまたその高いＮＴ能力からなる強い感受性に影響されやすい、
繊細な精神に異常をきたし、カミーユ＝ビダンよりも悲惨な結末を迎えるかのどちらかだった。

「とにかくクェス。俺はシャアがいる限りは間違いなく戦い続ける。少なくとも、人々の犠牲を強いるやり方しかできない、今の奴とはな」

半ば強引に話を切り上げると、アムロはチェーンと共に医務室を出て行った。

「どう思う？　クェスの事」

「どうも思いません！」

チェーンはかなり気が立っているようだった。
クェスの態度を見て、相当腹が立ったのだろう。
あの振る舞いを見て落ち着いていられるのは、よほど温和な人間だけだ。

「僕に八つ当たりされても困るんだが・・・」

「あ・・・っと、ごめんなさいアムロ」

チェーンは酷く赤面した。

「でも、私とほとんど変わらない年だなんて・・・」

「ああ、だが、本質はあの頃と変わっちゃいない。
そうも思えるんだが・・・」

「そうかしら」

一方、医務室のドアを挟んで室内。
とはいっても、その1時間と半分ほど後の出来事である。
ステラをただひっと見ていたシンは、シフトが近いことに気付き、退室する事にした。

しかしその際、あろうことか、彼はハサウェイと目を合わせてしまった。

「・・・」

「・・・なんだよ」

不愉快な表情を浮かべ、シンは彼を威圧する。

「・・・いや、別に・・・」

視線を天井にずらし、ハサウェイは言った。

「・・・そうかよ」

シンはそのまま医務室を立ち去ろうとした。
しかし、この男がアムロと話をしていた事を思い出し、
彼は自動ドアから離れた。

「・・・？」

妙なやつだと思いながら、ハサウェイはシンを見た。
すると、またしても二人は視線を合わせてしまった。
これで何かを話さないわけにはいかない。
ハサウェイは呆れ気味に「僕に用か？」と言った。

「アンタ、さっきアムロ隊長と話してただろ。
その女も」

「はあ？　何よアンタ」

睨み付けるクェスを手で制すと、ハサウェイはベッドから起き上がって答えた。

「そうだ」

「アンタ、隊長とどういう関係なんだ？」

「同じ世界から来た知り合い・・・と言ってわかるか？」

「ああ」

シンは態度を崩さなかった。
意外だな、とハサウェイは思ったが、アムロが何を話したかを想像すれば、
納得できる話だった。

「わかったならもういいだろう。それと・・・あの少女はもうじき死ぬぞ」

ハサウェイは横目でステラを見た。
相変わらず顔色は悪い。

「!?　・・・何言ってんだよアンタ!」

「ブロックワードなら無効だ。少なくとも今は」

「何わけのわかんないこと言ってんだよ!
だってステラは・・・」

「そうか、なら教えてやろう」

ハサウェイはベッドに腰掛けると、エクステンデッドの事について
話し始めた。
もちろん、軍事機密に触れないよう、だいぶ噛み砕いた説明だが。

「彼女はある一定の期間内に、特定の設備で療養しないと、確実に
死に至る。
この艦のお粗末な装備では、せいぜい持って後二週間。いや、十日
ぐらいかな?」

「そ、そんな・・・いや、嘘だ!
ステラがそんな・・・そんなの・・・」

シンの悲痛な叫びが医務室に響く。

「嘘だと思うのならそう思えばいい」

ハサウェイはまたベッドに入った。

「・・・クッ！」

シンは自動ドアに一度ぶつかりながら、医務室から走り去っていった。

途中でアスランやベリエスとぶつかったが、シンはお構いなしに走っていった。

＜同日　ＰＭ７：００　シチリア島＞

死に体のミネルバでジブラルタルまでたどり着くのは無理があった。

イタリア半島の東南部に位置するシチリア島の海岸。

ミネルバはここで、ジブラルタルから到着する予定の補給艦を待っていた。

しかし、本来ＰＭ６：００に合流する予定だったのだが、それが定時連絡すら来なくなったのだ。

「来ませんねえ艦長。見捨てられました？」

「そうではないと、信じたいわね・・・」

ついつい軽口を叩くアーサーに、タリアは真面目な返答をよこした。

補給艦が襲われたのか、それとも何らかのトラブルがあったのか。
どちらにしろ、このタイミングで敵に見つかると、
厄介なことになるのは明白だった。

メイリンがレーダーに何かが映ったのを見た。

「・・・？　艦長、レーダーに反応あり。来たようですけど・・・」

「不明瞭な報告はやめなさい。何があったのメイリン」

「・・・あら？」

メイリンは自らの目を疑った。
レーダーの反応を最初に見たとき、映っていた影は補給艦を含めて
３つだったが、
それが今では補給艦１つだけになっているのだ。
きっと見間違いだ。メイリンはそう判断した。

「いえ、なんでもありません。
補給艦が来ました。距離５０００」

「やっと来たかあ・・・」

アーサーは大きな欠伸をしながら呟いた。

補給艦はミネルバの右横に接舷した。

タリアは補給艦艦長に文句の一つも言いたかったが、
エンジンの不調が原因と言われてそれっきりだった。

補給のトラックが何台も補給艦からあらわれ、ミネルバの艦内へと入る。
しかし、そのトラック集団は何か様子がおかしかった。
運転は乱暴で、ヨウランに至っては、危うく轢き殺されそうになったほどだ。

「おい！　どこみて運転してやがる！」

「ああ、わりいわりい・・・」

運転手は煙草を窓から投げ捨てると、あろう事か、ＭＳ格納庫内に停車した。

「ちょ、そこのトラック！　なんてとこに停めてんだよ！
おっとっと・・・そっちまで！」

ヴィーノや他の整備士達も集まり、運転手に抗議したが、
そのトラック運転手達は聞く耳を持たなかった。
次々とトラックが停まり、６台ほどが格納庫内に停車した。

「もう、ちょっと何なのあなた達！」

整備に立ち会っていたユイも、その暴挙に見かねて抗議に加わる。

「ああったくもう・・・うだうだうっせえな姉ちゃん・・・。
こういうことだよ」

「！」

運転手が突き出したのはサイレンサー付きの拳銃だった。

「おっと、大声をだすと・・・風穴が開くぜ？」

拳銃を胸に突き付け、ユイを脅す。

ユイは従わざるを得なかった。

格納庫内には、ユイ、ヴィーノ、ヨウラン、マッドと3人の整備士しかいなかった。

非武装の彼等を制圧するなど、銃を持った運転手6人がかりならば造作もないことだった。

7人はあっという間に拘束され、一箇所にまとめられた。

「あなた達・・・連合軍ね！」

「だったらどうする？」

「クッ・・・！」

トラックの中から、沢山の小銃を持った兵士が現れる。

後から到着したトラックにも沢山の兵士が乗っており、

中にはコンピュータを持った技師もいた。

「おいそこの整備士、こっちへ来い」

ヴィーノに銃が突きつけられ、整備につかうコンピュータの所まで歩かされる。

「何する気・・・？」

「ここのＭＳのデータをまとめてもってくつもりじゃねえのか・・・？」

「そこ、私語は許さんぞ」

ユイとヨウランが呟く。

そう、彼等の目的はデータの奪取。

そして、少しでもこの艦に、内側からダメージを与えることだった。

。

同じ頃、ベリエスは自室で雑誌を読んでいた。

「オリジンアニメ化ってマジかよ・・・ん？」

銃声が鳴り響いたのに気がつき、ベリエスは廊下に出た。

「なんだなんだ・・・　！？」

ベリエスが見たのは、胸を射抜かれて倒れているクルーだった。

「お、おい、しっかりしろ！　何があった！」

「う・・・敵が・・・入り込んで・・・。
補給艦の連中・・・連合だ・・・！」

「敵・・・？」

そのクルーの意識はそこで途絶えた。

「・・・艦長に知らせないと・・・！」

ベリエスはタリアの所へ走った。

連合の兵士達は次々と各ブロックを制圧していき、艦のクルー達がこのことに気付いたのは、
だいぶ時間が経ってからだった。

タリア達は会議室を開いていた。
そこへ、ベリエスが駆け込んだのだ。
事の次第を知ったタリアは、深くため息をついた。

「参ったわね。まさか、あの補給艦が連合に乗っ取られてたなんて」

「艦内は分断されて、俺が見た限りでは、主だった抵抗はほとんど行われていません！」

「ブリッジへ戻りましょう」

「チィッ、何なんだこの連中は！」

アムロとシン、レイは、既に連合軍兵達と交戦中だった。
それぞれ手に小銃を持ち、彼等はブリッジを目指していた。

「隊長、後ろです！」

連合軍兵の一人を倒したレイが、アムロに叫ぶ。

「ん！？　そこか！」

「ぬわあ！」

アムロの放った銃弾は連合軍兵の胸を砕いた。
壁に隠れていた連合軍兵の一人が、グレネードを3人に投げつけようとした。
しかし、その一瞬のスキをシンは見逃さなかった。

「迂闊なんだよ！」

シンはグレネードだけを射抜き、グレネードはその掌の中で爆発した。
数人まとめて消し飛んだらしく、２人ほど逃走し、抵抗がやんだ。

「よし行くぞ！」

3人は再び走り出した。

「白兵戦なんか仕掛けてきやがって！」

「流石に予想外だな！」

「！　来ました！」

3人は立ち止まり銃を構えた。
現れたのはジョナサンだった。
銃を下ろし、壁に張り付くジョナサンに、アムロは叫んだ。

「ジョナサン！　ハイネ達は！？」

「隊長、兵士の集団が来ています！」

「！？　応戦するぞ！」

「チクショウ、次から次へと！」

ミネルバ内は大混戦に陥っていた。

「・・・ん？　だいぶ騒がしいな・・・？」

「そうね。どうしたのかしら？」

ハサウェイとクェスは営倉に入れられていた。
外の様子がおかしいのに気がつくと、ハサウェイは何とか抜け出せないかと策を巡らせた。
その時である。
営倉の扉が開き、小銃を持った兵士が数人入ってきた。

「ん？　イェーガー少佐、ご無事で！」

「あ、ああ。ここを開けてくれ」

「了解。下がってください」

連合兵は鍵に小型のプラスチック爆弾を取り付け、爆発させた。
鍵は木っ端微塵に吹き飛び、扉が開く。

「よし、いくぞレーナ」

「・・・本当に行くの、クリスト？」

「・・・何を言っているんだ？」

ハサウェイはクェスの発言が理解できなかった。

「だって、このままアムロと一緒に居れば、大佐に会えるかもしれないんだ。
大佐はこの世界に来てるし、大佐は必ずアムロを追って行動するはずよ！」

「！？」

ハサウェイは強引にその細い腕を掴み、営倉の外へ走った。

「あ、ちょっと、クリスト！　引っ張らなさんな！」

営倉の扉が開いたことに気がつき、アムロはハサウェイの集団を追った。

「ん？　営倉が開いた！
逃げるつもりかハサウェイ！」

「隊長！」

「シン、レイ、ここは任せるぞ！　俺は捕虜を追う！」

「りょうか・・・いっと！」

後ろから殴りかかってきた連合兵を、銃床で殴って気絶させながら、シンは了解した。

アムロは小銃の銃口を連合兵に向け、引き金を引いた。
連合兵の一人が倒れた事に気付き、ハサエウェイは後ろを振り返った。
鬼のような形相のアムロが走ってくるのを目撃したハサウェイは、

クェス達を先に行かせると、立ち止まった。

「待てアムロ！」

「！？　どういうつもりだハサウェイ！」

ハサウェイは小銃を向けず、アムロにこう言い放った。

「何故この軍隊に居座る！
ここの議長が考えていることは、貴方が納得できるようなものではないぞ！」

「・・・？」

アムロは首を傾げた。
ギルバート＝デュランダルが信用ならないのはやはり変わらないが、ハサウェイの発言は、何か核心を掴んでいるように聞こえた。

「警告しておく。言いたいことは・・・それだけだ！」

アムロが小銃を向け直すよりも早く、ハサウェイの投げたスタングレネードが爆発し、
１００万カンデラもの光と、１８０デシベルもの爆音に、アムロは一瞬意識を奪われた。

「うわ・・・！」

「ハロ、アムロ、ドーシタ？」

「うう・・・ハロか！」

戻ってきた意識の中、ハロを掴んで小銃を拾うと、
ハサウェイはもういなかった。

「見当はついてる、必ず捕まえてみせる！」

再び格納庫。
ハサウェイが到着した頃、ヴィーノとヨウラン、そしてマッドをはじめとした整備士たちは、
全員連合に協力させられており、ユイはロープで配管に縛り付けられていた。

「さてと・・・俺はこの姉ちゃんで楽しませてもらうかな・・・」

運転手の一人がユイに近づき、彼女のアゴに触れる。
当然、ユイは抵抗などできるはずもない。

「や、やめなさい！　ち、近寄らないで・・・この！」

その手を首で無理やり振り払うと、ユイは男の手を噛んだ。

「イテ！　この女・・・へへへそういう所もそそｒ・・・ぐほ！」

運転手はいきなり倒れこんだ。
格納庫に辿り着いたアムロが、男を気絶させたのだ。

「スケベめ」

「隊長！　来てくださったんですね！」

アムロはロープを解くと、ユイについてくるよう指示し、
グフの物陰に隠れながら、次々と連合の兵士達を狙撃した。
すぐにアムロが忍び込んだと気付いたハサウェイは、急いでクェスをセイバーに乗せると、
自分もそれに搭乗した。
彼等は撤退の算段を立てており、どのＭＳを奪っていくか相談していたところだった。
引き上げてきた兵士達は次々とトラックに乗ると、一目散に補給艦へ逃げていった。

「もう、この艦に用はない。行くぞ」

「・・・うん」

ビームライフルを奪い取り、ハサウェイはカタパルトも使わずに、
空へ消えていった。

「セイバーが！　クッ・・・ハサウェイ・・・！」

小銃を床に叩きつけ、アムロは壁を殴った。
逃げ遅れていた兵士に電流攻撃を食らわせていたハロが、
アムロの足元に転がるが、彼にはどうでもいい事だった。

「アムロ、元気ダセ」

「・・・ハロ、今はそっとしてあげて・・・」

ハロを抱きかかえ、ユイは彼から目を背けた。

艦内の戦闘は終わり、嘘のような静けさがミネルバに戻った。

クルー達の中には、負傷した兵士達も多かった。
しかし、連合の兵士達からすれば、格好の的でしかない。
そういった兵士達も含め、クルーたちの半分が殺された。
艦のシステムは、補給艦の撃墜すら出来ないほどにメチャクチャにされ、
ＭＳもほとんどが使用不能な状態にされていた。
使用可能なのは、構造が特殊だったνガンダムと、別のデッキに格納されていたコアスプレンダー、
そして、レッグフライヤー、チェストフライヤー、そして、各シルエットがそろぞれ一つづつだった。

最悪なことに、インパルス、セイバー、νガンダムのデータが地球連合軍に渡ってしまったのだ。

特に、ＵＣ世界の突出した技術力を渡してしまったのが、一番の痛手だった。

この戦闘で、ハイネは肩に銃弾をうけ、しばらくはＭＳには乗れなくなった。
本人は「わりいなあ。足引っ張っちゃって！」と明るく振舞っていたが、
やはり自分の不甲斐なさに落胆した様子だった。

そして、更にわかったことは、医務室からステラが消えたということだ。
つまり、敵側に奪還されたということになる。
シンはその事実を受け入れられず、倒れこんだほどだった。

「だってそうじゃないですか・・・ステラがあいつ等に渡ったら・・・。
また利用されて、人殺しをさせられてえ・・・畜生！」

「シン・・・」

アムロにはかける言葉が見つからなかった。
どのみち、このままでは彼女は死ぬ運命だったのだから・・・。

一夜明け、傷だらけのミネルバに太陽の光が当たる。
しかし、クルー達の心に、太陽の光は当たらなかった。

2日後、ミネルバはようやくジブラルタル基地に到着した。

第１６話　白兵戦（後書き）

原作とは少しミネルバ隊の行動が変わります。

次回「襲撃」。アムロ、あえて火中の栗を・・・ってこりゃボトムズだった。

大いなる破壊者に、飛べ、νガンダム！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8887j/

機動戦士ガンダムSEED DESTINY 逆襲のアムロ

2011年10月4日11時28分発行